秋田県文化財調査報告書第495集

払田柵跡

第143・145・147次調査

－県営ほ場整備事業（本堂城回地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－

２０１４・９

秋 田 県 教 育 委 員 会

題字　新 野 直 吉　書

シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土
の「岩偶」です。
縄文時代晩期初頭、1992年８月発見、高さ７㎝、凝灰岩。

払田柵跡

第143・145・147次調査

－県営ほ場整備事業（本堂城回地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－

２０１４・９

秋 田 県 教 育 委 員 会

序

本県には、これまでに発見された約5,000か所の遺跡をはじめとして、先人の遺産である埋蔵文化財が豊富に残されています。これら埋蔵文化財の保存・継承と積極的活用は、地域社会の歴史や文化に親しみ、理解を深め、ふるさとを愛する人づくりにつながります。

一方、本県は米作を中心とする農業県であり、将来にわたり持続しうる環境を整備するための、用排水路網の整備と水田の大区画化を旨とした規模拡大と、担い手育成を目的とするほ場整備が課題です。本教育委員会では、これら地域開発との調和を図りながら、埋蔵文化財を保存し、活用することに鋭意取り組んでおります。

本報告書は、県営ほ場整備事業（本堂城回地区）に先だって、平成23・24・25年度の３か年にわたって実施された国指定史跡・払田柵跡の発掘調査成果をまとめたものであります。調査の結果、材木塀が２か所、材木塀布掘溝跡が９か所確認されたほか、土坑や溝跡、柱穴や河川跡などが検出され、払田柵跡北～東部沖積地における外柵線の正確な位置や当時の地形と遺構の配置状況が明らかになりました。

本書が、ふるさとの歴史資料として広く活用され、埋蔵文化財保護の一助となることを心から願うものであります。

最後になりましたが、発掘調査ならびに本報告書の刊行にあたり、協力をいただきました秋田県仙北地域振興局農林部農村整備第二課に、心から感謝申し上げるとともに、文化庁記念物課、史跡管理団体であるに大仙市教育委員会、美郷町教育委員会など関係各位に対し厚くお礼申し上げます。

平成26年９月

秋田県教育委員会

教育長　米　田　　進

例　言

1　本書は、本堂城回地区ほ場整備事業に伴い、平成23～25年度に発掘調査した払田柵跡の発掘調査報告書である。

2　本書は、調査対象地が史跡払田柵跡内にあたることから、払田柵跡調査事務所で継続的に実施している調査年次に組み込む形で、第143・145・147次調査として収めたもので、県営ほ場整備事業に係る埋蔵文化財調査報告書の４冊目である。

3　調査の内容については、すでにその一部が埋蔵文化財センター年報、払田柵跡調査事務所年報などによって公表されているが、本書を正式なものとする。

4　払田柵跡の所在地は、秋田県大仙市払田と秋田県仙北郡美郷町本堂城回にまたがり、遺跡略記号は７ＤＨＴである。

5　発掘調査は、秋田県教育委員会が秋田県仙北地域振興局農林部農村整備第二課から調査の依頼を受けて、秋田県埋蔵文化財センターが平成23年～25年度に実施した。調査期間・調査面積・調査主体者・調査担当者・総務担当者は以下のとおりである。

（１）払田柵跡第143次調査

調 査 期 間　　平成23年９月12日～12月９日（本調査）
　　平成24年２月14日、16日、22日（立ち合い調査）
調 査 面 積　　1,217㎡
調査主体者　　秋田県教育委員会
調査担当者　　加藤　竜（秋田県埋蔵文化財センター調査班　文化財主任）
総務担当者　　小松正典（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主査）

（２）払田柵跡第145次調査

調 査 期 間　　平成24年８月24日～11月６日（本調査）
　　平成25年１月８日、28～30日（立ち合い調査）
調 査 面 積　　3,368㎡
調査主体者　　秋田県教育委員会
調査担当者　　栗澤光男（秋田県埋蔵文化財センター調査班　副主幹）
　　加藤　竜（秋田県埋蔵文化財センター調査班　文化財主任）
　　佐々木尚人（秋田県埋蔵文化財センター調査班　学芸主事）
　　山田祐子（秋田県埋蔵文化財センター資料管理活用班　文化財主事）
　　髙橋和成（秋田県埋蔵文化財センター調査班　文化財主事）
　　長澤隆広（秋田県埋蔵文化財センター調査班　調査・研究員）
総務担当者　　柴田真希（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主査）

（３）払田柵跡第147次調査

調 査 期 間　　平成25年８月24日～11月６日（本調査）
　　平成26年１月14～15日、２月３日（立ち合い調査）

調 査 面 積　　80㎡
調査主体者　　秋田県教育委員会
調査担当者　　髙橋和成（秋田県埋蔵文化財センター調査班　文化財主事）
佐々木尚人（秋田県埋蔵文化財センター調査班　学芸主事）
赤星純平（秋田県埋蔵文化財センター調査班　文化財主事）
総務担当者　　柴田真希（秋田県埋蔵文化財センター総務班　主査）

7　本書に使用した地形図は、国土地理院発行の25,000分の１『六郷』、払田柵跡調査事務所提供の払田柵跡調査実施位置図、秋田県仙北地域振興局農林部農村整備第二課提供の1,000分の１工事路線計画図である。

8　遺跡基本層位と遺構土層中の土色の色調表記は、農林水産省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色票監修『新版　標準土色帖』によった。

9　出土した木製品の一部は株式会社吉田生物研究所に保存処理を委託した。

10　本書の執筆は、加藤　竜、佐々木尚人、髙橋和成が行った。

11　本書の編集は、髙橋和成が行った。

12　調査に係る全ての資料は、秋田県教育委員会が保管している。

13　発掘調査及びに本報告書作成にあたり、史跡払田柵跡調査指導委員である秋田大学名誉教授・秋田県立博物館名誉館長　新野直吉氏、国立歴史民俗博物館名誉教授　岡田茂弘氏、富山大学名誉教授黒崎直氏、秋田大学名誉教授熊田亮介氏から指導を賜った。

14　発掘調査では、文化庁記念物課（浅野啓介・国武貞克）、大仙市教育委員会（熊谷直栄・斉藤浩志・佐藤健太郎）、美郷町教育委員会（亀井崇　晃）、美郷町農政課（山形博康）の協力を得た。

凡　例

1　遺構番号は、その種類ごとに下記の略記号を付し、検出順に通し番号を付したが、後に検討の結果、遺構ではないと判断したものは欠番とした。

ＳＡ・・・・角材列・柱列　　ＳＤ・・・溝跡　　ＳＫ・・・土坑
ＳＫＰ・・・柱穴様ピット　　ＳＬ・・・河川跡

2　土層番号に用いた数字は、ローマ数字を遺跡基本土層に、算用数字を遺構土層に使用して区別した。

3　古代の土器のうち、須恵器には断面に網カケをして土師器と区別した。また、墨書土器は文字が記されている面に写真データを貼り付けトレースした。

4　土器の拓影配置は、表裏を採拓した場合は、断面の左側に表面、右側に裏面を配置した。表面だけ採拓した場合は、断面の左側に配置した。

5　使用した網カケの凡例については個々の挿図中に示した。

目　次

序
例言・凡例・目次
挿図目次・表目次・図版目次
第１章　調査の概要 …… 1
　第１節　調査に至る経緯 …… 1
　第２節　発掘調査の経過 …… 2
　第３節　整理作業の経過 …… 6
第２章　遺跡の位置と歴史的環境 …… 7
　第１節　遺跡の位置 …… 7
　第２節　歴史的環境 …… 8
第３章　調査の方法と成果 …… 13
　第１節　調査の方法 …… 13
　第２節　基本層序 …… 14
第４章　調査の記録 …… 16
　第１節　第143次調査の検出遺構と遺物 …… 16
　第２節　第145次調査の検出遺構と遺物 …… 45
　第３節　第147次調査の検出遺構と遺物 …… 125
　第４節　遺構外出土遺物 …… 139
　　（１）　第143次調査 …… 139
　　（２）　第145次調査 …… 139
　　（３）　第147次調査 …… 139
第５章　総括 …… 145
図版１～20
報告書抄録
奥付

挿図目次

第１図　払田柵跡と周辺の古代～近世の遺跡 ‥‥‥ 10
第２図　払田柵跡調査実施位置図 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 12
第３図　払田柵跡第143次調査　調査区位置図
（外柵東門周辺地区）‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 25
第４図　１区中央部の遺構（１）SL2014 ‥‥‥‥‥ 26
第５図　１区中央部の遺構（２）SL2014, 2015 ‥‥‥ 27
第６図　１区中央部の遺構（３）SL2014, 2015 ‥‥‥ 28
第７図　１区中央部の遺構（４）SL2016, 2017 ‥‥‥ 29
第８図　１区中央部の遺構（５）SL2016, 2017 ‥‥‥ 30
第９図　１区南部の遺構　SL2018 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 31
第10図　１区北部の遺構　SD2003 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 32
第11図　２区の遺構　SA460 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 33
第12図　３区の遺構（１）SD2004 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 34
第13図　３区の遺構（２）SD2005, 2006 ‥‥‥‥‥ 35
第14図　４区の遺構（１）SD2007 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 36
第15図　４区の遺構（２）SD2008, 2009 ‥‥‥‥‥ 37
第16図　４区の遺構（３）SL2019 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 38
第17図　５区の遺構（１）SD2010 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 39
第18図　５区の遺構（２）SD2011, 2012 ‥‥‥‥‥ 40
第19図　６区の遺構（１）SD2013 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 41
第20図　６区の遺構（２）SL2020, 2021, 2022 ‥‥‥ 42
第21図　６区の遺構（３）SL2023, 2024 ‥‥‥‥‥ 43
第22図　７区の遺構　SA933, SL2025 ‥‥‥‥‥‥ 44
第23図　第145次調査
トレンチ・遺構配置略図（１）‥‥‥‥‥‥‥ 63
第24図　第145次調査
トレンチ・遺構配置略図（２）‥‥‥‥‥‥‥ 64
第25図　８区の遺構（１）SL2028 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 65
第26図　８区の遺構（２）SL2029 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 66
第27図　９区の遺構（１）SL2030, 2031 ‥‥‥‥‥ 67
第28図　９区の遺構（２）SL2032 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 68
第29図　10区の遺構（１）SL2033, 2036 ‥‥‥‥‥ 69
第30図　10区の遺構（２）SL2035 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 70
第31図　12区の遺構（１）SL2036, 2043, 2044 ‥‥‥ 71
第32図　12区の遺構（２）SL2036, 2043, 2044 ‥‥‥ 72
第33図　12区の遺構（３）SL2040, 2041 ‥‥‥‥‥ 73
第34図　12区の遺構（４）SL2040, 2041 ‥‥‥‥‥ 74
第35図　10・12区の遺構　SL2034, 2046 ‥‥‥‥‥ 75
第36図　12区の遺構（５）SL2042 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 76
第37図　12区の遺構（６）SL2042 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 77
第38図　12区の遺構（７）SL2038, 2039 ‥‥‥‥‥ 78
第39図　12区の遺構（８）SL2038, 2039 ‥‥‥‥‥ 79
第40図　12区の遺構（９）SL2045 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 80
第41図　12区の遺構（10）SL2037 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 81
第42図　12区の遺構（11）SL2037 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 82
第43図　13区の遺構（１）SK2051, 2052,
SKP2050, 2053～2059 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 83
第44図　13区の遺構（２）SK2051, 2052,
2053～2059 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 84
第45図　13区の遺構（３）SK2060, 2063, 2066,
SKP2061, 2062, 2064, 2065, 2067 ‥‥‥‥‥ 85
第46図　13区の遺構（４）SL2044, 2045 ‥‥‥‥‥ 86
第47図　13区の遺構（５）SL2045 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 87
第48図　13区の遺構（６）SD2072～2079 ‥‥‥‥‥ 88
第49図　13区の遺構（７）SD2075～2079 ‥‥‥‥‥ 89
第50図　13区の遺構（８）SD2080～2090 ‥‥‥‥‥ 90
第51図　13区の遺構（９）SD2091～2104 ‥‥‥‥‥ 91
第52図　13区の遺構（10）SD2105, SK2106 ‥‥‥‥ 92
第53図　13区の遺構（11）SD2107 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 93
第54図　13区の遺構（12）SL2115 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 94
第55図　13区の遺構（13）SL2116 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 95
第56図　13区の遺構（14）SL2118 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 96
第57図　13区の遺構（15）SL2117 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 97
第58図　13区の遺構（16）SL2117 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 98
第59図　13区の遺構（17）SD2119, SL2046 ‥‥‥‥ 99
第60図　13区の遺構（18）SD2120 ‥‥‥‥‥‥‥ 100
第61図　15区の遺構（１）SA2121 ‥‥‥‥‥‥‥ 101
第62図　15区の遺構（２）SA2122 ‥‥‥‥‥‥‥ 102
第63図　15区の遺構（３）SL2123 ‥‥‥‥‥‥‥ 103
第64図　15区の遺構（４）SL2124 ‥‥‥‥‥‥‥ 104
第65図　16区の遺構（１）SK2125 ‥‥‥‥‥‥‥ 105
第66図　16区の遺構（２）SK2127, SKP2126 ‥‥‥ 106
第67図　16区の遺構（３）SL2128 ‥‥‥‥‥‥‥ 107
第68図　17区の遺構（１）SL2129 ‥‥‥‥‥‥‥ 108
第69図　17区の遺構（２）SL2130 ‥‥‥‥‥‥‥ 109
第70図　17区の遺構（３）SL2131 ‥‥‥‥‥‥‥ 110
第71図　18区の遺構（１）SD2132, SK2133,
SL2129 ‥‥‥‥‥‥‥ 111
第72図　18区の遺構（２）SL2130 ‥‥‥‥‥‥‥ 112
第73図　18区の遺構（３）SK2134 ‥‥‥‥‥‥‥ 113
第74図　18区の遺構（４）SL2135 ‥‥‥‥‥‥‥ 114
第75図　20区の遺構　SL2136 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 115
第76図　遺構内出土遺物 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 116
第77図　ＳＬ2040出土遺物（１）‥‥‥‥‥‥‥ 117
第78図　ＳＬ2040出土遺物（２）‥‥‥‥‥‥‥ 118
第79図　ＳＬ2136出土遺物（１）‥‥‥‥‥‥‥ 119
第80図　ＳＬ2136出土遺物（２）‥‥‥‥‥‥‥ 120
第81図　ＳＬ2136出土遺物（３）‥‥‥‥‥‥‥ 121
第82図　ＳＬ2136出土遺物（４）‥‥‥‥‥‥‥ 122
第83図　ＳＫＰ2061出土遺物 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 124
第84図　第147次調査
調査区位置図（外柵北門周辺地区）‥‥‥ 134
第85図　第147次調査
調査区位置図（外柵東門周辺地区）‥‥‥ 135

第86図　第147次調査地点平面図（１）‥‥‥‥‥ 136
第87図　第147次調査地点平面図（２）‥‥‥‥‥ 137
第88図　第147次調査地点平面図（３）‥‥‥‥‥ 138
第89図　第147次調査　遺構外出土遺物 ‥‥‥‥‥ 139
第90図　第143次調査　遺構外出土遺物（１）‥‥ 140
第91図　第143次調査　遺構外出土遺物（２）‥‥ 141
第92図　第143次調査　遺構外出土遺物（３）‥‥ 142
第93図　第145次調査　遺構外出土遺物（１）‥‥ 143
第94図　第145次調査　遺構外出土遺物（２）‥‥ 144

表目次

第１表　払田柵跡周辺の主な
古代・中世・近世遺跡一覧 ‥‥‥‥‥‥‥ 11
第２表　柱穴様ピット一覧表 ‥‥‥‥‥‥‥‥‥ 58
第３表　遺構内出土遺物観察表 ‥‥‥‥‥‥‥‥ 116
第４表　SL2040, 2136出土遺物観察表‥‥‥‥‥‥ 123
第５表　SKP2061出土遺物観察表 ‥‥‥‥‥‥‥ 124
第６表　第147次調査　遺構外出土遺物観察表 ‥‥‥ 139
第７表　第143次調査　遺構外出土遺物観察表（１）‥ 140
第８表　第143次調査　遺構外出土遺物観察表（２）‥ 141
第９表　第143次調査　遺構外出土遺物観察表（３）‥ 142
第10表　第145次調査　遺構外出土遺物観察表（１）‥ 143
第11表　第145次調査　遺構外出土遺物観察表（２）‥ 144

図版目次

第143次調査
図版１　１　調査区遠景（南西→）　２　調査区遠景（西→）　３　調査区遠景（北西→）
図版２　１　１区北部調査完了状況（北→）　２　１区北部ＳＤ2003土層断面（西→）　３　１区中央部調査完了状況（北東→）
図版３　１　１区中央部ＳＬ2014土層断面（北西→）２　１区中央部ＳＬ2014・2015土層断面（北西→）
３　１区中央部ＳＬ2015土層断面（北西→）
図版４　１　１区中央部ＳＬ2016土層断面（北西→）　２　１区中央部ＳＬ2017土層断面（北西→）
３　１区中央部ＳＬ2017土層断面（北西→）
図版５　１　１区中央部ＳＬ2017土層断面（北→）　２　１区南部調査開始前状況（南西→）
３　１区南部ＳＬ2018土層断面（南西→）
図版６　１　２区調査完了状況（西→）　２　２区ＳＡ460土層断面（北→）　３　３区東西ライン調査完了状況（西→）
図版７　１　３区ＳＤ2004完掘状況（南→）　２　３区ＳＤ2005土層断面（南→）　３　３区ＳＤ2006完掘状況（東→）
図版８　１　４区調査完了状況（西→）　２　４区ＳＤ2007完掘状況（北→）　３　４区ＳＤ2008完掘状況（南→）
図版９　１　４区ＳＤ2009完掘状況（南→）　２　４区ＳＬ2019土層断面（南西→）　３　５区調査完了状況（東→）
図版10　１　５区ＳＤ2010完掘状況（南→）　２　５区ＳＤ2011完掘状況（北→）　３　５区ＳＤ2012完掘状況（北→）
図版11　１　６区調査完了状況（東→）　２　６区ＳＤ2013完掘状況（北→）　３　６区ＳＬ2020土層断面（南西→）
図版12　１　６区ＳＬ2021土層断面（南西→）　２　６区ＳＬ2022土層断面（南西→）
３　６区ＳＬ2023土層断面（南西→）
図版13　１　６区ＳＬ2024土層断面（南→）　２　７区調査完了状況（西→）　３　７区ＳＡ933確認状況（北西→）

第145次調査
図版14　１　調査区全景①政庁側から（南→）　２　調査区全景②政庁側から（南→）
３　13区ＳＫ2051, 2052, ＳＫＰ2053完掘状況（北→）
図版15　１　13区ＳＫＰ2057完掘状況（北→）　２　13区ＳＤ2073～2077確認状況（東→）
３　13区ＳＤ2073～2077完掘状況（西→）
図版16　１　13区ＳＤ2107完掘状況（東→）　２　13区ＳＤ2120土層断面（北→）　３　８区東西トレンチ精査完了（南→）
図版17　１　８区東西トレンチ精査完了（東→）　２　15区　ＳＡ2121完掘状況（北→）
３　15区　ＳＡ2122完掘状況（南→）

第147次調査
図版18　１　西側調査区全景（北西→）　２　西側調査区全景（西→）　３　東側調査区全景（南西→）
図版19　１　Ｗ５区角材列完掘状況（南西→）　２　W15区布掘溝跡検出状況（南西→）
３　W26区南側拡張部検出溝跡確認状況（西→）
図版20　１　Ｅ13区柵木検出状況（北→）　２　Ｅ14区布掘溝跡確認状況（北→）　３　Ｅ12区東門柱穴確認状況（南→）

第１章　調査の概要

第１節　調査に至る経緯

本堂城回地区を対象とした農地集積加速化基盤整備事業（ほ場整備事業）は、既存の用排水路回収により用水の確保・洪水時の湛水（たんすい）防止のほか、適切な水田管理と農業経営の安定化及び合理化を図るものである。

同地区のほ場整備計画は平成18年に示されたが、事業対象地区は払田柵跡の史跡指定範囲と重なる。このことから史跡内の現状変更について、文化財保護室、文化庁文化財材保護部記念物課、高梨土地改良区、仙北地域振興局農村整備第二課、農林水産部の担当者間で随時協議を行ってきた。

ほ場整備事業への対応に先立ち、払田柵跡の保存管理計画の見直しの必要が生じ、文化庁の指導により、平成12・13年度の２か年、旧仙北町が事業主体となり、国・県補助事業で払田柵跡保存管理計画策定事業を実施した。その成果は、平成14年３月に『払田柵跡第２次保存管理計画書』（仙北町教育委員会）として公刊された。

平成15年に入り、試掘、発掘、事業の進め方や現状変更許可申請手続きについて、事業に関係する担当者間での打ち合わせを進めていった。最終的には『公共公益事業における既存施設の改修』にあたる箇所のみを整備することで合意した。既存施設とは、道路・用水路・排水路であり、当該ほ場整備事業区域（対象面積72,589㎡）において、対象の施設が占める面積は9,967㎡と算定された。

これを受けて秋田県教育委員会教育長は平成15年10月14日付けで文化庁長官あてに「史跡払田柵跡の現状変更（試掘調査）について」の申請書を提出した。同年11月21日付けで文化庁長官より現状変更許可通知があり、11月25日より確認調査（第124次調査）に入った。第124次調査は、ほ場整備事業の対象区全域を対象とした試掘であり、これは今後の調査に向けての遺構・遺物の分布や遺構面までの深度、土質の状態を確認することを目的とした。調査の性質上、確認調査の担当は払田柵調査事務所職員が担当した。

第124次調査の成果を受けた協議を経て、本堂城回地区農地集積加速化基盤整備事業の対象区である史跡北東側の百目木地区において『払田柵跡第２次保存管理計画書』に従って用水路・排水路などの改修を対象とすることになり、当該ほ場整備事業区域の対象面積は121,000㎡と算定された。県教育委員会は20年11月４日から12月25日まで、払田柵跡調査事務所の協力のもと、埋蔵文化財センターが担当して確認調査（第138次調査）を実施した。翌21年度には事業行程と調査行程の調整・準備を進めたが、地元との緻密な調整が必要となり、事業開始年度が平成23年度に変更された。

平成22年度には工程の詳細を再度協議し、ほ場整備事業に対応する本調査は23年度から３か年で実施することとした。すなわち23年度に外柵東門周辺地区、24年度に外柵北門周辺地区、25年度に両地区の暗渠施工部分を調査することとし、26年度に最終的な調査報告書を刊行する計画とした。

県教育委員会教育庁は、平成23年６月22日付けで発掘調査の実施を条件に附した用排水路設置工事について、文化庁長官あて現状変更申請を進達し、同年７月15日付けで現状変更許可が通知された。

第２節　発掘調査の経過

平成23年度から平成25年度までの３か年で実施した発掘調査の経過は次のとおりである。

第143次調査（平成23年度）

【第１週】９月12日～９月16日

12日、調査員１名、発掘作業員12名の体制で発掘調査を開始した。作業員に作業内容の説明や諸注意をおこない、発掘機材の搬入、環境整備をおこなった。その後、外柵の残存状況を確認し、排水路の設計変更が必要かを判断するため４区から調査を開始した。遺構の検出は壁と底面でおこなった。15日に３区東端から18mの所で　外柵の布掘溝跡とみられる溝状プラン（ＳＤ2007）を検出した。西端部では溝跡（ＳＤ2005）を検出した。表土中やフリュームの裏込め土から数点の土師器、須恵器が出土した。

【第２週】９月20日～23日

20日・21日は台風のため作業を中止し、22日から先週検出した遺構の精査と３区、４区の調査を開始した。ＳＤ2007からは礎板が出土した。

【第３週】９月26日～９月30日

３区、４区の遺構検出と記録をおこなう。３区の調査はこの週で終了した。30日は降雨のため、調査を中止した。

【第４週】10月３日～10月７日

４区の記録をおこなう。５区、１区の遺構検出と記録おこなう。５区からＳＤ2011、ＳＤ2012を検出した。

【第５週】10月11日～10月14日

１区、２区、５区の遺構検出と記録をおこなう。２区からＳＡ460、５区からＳＤ2010を検出した。

【第６週】10月１７日～10月21日

17日は降雨のため作業を中止した。19日は調査可能場所がなくなったため作業員は休みにし、１区のフリューム抜き取り立ち合い調査をおこなった。２区、５区の記録をおこなった。１区は遺構の検出と記録をおこなった。

【第７週】10月24日～10月28日

24、25、26日工事遅延により調査可能場所がなかったため作業員は休ませ、２区の記録をおこなった。27日に２区の記録をおこない、28日に３区の記録と３区、４区のフリューム抜き取り立ち合いをおこなった。

【第８週】10月31日～11月４日

１区、３区、４区の記録をおこなった。

【第９週】11月７日～11月11日

１区の遺構検出と記録をおこなう。２区の記録をおこなう。

【第10週】11月14日～11月18日

１区の記録と６区の遺構検出をおこなう。

【第11週】11月21日～11月25日

６区の遺構検出をおこなう。

【第12週】11月28日～12月２日

６区の記録をおこなう。７区の遺構検出と記録をおこなう。

【第13週】12月５日～12月９日

５区、６区、７区の記録をおこなう。７日からは機材の整理・収納をおこなった。９日をもって一連の調査を終了した。

第145次調査（平成24年度）

【第１週】８月20日～８月23日

20日、調査員５名、補佐員１名、発掘作業員34名の体制で発掘調査を開始した。作業員に作業内容の説明や諸注意をおこない、発掘機材の搬入、環境整備をおこなった。その後、12区（北側）と20区（南側）に分かれて遺構検出を開始した。21日に20区に残っていた沈殿槽の抜き取り立ち合いをおこなった。23日から12区に並行して設置する13区の遺構検出にも着手した。

12区の河川跡から土師器、須恵器が出土した。

【第２週】８月27日～８月31日

12、13区の遺構検出をおこなった。20区は遺構検出と記録をおこなった。13区には外柵推定ラインと交差する地点があり、遺構検出をおこなったが、布掘溝跡は検出しなかった。20区は記録終了部分を原因者に引き渡した。20区から河川跡を検出し、土師器、須恵器、墨書土器、丸瓦が出土した。

【第３週】９月３日～９月７日

12、13、20区の遺構検出と記録をおこなった。各区は調査が終わった部分から原因者に引き渡した。９日には17、18区の古いフリュームの抜き取り立ち合いをおこなった。12区から河川跡を検出し、堆積層から土師器、須恵器、木製品が多数出土した。

【第４週】９月10日～９月14日

12、13、20区の遺構検出と記録をおこなった。17、18区の遺構検出を開始した。20区は全ての調査が終了したため原因者に引き渡した。12区から検出した河川跡から平瓦が出土した。

【第５週】９月18日～９月21日

12、13、17、18区の遺構検出と記録をおこなった。12、13区は調査の終了した140ｍ、17、18区は調査の終了した80ｍをそれぞれ原因者に引き渡した。21日は降雨のため、作業は中止した。

【第６週】９月24日～９月28日

12、13、17、18区の遺構検出と記録をおこなった。９、10、15、16区の調査を開始した。17、18区のうち調査の終了した160ｍについては原因者に引き渡した。15区の西側で布掘溝跡を２か所検出した（ＳＡ2121、ＳＡ2122【2121と同一遺構と思われる】）。掘り下げてみると角材列が残存していることが分かった。

【第７週】10月１日～10月５日

９、10、12、13、16、17、18区の遺構検出と記録をおこなった。８区（北門付近）の調査を開始した。12、13区は調査が終了した部分を、17区は調査が全て終了したため、原因者に引き渡した。18区は車両などの通行のために敷いている鉄板の下以外の調査を終了し原因者に引き渡した。敷鉄板の下は調査の進み具合を見ておこなうことにした。16区は検出遺構の記録作成をおこなった。15区で角材

列を検出したことから15区のフリューム設置工事の一部を変更することになった。

【第８週】10月９日～10月12日

８、９、10、12、13、15、16区の遺構検出と記録をおこなった。８区から河川跡を検出したが、北門関係の遺構は未検出である。９、10区から河川跡を検出し、精査を開始した。12区と13区を跨ぐ３条の河川跡を検出し、精査を開始した。15区は調査と並行して角材列（ＳＡ2121、2122）の記録作成を進めた。16区は調査が終了したため、原因者に引き渡した。11日は降雨のため、作業を中止した。

【第９週】10月15日～10月19日

８、９、10、12、13、15区の遺構検出と記録をおこなった。８区は調査範囲を拡大して遺構検出をおこなったが、北門関係の遺構は検出されなかった。９区は工事の都合上未着手の一部を除き原因者に引き渡した。10区は調査を終了し、原因者に引き渡した。15区は検出した角材列（ＳＡ2121、2122）を養生した後、原因者に引き渡し、継続して遺構検出と記録をおこなった。

【第10週】10月22日～10月26日

８、12、13区の遺構検出と記録をおこなった。11、14区の調査を開始した。８区は調査範囲を拡大して遺構検出をおこなったが、北門関係の遺構は検出されなかった。11、12区は調査を終了し、原因者に引き渡した。13区は調査の終了した部分を原因者に引き渡した。14区は粗掘りが完了した。18区の敷鉄板を撤去し遺構検出と記録をおこない、原因者に引き渡した。23日は降雨のため、作業を中止した。

【第11週】10月22日～10月26日

８、13、14、15区の遺構検出と記録をおこなった。８区は調査範囲を拡大して遺構検出をおこなったが、北門関係の遺構は検出されなかったため、記録作成後、埋め戻した。13、14区は調査を終了し、原因者に引き渡した。15区工事用道路として使用していた場所以外は調査が終了し、原因者に引き渡した。

【第12週】11月５日～11月６日

15区の工事用道路として使用していた場所の遺構検出と記録をおこない、調査終了後、原因者に引き渡した。これで全体の調査が終了した。発掘機材の整理・収納を行い一連の調査を終了した。

第147次調査（平成25年度）

【第１週】10月７日～10月11日

15日、調査員３名、発掘作業員13名の体制で発掘調査を開始した。作業員に作業内容の説明や諸注意をおこない、発掘機材の搬入、環境整備をおこなった。調査範囲は東側調査区と西側調査区に分かれており、西側調査区の西端から調査を開始した。調査トレンチ番号はＷ１、Ｗ２…とした。Ｗ１からW34まで調査トレンチを設定し、遺構検出と記録をおこなった。Ｗ１からW19、W33、34からは布掘溝跡を検出した。W20からW32の調査トレンチでは遺構を検出しなかった。検出した布掘溝跡が外柵か確認するためにＷ５を掘り下げた所、角材列を検出した。W22からW32のトレンチは遺構検出のために南方向に拡張した。実測で使用する払田柵跡の座標の位置を確認した。雨の日が多く、遺構検出できなかったり、午後の作業を中止せざるをえなかった。

【第２週】10月15日～10月18日

西側調査区（W22～32）と東側調査区（Ｅ１～８）に分かれて調査をおこなった。

西側調査区のW22からW32で南方に拡張したトレンチのうちW26、28、29、30、31、32で外柵推定線より南で浅い溝跡を検出した。W24、25では遺構の検出はなかったが、遺物包含層が残っており須恵器など土器片が出土した。東側調査区のＥ１～８全ての調査トレンチから布掘溝跡を検出した。これらを一連の遺構と捉えＳＡ08とした。16日は台風の影響で調査は中止した。

【第３週】10月21日～10月25日

西側調査区はＷ１から34までの記録作成をおこない、全て終了した。東側調査区は新たにＥ９から14までの調査トレンチを設定した。Ｅ９から11、Ｅ13から布掘溝跡を検出した。このうちＥ９と13の布掘溝跡は既設暗渠により一部が撹乱されている状況を確認した。外柵東門の位置を特定するためにボーリング棒で門柱の位置を確認した。南東隅の門柱はボーリング棒で確認出来なかったため、第138次調査トレンチを掘り返し、その位置を確認した（Ｅ12トレンチ）。

【第４週】10月28日～11月１日

布掘溝跡および角材列の残存状況の良い西側の新規暗渠工事について文化財保護室と地域振興局農村整備第二課との協議により既設暗渠を利用し新規暗渠を埋設することになった。これにより西側調査区では既設暗渠により布掘溝跡が壊されている部分を調査する事になった。この調査により西側調査区で13か所を確認した。東側調査区でも同様に既設暗渠と布掘溝跡との交点を調査し、４か所の交点を確認した。検出した既設暗渠が新規暗渠の設置に適しているか否かは次週調査する。調査トレンチは記録作成が終わり次第順次埋め戻しをおこなった。

【第５週】11月５日～11月8日

調査区内の図面などの記録が終了したことから、調査区に残してあるセクションポイントの計測をトータルステーションでおこなった。既設暗渠の埋設状況を調査した結果、新規暗渠を埋設するのに十分な深度があったのは、西側調査区で４か所、東側調査区で４か所になった。

【第６週】11月11日～11月15日

既設暗渠を利用して新規暗渠を埋設することになったが、新規暗渠工事は来年１月中旬頃に着工する予定である。そのため、雪中でも分かるように十分な長さで目立つ杭を既設暗渠の南北端に設置することになった。杭は工事担当業者である細井技研より提供を受けセンター側で塗装して南北の畦に２本ワンセットで設置した。設置箇所は西側調査区は６か所（既設暗渠４か所に布掘溝跡を検出しなかった２か所）、東側調査区は４か所（既設暗渠）である。この週から、まとまった降雪があり調査区やヤード等の除雪作業を定期的におこなった。

【第７週】11月18日～11月22日

東側調査区は、水はけが悪く調査トレンチの影響で農作業中に機械がぬかるみにはまり動けなくなる危険性がある。この対策を文化財保護室と地域振興局農村整備第二課が協議した結果、東側調査区の調査トレンチに厚さ20㎝程の砂を入れて埋め戻すことになった。既に全ての調査トレンチは埋め戻しを完了しており、積雪も20㎝程あったことから調査トレンチに砂を運び、春先に暗渠工事の埋め戻し作業の時に入れてもらうことにした。余剰分の砂は工事担当業者である細井技研に預かってもらうことにした。22日に調査区に設置していたセクションポイントの釘を回収し、発掘機材の整理・収納を行い一連の調査を終了した。

第３節　整理作業の経過

整理作業は、発掘調査終了後に秋田県埋蔵文化財センターで行った。３次にわたる発掘調査は、各年度末毎に刊行される『払田柵跡調査事務所年報』にも、その調査概要を掲載させることにしていたため、遺構配置図作成と遺構写真の選別を中心に作業を進めた。第143次調査の概要は『払田柵跡調査事務所年報2011』（以下書名を『年報＋年号』と略記）に、第145次調査は『年報2012』に、第147次調査は『年報2013』にそれぞれ掲載された。

出土遺物は、洗浄・注記・分類・接合を行った後、実測と採拓を行った。実測図はデジタルトレースで行い、拓影図はスキャナーで取り込んで挿図の作成を行った。遺物の写真撮影のうち墨書土器は赤外線カメラで撮影し、遺物図版を作成した。検出遺構については、調査で記録作図した実測図を基に第２原図を作成した後、デジタルトレースを行って挿図に完成した。

現地調査が終了した平成25年度は過去３年間のデータを統合させ、一冊の報告書にまとめる作業をおこなった。

第２章　遺跡の位置と歴史的環境

第１節　遺跡の位置

払田柵跡は、秋田県大仙市払田・仙北郡美郷町本堂城回にある古代城柵である。遺跡は雄物川の中流域に近く、大仙市大曲地区の東方約６㎞、横手盆地北側の仙北平野中央部に位置する。遺跡は、第三紀硬質泥岩からなる真山・長森の小丘陵を中心として、北側を川口川・矢島川（烏川）、南側を丸子川（鞠子川、旧名：荒川）によって挟まれた沖積低地に立地する。

遺跡については、明治35・36（1902・03）年の千屋村（現美郷町）坂本理一郎による溝渠開削の際や、明治39（1906）年頃から開始された高梨村（現大仙市）耕地整理事業の際に土中に埋もれ木のあることが知られていた。その後、この埋もれ木について地元の後藤寅之助（宙外）・藤井東一（甫公）らが注目し、氏らによって歴史的遺産であることが判明した。

昭和５年３月、高梨村が調査を実施したが、その中心となったのは後藤寅之助で、さらに同年10月、文部省嘱託上田三平によって学術調査が行われ遺跡の輪郭が明らかにされた。この結果に基づき、昭和６年３月30日付けで秋田県最初の国指定史跡となり、昭和63年６月29日付けで史跡の追加指定がされ現在に至っている。史跡指定面積は894,618.04㎡である。

昭和40年代に入り、史跡指定地域内外の総合整備パイロット事業等の計画が立案された。そこで秋田県教育委員会は地元仙北町（現大仙市）と協議の上、この重要遺跡を保護するための基礎調査を実施して、遺跡の実体を把握することとし、昭和49年、現地に「秋田県払田柵跡調査事務所」を設置し、本格的な発掘調査を開始した（昭和61年４月「秋田県教育庁払田柵跡調査事務所」と改称）。幸い、地元管理団体である仙北町及び地域の人々の深い理解により、史跡指定地内は開発計画から除外された。

遺跡は真山・長森を囲む外柵と、長森を囲む外郭線からなる。長森丘陵中央部には政庁がある。政庁は板塀で区画され、正殿・東脇殿・西脇殿や付属建物群が配置されている。これらの政庁の建物には５期の変遷があり、創建は９世紀初頭、終末は10世紀後半である。政庁の調査成果は報告書『払田柵跡Ⅰ－政庁跡－』（昭和60年３月）として公刊された。

区画施設である外柵は、真山・長森の二つの丘陵を囲むようにしてあり、東西1,370ｍ南北780ｍの長楕円形で、標高32～37ｍ、総延長3,654ｍ、外柵によって囲まれる遺跡の総面積は約878,000㎡である。外柵は１時期の造営で杉角材による材木塀が一列に並び、東西南北に八脚門が開く。外郭は、長森を取り囲むようにしてあり、東西765ｍ、南北320ｍの長楕円形で、面積約163,000㎡、最高地は標高53ｍである。外郭線の延長は約1,780ｍで石塁、築地塀（東・西・南の山麓）と材木塀が連なり、東西南北に八脚門を配する。外郭線は全体に４時期わたる造営が認められる。なお外柵・外郭は、従来それぞれ外郭線・内郭と呼称されていたが、それまでの調査成果を踏まえ、平成７年から呼び替えたものである。これら区画施設の調査成果は、報告書『払田柵跡Ⅱ－区画施設－』（平成11年３月）として公刊された。

出土品には、須恵器・土師器・緑釉陶器・灰釉陶器・瓦質土器・青磁（越州窯系）・瓦・硯などの土器・陶磁器類のほか、石帯・砥石・金床石などの石製品、鏃・鎌・刀子・釘・紡錘車などの鉄製品、鉄（銅）滓、斎串、曲物、挽物、鋤、楔などの木製品、漆紙文書（６点）・木簡・墨書土器・箆書土器などの文字資料もある。

木簡（絵馬２点・刻字を持つ角材などを含む）は108点確認されており、「飽海郡少隊長解申請」「十火大粮二石八斗八升」「嘉祥二年正月十日」「別當子弟大伴寧人」「鹿毛牡馬者」「矢田部弓取」「北門」「狄藻」「山本」「最上」「最上四」などと記されている。

墨書・箆書土器は約600点出土・採集されており、一小隊御前下・大津郷・鷹空上・懺悔・小勝・音丸・北門・北預・厨家・靫大・中大・中万・厨・官・舎・館・麿・宅・新・吉・秋・郡・千・主・長・酒・安・賀・全・成・前・伴・部・左・文・名・上・下・矢・車・工・益・山・就・立・生・平・延・圓・集・大・木・中・仲・犬・方・継・廳・春・又・十・七・（以上墨書）、「出羽□　郡□男賀凡酒杯」（箆書）などの文字が認められる。

第２節　歴史的環境

本節では、払田柵跡周辺域において発掘調査が行われた古代遺跡について紹介する。なお遺跡名の次の（　）内は、遺跡番号を表す。位置などは第１図と第１表を参照されたい。

内村遺跡（54－14）　美郷町千屋：秋田県教育委員会が昭和55年に調査

払田柵跡の南東約３㎞に位置する10世紀前半～中頃の集落遺跡である。竪穴建物跡３棟、土坑、焼土遺構などが検出された。出土遺物は、土師器杯・皿・甕類、須恵器長頸壺・甕、緑釉陶器、青磁皿、和鏡などがある。緑釉陶器は近江産、青磁皿は中国越州窯系である。和鏡は、直径12.4㎝の瑞花鳳八花鏡である。出土遺物に緑釉陶器・中国産青磁や和鏡が含まれることから、払田柵に関連の深い集落跡と推測される。

厨川谷地遺跡（54－3）　美郷町土崎：秋田県埋蔵文化財センターが平成13年に調査

払田柵跡外柵の南東約350ｍの至近距離に位置するが、大正４年（1915年）に水田下から約１万2000枚の銭貨が偶然掘り出されたことから中世の遺跡（埋蔵銭出土地）として周知されていた。

調査の結果、９世紀後半～10世紀前半代の払田柵で執り行われる祭祀を挙行する場（祭祀遺構）であったことが判明した。祭祀の実態は、大きく２時期の変遷が推測された。９世紀後半代では、複数の旧河川とそれに囲まれた微高地上に、柵列を目隠し塀とした掘立柱建物跡で祭祀が執り行われ、10世紀に入ると建物・柵列は滅失するものの、微高地上の新たに作った土坑や自然の凹地を利用した祭祀が展開する。後者は、十和田火山噴火（西暦915年）という天災も契機に含まれる。一方、祭祀屋・土坑の周辺に広がる河川や湧水地点においても水辺での祭祀が執り行われ、木製祭祀具（斎串・人形・呪符木簡など）や墨書土器なども多量に出土した。

中屋敷Ⅱ遺跡（54－5）　美郷町土崎：美郷町（旧千畑町）教育委員会が平成14・17年に、秋田県埋蔵文化財センターが平成14・15年に調査

払田柵跡の南東約1.5㎞に位置する。調査の結果、縄文時代中期～晩期、弥生時代、古代・中世・

近世の集落跡であることが判明した。古代は竪穴建物跡や竪穴状遺構が点在する集落跡であり、10世紀前半代を中心とする時期である。

城方小屋遺跡（54－41）　美郷町本堂城回：美郷町教育委員会が平成19年に調査

平成18年に発見された遺跡であり、払田柵跡外柵東門跡の東側約150ｍに位置する。調査の結果、柵列跡、掘立柱建物跡、土坑などが検出された。柵列跡は溝内に材を埋設した痕跡（窪み）が認められるもので、軸線方向は北西－南東方向を指す。幅45㎝前後の布掘溝跡が長軸約85ｍ以上、短軸約60ｍの規模でＵ字状に確認され、楕円形に巡る可能性もある。溝跡堆積土中に十和田a火山灰が見られることから、西暦915年以前に柵列として機能していたものの、遺棄され材が抜き取られた後、溝状となった遺構に火山灰が堆積したと推測される。溝跡の軌跡は、西約100㎡に位置する材木塀のそれと似る。払田柵跡の外側に別の区画施設が存在していた貴重な発見である。また土坑のうち１基は、形態・堆積土・遺物の出土状況から10世紀代の木棺を伴う伸展葬墓と推測される。払田柵跡の外側隣接地に古代墓が発見されたのは、真山丘陵部での２例（火葬墓）に次ぐものである。

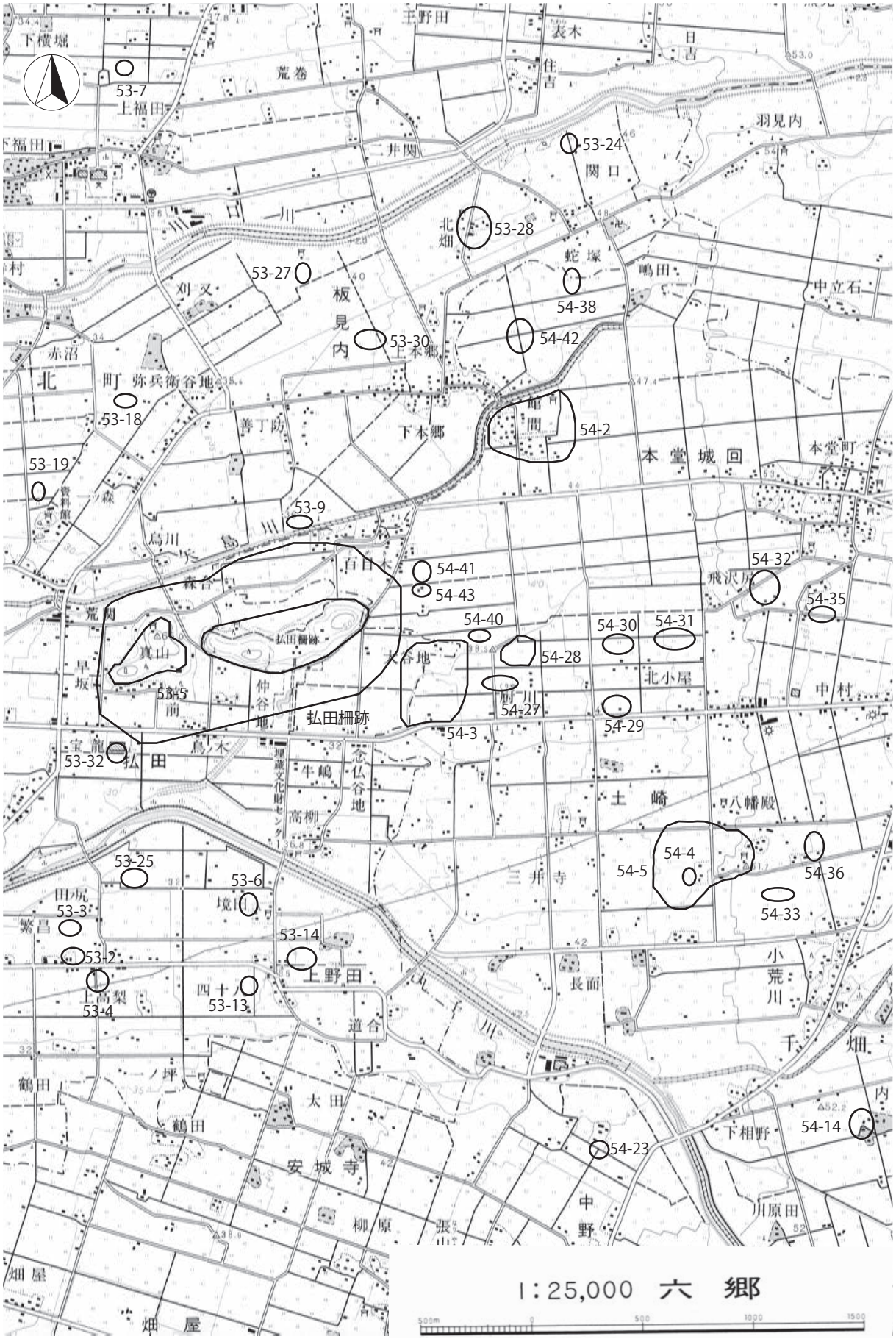
森崎Ⅱ遺跡（54－43）　美郷町本堂城回：美郷町教育委員会が平成19年に調査

城方小屋遺跡の南側に隣接する遺跡である。調査の結果、９世紀中頃の竪穴建物跡が１棟出された。払田柵跡周辺の沖積地部における竪穴建物跡の確認は、外柵西門東門（第９次調査）に次いで２例目である。

以上の他に、払田柵跡東方２㎞圏内では、墨書土器が出土した下中村遺跡（54－29）、和鏡と墨書土器が出土した飛沢尻遺跡（54－30）、墨書土器が出土した森崎Ⅰ遺跡（54－40）などの古代遺跡も点在する。

【第１表の註】

1　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（県南版）』1987（昭和62）年
2　秋田県教育委員会『秋田県中世城館』秋田県文化財調査報告書第86集　1981（昭和56）年
3　千畑町「古銭発掘由来記」『千畑町郷土史』1986（昭和61）年
4　秋田県教育委員会『内村遺跡』秋田県文化財調査報告書第82集　1981（昭和56）年
5　千畑町教育委員会『中屋敷Ⅱ遺跡』千畑町文化財調査報告書第６集　2004（平成16）年
　美郷町教育委員会『中屋敷Ⅱ遺跡』美郷町埋蔵文化財調査報告書第３集　2006（平成18）年
6　千畑町教育委員会『十二遺跡・上飛沢遺跡』千畑町文化財調査報告書第７集　2004（平成16）年
7　秋田県教育委員会『厨川谷地遺跡』秋田県文化財調査報告書第383集　2005（平成17）年
8　今村義孝校注『奥羽永慶軍記（上）（下）』人物往来社　1966（昭和41）年
9　美郷町教育委員会『町内遺跡詳細分布調査報告書』美郷町文化財調査報告書第１集　2005（平成17）年
10　山崎文幸「秋田・観音堂遺跡」『木簡研究』第26号　木簡学会　2004（平成16）年
11　大仙市教育委員会からの情報提供による。
12　秋田市教育委員会『中屋敷Ⅱ遺跡』秋田県文化財調査報告書第384集　2005（平成17）年
13　美郷町教育委員会からの情報提供による。
14　秋田県教育委員会『遺跡詳細分布調査報告書』秋田県文化財調査報告書第267集
15　秋田県教育委員会『秋田県遺跡地図（仙北地区）』2007（平成19）年
16　島田祐悦・高橋学「内村遺跡」『横手市史　資料編　考古』2007（平成19）年
17　山形博康「城方小屋遺跡・森崎Ⅱ遺跡発掘調査の概要」『第34回古代城柵官衙遺跡検討会資料集』2008（平成20）年



第１図　払田柵跡と周辺の古代～近世の遺跡

第１表　払田柵跡周辺の主な古代・中世・近世遺跡一覧

地図番号	遺跡名	所在地	備　考	註
212－53－1	払田柵跡	大仙市払田	古代城柵官衙遺跡（９世紀初頭～10世紀後半）	
434－54－1		美郷町本堂城回	集落（縄文）、墓地（中世）、城館（堀田城）	
212－53－2	繁昌Ⅰ遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（木製品）：古代	1
212－53－3	繁昌Ⅱ遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212－53－4	上高梨遺跡	大仙市高梨	遺物包含地（須恵器）	1
212－53－5	堀田城跡	大仙市払田	真山丘陵を利用した中世城館跡（払田柵跡内）	2・8
212－53－6	境田城跡	大仙市払田	中世城館跡：天正18年（1590）破却	2
212－53－7	杉ノ下Ⅰ遺跡	大仙市横堀	遺物包含地（須恵器）	1
212－53－9	鍛治屋敷遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212－53－13	四十八遺跡	大仙市上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212－53－14	中村遺跡	大仙市上野田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212－53－18	弥兵谷地遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（須恵器）	1
212－53－19	一ツ森遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（須恵器系陶器壺）	1
212－53－24	堰口遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（鉄滓）	15
212－53－25	田ノ尻遺跡	大仙市払田	遺物包含地（土師器・須恵器）	1
212－53－27	観音堂遺跡	大仙市板見内	近世集落跡、掘立柱建物跡、井戸など検出	10
212－53－28	北畑遺跡	大仙市北畑	中世集落・墓地、火葬墓、2005年発掘調査	11
212－53－30	八幡堂遺跡	大仙市板見内	遺物包含地（土師器、中近世陶器）	11
212－53－32	下川原遺跡	大仙市払田	遺物包含地（土師器）、1995年発見	14
434－54－2	本堂城跡	美郷町本堂城回	本堂氏の居城跡、2004年～確認調査	2
434－54－3	厨川谷地遺跡	美郷町土崎	埋蔵銭出土地（1915年≪大正４≫出土）	3
			古代祭祀遺跡、2001年発掘調査	7
434－54－4	中屋敷Ⅰ遺跡	美郷町土崎	寺院跡	1
434－54－5	中屋敷Ⅱ遺跡	美郷町土崎	縄文・古代集落跡、2002・03年発掘調査	5・12
434－54－14	内村遺跡	美郷町千屋	古代集落跡、1980年発掘調査、中国産青磁出土	4・16
434－54－23	砂館跡	美郷町中野	城館跡	2
434－54－27	厨川谷地Ⅱ遺跡	美郷町土崎	中世以降？、2000年発見	9
434－54－28	厨川谷地Ⅲ遺跡	美郷町土崎	古代、2001年発見	9
434－54－29	下中村遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見、墨書土器出土	9
434－54－30	飛沢尻遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見、墨書土器出土・和鏡出土	9
434－54－31	下飛沢遺跡	美郷町土崎	古代、2002年発見	9
434－54－32	上飛沢遺跡	美郷町土崎	古代、2003年発掘調査	6
434－54－33	上館遺跡	美郷町土崎	中近世城館跡、2002年発見	13
434－54－35	松ノ木遺跡	美郷町土崎	中世～近世、2003年の確認調査で柱穴確認	9
434－54－36	八幡殿遺跡	美郷町土崎	古代集落跡か、2003年確認調査	9
434－54－38	西館遺跡	美郷町本堂城回	縄文・古代、2005年発見	13
434－54－40	森崎Ⅰ遺跡	美郷町本堂城回	古代、2006年発見、墨書土器出土	13
434－54－41	城方小屋遺跡	美郷町本堂城回	古代集落跡、2007年発掘調査、柵列跡、火葬墓	17
434－54－42	北館遺跡	美郷町本堂城回	近世集落跡、2006年発見	13
434－54－43	森崎Ⅱ遺跡	美郷町本堂城回	古代集落跡、2007年発掘調査、竪穴建物跡	17

地図番号の212は大仙市管内、53は旧仙北町域を示し、434は美郷町管内、54は旧千畑町域を示す。

第２図　払田柵跡調査実施位置図

第３章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法

本報告書は第143次調査、第145次調査、第147次調査と３か年の調査成果をまとめたものである。各調査ごとに調査箇所や調査目的が違うため各年次調査ごとに調査方法を説明する。

第143次調査（平成23年度）

用排水路の改修に伴う調査である。用水路に並走するように任意で測量用の杭を打設した用水路ごとに22から28の番号を割り、割り振った番号から調査方向に22－1、22－２…とした。杭間は直線方向では20m間隔であるが調査区が湾曲する場合は、調査に最適な間隔で杭を打設した。必要に応じて杭に標高値を記した。

検出した遺構には確認した順に略記号及び通し番号を付し、精査をおこなった。出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は主に、図面の記録および写真撮影によった。遺構図面は原則として1/20縮尺で作成し、平面図は任意の杭を基準とした簡易の遣り方測量により作成した。遺構細部の図面を必要とした際には1/10縮尺での作図もおこなった。写真撮影はアナログカメラ（35㎜カメラおよび６×4.5㎝カメラ）とデジタルカメラを併用しアナログカメラのフィルムはモノクロとカラーリバーサルを使用した。

第145次調査（平成24年度）

用排水路のフリューム交換および、新規の用水路設置のための調査である。用排水路および新規の用水路に並走するように任意で測量用の杭を打設した。用排水路ごとに№.０から№.１、№.２…とし№.間は20mとした。用排水路の延長方向が変わった場合は№.１+N12.5mのように方位と距離を記した杭を打設している。また、各杭には標高値が記してある。

検出した遺構には確認した順に略記号及び通し番号を付し、精査をおこなった。出土した遺物には、遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は主に、図面の記録および写真撮影によった。遺構図面は原則として1/20縮尺で作成し、平面図は任意の杭を基準とした簡易の遣り方測量により作成した。遺構細部の図面を必要とした際には1/10縮尺での作図もおこなった。写真撮影はアナログカメラ（35㎜カメラ）とデジタルカメラを併用しアナログカメラのフィルムはカラーリバーサルを使用した。

第147次調査（平成25年度）

新規の暗渠を埋設するため外柵の推定ラインと暗渠設置予定箇所の交点に角材列などの遺構が残存していないかを調べる調査である。第147次調査の範囲は第143次調査と第145次調査の調査範囲にまたがっており広範囲であることに加え、実際に調査する箇所も外柵の推定ラインと暗渠の交点という狭い範囲であることから測量用の杭は打設せず、トータルステーションでセクションポイントの座標値を計測した。

検出した遺構には確認した順に略記号及び通し番号を付し、精査をおこなった。出土した遺物には、

遺跡名・出土位置または遺構名・出土層位・出土年月日を記録し、取り上げた。

調査の記録は主に、図面の記録および写真撮影によった。遺構図面は原則として1/20縮尺で作成し、平面図はセクションポイントを基準とした簡易の遣り方測量により作成した。写真撮影は高性能デジタルカメラを使用した。

任意の杭やセクションポイントで作図した図面や取り上げた遺物は、整理作業時に払田柵跡のグリッド番号に振り替えた。また、遺構番号や遺物番号を払田柵跡の管理番号に振り替えた。

第２節　基本層序

第143次調査は水路の改修に伴うもので、沖積低地の広大な範囲に細長い調査区が展開している。遺構が検出された各地点において断続的に観察された層序について、調査区全体にわたり整合させるのは困難であることから、基本層序については以下のような簡便な分類の下で行った。なお、各層中でさらに細分された場合、便宜的に上からａ・ｂ・ｃ…と小文字アルファベットを付しているが、これらの細分は土層断面ごとに行っているため、必ずしも小文字同士で一致するものではない。

Ⅰ層　近現代の土層を一括した。水路設置時の盛土や近・現代の水田耕作土を含む。

Ⅱ層　Ⅲ層より上位に堆積する土壌化した部分。黒色基調のシルトで、調査区のごく一部に確認することができ、旧表土と考えられる。火山灰との前後関係は不明確である。

Ⅲ層　黄褐色基調の粘土層。調査区の広範囲に認められるが、欠失しているところもある。下位Ⅳ層との境界は不明瞭で漸移的な変化を示しており、基本的にⅣ層が離水し色調変化した部分と考えられる。遺構の一部は本層上面で確認している。

Ⅳ層　オリーブ黒色基調の粘土層。調査区の立地する沖積低地の基盤層である。植物遺存体を含んでおり、水成堆積物と考えられる。

第145次調査は用排水路のフリューム交換及び新規用水路の設置という性質上、第143次調査と同じく広大な範囲に細長く調査区が展開しているため、調査区を通した基本層序を記録することが困難でり、各調査区ごとに断続的に観察し記録した。基本層序については以下のように整理した。

なお、第147次調査の基本層序は東側調査区が第143次調査範囲と、西側調査区が第145次調査範囲と重複しているため、それぞれの調査区の基本層序を使用した。

第145次調査

Ⅰa層　　黒褐色（10YR3/2）シルト。表土。

Ⅰb層　　黒褐色（10YR3/1）シルト。造成土。

Ⅱa層　　暗オリーブ（2.5Y3/3）シルト。遺物包含層①。

Ⅱb層　　黒褐色（10YR3/1）シルト。遺物包含層②。

Ⅱc層　　灰黄褐色（10YR5/2）シルト。遺物包含層③。

Ⅲ層　　暗灰黄色（2.5Y4/2）シルト。

Ⅳ層　　黒褐色（2.5Y3/1）粘土。漸移層。
Ⅴ層　　暗オリーブ灰色（5GY4/1）粘土。

Ⅰa層は表土である。調査範囲が水田やその隣接地ということもあり植物根が多く含まれている。Ⅰb層は造成土である。主に耕作するために造成されたと思われ、土性の特徴もⅠa層とよく類似している。またこの層には農業資材と思われるビニール片や肥料袋などのゴミや砂を入れている場所もあった。Ⅱa層、Ⅱb層、Ⅱc層は遺物包含層である。土師器や須恵器が出土する遺物包含層である。全体的に遺物包含層は削平を受けており12区、13区、15区、17区、18区で部分的に残存している。Ⅲ層は暗灰黄色のシルトであり、これを更に下げると地山漸移層であるⅣ層またはⅤ層に到達する。Ⅴ層は地山土で還元作用によりグライ化している。

第４章　調査の記録

第１節　第143次調査の検出遺構と遺物

第143次調査の遺構数総計は、外柵を構成する材木塀のうち、角材列２か所と布掘溝跡５か所、溝跡６条であり、加えて河川跡を12か所で確認した。

調査区は工事対象である用排水路の分岐点を境界として、１～７区に分割した。第143次調査で使用した遺構番号は2003～2025である。なお、２区・７区で検出した材木塀は、過去に調査が行われたものに連続することから、過去調査分の番号をそのまま付している。

材木塀の調査にあたっては、現況保存を原則とする認識に立ち、遺構確認後に図面・写真の記録を作成し、その後埋め戻しを行った。

１　１区（第４～10図、図版２～５）

本区は第143次調査区西端に位置し、北東から南西へ流下する幹線排水路（通称八幡堰）である。全長は約306ｍであるが、町道と交差する２か所は暗渠となっており、これらの暗渠を境として調査区はさらに北部・中央部・南部に分割される。本区は西側で市道と接しており、かつ道路面との高低差が大きい。このため、安全確保の観点から調査にあたっては西側壁面に着手せず、底面及び東側の壁面を清掃し、遺構確認を行った。なお暗渠部分（北部と中央部間の約17ｍ分、中央部と南部間の約24ｍ分）については工事立ち会いを実施したが、遺構・遺物とも確認されなかった。

遺構は材木塀布掘溝跡１か所、河川跡５か所を検出した。本区に設置されていた水路フリュームは比較的大型であったため深く撹乱されており、遺構は平面的に確認することはできず、全て東側壁面において土層断面のみの検出となった。なお、本地区における土層断面の記録は比較的撹乱の少ない部分に留めている。遺物は須恵器坏・甕、土師器坏・甕が出土した。

ＳＤ2003材木塀布掘溝跡（第10図）

北部北端から南へ約18ｍ、ＯＯ54区に位置する。東側壁面で加工木片の集中箇所を検出し、周辺を精査したところ、溝状の断面形を確認した。

土層断面は溝跡を斜めに横断していると推測されるが、現況で開口部幅68㎝、底部幅50㎝、Ⅳ層上面から底面までの深さ30㎝を測る。底面は平坦で、壁は北側が外傾し、南側がほぼ垂直に立ち上がる。なお、本溝跡より上の堆積層（Ⅱａ～Ⅱｃ層）中には砂粒や植物遺存体、十和田火山起源と見られる火山灰の二次堆積物が含まれており、河川堆積物と考えられる。おそらく十和田ａ火山灰降下以前に形成された河川によって浸食され、本溝跡の構築面は失われているものと考えられる。

堆積土は２層に分層した。１層とその上位の河川堆積物（Ⅱｃ層）との境界は不明瞭で、土質は類似している。従って、河川の浸食に伴って角材が脱落し、河川堆積物が流入した可能性がある。２層はⅣ層由来土塊を多く含み、柵木設置時の裏込め土残存部と考えられる。

遺物は北壁寄りの位置で加工木片が折り重なった状態で出土している。これらは角材列の設置・固

定に際し、間隙に詰めたものと推測する。

本溝跡には角材列が残存していないが、検出位置、断面形状、堆積状況を総合して、材木塀の布掘溝跡と推定する。検出位置は、従来の外柵推定ラインとほぼ整合する。

ＳＬ2014河川跡（第４～６図）

中央部の北東端から南西へ約35.5ｍの範囲、ＮＧ63・64、ＮＨ63、ＮＩ62・63、ＮＪ61・62、ＮＫ60・61、ＮＬ60、ＮＭ59・60、ＮＮ59、ＮＯ59、ＮＰ58・59、ＮＱ58区に位置する。

本河川跡は断面のみの部分的な検出であるため流路方向は不明確であるが、おそらく現水路（八幡堰）とほぼ重複する、北東－南西方向の流路であったと推測する。底面は未確認であるが、本河川跡の上に形成された旧表土（Ⅱａ層）上面から68㎝以上の深さを測る。北端部の立ち上がりは確認しておらず、本河川跡はより北側へ延長するものと考えられる。

堆積土は、北部（Ｃ－Ｉライン）において12層に分層した。シルトが大部分を占め、砂・粘土主体層は部分的に挟まる程度あり、比較的緩やかな流速で堆積したものと考えられる。堆積土の中位にあたる５層は火山灰の二次堆積と見られることから、火山灰降下時には河川として機能していたと推測される。南部（Ｊ－Ｌライン）においては、堆積土の上下関係からＳＬ2015より古いと判断したが、先後関係のない一連の河川である可能性もある。遺物は出土しなかった。

ＳＬ2015河川跡（第５・６図）

中央部北東端から南西へ約34～58ｍの範囲、ＮＡ69、ＮＢ68・69、ＮＣ67・68、ＮＤ66･67、ＮＥ65・66、ＮＦ64・65、ＮＧ64区に位置する。

本河川跡はＳＬ2014同様、現水路（八幡堰）とほぼ重複する北東－南西方向の流路であったと推測される。底面は未確認であるが、本河川跡の上に形成された旧表土（Ⅱａ層）上面から76㎝以上の深さを測る。

堆積土は３層に分層した。最下層は細砂を主体とするが、上部の１・２層は細砂を若干含む程度であり、最終的には緩やかな流速で堆積し埋没したと考えられる。北端部においては、堆積土の上下関係からＳＬ2014より新しいと判断したが、先後関係のない一連の河川である可能性もある。遺物は出土しなかった。

ＳＬ2016河川跡（第７・８図）

中央部南西端から北東へ約44～50ｍの範囲、ＭＯ74・75、ＭＰ74区に位置する。

本河川跡はＳＬ2014・2015同様、現水路（八幡堰）とほぼ重複する北東－南西方向の流路であったと推測される。底面は未確認であるが、本河川跡の上に形成された旧表土（Ⅱａ層）上面から80㎝以上の深さを測る。北端部の立ち上がりは確認しておらず、本河川跡はより北側へ延長するものと考えられる。

堆積土は２層に分層した。細砂をわずかに含むシルトを主体とし、比較的緩やかな流速で堆積し埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＬ2017河川跡（第７・８図）

中央部南西端から北東へ約20.5～44ｍの範囲、ＭＩ79・80、ＭＪ79、ＭＫ78・79、ＭＬ77・78、ＭＭ76・77、ＭＮ75・76、ＭＯ75区に位置する。

本河川跡はＳＬ2014・2015・2016同様、現水路（八幡堰）とほぼ重複する北東－南西方向の流路で

あったと推測される。底面は未確認であるが、本河川跡の上に形成された旧表土（Ⅱａ層）上面から76㎝以上の深さを測る。

堆積土は２層に分層した。細砂をわずかに含むシルトが主体であり、比較的緩やかな流速で堆積し埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＬ2018河川跡（第９図）

南部南西端から北東へ約14～26ｍの範囲、ＬＣ92、ＬＤ91・92、ＬＥ91、ＬＦ90・91区に位置する。

本河川跡はＳＬ2014・2015・2016・2017同様、現水路（八幡堰）とほぼ重複する北東－南西方向の流路であったと推測される。深さ最大87㎝を測る。

堆積土は３層に分層した。１層は粗砂主体で、２・３層は礫を多量に混入しており、比較的速い流速の下、一気に堆積し埋没したと推測する。最下部には巨大な頁岩の岩塊を含んでいるが、本溝跡は長森丘陵の東端部に近接しており、ここからの転礫と考えられる。

２　２区（第11図、図版６）

本区は第143次調査区北側に位置する用水路部分で、長さは東西方向約46ｍである。

遺構は角材列１条のみの検出である。遺物は須恵器甕、土師器坏・甕・不明器種が出土した。

ＳＡ460角材列（第11図）

東端から西へ約12ｍ、ＯＣ44・45区に位置する。旧水田耕作土と思われるＩｃ層掘り下げの途中で角材先端部を確認し、周辺をⅣ層上面まで掘り下げた段階で布掘溝跡を含めた全体プランを確認した。ただし、北側は暗渠管が横断するため、遺構確認はこの暗渠管より南側に限られる。なお、調査区の南壁面に沿って幅15㎝、深さ15㎝のトレンチを設定し、堆積状況を確認した。本角材列は第56次調査Ａトレンチで検出されたものに連続することから、遺構番号もこれに従っている。

角材列は南北方向に２本を確認した。南側の角材は部分的な検出で、最大幅22㎝を測る。北側の角材は東（柵の外側）へ倒れており、暗渠設置の影響によると考えられる。この角材の最大幅は23㎝である。角材最上端部の標高は、北端の材で35.35ｍである。布掘溝跡は検出部分の長さ43㎝、幅56～57㎝を測り、主軸方向は座標北から西へ21°振れる。調査区南壁トレンチの土層断面状況を見る限り、東・西壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

堆積土は２層に分層した。１層は角材に張り付くような堆積状況を示しており、角材先端の腐朽した部分への流入土であろう。２層はⅣ層由来土塊を多く含み、角材列設置時の裏込め土と考えられる。遺物は２層中から土師器坏の底部破片が１点出土している（第11図１）。角材列設置の際、裏込め土に混入したものであろう。

本角材列の検出位置は、従来の外柵推定ラインから４ｍほど東に離れている。

３　３区（第12・13図、図版６・７）

本区は第143次調査区中央東側に位置する用水路部分であり、東西方向約40ｍ、西端で南へ直角に折れ、約20ｍで４区に接続する。

遺構は材木塀布掘溝跡１条、溝跡２条を検出した。遺物は墨書土器(須恵器坏)、須恵器坏・甕・不明器種、土師器坏・甕・不明器種、スクレイパーが出土した。

ＳＤ2004材木塀布掘溝跡（第12図）

東端から西へ約15.5ｍ、ＮＪ37区に位置する。Ⅲ層上面で調査区を南北に横断する不明瞭な黒色土プランを確認し、周辺をⅣ層まで掘り下げた段階で明瞭なプランを検出した。

確認部分の長さ72㎝、幅38～42㎝を測り、主軸方向は座標北から西へ24°振れる。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がり、Ⅲ層上面から底面までの深さは103㎝である。本溝跡は現水田の畦と田面の境界に位置しており、畦にかかる調査区北側壁面の土層断面を見ると、底面から80㎝ほどの高さに段が付く。しかしこれは本来の形状ではなく、角材の抜き取りに伴い撹乱されたものと推測する。

堆積土は５層に分層した。１～３層は黒色土を主体としてⅢ・Ⅳ層由来土塊を多量に含み、４層との境界は明瞭である。これらは角材列が耕地整理等に伴い引き抜かれた際の埋め戻し土であろう。４層は角材間の充填土や裏込め土が角材抜き取りに伴い崩落したもの、５層はⅣ層由来土塊を多く含み、角材列設置時の裏込め土残存部と考えられる。

遺物は３層中から内黒土師器坏・甕が出土しており、埋め戻し土への混入と考えられる。また、底面直上からは溝の中軸線に並ぶように板材が３点出土しており、これらは角材列設置時の高さ調整のため、角材の下に敷かれたものと推測する。

本溝跡には角材列が残存していないが、平面形状とその延長方向、断面形状と堆積状況、そして底面からの板材出土状況を総合して、外柵材木塀布掘溝跡と判断した。検出位置は、従来の外柵推定ラインから11ｍほど東に離れている。

ＳＤ2005溝跡（第13図）

西端から東へ約1.5～6.5ｍの範囲、ＮＩ44・45区に位置する。Ⅲ層上面で明瞭な黒褐色土プランとして確認した。調査区を南北に横断し、南壁に沿う形で直角に折れて東へ延びている。南北の横断部分のみ底面まで掘り下げ、東側の延長部分については上端ラインの記録作成に留めた。

南北横断部分は長さ78㎝、幅25～28㎝を測り、主軸方向は座標北から西へ７°振れる。底面は平坦で、西壁はほぼ垂直に、東壁はやや緩やかに外傾し立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大50㎝である。東西方向の長さは西端から11.8ｍを測り、さらに東へと続いている。

堆積土は１層のみで、Ⅱ層に類似した黒褐色土を主体としてⅢ層由来土塊を混入する。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、古い水田区画に伴う水路等の可能性もある。

ＳＤ2006溝跡（第13図）

北端から南へ約12ｍ、ＮＥ45区に位置する。Ⅲ層上面で調査区を東西に横切る明瞭な黒褐色土プランとして確認した。

確認部分は長さ76㎝、幅43～47㎝を測り、主軸方向は座標北から西へ90°振れる。底面は緩やかに窪み、壁は底面から連続して南側でやや急に、北側で緩やかに外傾し立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大13㎝である。

堆積土は１層のみで、Ⅱ層に類似した黒褐色土を主体としてⅢ層由来土塊を混入する。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、ＳＤ2005同様、古い水田区画に伴う水路等の可能性もある。

４　４区（第14～16図、図版８・９）

本区は第143次調査区中央東側に位置する排水路部分であり、東西方向約121ｍの直線状を呈し、東端から西へ約42ｍの地点で３区に、西端で１区に接続する。本区に設置されていた水路フリュームは比較的大型であり、底面は遺構確認面（Ⅲ・Ⅳ層上面）より深く撹乱されていた。そのため南北両側壁面の清掃に傾注し、土層断面の観察から遺構の確認に努めた。

遺構は材木塀布掘溝跡１条、溝跡２条、河川跡１か所を検出した。遺物は須恵器壺・甕、土師器坏・甕が出土した。

ＳＤ2007材木塀布掘溝跡（第14図）

東端から西へ約13.5ｍ、ＮＤ35区に位置する。調査区南壁面の清掃中、土層断面に溝状プランが検出されたため周辺を精査したところ、北壁面及びⅣ層上面においても確認することができた。

確認部分の長さ156㎝、幅55～95㎝を測り、主軸方向は座標北から西へ８°振れる。底面は平坦で、東壁はほぼ垂直に立ち上がるが、西壁は部分的に段差が付いている。Ⅲ層上面から底面までの深さは最大106㎝である。

堆積土は３層に分層した。いずれも地山由来土塊を多く含むが、特に１層は上部Ｉｂ層から連続した状況を示しており、最近の埋土と考えられる。２層は締まりが緩く、角材引き抜き後の流入土の可能性が高い。３層は固く締まっており、角材列設置時の裏込め土残存部と考えられる。断面形状と堆積状況を併せて考えると、角材の引き抜きに伴う撹乱は底面付近まで及び、特に西壁は本来の形状を留めていないものと推測される。

遺物は底面の東寄りで大小の加工木片が出土しており、これらは角材列設置時に詰められた端材と考えられる。

本溝跡には角材列が残存していないが、平面形状とその延長方向、断面形状と堆積状況、そして底面からの加工木出土状況を総合して、材木塀布掘溝跡と判断した。検出位置は、従来の外柵推定ラインから11ｍほど東に離れている。

ＳＤ2008溝跡（第15図）

東端から西へ約72ｍ、ＮＢ55区に位置する。調査区北壁沿いで撹乱を免れたⅢ層残存部分の上面において、南北方向の明瞭な黒色土プランを確認した。

確認部分は長さ30㎝、幅50㎝を測り、主軸方向は座標北から東へ16°振れる。底面は緩やかに窪み、壁は底面から連続して西側ではやや急に、東側では緩やかに外傾し立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大15㎝である。

堆積土は１層のみで、Ⅱ層に類似した黒色土を主体にⅢ層由来土粒を少量混入する。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、ＳＤ2005・2006同様、古い水田区画に伴う水路等の可能性もある。

ＳＤ2009溝跡（第15図）

東端から西へ約78ｍ、ＮＢ57区に位置する。調査区北壁沿いで撹乱を免れたⅢ層残存部分の上面において、南北方向の明瞭な黒色土プランを確認した。

確認部分は長さ15㎝、幅26㎝を測り、主軸方向は座標北から西へ７°振れる。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大16㎝である。

堆積土は２層に分層した。共にⅡ層に類似した黒褐色土を主体として、特に１層には地山由来土を多量に混入しており、埋戻しの様相を呈する。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、ＳＤ2005・2006・2008同様、古い水田区画に伴う水路等の可能性もある。

ＳＬ2019河川跡（第16図）

西端から東へ約6～15.5ｍの範囲、ＭＴ66～69区に位置する。北側壁面及び底面において砂粒を多量に含む堆積層を確認し、河川跡の存在が想定された。このため北壁沿いにトレンチを設定して全体の幅を検出した。

本河川跡の流路方向は、東岸の平面状況からおそらく北東－南西方向であったと推測される。最大幅は9.4ｍ、最底面は未確認であるが、最上面から87㎝以上の深さを測る。

堆積土は６層に分層した。概ね細砂や粗砂を主体とし、比較的急な流速で堆積したと考えられる。特に３層には直径30㎝ほどの大型の流木を含み、洪水堆積の様相を示す。遺物は出土しなかった。

本河川跡の上部にはⅢ層が形成されていることから、払田柵の創建より相当古い段階に埋没した河川である可能性が高い。

５　５区（第17・18図、図版９・10）

本区は第143次調査区中央東側に位置する用水路部分であり、長さは東西方向約160ｍである。数地点でトレンチを設定し掘削したところ、遺構確認面は新設水路の設置面よりもさらに深いレベルにあることが判明した。このような状況を受け、本地区での掘削深度は新設水路設置面から下へ20㎝程度とした。このため、遺構検出は材木塀推定ライン付近及び土層確認用のトレンチ部分に限られている。

遺構は材木塀布掘溝跡１条、溝跡２条を検出した。遺物は土師器坏が出土した。

ＳＤ2010材木塀布掘溝跡（第17図）

東端から西へ約18ｍ、ＭＦ35・36区に位置する。Ⅳ層上面で調査区を南北に横断する黒色土の不明瞭なプランを確認した。

確認部分の長さ77㎝、幅59㎝を測り、主軸方向は座標北から西へ４°振れる。上部は撹乱され、段が付いている。底面は平坦で、壁はほぼ垂直に立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大110㎝である。

堆積土は３層に分層した。１層は角材引き抜き後の流入土、２層は角材列設置時の裏込め土と考えられる。３層は角材設置前に高さ調整のため埋め戻した部分であろう。

遺物は１層中から加工木片２点が出土しており、角材列設置時に詰められた端材の可能性がある。本溝跡には角材列が残存していないが、平面形状とその延長方向、断面形状と堆積状況を総合し外柵材木塀布掘溝跡と判断した。検出位置は、従来の外柵推定ラインから3.5ｍほど東に離れている。

ＳＤ2011溝跡（第18図）

東端から西へ約57ｍ、ＭＤ48区に位置する。土層確認用トレンチの底面、Ⅳ層上面において調査区を南北に横断する明瞭な黒色土プランを検出し、この段階でＳＤ2012を切ることも確認できた。

確認部分は長さ79㎝、幅28～36㎝を測り、主軸方向は座標北から西へ６°振れる。底面は狭くやや丸みを帯びており、壁は急角度で外傾し立ち上がる。構築面であるＩｄ層上面から底面までの深さは

最大47㎝である。

堆積土は１層のみである。Ｉｄ層に類似した黒色土を主体に、Ⅳ層由来土塊を少量含む。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、水田区画に伴う水路の可能性が高い。

ＳＤ2012溝跡（第18図）

東端から西へ約56～59.5ｍの範囲、ＭＤ48・49区に位置する。土層確認用トレンチの底面、Ⅳ層上面において調査区を東西に横断する明瞭な黒色土プランを検出し、この段階でＳＤ2012に切られることも確認できた。

確認部分は長さ3.3ｍ、幅11～19㎝を測り、主軸方向は座標北から東へ70°振れる。底面は平坦であり、壁は急角度で外傾し立ち上がる。確認面から底面までの深さは最大６㎝である。

堆積土は１層のみである。Ｉｄ層に類似した黒色土を主体に、Ⅳ層由来土塊を少量含む。遺物は出土しなかった。

本溝跡の時期は不明確であるが、ＳＤ2011同様、水田区画に伴う水路の可能性が考えられる。

６　６区（第19～21図、図版11～13）

本区は第143次調査区南側に位置する排水路部分で、東西方向の総延長は約206ｍ、東端から西約161ｍの地点で７区と接続する。本区に設置されていた水路フリュームは大型で、底面まで深く撹乱されていたため、遺構確認は主として壁面を清掃し、土層断面での検出となった。

遺構は材木塀布掘溝跡１条、河川跡５か所を検出した。遺物は須恵器坏・壺・甕、土師器坏・甕・不明器種、内黒土師器坏、磨石１点が出土した。

ＳＤ2013材木塀布掘溝跡（第19図）

東端から西へ約35.5ｍ、ＬＥ39区に位置する。検出地点付近には、分水用のコンクリート製構造物が設置され、大きく撹乱されていた。撹乱土を除去する段階でその中から材木塀の角材が３点出土したため、周辺を精査したところ南壁に溝跡の土層断面を確認し、次いで南壁沿いの撹乱を免れた部分で溝跡の下半部を平面的に検出することができた。

溝跡は東・北側が大きく撹乱されているが、残存部分の長さ36㎝、最大幅32㎝を測り、主軸方向は座標北から東へ10°振れる。底面は平坦で、西壁はほぼ垂直に立ち上がり、上部はやや外傾する。本来的な確認面（Ⅲ層上面）から底面までの深さは最大55㎝である。

堆積土は２層に分層した。１層は大きな地山土塊を多く含み、比較的最近の角材引き抜きに伴う流入土と考えられる。２層の部分はボーリング棒を慎重に刺したところ、壁奥数センチで角材に突き当たることが確認された。角材列間の充填土と考えられる。

遺物は周辺の撹乱土中から角材３点が出土し、遺存状況の良い２点を図示した（第19図１・２）。

本溝跡には角材列が残存していないが、平面形状とその延長方向、断面形状と土層断面の奥に角材を確認できること、周辺の撹乱から角材が出土したことを総合して、材木塀布掘溝跡と判断した。検出位置は、従来の外柵推定ラインから２ｍほど東に離れている。

ＳＬ2020河川跡（第20図）

東端から約15.5ｍの範囲、ＬＦ32～37、ＬＧ32～36区に位置する。調査区壁面及び底面において、

砂粒を多く含む堆積層として確認した。

本河川跡の堆積土は西側でさらに深く潜り込み、東側では調査区外へと延びるため、全体の範囲は不明確である。流路方向は、西端部の平面状況からおそらく南北方向であったと推測される。東西の最大幅31.4m、最底面は未確認であるが、最上面から36㎝以上の深さを測る。

堆積土は２層に分層した。１層は粗砂を主体とし、２層は粗砂と粘土の混合で、共に礫を含み、洪水堆積の様相を呈する。遺物は出土しなかった。

本河川跡の上部にⅣ層が形成されていることから、払田柵の創建より相当古い段階に埋没した河川である可能性が高い。

ＳＬ2021河川跡（第20図）

東端から西へ約40～68ｍの範囲、ＬＤ44～49、ＬＥ40～49区に位置する。調査区壁面及び底面において砂粒を多く含む堆積層として確認した。

本河川跡の堆積土は西側でさらに深く潜り込むため、全体の範囲は不明確である。ＳＬ2022と一体のものである可能性も考えられる。流路方向は、両端部の平面状況から北東－南西方向であったと推測される。東西の最大幅は28ｍ、最底面は未確認であるが、最上面から40㎝以上の深さを測る。

堆積土は２層に分層した。共に粗砂を主体とし、特に２層は礫を多量に含み、洪水堆積の様相を呈する。遺物は出土しなかった。

本河川跡の上部にⅣ層が形成されていることから、払田柵の創建より相当古い段階に埋没した河川である可能性が高い。

ＳＬ2022河川跡（第20図）

東端から西へ約79.5～84.5ｍの範囲、ＬＣ53～55、ＬＤ53～55区に位置する。調査区壁面及び底面において砂粒を多く含む堆積層として確認した。

本河川跡の堆積土は東側でさらに深く潜り込むため、全体の範囲は不明確である。ＳＬ2021と一体のものである可能性も考えられる。流路方向は、西岸の平面状況から北東－南西方向であったと推測される。東西の最大幅は4.8ｍ、最底面は未確認であるが、最上面から25㎝以上の深さを測る。

堆積土は１層のみである。粗砂を主体として礫を多量に含み、洪水堆積の様相を呈する。遺物は出土しなかった。

本河川跡の上部にⅣ層が形成されていることから、払田柵の創建より相当古い段階に埋没した河川である可能性が高い。

ＳＬ2023河川跡（第21図）

西端から東へ約14～18.5ｍの範囲、ＫＳ89～91区に位置する。調査区北壁の土層断面で植物遺存体を含む黒色土の堆積層を確認した。調査区底面には絶えず水が流れる状況で、平面形を検出することは困難であったため、南壁も精査して土層断面を検出し、流路方向の把握に努めた。

本河川跡の流路方向は、調査区南北の土層断面の検討から北東－南西方向であったと推測される。東西の最大幅は5.6ｍ、最底面は未確認であるが、最上面から22㎝以上の深さを測る。

堆積土は２層に分層した。粘土主体で植物遺存体を含み、緩やかな流速で堆積し埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

ＳＬ2024河川跡（第21図）

西端から約2.5ｍの範囲、ＫＲ94・95、ＫＳ94・95区に位置する。調査区北壁の土層断面で植物遺存体を含む黒色土の堆積層を確認した。ＳＬ2023と同様の状況であったため、同じく南壁も精査して土層断面を検出し、流路方向の把握に努めた。

本河川跡の流路方向は、調査区南北の土層断面を併せて検討した結果、北東－南西方向であったと推測される。西側は調査区外へと延びるため全体幅は不明であるが、東西の最大幅は2.6ｍ、最底面は未確認であるが、最上面から18㎝以上の深さを測る。

堆積土は２層に分層した。シルト主体で植物遺存体を含み、比較的緩やかな流速で堆積し埋没したと考えられる。遺物は出土しなかった。

７　７区（第22図、図版13）

本区は第143次調査区南側に位置する用水路部分で、東西方向の延長約145ｍ、西端で６区と接続する。５区と同様の状況であり、遺構確認実施箇所は材木塀推定ライン付近及び土層観察用トレンチに限られている。

遺構は角材列１条、河川跡１か所を検出した。遺物は須恵器坏・壺・甕、土師器坏・甕・不明器種が出土した。

ＳＡ933角材列（第22図）

東端から西へ約25ｍ、ＫＰ・ＫＱ40区に位置する。Ⅳ層上面で布掘溝跡を含めた全体プランを確認した。本角材列は第138次調査Ｅ８区で検出されたものに近接することから、遺構番号もこれに従っている。

角材列は南北方向に３本を確認した。北端と南から２番目の角材の間には抜き取り痕が確認され、おそらく水路設置に伴うと考えられる。角材列の確認部分の長さは1.3ｍ、主軸方向は座標北から西へ10°振れる。南から２番目の角材規模は幅24㎝、厚さ20㎝を測る。角材最上端部の標高は、北端の材で34.87ｍである。布掘溝跡は幅48～50㎝を測り、土層断面から見る限り壁の立ち上がりはほぼ垂直である。

堆積土は１層のみであり、角材列設置時の充填土と考えられる。遺物は出土しなかった。

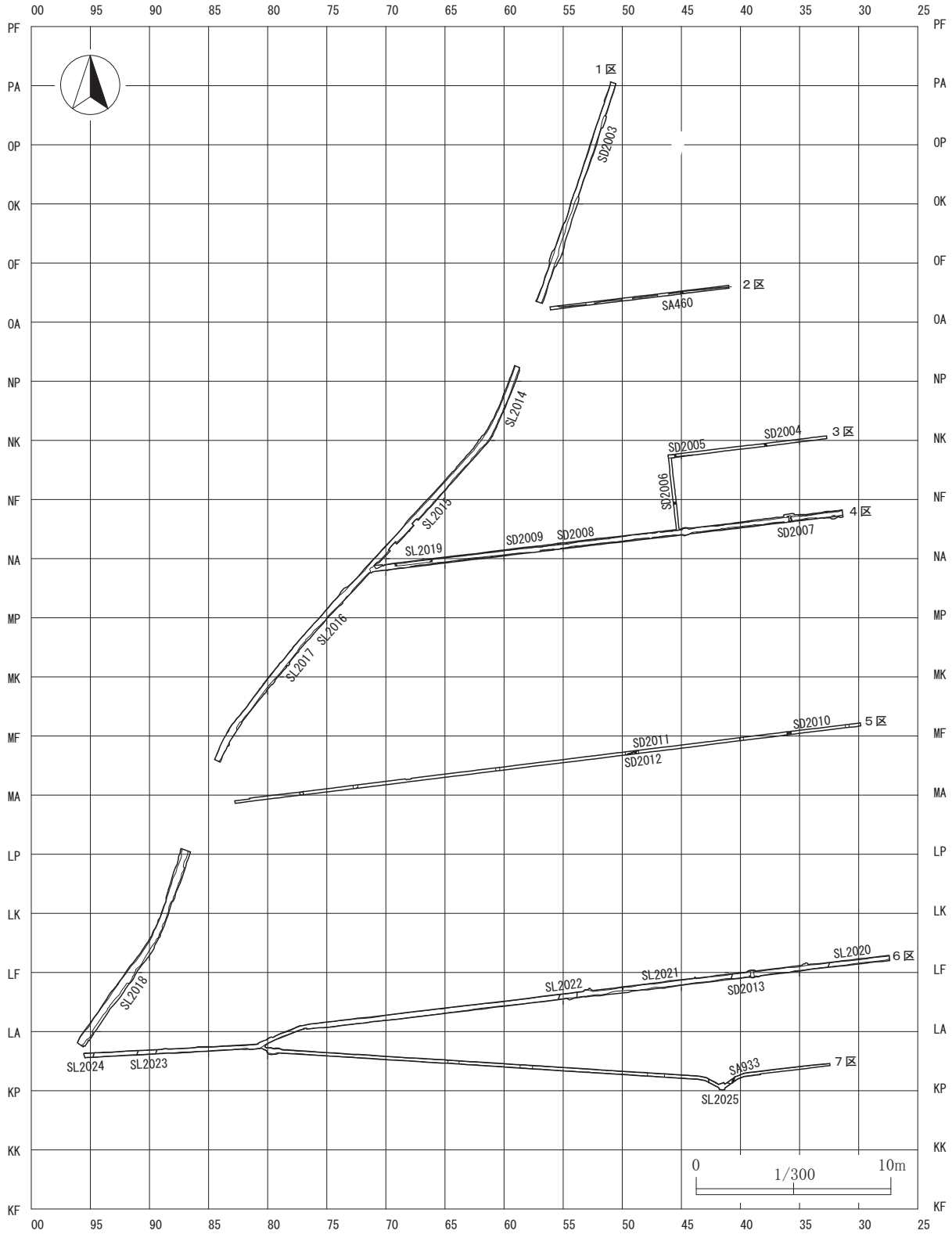
本角材列の検出位置は、従来の外柵推定ラインとほぼ整合している。

ＳＬ2025河川跡（第22図）

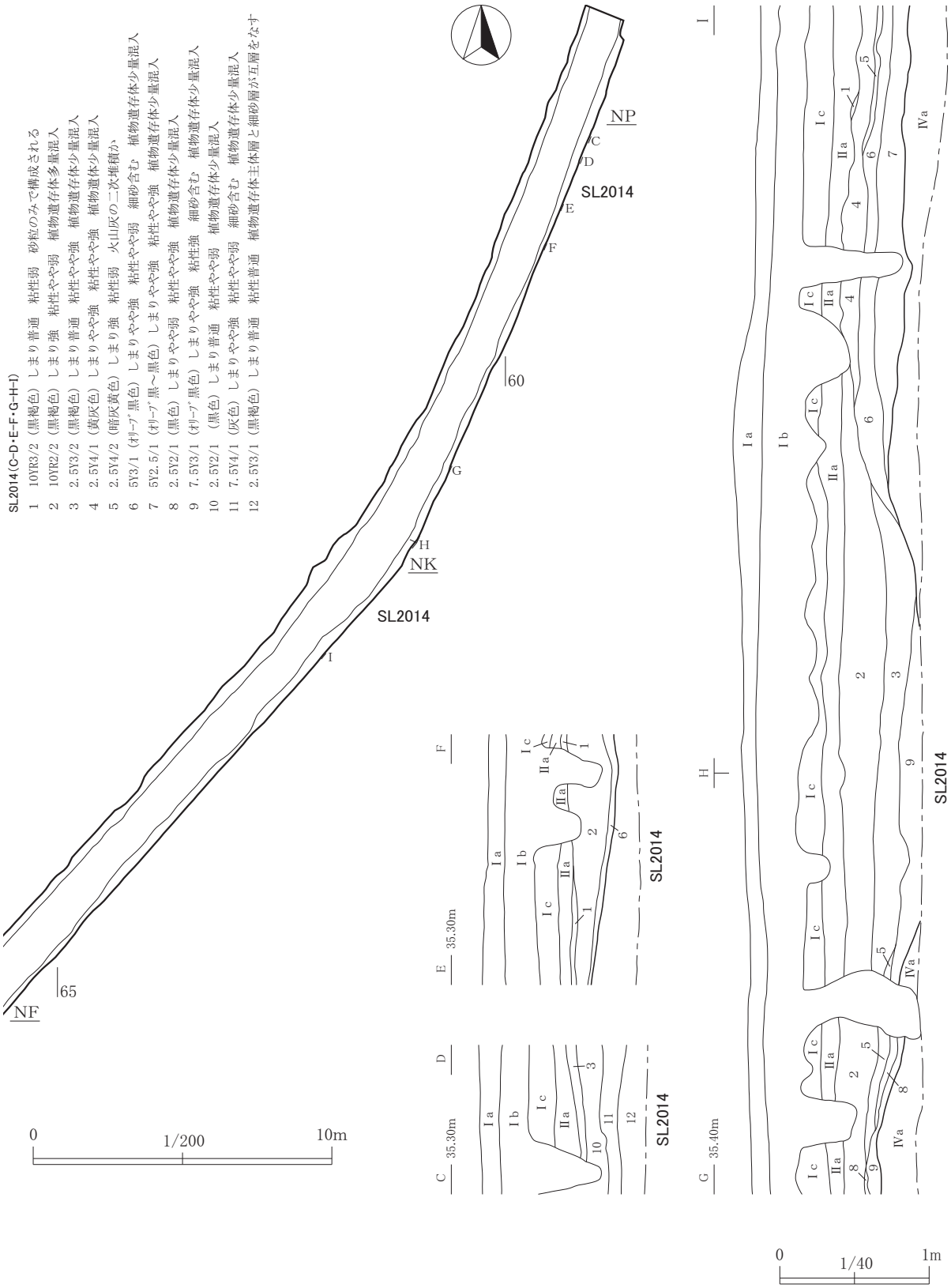
東端から西へ約25.5～31ｍの範囲、ＫＰ40～42区に位置する。当初材木塀の検出を目的としてⅣ層上面を精査中に、河川跡の東端部に相当する黒色土の落ち込みを確認した。このため西側へと精査範囲を広げ、西端部の立ち上がりも確認した。なお、本河川跡が確認された地点は常に水が溜まる状況であったため、底面までの掘り下げは行っていない。

本河川跡の流路方向は平面状況から南北方向と推測されるが、東西の岸ラインが並行しないことから、屈曲部に相当する可能性がある。確認部分の東西最大幅は5.4ｍ、深さは10㎝である。

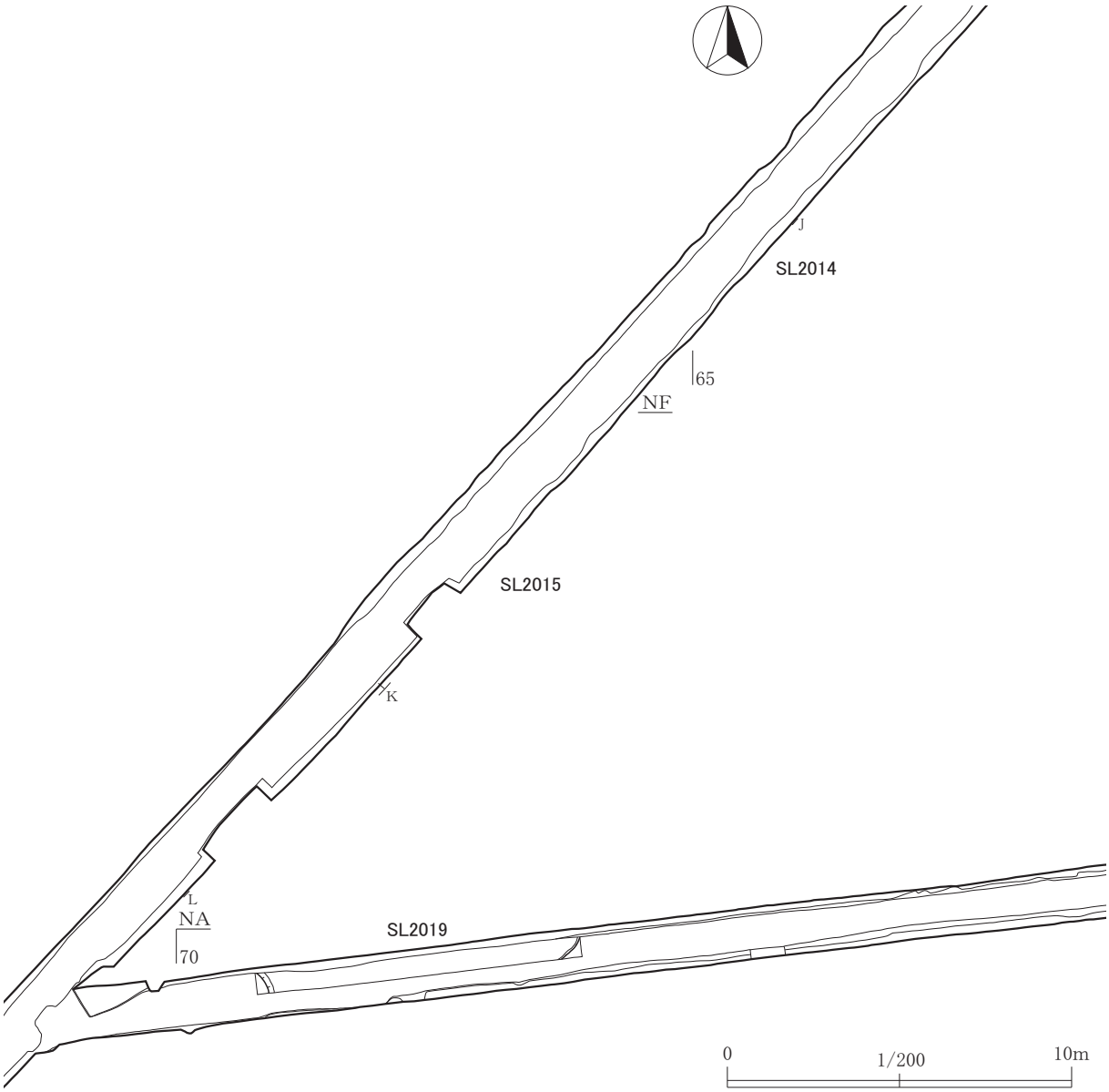
堆積土は１層のみで、植物遺存体を含む粘土を主体としており、緩やかな流速で堆積し埋没したものと考えられる。遺物は出土しなかった。



第３図　払田柵跡第143次調査　調査区位置図（外柵東門周辺地区）



第４図　１区中央部の遺構（１）　SL2014



1区中央部　基本土層（J-K-L）

Ⅱａ　10YR2/1（黒色）しまり普通　粘性やや弱　旧表土か
Ⅱｂ　10YR2/2（黒褐色）しまりやや強　粘性やや弱　植物遺存体多量混入
Ⅱｃ　5Y2/1（黒色）しまり普通　粘性普通　植物遺存体少量混入
Ⅱｄ　10YR1.7/1（黒色）しまり普通　粘性やや弱　植物遺存体多量混入
Ⅱｅ　10YR4/2（灰黄褐色）しまりやや強　粘性やや強　Ⅲ層に類似する

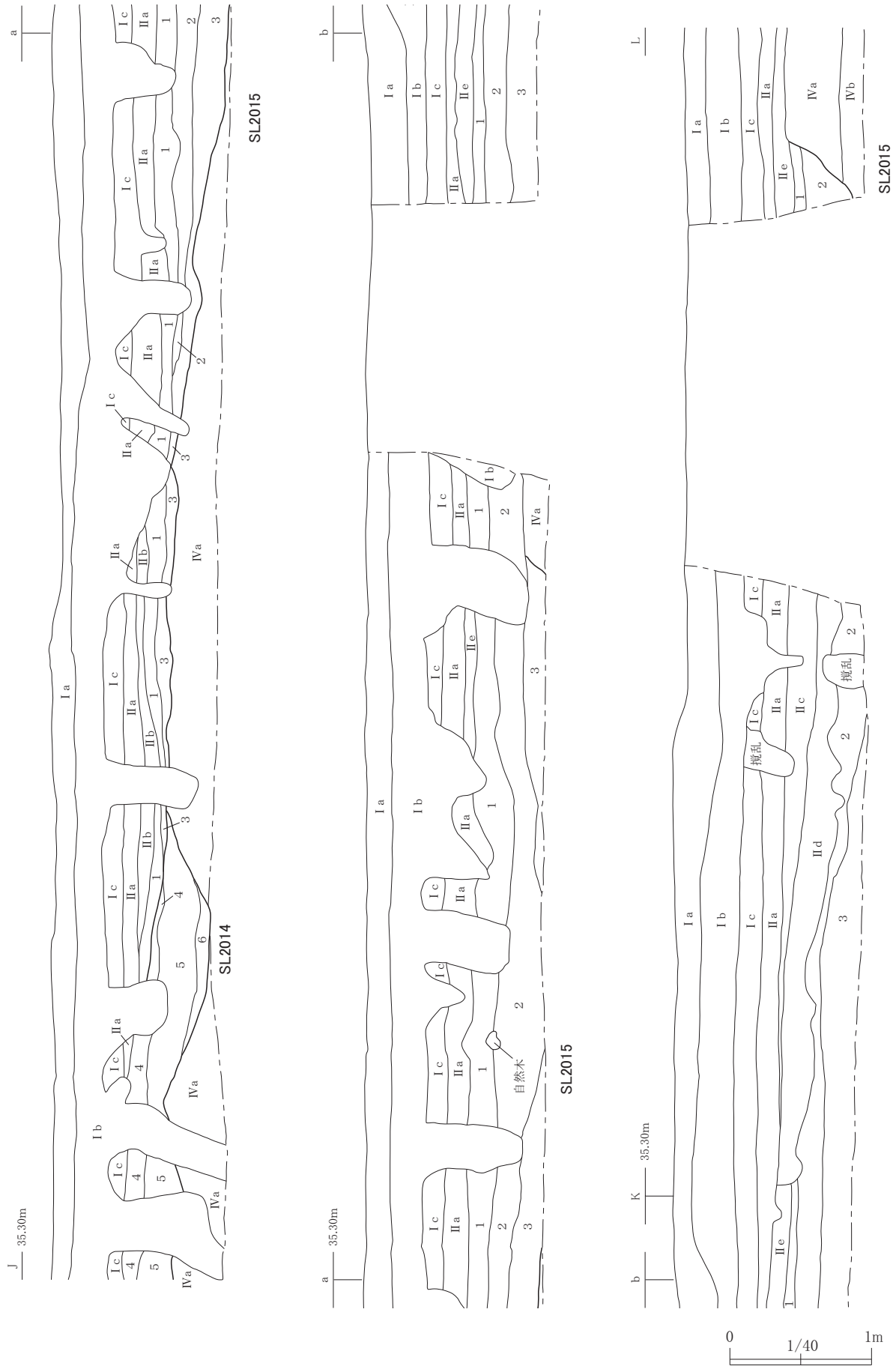
SL2015

１　10Y3.5/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒～灰色）しまりやや強　粘性やや強　細砂わずかに含む　植物遺存体少量混入
２　10Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや強　粘性強　細砂わずかに含む　植物遺存体少量混入
３　7.5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまり普通　粘性弱　細砂主体とする

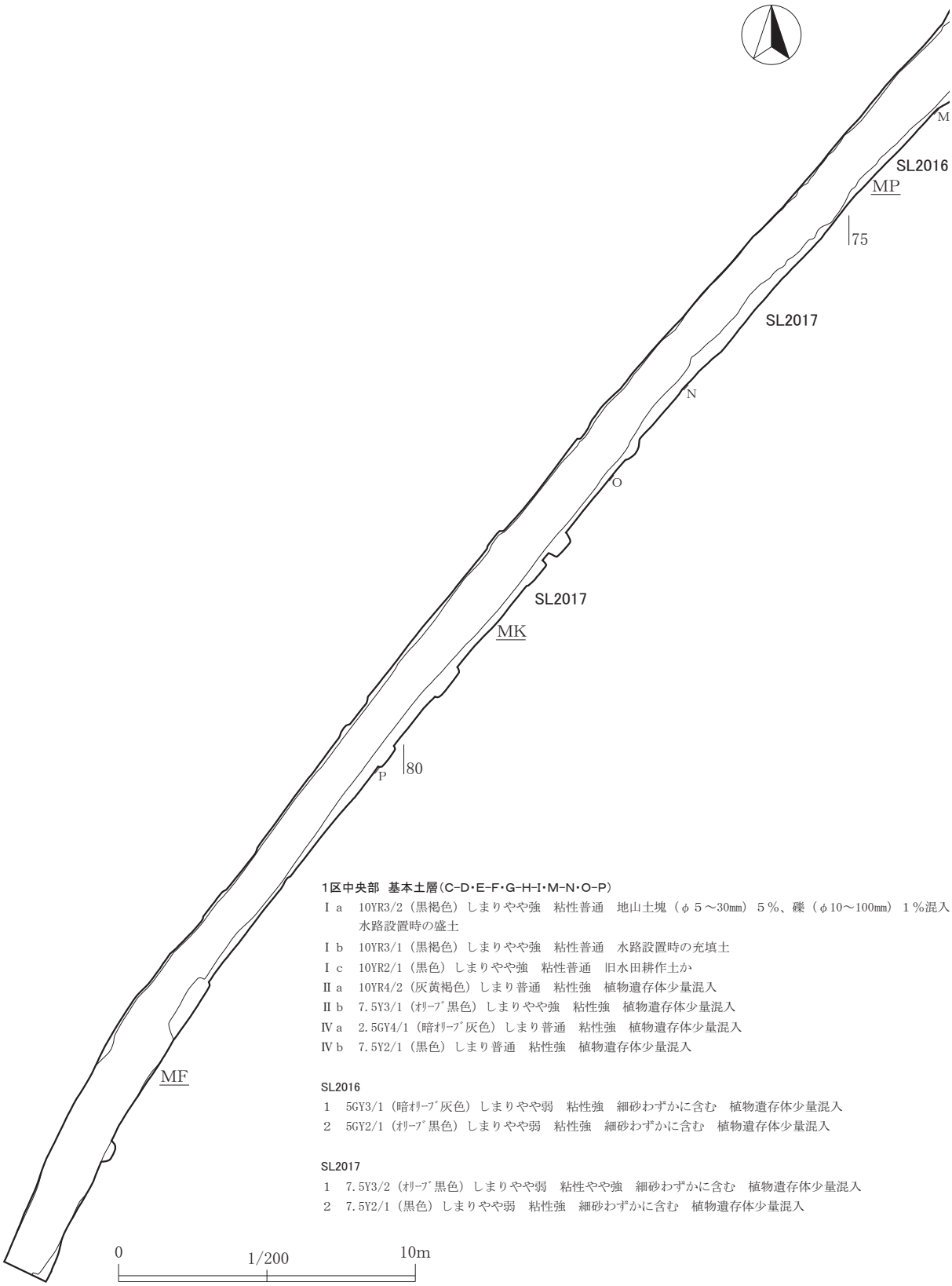
SL2014（J-K-L）

４　5Y3/2（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）　しまりやや強　粘性やや強　植物遺存体少量混入
５　2.5Y3/1（黒褐色）　しまり普通　粘性やや強　植物遺存体多量混入
６　2.5Y2/1（黒色）　しまりやや弱　粘性やや強　植物遺存体多量混入

第５図　１区中央部の遺構（２）　SL2014, 2015



第６図　１区中央部の遺構（３）　SL2014, 2015



1区中央部　基本土層（C-D・E-F・G-H-I・M-N・O-P）

Ⅰａ　10YR3/2（黒褐色）しまりやや強　粘性普通　地山土塊（φ５～30mm）５％、礫（φ10～100mm）１％混入
水路設置時の盛土

Ⅰｂ　10YR3/1（黒褐色）しまりやや強　粘性普通　水路設置時の充填土

Ⅰｃ　10YR2/1（黒色）しまりやや強　粘性普通　旧水田耕作土か

Ⅱａ　10YR4/2（灰黄褐色）しまり普通　粘性強　植物遺存体少量混入

Ⅱｂ　7.5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや強　粘性強　植物遺存体少量混入

Ⅳａ　2.5GY4/1（暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色）しまり普通　粘性強　植物遺存体少量混入

Ⅳｂ　7.5Y2/1（黒色）しまり普通　粘性強　植物遺存体少量混入

SL2016

１　5GY3/1（暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色）しまりやや弱　粘性強　細砂わずかに含む　植物遺存体少量混入

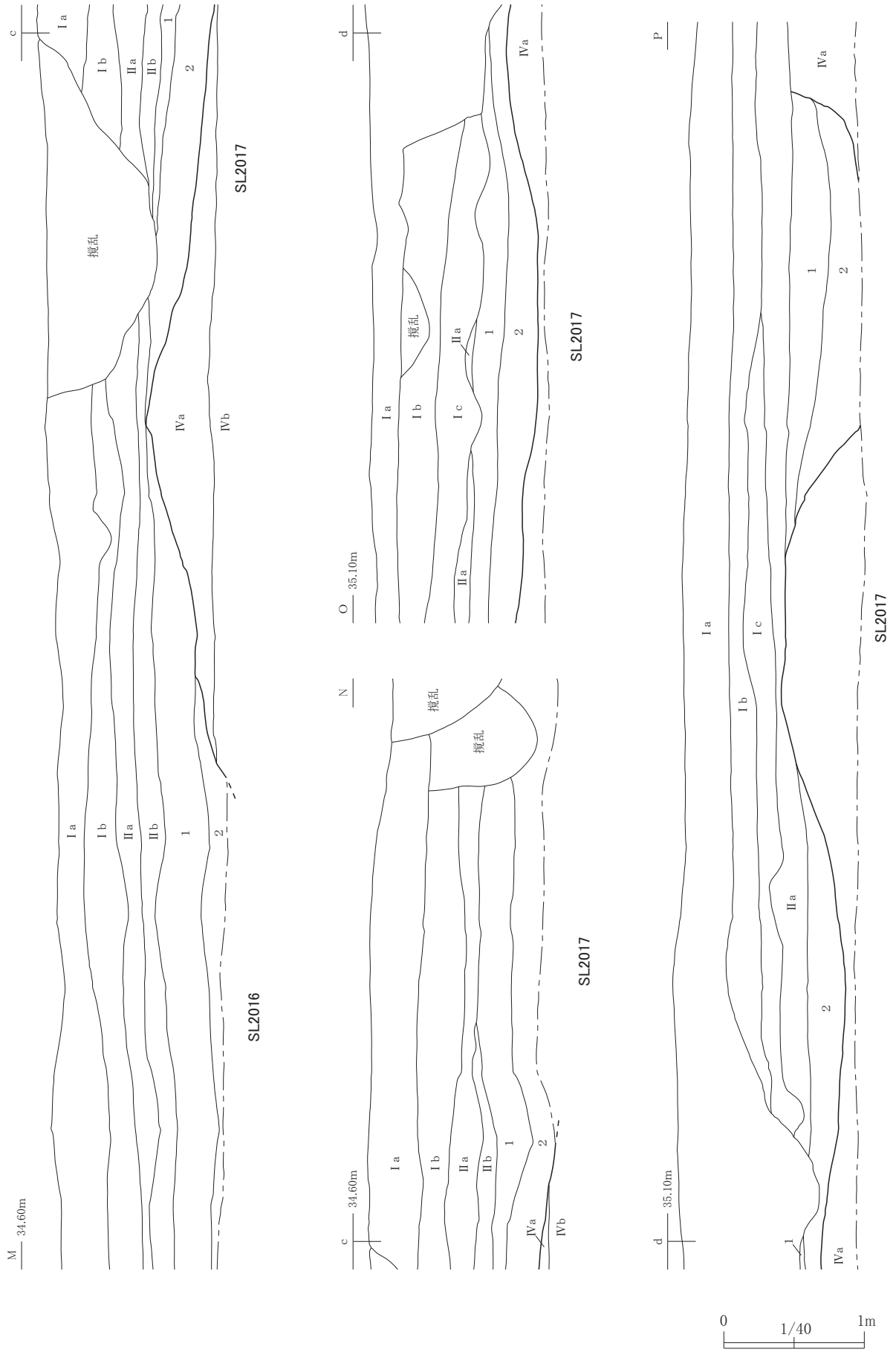
２　5GY2/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや弱　粘性強　細砂わずかに含む　植物遺存体少量混入

SL2017

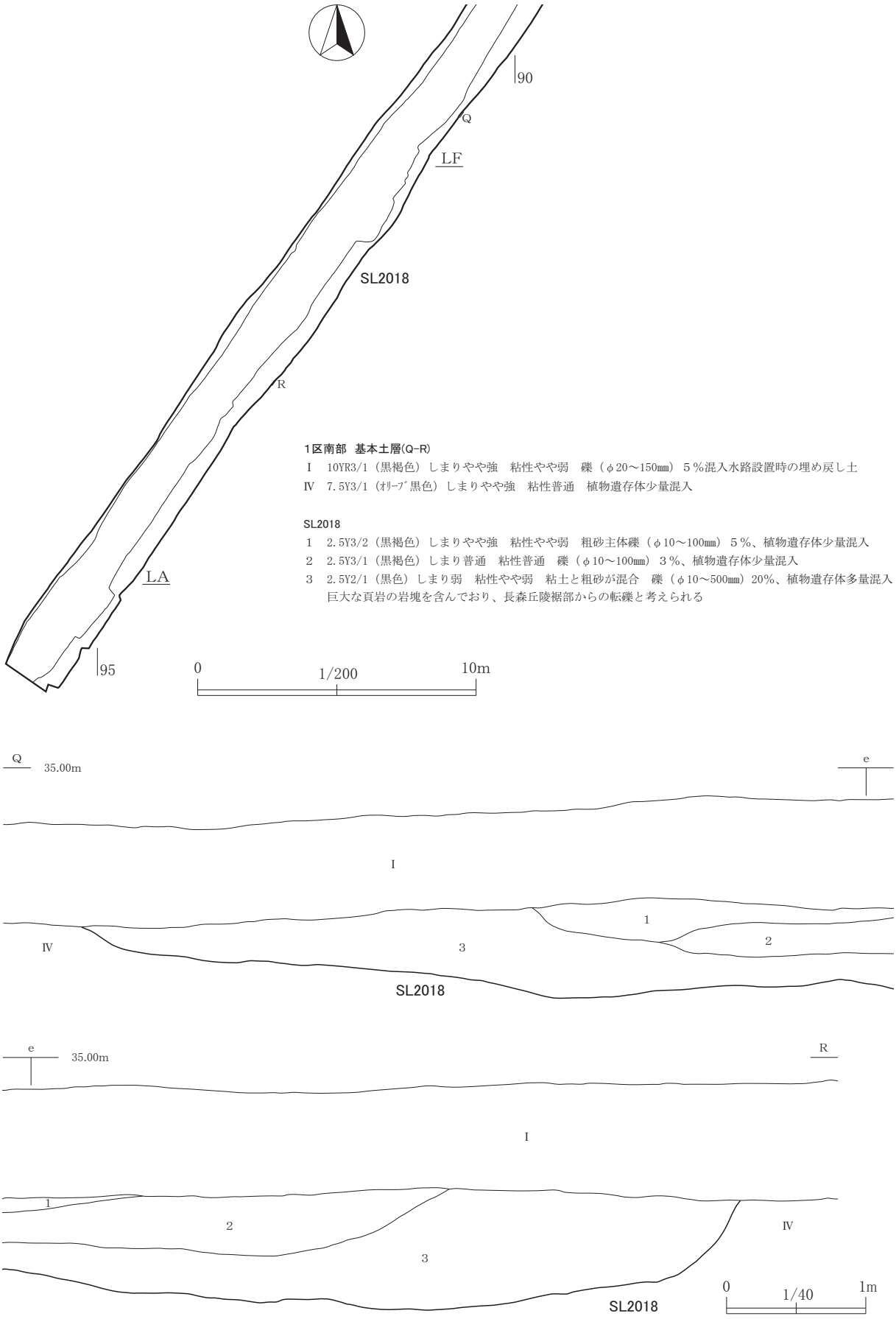
１　7.5Y3/2（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや弱　粘性やや強　細砂わずかに含む　植物遺存体少量混入

２　7.5Y2/1（黒色）しまりやや弱　粘性強　細砂わずかに含む　植物遺存体少量混入

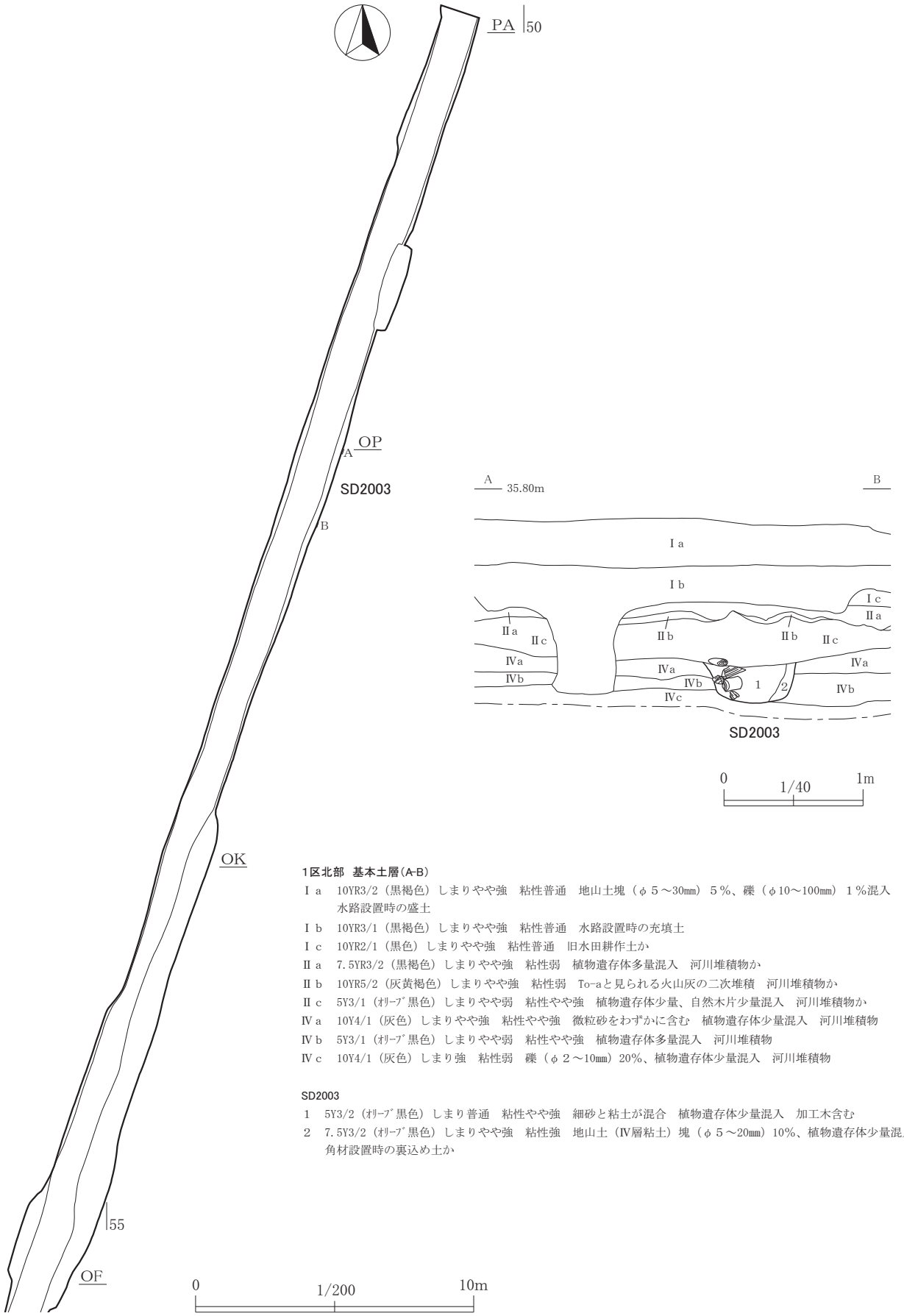
第７図　１区中央部の遺構（４）　SL2016,2017



第８図　１区中央部の遺構（５）　SL2016, 2017



第９図　１区南部の遺構　SL2018



1区北部　基本土層（A-B）

Ⅰａ　10YR3/2（黒褐色）しまりやや強　粘性普通　地山土塊（φ５～30㎜）５％、礫（φ10～100㎜）１％混入
水路設置時の盛土

Ⅰｂ　10YR3/1（黒褐色）しまりやや強　粘性普通　水路設置時の充填土

Ⅰｃ　10YR2/1（黒色）しまりやや強　粘性普通　旧水田耕作土か

Ⅱａ　7.5YR3/2（黒褐色）しまりやや強　粘性弱　植物遺存体多量混入　河川堆積物か

Ⅱｂ　10YR5/2（灰黄褐色）しまりやや強　粘性弱　To-aと見られる火山灰の二次堆積　河川堆積物か

Ⅱｃ　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや弱　粘性やや強　植物遺存体少量、自然木片少量混入　河川堆積物か

Ⅳａ　10Y4/1（灰色）しまりやや強　粘性やや強　微粒砂をわずかに含む　植物遺存体少量混入　河川堆積物

Ⅳｂ　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや弱　粘性やや強　植物遺存体多量混入　河川堆積物

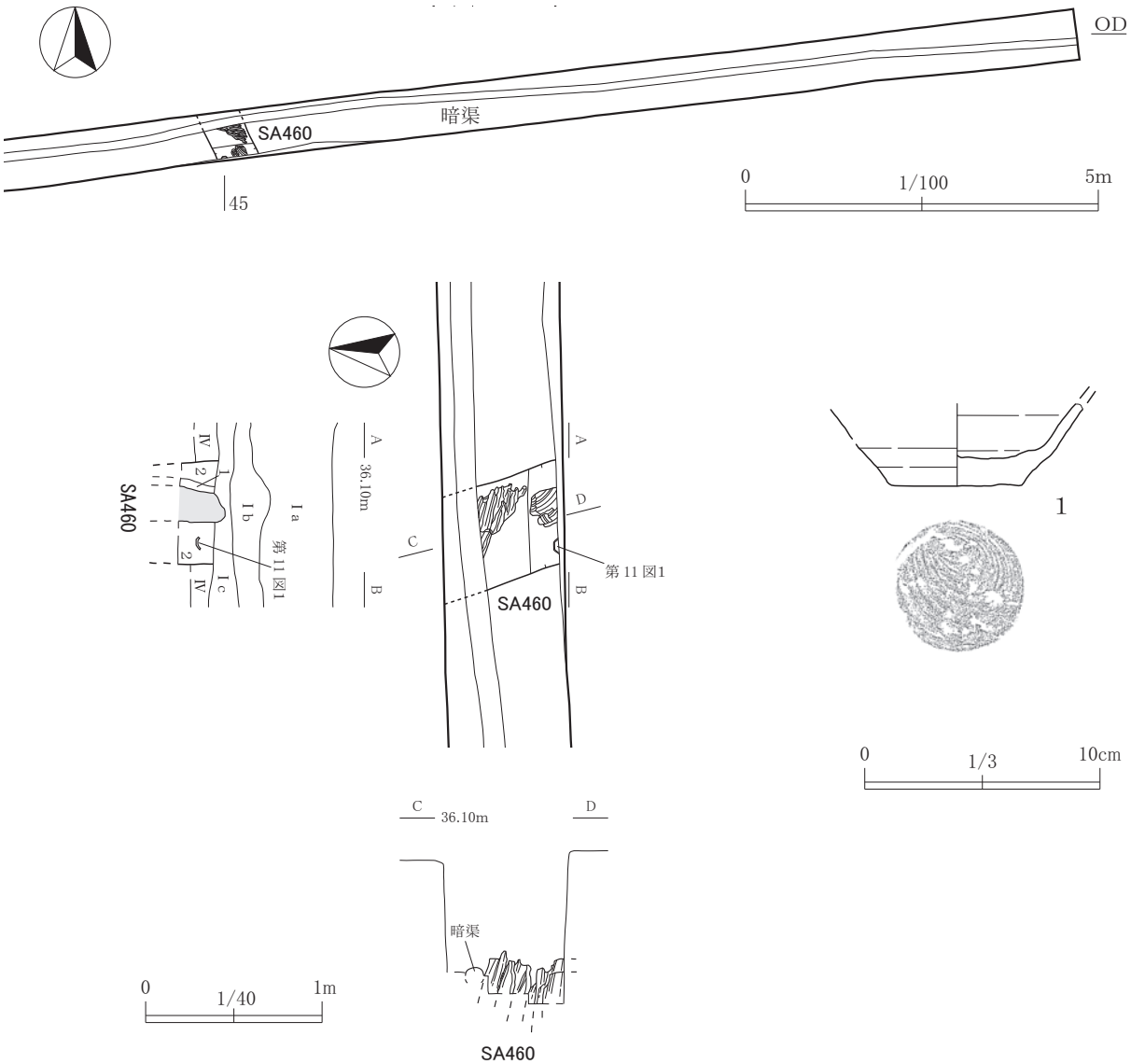
Ⅳｃ　10Y4/1（灰色）しまり強　粘性弱　礫（φ２～10㎜）20％、植物遺存体少量混入　河川堆積物

SD2003

１　5Y3/2（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまり普通　粘性やや強　細砂と粘土が混合　植物遺存体少量混入　加工木含む

２　7.5Y3/2（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや強　粘性強　地山土（Ⅳ層粘土）塊（φ５～20㎜）10％、植物遺存体少量混入
角材設置時の裏込め土か

第10図　１区北部の遺構　SD2003



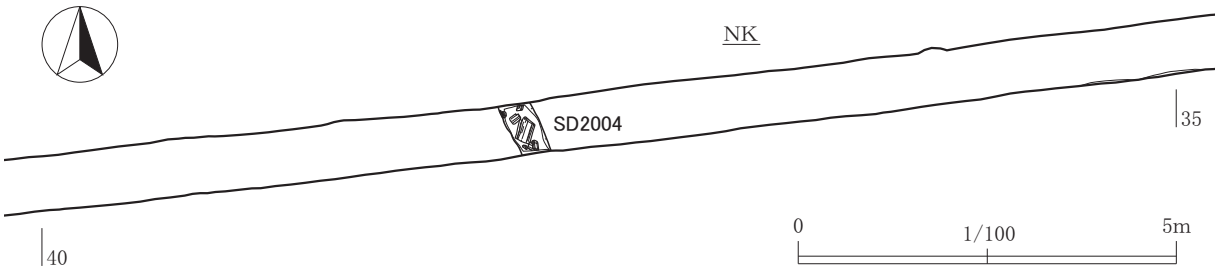
2区基本土層

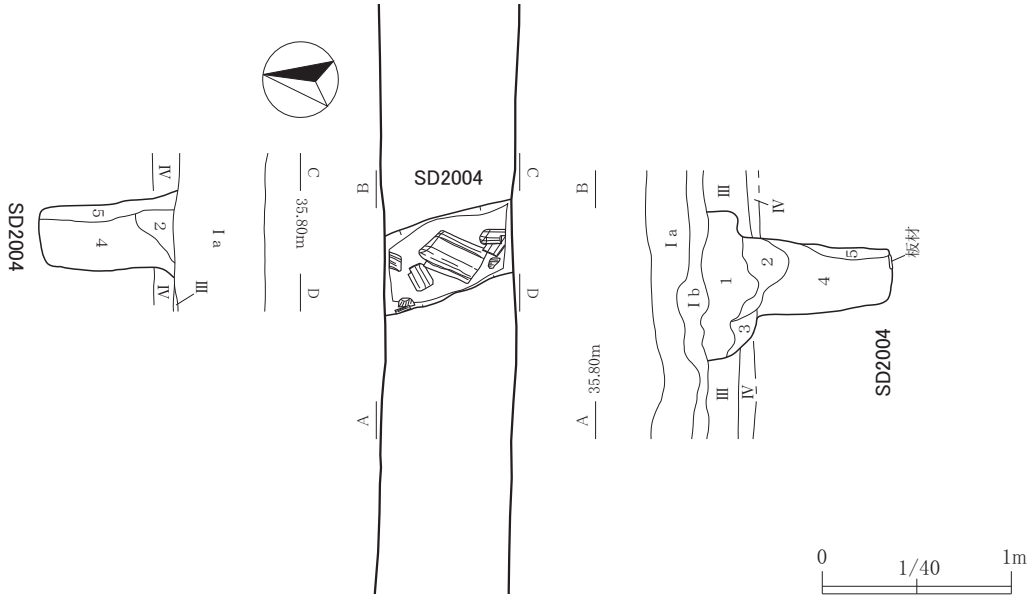
Ⅰa　10YR3/2（黒褐色）しまりやや強　粘性普通　礫（φ10～200㎜）５％混入　道路造成時の盛土
Ⅰb　10YR4/2（灰黄褐色）しまりやや強　粘性弱　礫（φ５～50㎜）１％混入　水路設置時の敷砂
Ⅰc　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや弱　粘性強　礫（φ10～200㎜）10％混入　旧耕作土か
Ⅳ　5GY4/1（暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色）しまり普通　粘性強　植物遺存体少量混入

SA460

1　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまり普通　粘性強　角材が腐朽した部分への流入土か
2　5Y4/1（灰色）しまりやや強　粘性強　地山土（Ⅳ層）塊（φ50～100㎜）30％混入　角材設置時の裏込め土

第11図　２区の遺構　SA460





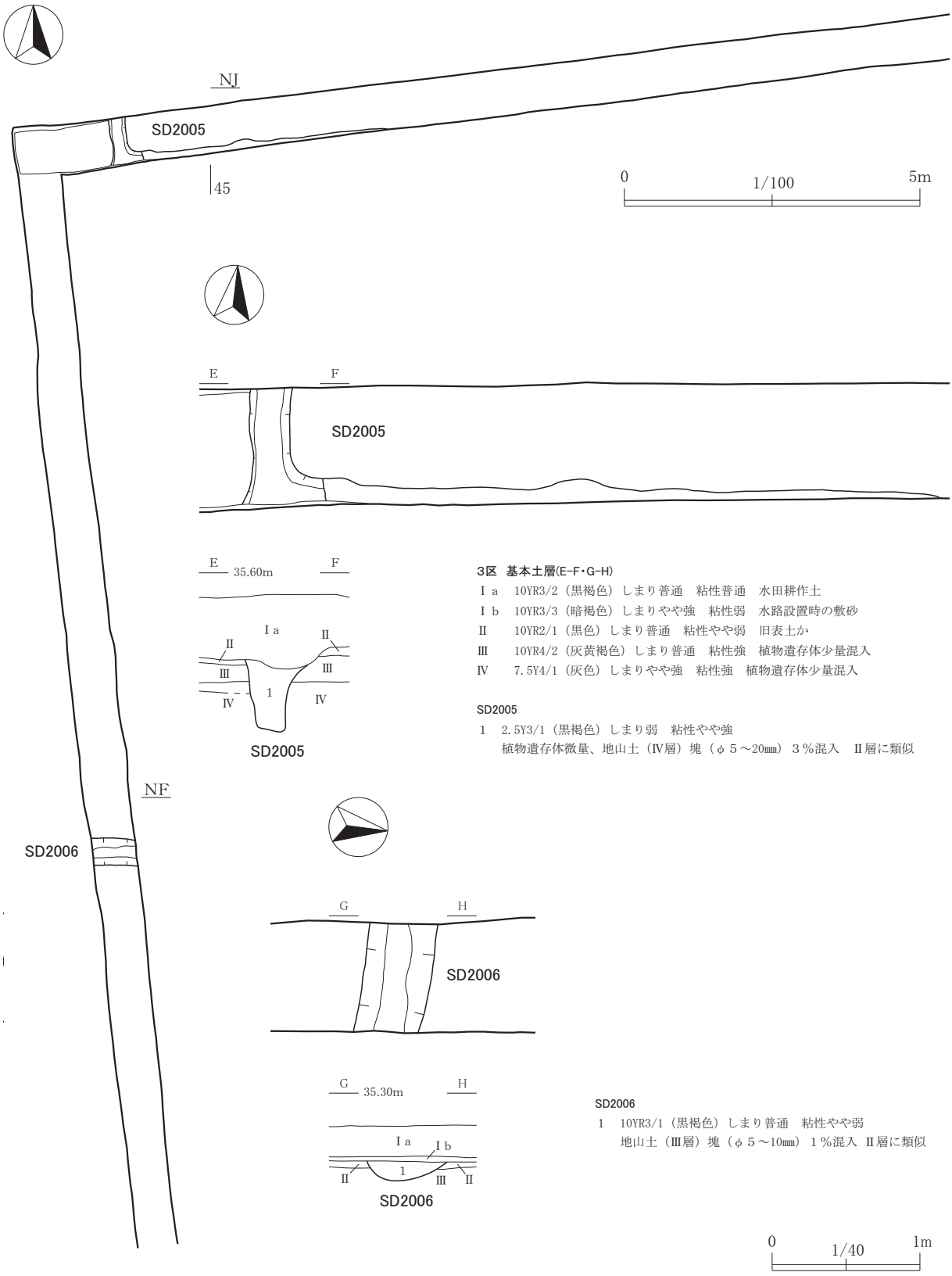
3区　基本土層(A-B･C-D)

Ⅰａ　10YR3/2（黒褐色）しまりやや強　粘性やや強　水田耕作土
Ⅰｂ　10YR3/3（暗褐色）しまりやや強　粘性弱　水路設置時の敷砂
Ⅲ　10YR4/2（灰黄褐色）しまり普通　粘性強　植物遺存体少量混入
Ⅳ　7.5Y4/1（灰色）しまりやや強　粘性強　植物遺存体少量混入

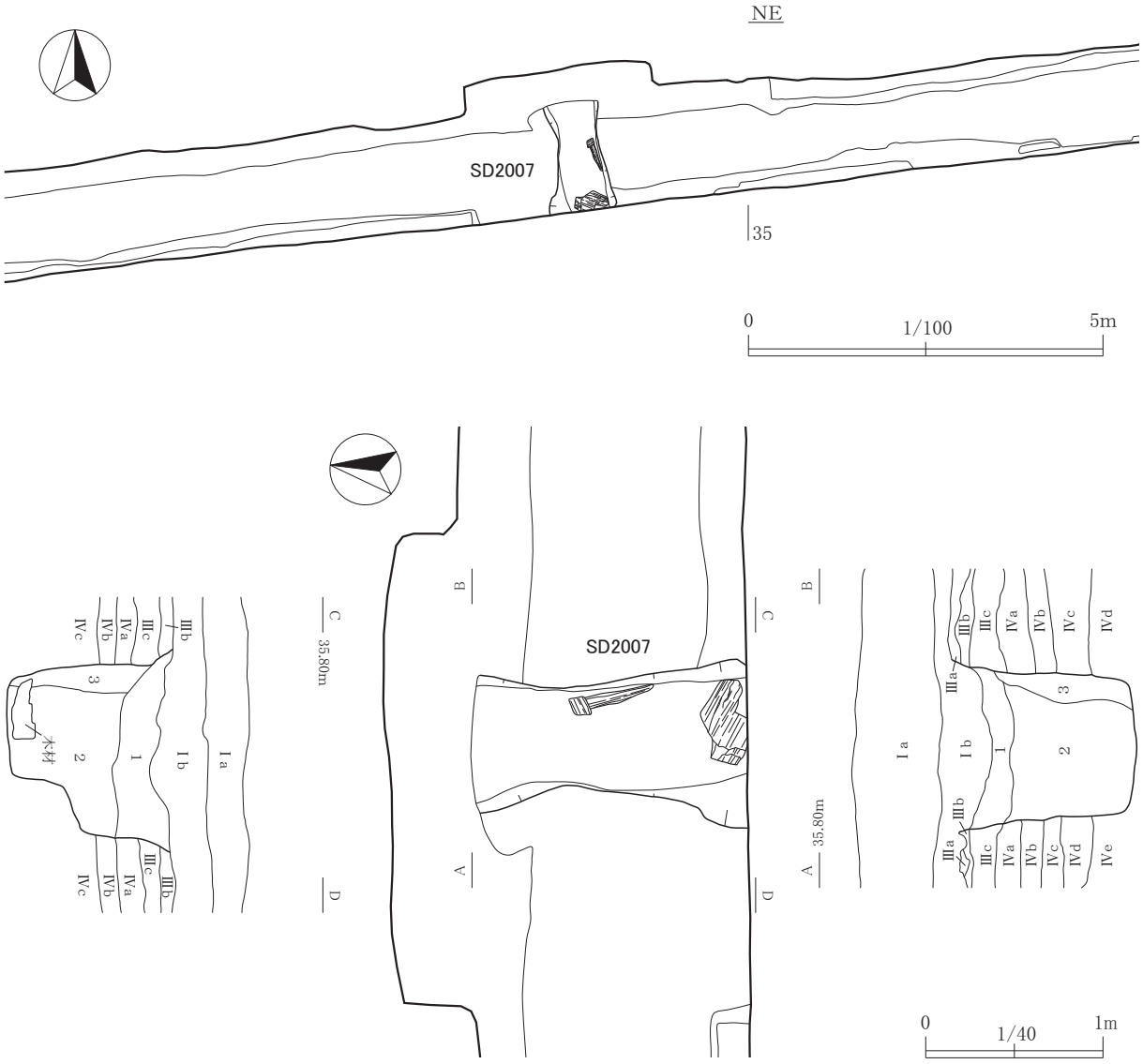
SD2004

１　10YR2/1（黒色）しまり強　粘性普通　炭化物粒（φ１～２㎜）１％未満、地山土（Ⅲ層・Ⅳ層共）塊（φ20～100㎜）60％混入
２　10YR2/1（黒色）しまり普通　粘性普通　炭化物粒（φ１～２㎜）１％未満、地山土（Ⅲ層・Ⅳ層共）塊（φ20～100㎜）60％混入
３　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや強　粘性強　地山土（Ⅳ層）粒（φ１～７㎜）10％混入
４　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや弱 粘性強 地山土（Ⅳ層）粒・塊（φ５～20㎜）25％混入　植物遺存体少量混入
５　7.5Y4/1（灰色）しまりやや弱　粘性強　地山土（Ⅳ層）粒・塊（φ３～20㎜）40％混入　角材設置時の裏込め土

第12図　３区の遺構（１）　SD2004



第13図　３区の遺構（２）　SD2005,2006



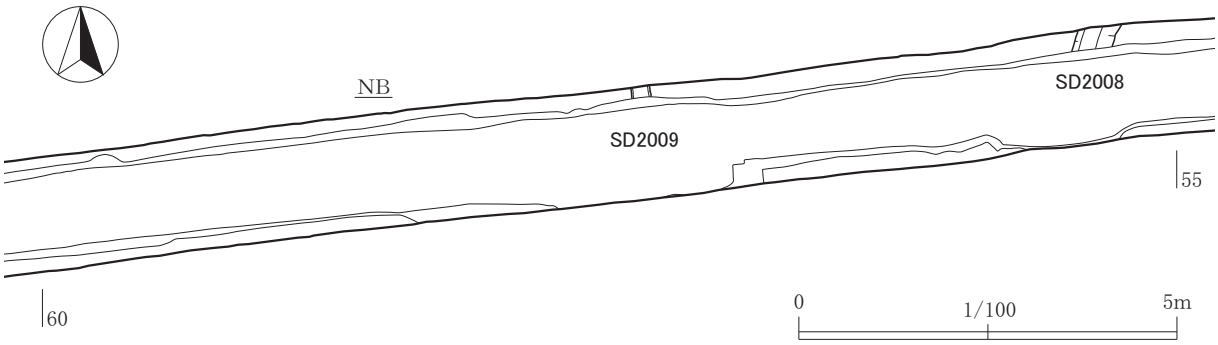
4区　基本土層(A-B･C-D)

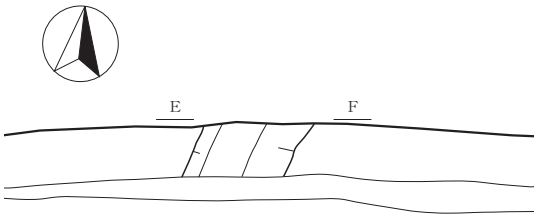
Ⅰａ　10YR3/2（黒褐色）しまりやや強　粘性やや弱　水田耕作土
Ⅰｂ　10YR3/1（黒褐色）しまりやや弱　粘性やや弱　地山土塊（φ10～50㎜）20%混入　水田床土か
Ⅲａ　10YR4/3（にぶい黄褐色）しまり普通　粘性普通
Ⅲｂ　10YR4/2（灰黄褐色）しまり普通　粘性やや強
Ⅲｃ　10YR4/2.5（にぶい黄褐色～灰黄褐色）しまりやや強　粘性やや強　植物遺存体少量混入
Ⅳａ　5GY4/1（暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色）しまりやや強　粘性強　植物遺存体少量混入
Ⅳｂ　7.5Y2/1（黒色）しまり普通　粘性強　植物遺存体少量混入
Ⅳｃ　5GY4/1（暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色）しまり普通　粘性強　植物遺存体少量混入
Ⅳｄ　7.5Y2/1（黒色）しまり普通　粘性強　植物遺存体少量混入
Ⅳｅ　5GY4/1（暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色）しまり普通　粘性強　植物遺存体少量混入

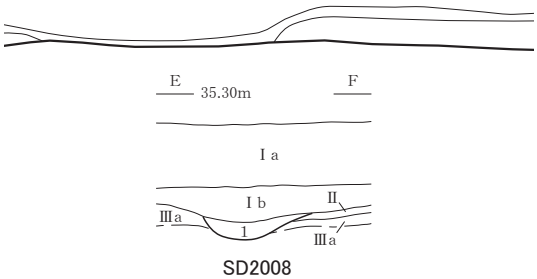
SD2007

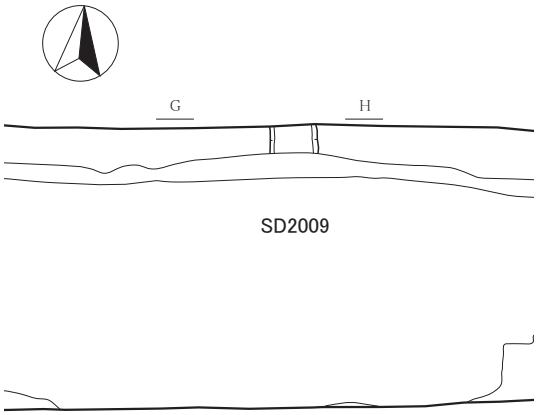
１　10YR3/1（黒褐色）しまりやや強 粘性強 地山土（Ⅲ層）塊（φ10～50㎜）40%混入
２　5Y2/1（黒色）しまりやや弱 粘性強 地山土（Ⅳ層）塊（φ10～30㎜）25%混入
３　5Y2/1（黒色）しまりやや強 粘性強 地山土（Ⅳ層）塊（φ10～30㎜）30%混入

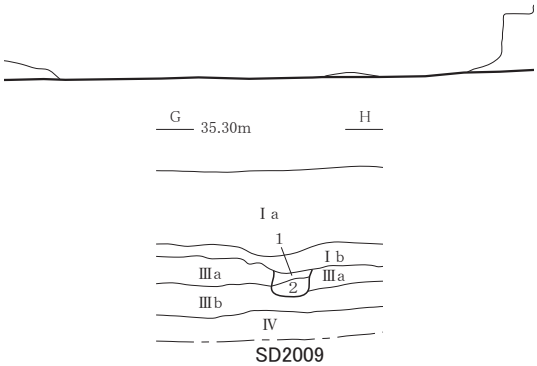
第14図　４区の遺構（１）　SD2007











4区　基本土層（E－F・G－H）

Ⅰa　10YR3/2（黒褐色）しまり普通　粘性やや弱　水田耕作土
Ⅰb　10YR3/2（黒褐色）しまり普通　粘性やや強　地山土塊（φ５～50㎜）50％混入
　　水田床土か
Ⅱ　10YR3/1（黒褐色）しまり普通　粘性やや強　旧表土
Ⅲa　2.5Y4/2（暗灰黄色）しまりやや強　粘性強　植物遺存体少量混入
Ⅲb　10YR4/2.5（にぶい黄褐色～灰黄褐色）しまりやや強　粘性やや強
　　植物遺存体少量混入
Ⅳ　5Y3/2（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまり普通　粘性強　植物遺存体少量混入

SD2008

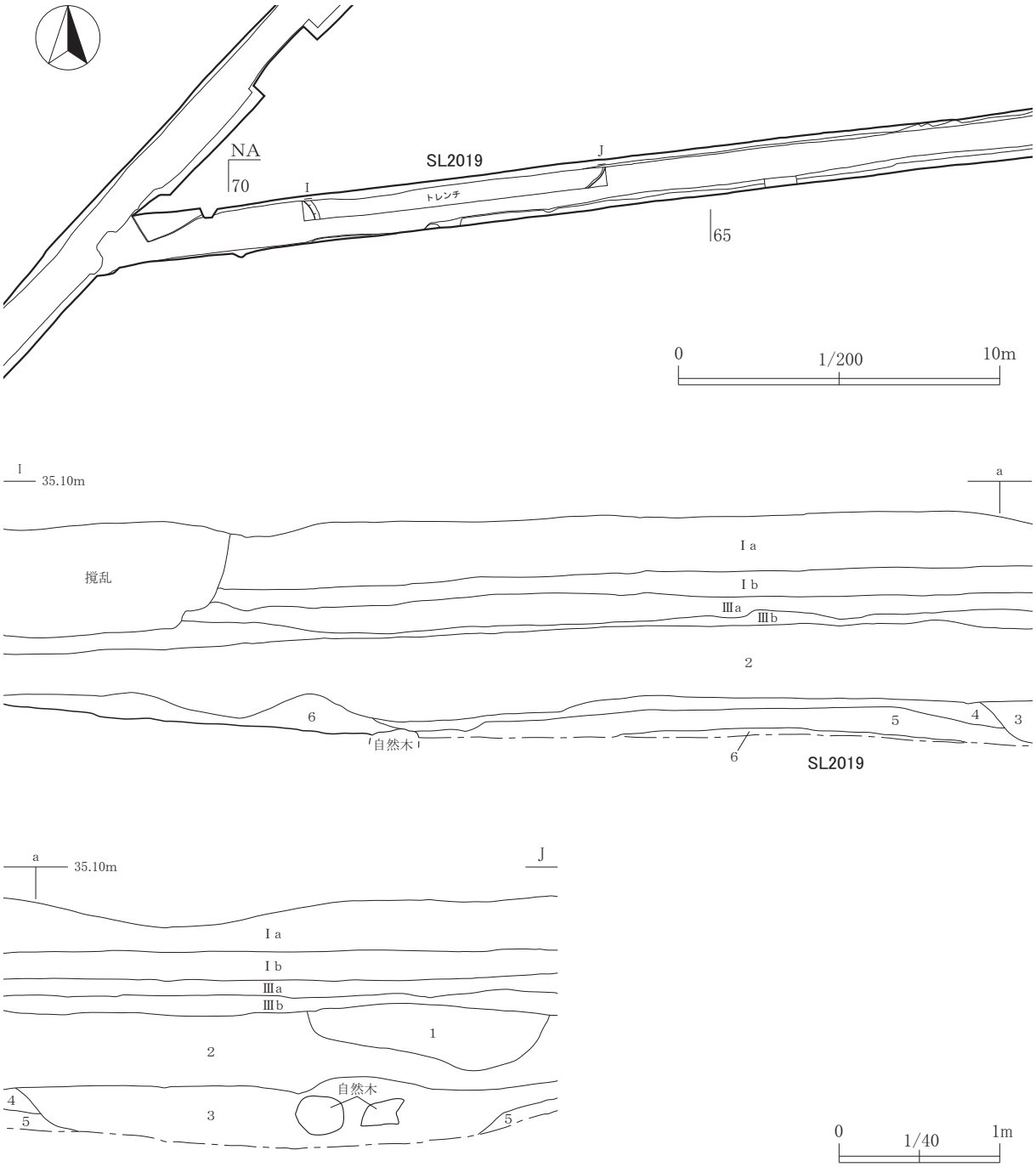
１　10YR2/1（黒色）しまりやや弱　粘性普通　地山土粒（φ１～５㎜）２％混入
　　Ⅱ層に類似

SD2009

１　10YR3/1（黒褐色）しまりやや強　粘性普通　地山土塊（φ５～20㎜）40％混入
２　10YR3/1（黒褐色）しまり弱　粘性普通

0　1/40　1m

第15図　４区の遺構（２）　SD2008, 2009



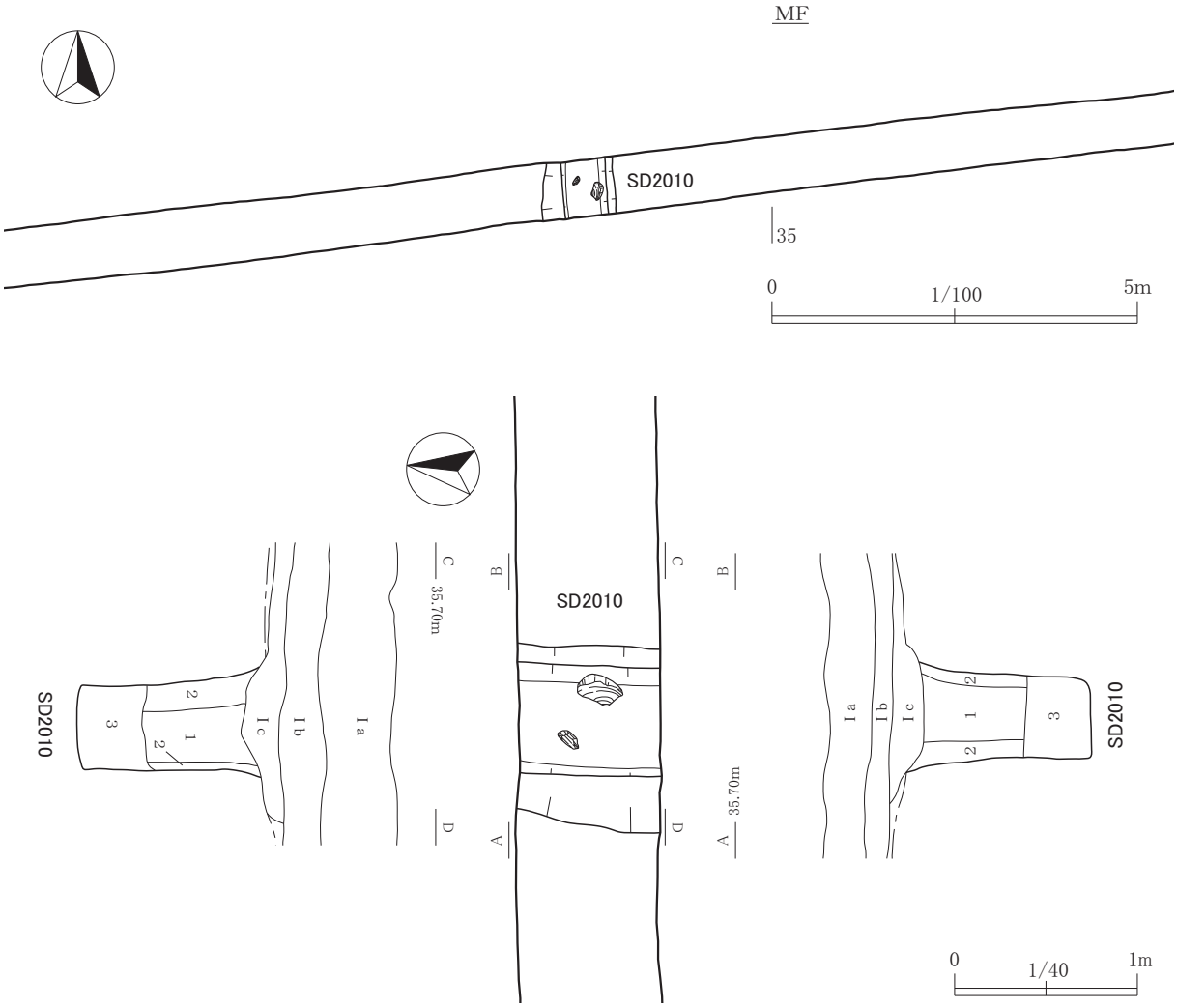
4区　基本土層(I－J)

Ⅰa　10YR2/2（黒褐色）しまり強　粘性やや弱　地山土粒（φ３～10㎜）３％混入　水路設置時の盛土
Ⅰb　10YR2/1（黒色）しまり普通　粘性やや弱　地山土粒（φ３～20㎜）５％混入　旧水田耕作土
Ⅲa　10YR4/3（にぶい黄褐色）しまり普通　粘性やや強　植物遺存体少量混入
Ⅲb　5Y3/2（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや強　粘性やや強　植物遺存体少量混入

SL2019

1　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまり強　粘性弱　粗砂主体　植物遺存体少量混入
2　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまり普通　粘性普通　細砂と粘土が互層をなす　植物遺存体少量混入
3　10Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまり強　粘性やや弱　植物遺存体・砂・小礫・粘土が混合　φ30㎝ほどの大きな自然木を含む
4　5Y2.5/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒～黒色）しまりやや強　粘性やや強　植物遺存体少量混入
5　5Y2/1（黒色）しまり普通　粘性普通　植物遺存体少量混入
6　10Y4/1（灰色）しまりやや強　粘性やや弱　植物遺存体少量混入　大きな自然木を含む

第16図　４区の遺構（３）　SL2019



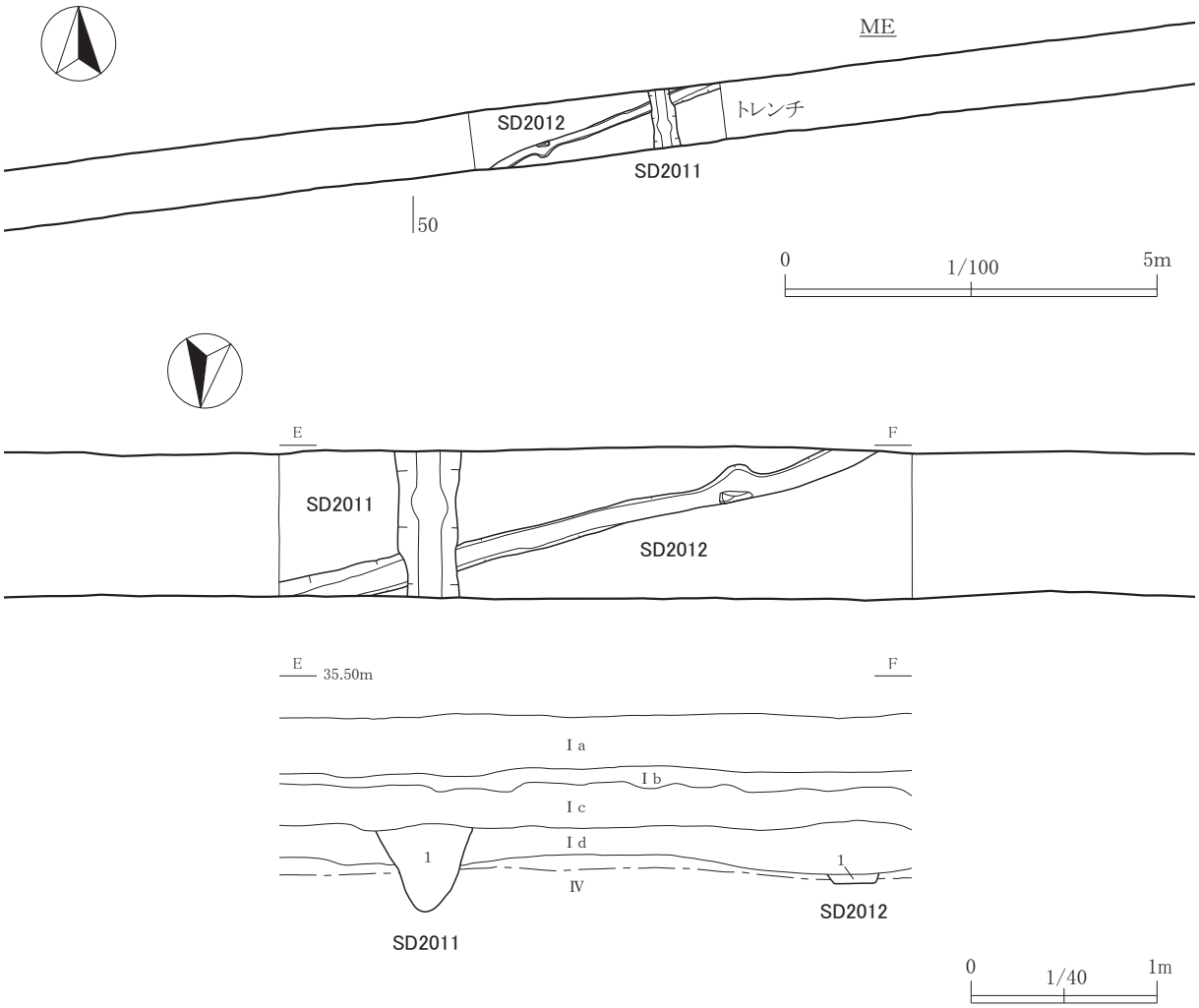
5区　基本土層(A-B･C-D)

Ⅰａ　10YR3/2（黒褐色）しまりやや強　粘性やや弱　礫（φ10～30㎜）10%混入　道路設置時の盛土
Ⅰｂ　10YR2/2（黒褐色）しまりやや強　粘性普通　旧水田耕作土か
Ⅰｃ　2.5Y2/1（黒色）しまり普通　粘性普通　地山土（Ⅳ層）塊（φ10～30㎜）５%混入

SD2010

1　10Y2/1（黒色）しまり普通　粘性普通　地山土（Ⅳ層）塊（φ５～100㎜）10%混入
2　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまりやや強　粘性強　地山土（Ⅳ層）塊（φ10～50㎜）30%混入
3　10Y4/1（灰色）しまりやや弱　粘性強　地山土（Ⅳ層）塊（φ30～100㎜）50%混入

第17図　５区の遺構（１）　SD2010



5区　基本土層(E-F)

Ⅰａ　10YR3/2（黒褐色）しまりやや強　粘性やや弱　礫（φ10～30㎜）10％混入　道路設置時の盛土
Ⅰｂ　10YR2/2（黒褐色）しまりやや強　粘性普通　旧水田耕作土か
Ⅰｃ　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）　しまりやや強　粘性やや強　地山土（Ⅳ層）塊（φ10～20㎜）５％混入　旧水田耕作土か
Ⅰｄ　5Y2/1（黒色）しまりやや強　粘性やや強　地山土（Ⅳ層）粒（φ５～10㎜）１％混入　旧水田耕作土か
Ⅳ　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまり普通　粘性強　植物遺存体多量混入

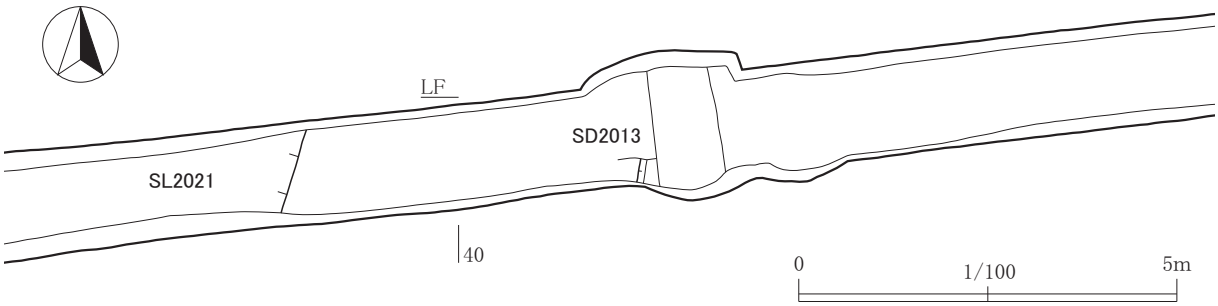
SD2011

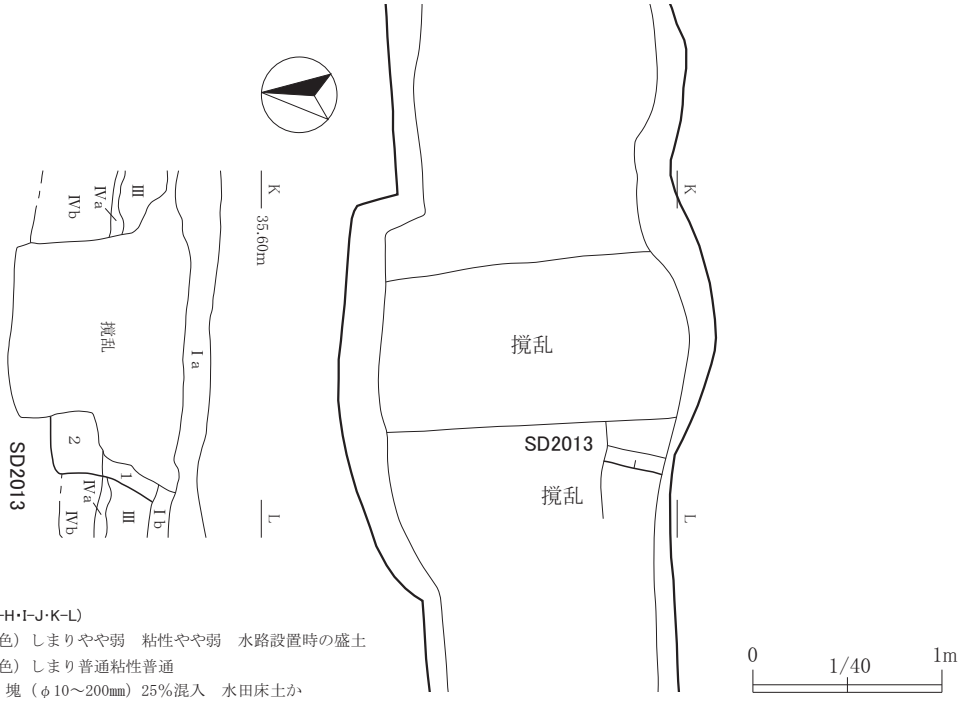
１　5Y2/1（黒色）しまりやや強　粘性強　地山土（Ⅳ層）粒（φ５～30㎜）２％混入

SD2012

１　5Y2/1（黒色）しまり普通　粘性普通　地山土（Ⅳ層）粒（φ５～10㎜）３％混入

第18図　５区の遺構（２）　SD2011,2012





６区　基本土層(E-F･G-H･I-J･K-L)

Ⅰａ　10YR3/2（黒褐色）しまりやや弱　粘性やや弱　水路設置時の盛土

Ⅰｂ　10YR3/2（黒褐色）しまり普通粘性普通
　　地山土（Ⅲ層）塊（φ10～200㎜）25％混入　水田床土か

Ⅲ　10YR5/3（にぶい黄褐色）しまりやや強　粘性やや強

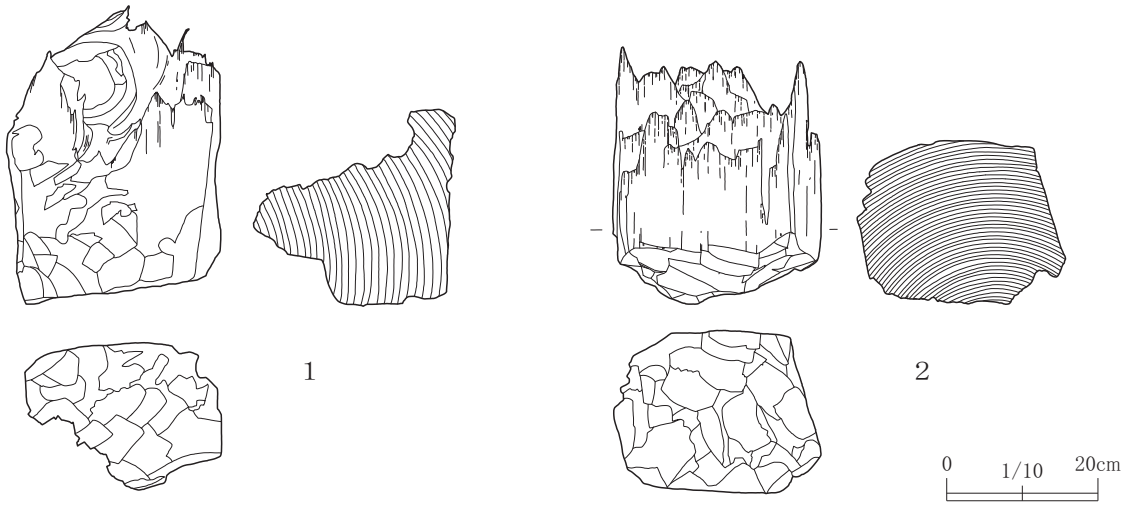
Ⅳａ　2.5GY4/1（暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色）しまり普通　粘性強

Ⅳｂ　7.5GY4/1（暗緑灰色）しまりやや強　粘性弱　細砂主体　植物遺存体少量混入

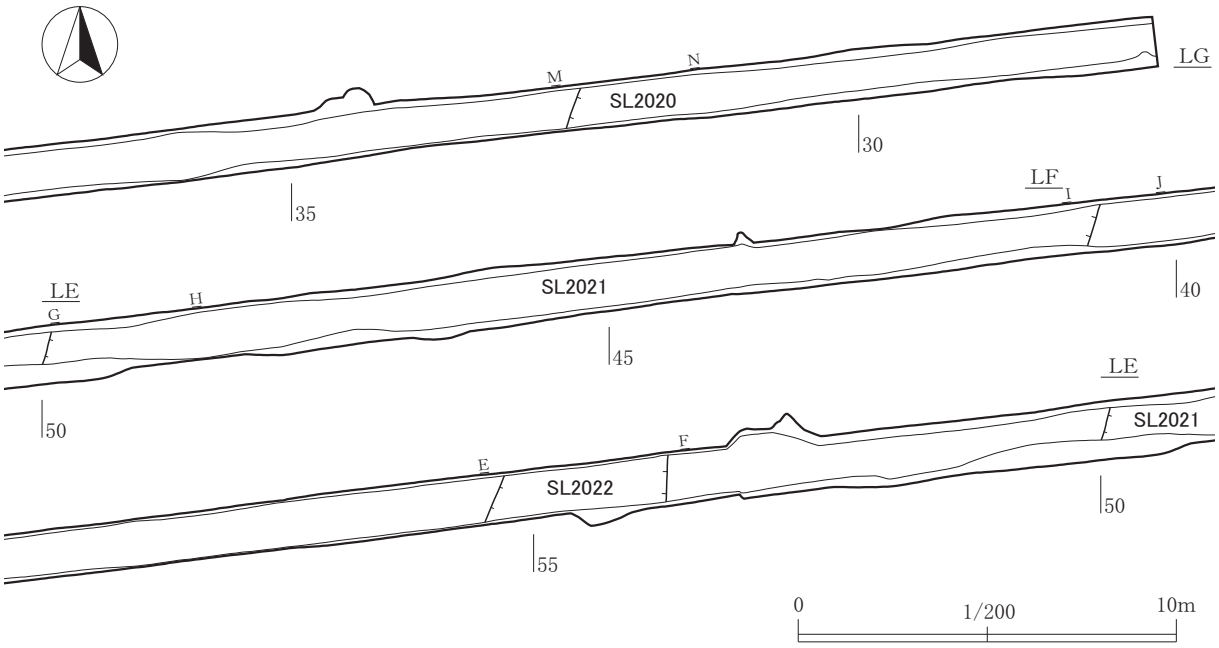
SD2013

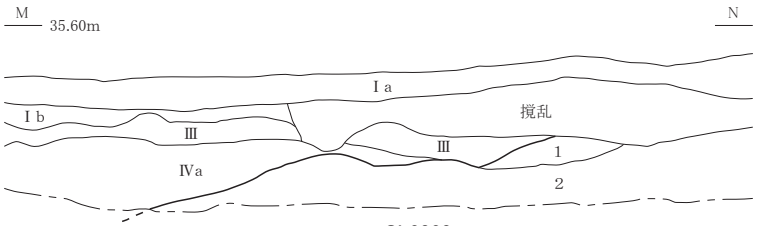
１　10YR3/2（黒褐色）しまり普通　粘性やや強　地山土塊（φ５～30㎜）15％混入

２　10Y4/1（灰色）しまりやや強　粘性弱　地山土塊（φ３～15㎜）７％混入　角材設置時の充填土か

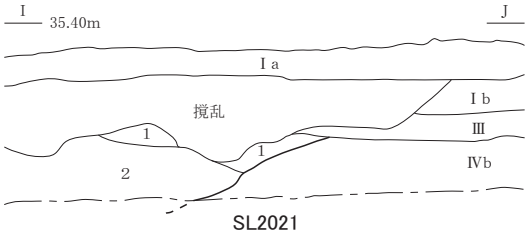


第19図　６区 の遺構（１）　SD2013

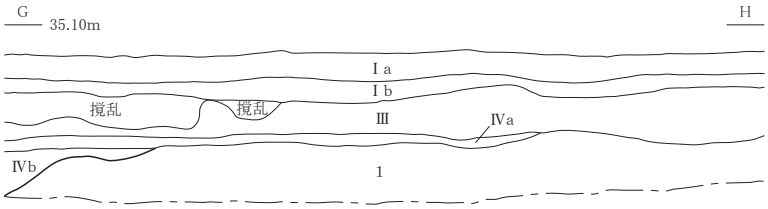




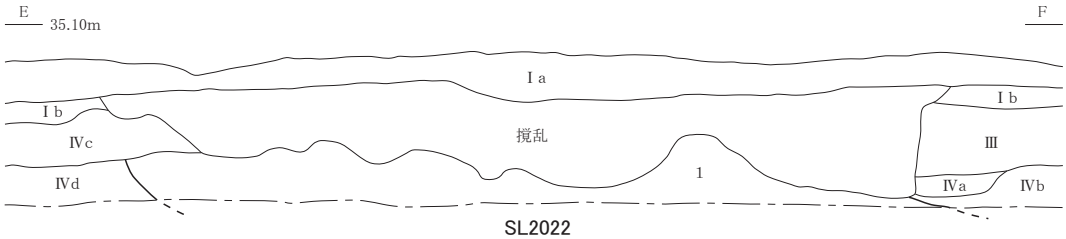
SL2020



SL2021



SL2021



SL2022

0　1/40　1m

６区　基本土層(E-F･G-H･I-J･M-N)

Ⅳｃ　5GY3/1（暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色）しまりやや強　粘性やや強
　　粗砂少量含む

Ⅳｄ　7.5GY5/1（緑灰色）しまり普通　粘性強

SL2020

１　10YR4/3（にぶい黄褐色）しまり強　粘性弱
　　粗砂主体　礫（φ３～15㎜）５％混入

２　5GY4/1（暗ｵﾘｰﾌﾞ灰色）しまり強　粘性やや弱
　　粗砂と粘土の混合　礫（φ５～50㎜）50％混入

SL2021

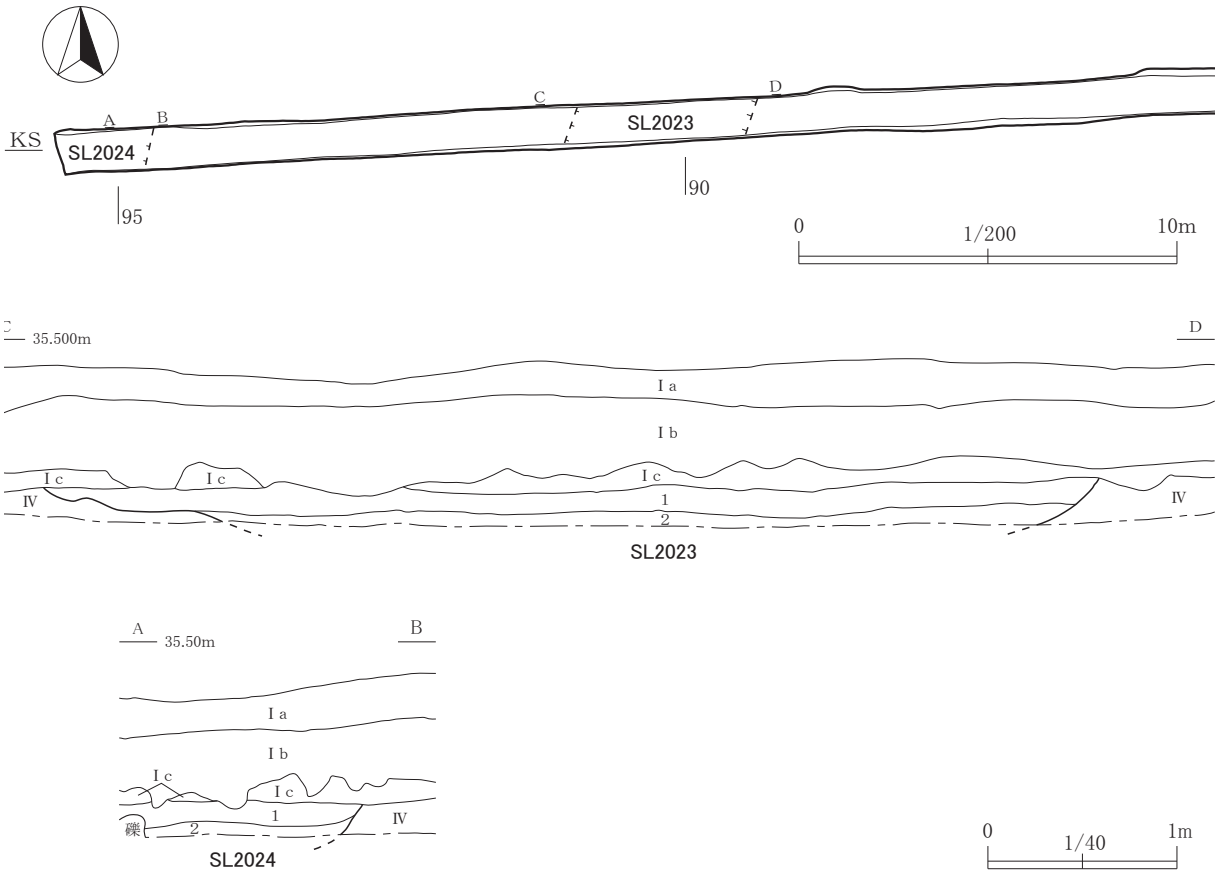
１　10YR3/3（暗褐色）しまり普通　粘性弱　粗砂主体

２　10GY5/1（緑灰色）しまり強　粘性弱　粗砂主体
　　礫（φ５～100㎜）50％混入

SL2022

１　10GY5/1（緑灰色）しまり強　粘性やや弱
　　粗砂主体　礫（φ５～50㎜）50％混入

第20図　６区の遺構（２）　SL2020, 2021, 2022



6区　基本土層(A-B・C-D)

Ⅰａ　10YR3/2（黒褐色）しまり普通　粘性やや弱　水路設置時の盛土
Ⅰｂ　10YR3/2（黒褐色）しまり普通　粘性やや弱　地山土塊（φ50～150㎜）10％混入　水路設置時の充填土
Ⅰｃ　10YR3/1（黒褐色）しまりやや弱　粘性普通　旧水田耕作土か
Ⅳ　10Y4/1（灰色）しまりやや強　粘性強

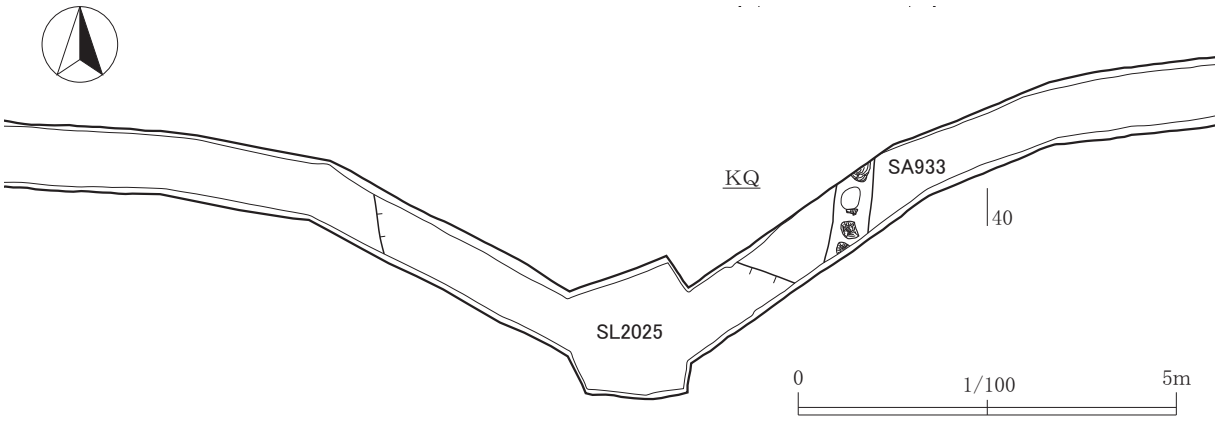
SL2023

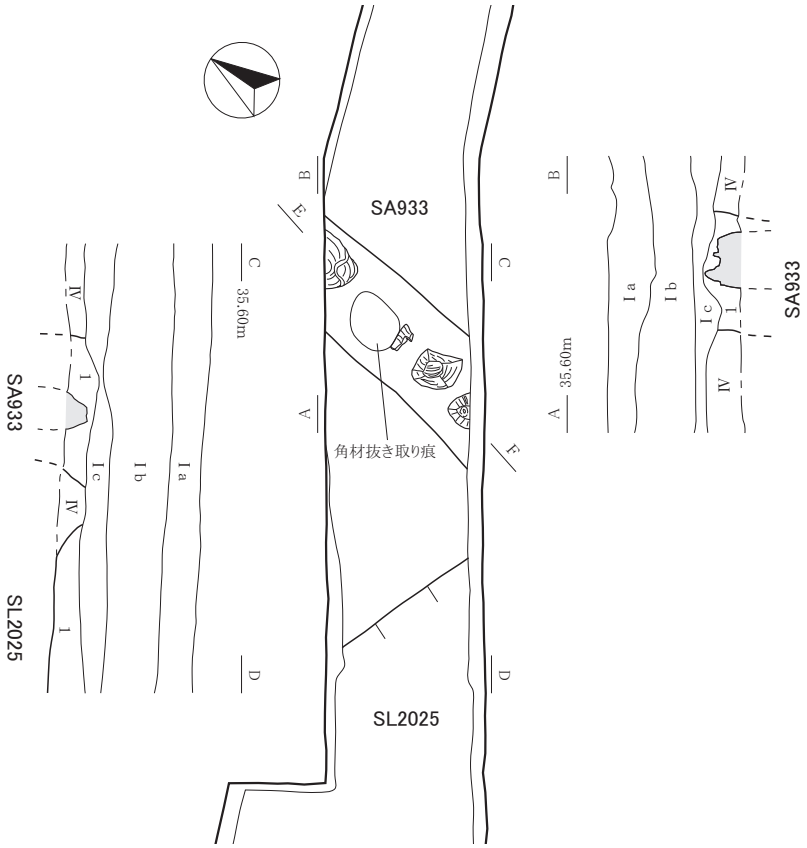
１　5Y3/1（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまり普通　粘性やや強　植物遺存体少量混入
２　5Y2/2（ｵﾘｰﾌﾞ黒色）しまり普通　粘性やや強　植物遺存体多量混入

SL2024

１　2.5Y3/1（黒褐色）しまり普通　粘性やや強　植物遺存体少量混入
２　2.5Y2/1（黒色）しまりやや弱　粘性やや弱　粗砂の薄層含む　植物遺存体少量混入

第21図　６区の遺構（３）　SL2023, 2024





0　1/40　1m

7区　基本土層

Ⅰａ　10YR3/2（黒褐色）しまり普通　粘性やや弱　水路設置時の盛土
Ⅰｂ　10YR3/2（黒褐色）しまりやや強　粘性やや弱
　　地山土塊（φ10～200㎜）10％混入　水路設置時の充填土
Ⅰｃ　10YR4/2（灰黄褐色）しまりやや強　粘性弱　水路設置時の敷砂
Ⅳ　7.5Y4/1（灰色）しまりやや強　粘性強　植物遺存体少量混入

SA933
1　5Y2/1（黒色）しまり普通　粘性強

SL2025
1　7.5Y2/1（黒色）しまり普通　粘性やや強　植物遺体少量混入

第22図　７区の遺構　SA933, SL2025

第２節　第145次調査の検出遺構と遺物

払田柵跡第145次調査は用排水路の改修に伴うものである。調査は第143次調査からの継続していることから第145次調査の調査区は用排水路の分岐点を境界とし、８区から20区に区分けした。また、調査区には次年度調査予定の暗渠埋設工事に先立ち、外柵北門の確認調査も含んでいる。

第145次調査の遺構数総計は、材木塀布掘溝跡２か所、溝跡42条、土坑11基、柱穴様ピット24基であり、加えて河川跡を36か所で確認した。第145次調査で使用した遺構番号は2028～2136である。材木塀布掘溝跡の調査にあっては、現状保存を原則とする認識に立ち、遺構確認後に図面・写真の記録を作成した後、埋め戻しを行った。

１　８区（第25・26図、図版16・17）

本区は調査区中央北側に位置する水田内である。次年度に予定されている暗渠設置工事に先立って調査をおこなった。文部省発行の『史蹟精査報告書第三　拂田柵阯・城輪柵阯』1938（昭和13）年によれば外柵北門には柱材が幾つか残されているとある。これを元に外柵北門の推定範囲で南北８ｍ、東西10ｍ、深さ40㎝のトレンチを設定した。これに加え東端、西端に南北方向に長さ37ｍ、幅１ｍ、深さ１ｍのトレンチを設定した。今回の調査で柱材・柱穴は確認できず、北門付近が削平されていることが分かった。検出遺構は東端トレンチと西端トレンチから河川跡が１か所である。

ＳＬ2028河川跡（第25図）

ＱＱ17～18・ＱＲ17～18・ＱＯ17・ＱＰ17～18に位置する。第Ⅲ層上面で灰黄褐色土と黒褐色土の広がりとして確認した。

河川跡は確認部分の幅が（南－北）6.65ｍ、確認面からの深さは90㎝である。壁は南側の立ち上がりは急であるが、北側の壁は下半は急に立ち上がり上半で緩やかとなる。底面は平坦である。

堆積土は７層に分層した。１層はシルトであるが、２層は細砂が主体でシルトがラミナ状に貫入する。３層では細砂主体にシルトがラミナ状に貫入する。４層は細砂が主体でシルトがラミナ状に貫入する。５・６層は粘土であるが、７層は粗砂主体の層である。全体的にシルトや細砂がラミナ状に堆積していることから水成堆積物である。

ＳＬ2029河川跡（第26図）

ＱＰ14・ＱＳに位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。

河川跡は確認部分の幅（南－北）は3.38ｍ、確認面からの深さは45㎝である。壁は立ち上がりが確認できる南側は緩やかに傾斜している。北側はＳＬ2029が調査区より更にのびているため不明である。底面は平坦である。

堆積土３層に分層した。どの層もシルト主体の層に細砂がラミナ状に入っている水成堆積物である。

２　９区（第27・28図）

本区は８区東側に位置する用水路部分であり、南北に約103ｍのび、南側に位置する12区に接続する。検出遺構は河川跡が３か所である。

ＳＬ2030河川跡（第27図）

ＲＪ15・ＰＫ15・ＲＬ15に位置する。第Ⅲ層上面で灰黄褐色土の広がりとして確認した。

河川跡は確認部分の幅（東－西）が4.35ｍ、確認面からの深さは35㎝である。壁の立ち上がりは西側で急であり、東側の立ち上がりは緩やかである。底面は平坦であるが、西から中央に向かって段状に落ち込む箇所がある。

堆積土４層に分層した。１層はシルト主体で細砂がラミナ状に入るが、２層は細砂主体で黒色シルトが、３層は細砂主体で粗砂がともにラミナ状に入る。最下層の４層は細砂と黒色シルトが混入している。ラミナ状に堆積していることから水成堆積である。

ＳＬ2031河川跡（第27図）

ＲＨ14～15・ＲＩ14～15に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。
河川跡の確認部分は幅（東－西）が6.05ｍ、確認面からの深さは50㎝である。壁の立ち上がりは西側は急であり、東側の立ち上がりは緩やかである。底面は平坦である。

堆積土は３層に分層した。１層はシルトで混入等は特にない、２層は細砂主体で粗砂・黒色シルトと互層・ラミナ状に堆積している。３層は２層の下にあるが端が僅かに重なっているだけで、東側に幅2.2ｍで塊状にある。粗砂主体で細砂・黒色シルトと互層・ラミナ状に堆積している。２・３層は水成堆積物である。

ＳＬ2032河川跡（第28図）

ＲＣ16～17に位置する。第Ⅲ層上面で灰黄褐色土（シルト主体のものと細砂主体のもの２か所）の広がりとして確認した。

河川跡の確認部分は幅（東－西）が4.05ｍ、確認面からの深さは78㎝である。壁の立ち上がりは西側の壁は撹乱を受けており確認できなかった。東側の立ち上がりは急であるが、上面付近で緩やかに変化する。底面には20～60㎝の傾斜があり、北から南に水が流れていたと考られる。

堆積土13層に分層した。２層以下細砂・粗砂主体になる。また６・９層には腐葉土のような植物遺体が少量堆積している。細砂・粗砂を多く含んでいることから水成堆積である。

３　10区（第29・30・35図）

本区は９区の東側に位置する排水路部分で、農道を挟んで９区と並行するように南北方向約87ｍのび、南側に位置する12区と接続する。検出遺構は河川跡が４か所である。

ＳＬ2033河川跡（第29図）

ＲＧ13・ＲＨ13に位置する。第Ⅲ層上面で灰色土の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は遺構の規模が大きいため、立ち上がりのみの調査とした（南－北）。なお北側の立ち上がりは調査区の外にのびており調査範囲で確認できなかったことから、長さは調査区を越えた32ｍ以上であると考られる。壁はの立ち上がりは南側は急であるが、上層付近で緩やかになる。底面は掘り下げていないため不明である。

堆積土６層に分層した。全ての層に１～10㎜の大きさの地山土粒が１～３％で混入している。２層と４層、３層と５層の土性は同じである。

ＳＬ2034河川跡（第35図）

ＱＱ11～12、ＱＲ11～12に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。本遺構は壁での検出が出来ず調査範囲まで掘り下げた底部、平面上でのみ確認することができた。本遺構は調査範囲よりも深く堆積していたがそれ以上掘り下げなかった。断面土層は両壁は撹乱されており確認することができなかった。確認面の土層から河川跡と判断した。河川跡の確認部分は幅は（南－北）6.01ｍである。平面上での確認なので壁の立ち上がり・底面・底面標高は不明である。

堆積土は確認面土層１層だけである。地山粒や炭化物が１％程度混入しており、水成堆積物である。

ＳＬ2035河川跡（第30図）

ＱＬ11・ＱＭ11・ＱＨ10・ＱＩ10～11・ＱＪ10～11・ＱＫ11に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（南－北）14ｍ、確認面からの深さは80㎝である。壁の立ち上がりは両壁とも緩やかである。底部は部分的に深く下がる。

６層に分層した。１層と２層、３層～５層は同じ土性で地山土粒の混入具合のみの違いである。地山土粒は下層にいくにつれて多く混入している。

ＳＬ2036河川跡（第29図）

ＱＥ10～11ＱＦ11に位置する。第Ⅲ層上面で暗褐色土の広がりとして確認した。遺構は南北方向に延びるが、南方向の立ち上がりは調査区外へのびているため正確な幅は不明である。調査範囲で確認できなかったことから、調査範囲を超えた幅は2.1ｍ以上であると考えられる。壁は北側の立ち上がりは急であるが１層からは緩やかになる。底面は掘りきっていないため不明である。

３層に分層した。しまりや粘性、土質に大きな違いはないが、下層へ行くにつれ還元色が強まる。12区でもＳＬ2036が検出されている。

４　11区

本区は住宅地にの間を通る全長約53ｍの用水路部分である。地山まで削平したあと庭用の床土が盛られている。床土は植物の浸食を受け土壌化している。11区と13区の間には住宅の新築・改築に伴う第57・96調査が行われている。どちらの調査でも河川跡を確認したのみで遺構・遺物の出土はなかった。本調査では遺構の検出はなかったが、遺物は須恵器、陶磁器が出土した。

５　12区（第31～42図）

本区の北側には矢島川が流れており、南北にのびる9・10区と接続する。本区は全長約390ｍの排水路部分で、農道を挟んで南側には13区用水路が並列している。検出遺構は河川跡が11か所である。出土遺物は土師器、須恵器、白磁、丸瓦、平瓦、土製品、石製品、木製品（曲げ物底板・箸・斎串）である。

ＳＬ2036河川跡（第31・32図）

ＯＥ09～11・ＱＤ10～11に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅（東－西）は4.7ｍ、確認面からの深さは50㎝である。壁は西側は削平・撹乱されており不明である。東側の壁は緩やかに立ち上がる。底面は舟底形である。

堆積土は４層に分層した。１層はシルト、２層は砂質土、３層はシルトである。４層はシルトと砂質土がほぼ同量の混合層である。

出土遺物は１・２・４層から出土した土師器を接合した坏が１点、４層から須恵器の墨書土器（坏）が２点、須恵器の坏が３点、１・４層から出土した須恵器を接合した坏が１点、１層から須恵器の坏が１点、４層から平瓦が１点出土した。

１・２・４層から出土した土師器や須恵器が接合できたことから１～４層は近い時期に堆積した可能性がある。

ＳＬ2037河川跡（第41・42図）

ＰＯ85～90・ＰＰ79～90・ＰＱ79～80に位置する。第Ⅲ層上面で暗灰黄色土の広がりとして確認した。東西方向にのびる全長約43.5ｍの遺構であるが、必ずしも連続しておらず部分的に皿状または帯状に点在している。確認面からの深さは最大で12cm、最小で４cmである。

堆積土は単層である。１～10cmの厚さで粗砂～細砂がラミナ状に貫入していることから水成堆積である。

ＳＬ2038河川跡（第38・39図）

ＰＲ63～66・ＰＳ61～66に位置する。第Ⅴ層上面にオリーブ褐色土の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東－西）9.1ｍ、確認面からの深さは50cmである。壁は東西ともに緩やかに立ち上がり、底面は緩やかな波形である。

堆積土は単層である。砂質土で、径５～10cmの礫が混じる。

ＳＬ2039河川跡（第38・39図）

ＰＳ58～61に位置する。第Ⅴ層上面に黒褐色土の広がりとして確認した。確認範囲は幅が（東－西）10.9ｍ、確認面からの深さは80cmである。本遺構では南北方向の断面を確認するために断面ベルトを設けた。壁の立ち上がりは、西壁は緩やかで東壁はやや急である。底面は緩やかな波形である。

堆積土は９層に分層した。１層は堆積状況から２層以下が堆積した後に２次堆積した可能性がある。２～８層は砂質土で径５～10cmの礫が混じる。６層では植物遺体の堆積を確認した。９層は粘土でここでも少量ながら植物遺体が堆積し、６～９層までは近い時期に堆積した可能性がある。

ＳＬ2040河川跡（第33・34図）

ＰＴ50～53に位置する。第Ⅲ層上面に黒褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東－西）12.5ｍで、確認面からの深さは98cmである。西側には古い暗渠が通っており、その周辺は撹乱されている。このため西側の壁の立ち上がりは確認できなかった。東側は、なだらかな起伏の後、急に立ち上がる。

堆積土は26層に分層した。１層は東側に長さ1.45ｍ、深さ５cmであるが、その下の２層はＳＬ2041の上にまで堆積しており、広範囲に確認できる。３～９層は西端に位置する。３層はシルトだが、４～９層は砂質土である。10層はシルトに細砂がラミナ状に貫入しており10層までが１つの水成堆積である。11～20層はＳＬ2040の中央付近で２層下まで立ち上がっている。２層の下に堆積する11層と19層、11層の下に堆積する12層はシルトであるがそれより下に堆積する層は砂質土であり水成堆積である。ＳＬ2040の東端部に堆積する21～26層はシルトである。

出土遺物は土師器が９～10層から甕が２点（うち１点は13層から出土した破片と接合）、11層から坏が２点、甕が２点、10～11層から甕が２点、24～25層からは坏が１点出土している。須恵器は9～10層から坏が１点、10～11層から甕が１点出土している。土製品は10層から塼が２点、4～9層から白

磁の碗が１点、木製品は9～10層から曲げ物底板が１点、斎串が１点、10～11層から箸が１点出土している。

９～10層の出土遺物と13層の出土遺物が接合できたことから10～13層は近い時期に堆積したと考えられる。

ＳＬ2041河川跡（第33・34図）

ＰＴ48～53に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東－西）1.3m、確認面からの深さは30cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。またＳＬ2040の２層下に位置するが切り合いはない。底部は平坦である。

堆積土は２層に分層した。両層ともシルトであり１層は地山土塊が30％、２層は地山土塊が40％含んでいる。

ＳＬ2042河川跡（第36・37図）

ＰＴ46～48、ＱＡ43～48に位置する。第Ⅲ層上面で褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東－西）12.2m、確認面からの深さは95cmである。壁は西側の立ち上がりは緩やかであるが東側の壁は撹乱を受けており不明である。底面は中央部は深く掘り込まれているが東西方向には40cm程の深さで広がっている。

堆積土は16層に分層した。１・５・６・８・12～16の９層はＳＬ2042の中央付近に堆積しているこの９層に切られる形で17層が西側に堆積している。２～４・７・９・11層はＳＬ2042中央から東側にかけて薄く広く堆積してる。堆積土は全て砂質土であり、堆積状況から水成堆積である。

ＳＬ2043河川跡（第31・32図）

ＱＥ09～11に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東－西）3.2m、確認面からの深さは30cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急であり、底面は平坦である。

堆積土は２層に分層した。両層ともにシルトで植物遺体が少量堆積している。

ＳＬ2044河川跡（第31・32図）

ＱＧ93・94に位置する。第Ⅲ層上面で暗褐黄色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東－西）5.3m、確認面からの深さは43cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は平坦である。

堆積土は３層に分層した。３層とも暗褐黄色シルトで地山土粒の混入割合に差がある。１層の下に２・３層が並んで堆積しており西側に３層が、中央から東に向かって２層が広がっている。

出土遺物としては丸瓦が１点出土している。

ＳＬ2045河川跡（第40図）

ＱＦ01～04に位置する。第Ⅲ層上面で灰黄色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東－西）7.2m、確認面からの深さは60cmである。壁の立ち上がりは西側は緩やかであり、東側は急である。底面は平坦である。

堆積土は５層に分層した。シルトと砂質土が互層になっていることから水成堆積である。

ＳＬ2046河川跡（第35図）

ＱＧ93・94に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が

（東－西）3.7m、確認面からの深さは８cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は皿状である。

堆積土は３層に分層した。３層とも粘土で、１・２層には十和田a火山灰の混入が確認できた。

６　13区（第43～60図、図版14～16）

本区は12区と並行する南北方向にのびる全長約508mの用水路部分である。東側では住宅地のまでのびる。途中で北方向へ向きを変えるがそこからは14区に区分けされる。検出遺構は溝跡が40条、土坑が７基、柱穴様ピットが23基、これに河川跡が７か所である。出土遺物は土師器、須恵器、土製品、石製品、陶器である。

ＳＬ2044河川跡（第46・47図）

ＱＢ05・06、ＱＣ06に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東－西）4.5m、確認面からの深さは60cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は平坦である。

堆積土は単層である。黒褐色シルトで地山土粒を３％を含んでいる。

ＳＬ2045河川跡（第46・47図）

ＱＤ00～03に位置する。第Ⅲ層上面で黄灰色の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東－西）6.6m、確認面からの深さは70cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにやや急である。ＳＬ2045は立ち上がりの記録だけのため底面形は不明である。

堆積土は６層に分層した。２層以下はシルトと砂質土が互層であることから水成堆積である。

ＳＬ2046河川跡（第59図）

ＱＥ93・94に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。河川跡の確認部分は幅が（東－西）3.0m、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は平坦である。

堆積土は３層に分層した。１～３層とも黒褐色シルトで１・２層は火山灰を含んでおり、含有割合は２層の方が多い。東に広がるにつれ１層と２層は減少していき、途中でⅠ層直下が３層になる。

ＳＫ2051土杭（第43・44図）

ＰＬ02に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。土坑の確認部分は長さが（東－西）54cm、確認面からの深さは14cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直であり、底面は平坦である。

堆積土は２層に分層した。２層とも黒褐色土シルトで地山土粒と炭化物を含む。

ＳＫ2052土杭（第43・44図）

ＰＬ02に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。土坑の確認部分は長さが（東－西）31cm、確認面からの深さは32cmである。壁の立ち上がりは東壁は撹乱を受けており不明である。西壁の立ち上がりはほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は２層に分層した。２層とも黒褐色土シルトで地山土粒と炭化物を含む。

ＳＫＰ2053柱穴様ピット（第43・44図）

ＰＬ01に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東－西）

40cm、確認面からの深さは20cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり、東壁は急であり、底面はほぼ平坦であるが中央に柱材のあたりとみられる窪みがある。

堆積土は単層である。黒褐色土シルトで、上部は撹乱の影響で一部が削平を受けている。

ＳＫＰ2056柱穴様ピット（第43・44図）

ＰＬ01に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東－西）50cm、確認面からの深さは20cmである。壁の立ち上がりは西壁は急であり、東壁はほぼ垂直である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は２層に分層した。２層とも黒褐色土シルトで地山土粒と炭化物を含む。

ＳＫＰ2057柱穴様ピット（第43・44図）

ＰＬ01に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東－西）42cm、確認面からの深さは24cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

堆積土は２層に分層した。１層が柱痕跡である。

出土遺物は１層から土師器と須恵器の甕が１点ずつ出土している。

ＳＫ2060土杭（第45図）

ＰＬ00に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東－西）74cm、確認面からの深さは49cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面はほぼ平坦であるが東側立ち上がり付近で小さく落ち込む。

堆積土は３層に分層した。３層ともシルトで地山土粒と炭化物を含んでいる。特に２層は地山土塊40％と多く含んでいる。

ＳＫ2063土杭（第45図）

ＰＬ98・99に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東－西）60cm、確認面からの深さは24cmである。壁の立ち上がりは西壁は急であるが、東壁は撹乱を受けており不明である。底面は中央付近で80cmほど落ち込んでいる。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＫ2066土杭（第45図）

ＰＬ97に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東－西）1.02m、確認面からの深さは22cmである。壁の立ち上がりは西壁はやや急、東壁はほぼ垂直に立ち上がる。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2068溝跡（第45図）

ＰＬ96に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）31cm、確認面からの深さは６cmである。壁の立ち上がりは西壁はやや急、東壁はほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2069溝跡（第45図）

ＰＬ95・96に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－

西）33cm、確認面からの深さは８cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＫ2070土杭（第45図）

ＰＬ95に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の長さは（東－西）55cm、確認面からの深さは４cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急で、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2071溝跡（第45図）

ＰＬ・ＰM95に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）22cm、確認面からの深さは５cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急であり、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2068、2069、2071、は土層の特徴がＳＫ2070と類似していることからＳＤ2068、2069、2071とＳＫ2070は同時期の遺構だと考えられる。

ＳＤ2072溝跡（第48・49図）

ＰM91に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）29cm、確認面からの深さは20cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり、東壁は急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2073溝跡（第48・49図）

ＰM89・90に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）32cm、確認面からの深さは21cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直であり、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2074溝跡（第48・49図）

ＰM89に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）31cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁共に急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2072～2074は地山土の混入割合に多少の差異はあるが、ほぼ同じ特徴であり同時期の遺構と考えられる。

ＳＤ2075溝跡（第48・49図）

ＰM88に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは６cmである。壁の立ち上がりは両壁共にほぼ垂直にであり、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2076溝跡（第48・49図）

ＰM88に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）

20cm、確認面からの深さは８cmである。壁の立ち上がりは西壁は急であり、東壁は撹乱（暗渠）により不明である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2077溝跡（第48・49図）

ＰＭ・ＰＮ87に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2078溝跡（第48・49図）

ＰＭ・ＰＮ86に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）34cm、確認面からの深さは13cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり、東壁は急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2079溝跡（第48・49図）

ＰＭ・ＰＮ86に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2075～2079は1.5～2.0m間隔に検出した。溝も同一方向にのびている。

ＳＤ2080溝跡（第50図）

ＰＮ85に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）24cm、確認面からの深さは６cmである。壁の立ち上がりは西壁は緩やかであるが東壁は急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2081溝跡（第50図）

ＰＮ84に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは10cmである。壁の立ち上がりは西壁は緩やかであるが東壁は急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2082溝跡（第50図）

ＰＮ84に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）24cm、確認面からの深さは11cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2083溝跡（第50図）

ＰＮ83に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）13cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦で

ある。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2084溝跡（第50図）

ＰＮ83に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）10cm、確認面からの深さは７cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2085溝跡（第50図）

ＰＮ83に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは19cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2086溝跡（第50図）

ＰＮ82・83に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）28cm、確認面からの深さは10cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は椀型である。ＳＤ2087と切り合い関係にあり、本遺構の方が新しい。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2087溝跡（第50図）

ＰＮ82に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。ＳＤの確認部分は幅が（東－西）26cm、確認面からの深さは20cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直であり、底面は平坦である。ＳＤ2087と切り合い関係にあり、本遺構の方が古い。

堆積土は１層に分層した。シルトで地山土塊中～極大25％を含んでいる。

ＳＤ2088溝跡（第50図）

ＰＮ82に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）38cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2089溝跡（第50図）

ＰＮ82に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）36cm、確認面からの深さは18cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急で、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2090溝跡（第50図）

ＰＮ81・82に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは18cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。平面は椀型である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2091溝跡（第51図）

ＰＮ80・81に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）24cm、確認面からの深さは16cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2092溝跡（第51図）

ＰＮ80に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）46cm、確認面からの深さは18cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急で、底面は平坦である。

堆積土は２層に分層した。２層ともシルトであるが下層の方が大きい地山土塊を含んでいる。

ＳＤ2093溝跡（第51図）

ＰＮ80に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）38cm、確認面からの深さは16cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2094溝跡（第51図）

ＰＮ79・80に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）34cm、確認面からの深さは16cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2095溝跡（第51図）

ＰＮ・ＰＯ79に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）24cm、確認面からの深さは16cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は椀型である。

堆積土は２層に分層した。シルトで２層とも地山土塊を多く含むが下層の方がより多く地山土塊を含んでいる。

ＳＤ2096溝跡（第51図）

ＰＮ・ＰＯ79に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）26cm、確認面からの深さは６cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2097溝跡（第51図）

ＰＮ78・79、ＰＯ78・79に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）42cm、確認面からの深さは16cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は東から西へ緩やかに傾斜している。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2098溝跡（第51図）

ＰＮ・ＰＯ78に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。ＳＤの確認部分は幅が（東－西）62cm、確認面からの深さは20cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり、東壁は

急に立ち上がる。底面は東から西に緩やかに傾斜している。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2099溝跡（第51図）

ＰＮ・ＰＯ77に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）30cm、確認面からの深さは10cmである。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2100溝跡（第51図）

ＰＯ76に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）44cm、確認面からの深さは19cmである。壁の立ち上がりは西壁はほぼ垂直であり東壁は急である。平面は平坦である。ＳＤ2101と切り合い関係にあり、本遺構が新しい。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2101溝跡（第51図）

ＰＯ76に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）20cmである。確認面からの深さは８cmである。壁の立ち上がりは東壁は緩やかであるが西壁はＳＤ2100と切り合っているため不明である。なお本遺構の方が古い。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2102溝跡（第51図）

ＰＯ76に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）40cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急で、底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2103溝跡（第51図）

ＰＯ75・76に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分は幅が（東－西）45cm、確認面からの深さは12cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は平坦である。

堆積土は１層に分層した。シルトで地山土塊中～極大20％を含んでいる。

ＳＤ2104溝跡（第51図）

ＰＯ75に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）32cm、確認面からの深さは10cmである。壁の立ち上がりは西壁は緩やかであるが東壁は垂直である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2105溝跡（第52図）

ＰＯ73に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）34cm、確認面からの深さは８cmである。壁の立ち上がりは両壁とも急である。底面は平坦である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＫ2106土杭（第52図）

ＰＯ72に位置する。第Ⅲ層上面で黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）

1.2m、確認面からの深さは22cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底面は中央やや東よりから10cmほどの窪みがある。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＤ2107溝跡（第53図）

ＰＱ55・56、ＰＲ55に位置する。Ⅳ層上面で暗オリーブ灰の広がりとして確認した。ＳＤ2107は北壁と南壁の２面で記録をとっており、北壁の確認部分の幅は（東－西）63cm、確認面からの深さは22cmである。壁の立ち上がりは西壁は、ほぼ垂直であり、東壁も急である。南壁の確認部分の幅は（東－西）77cm、確認面からの深さ41cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。ＳＤ2107は沈殿槽の裏込め土の下から検出されており一部で撹乱の土が流入している。底面は北壁では西側に急に落ち込んでいる。南壁では東側から中央にかけて緩やかに落ち込み、中央から西側に向かっては平坦である。

堆積土は北壁は４層、南壁は６層に分層した。上層はシルトであるが下層に向かって粘土に変化していく。

ＳＬ2115河川跡（第54図）

ＰＲ48に位置する。Ⅲ層上面で暗褐色土、灰黄褐色土、黒褐色土の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）7.86m、確認面からの深さは1.15mである。壁の立ち上がりは、西壁は急であるが東壁は緩やかである。底面は完全に掘り下げていないため、不明である。

堆積土は５層に分層した。一番上層の１層はシルトで地山土塊が大～極大で20％を含むが２層以下は砂質土で砂礫小～大を含んでいることから水成堆積である。

ＳＬ2116河川跡（第55図）

ＰＳ42～44に位置する。Ⅲ層上面で黒褐色の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東―西）7.25m、確認面からの深さは70cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに急である。底面は完全に掘り下げていないため、不明である。

堆積土は５層に分層した。１、２層はシルトで、特に２層は礫を多く含んでいる。３～５層は砂質土で礫が中～極大で30～50％と多く含んでいる。このことから水成堆積と考えられる。

ＳＬ2117河川跡（第57・58図）

ＱＡ22、ＱＢ15～22、ＱＣ15～16に位置する。Ⅲ層上面で黒褐色、黄灰色の広がりとして確認した。ＳＬの確認部分の幅は（東―西）14.15m、確認面からの深さは32cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は平坦である。

堆積土は３層に分層した。レンズ状に堆積しており２層が大部分を占めている。３層は側に幅1.5m、厚さ10cmで堆積している。遺物は全ての層から出土しており、特に２層と３層からは多くの土器片が出土している。また２層、３層には植物遺体が少量含まれていた。

ＳＬ2118河川跡（第56図）

ＱＣ09～11に位置する。Ⅲ層上面で褐灰色の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東西）４m、確認面からの深さは43cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであるが西壁の方がより緩やかである。底面は平坦である。

堆積土は４層に分層した。１層はシルトで、２層、３層と移る毎に粘性が高くなっていくが４層は

砂質土である。

ＳＤ2119溝跡（第59図）

ＱＥ、ＱＦ91に位置する。Ⅲ層上面で暗灰黄色の広がりとして確認した。確認部分の幅は（東－西）54cm、確認面からの深さは24cmである。壁の立ち上がりは両壁共にほぼ垂直である。底面は平坦である。

堆積土は２層に分層した。２層とも粘土であるが、１層には水成堆積と思われる砂が層状に混入していることから河川の氾濫などで流れ込んだ土が堆積した層だと考えられる。

ＳＤ2120溝跡（第60図）

ＱＬ48に位置する。Ⅲ層上面で暗オリーブ色の広がりとして確認した。確認部分の幅は2.2m、確認面からの深さは45cmである。壁の立ち上がりは両壁共に急であり、底面は平坦である。

堆積土は単層である。シルトであるが位置的に外柵材木塀布掘溝跡の可能性もある。遺構内には柵木などの遺物は確認できなかったが、すぐ隣が畑であることから抜き取られた可能性がある。

第２表　柱穴様ピット一覧表

SKP番号	検出区	検出面	平面形	規模（m）		底面標高（m）	備　　考
				長軸	短軸		
2047	PK04	Ⅲ	隅丸方形	0.22	0.20	33.994	
2048	PK04	Ⅲ	不整形	0.38	0.13	33.956	暗渠に切られている。
2049	PK04	Ⅲ	隅丸方形	0.30	0.19	34.043	
2050	PL02	Ⅲ	不整形	0.22	0.18	33.987	一部が壁にかかっている。
2054	PL01	Ⅲ	隅丸方形	0.48	0.46	33.916	
2055	PL01	Ⅲ	不整形	0.18	0.10	33.915	一部が壁にかかっている。
2058	PL01	Ⅲ	円形	0.34	0.26	33.936	
2059	PL00・01	Ⅲ	円形	0.40	0.34	33.715	土師器の坏出土
2061	PL99・00	Ⅲ	円形	0.48	0.46	33.696	土師器の坏・甕出土、甕は内側に煤が付着している。
2062	PL99	Ⅲ	不整形	0.40	0.29	34.010	土師器の坏・甕出土、甕は外側に煤が付着している。一部が壁にかかっている。
2064	PL98	Ⅲ	不整形	0.40	0.17	33.970	一部が壁と撹乱に切られている。
2065	PL97	Ⅲ	円形	0.25	0.25	34.010	
2067	PL97	Ⅲ	円形	0.28	0.25	34.020	
2108	PR50	Ⅲ	円形	0.26	0.22	34.360	
2109	PR50	Ⅲ	円形	0.34	0.34	34.430	
2110	PR49・50	Ⅲ	不整形	0.39	0.38	34.269	一部が壁にかかっている。
2111	PR49	Ⅲ	円形	0.30	0.20	34.357	2112と切り合い、こちらが古い。
2112	PR49	Ⅲ	円形	0.30	0.24	34.237	2111と切り合い、こちらが新しい。
2113	PR48	Ⅲ	隅丸方形	0.30	0.26	34.385	
2114	PR48	Ⅲ	不整形	0.22	0.08	34.428	一部が壁にかかっている。

ここに掲載する柱穴様ピットは平面図及び断面図に記録されていないものである。

ＳＫＰ2059、2061、2062からは土師器が出土している。このうちＳＫＰ2061からは内側に煤が付いた甕が、ＳＫＰ2062からは外側に煤が付いた甕が出土している。ＳＫＰの検出は全てⅢ層の上面である。ＳＫＰ2047～2067までは13区でも西側に位置している。ＳＫＰ2108～2114は13区の中央付近に位置する。

７　14区

本区は調査区の最東端に位置し、住宅地内を通る用水路である。住宅地と隣接していることもあり所々に撹乱が確認できた。遺構は検出されなかったが遺物は須恵器が出土している。

８　15区（第61～64図、図版17）

本区は調査区のほぼ中央に位置し東西方向に422.5ｍのびる排水路である。北側には13区が、南側には17区がある。本来の工事予定では直線であったが15区の西端で外柵材木塀角材列を検出したことから、これを迂回する形で工事が変更された。検出遺構は材木塀が２条、河川跡が２か所である。出土遺物は土師器、須恵器、陶磁器が出土した。

ＳＡ2121角材列（第61図）

ＯＧ08に位置する。確認部分の長さは（東－西）1.3ｍ、幅40㎝、確認面からの深さは22㎝である。壁の立ち上がりはほぼ垂直であるが部分的に撹乱されている。底面はほぼ平坦である。本遺構とＳＡ2122にはボーリング棒による調査で柵木が残存していることを確認している。

堆積土は３層に分層した。１層は裏込め土か２層が裏込めされた後に流入した層で、２層は裏込め土、３層は柵木が埋まっていた層である。堆積土は全て粘土である。

ＳＡ2122角材列（第62図）

ＯＭ99、00に位置する。確認部分の長さは（北東－南西）1.75ｍ、幅47㎝、確認面からの深さは35㎝である。断面図は北壁と南壁の２面を記録しており、壁の立ち上がりは、両断面、両壁ともにほぼ垂直で、底面は、北壁は平坦であるが南壁は部分的に撹乱の影響を受けているせいか起伏がある。また、本遺構はボーリング棒による調査で柵木が残存していることを確認している。

堆積土は３層に分層した。３層は柵木の埋められていた層、２層は柵木の裏込め土、１層はその上にできた窪みに堆積した層となっている。南壁は水田耕作地にあり、部分的に撹乱されている。また１層には礫が多く含まれていることから河川堆積したと考えられる。

ＳＬ2123河川跡（第63図）

ＯＴ37～45、ＰＡ34～45に位置する。確認部分の長さは（東－西）30.6ｍ、確認面からの深さは1.1ｍである。壁の立ち上がりは、西壁は撹乱を受けており不明であるが、東壁は急である。底面は調査範囲よりも奥に河川跡がのびているため不明である。

堆積土は７層に分層した。１～４層、７層はシルトであるが５、６層は砂質土である。２、４、５、６層は礫を含んでおり、水成堆積である。

ＳＬ2124河川跡（第64図）

ＰＦ91～94、ＰＧ84～94、ＰＨ76～86、ＰＩ68～77、ＰＪ68～71に位置する。確認部分の長さは（東－西）78.8ｍ、確認面からの深さは60㎝である。壁の立ち上がりは西壁は急である。東壁は調査区外にのびているため不明である。底面も調査区外にのびているため不明である。

堆積土は２層に分層した。１層はシルトで、２層は砂質土である。また２層は礫を多く含んでおり、水成堆積である。

９　16区（第65～67図）

本区は調査区の南東に位置し、北東－南西方向に110.9ｍのびる用水路である。調査区の境界上にあり、北側は15区と、南側は17区と近接している。また、本区の南側には用水路があり、その時の工事の影響か造成土直下が地山土になる。検出遺構は土坑が２基、柱穴様ピットが１基、河川跡が１か所である。出土遺物には須恵器がある。

ＳＫ2125土杭（第65図）

ＮＯ・ＯＯ85に位置する。確認部分の長さは（南西－北東）1.63ｍ、確認面からの深さは22㎝である。壁の立ち上がりは南西壁は急であるが北東壁は緩やかである。底面は平坦である。

堆積土は２層に分層した。２層とも黒褐色シルトである。

ＳＫＰ2126土杭（第66図）

ＯＴ・ＰＡ78に位置する。確認部分の長さは57㎝の正方形の中心に23㎝の円形プランがある。確認面からの深さは30㎝である。壁の立ち上がりは両壁ともにほぼ垂直であり、底面は平坦である。

堆積土は２層に分層した。１層は柱痕跡で、２層は掘方である。

ＳＫ2127土杭（第66図）

ＰＤ・ＰＥ71に位置する。確認部分の長さは（南西―北東）1.5ｍ、確認面からの深さ38㎝である。断面図は南西の壁で記録しており、壁の立ち上がりは南東壁は調査区外までのびており不明であるが北西壁は急である。底面は平坦である。

堆積土は３層に分層した。３層ともシルトで、下層へ進むほど褐色が強くなる。底部から木材が出土した。

ＳＬ2128河川跡（第67図）

ＰＧ69・70に位置する。確認部分の幅は（南西―北東）95㎝、確認面からの深さ22㎝である。壁の立ち上がりは、西壁は緩やかであるが東壁は河川のえぐり込みで削られており急である。底面はほぼ平坦である。

堆積土は６層に分層した。１と４層、３と５層は同じ性質の土で互層に堆積している。

10　17区（第68～70図）

本区は調査区の南側に位置し、東―西方向に309.4ｍのびる用水路である。南側には18区が並行しており、東側は16区がある。ここからは河川跡が３か所検出している。遺物は土師器、須恵器が出土した。

ＳＬ2129河川跡（第68図）

ＮＱ81・82に位置する。確認部分の幅は（東―西）3.85ｍ、確認面からの深さは32㎝ある。壁の立ち上がりは西壁は緩やかであるが東壁は急である。底面はほぼ平坦である。18区でも断面で確認できる。

堆積土は２層に分層した。１層は粘土であるが２層は砂質土である。

ＳＬ2130河川跡（第69図）

ＯＡ48・49に位置する。確認部分の長さは（東―西）3.35ｍ、確認面からの深さは48㎝である。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかであり、底面は舟底形である。18区でも断面で確認できる。

堆積土は７層に分層した。１層はシルトであり、土器片が出土している。２～６層までは粘土である。４層には火山灰が板状に堆積している。最下層である７層は砂質土である。

ＳＬ2131河川跡（第70図）

ＯＢ37～39、ＯＣ37・38に位置する。確認部分の幅は（東―西）７ｍ、確認面からの深さは41cmである。中央部分に撹乱が確認できた。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底面はほぼ平坦である。

堆積土は11層に分層した。基本的にシルトであるが底部の11層は砂質土である。下層に下がるにつれグライ化が進んでいる。

11　18区（第71～74図）

本区は南側にあり、17区と並行して東―西方向に306.5ｍのびる用水路である。東側に進むと南西―北東方向にのびている19区の北側で合流する。南側には20区が位置する。ここからは溝跡１条、土坑２基、河川跡３か所を検出している。出土遺物は土師器、須恵器、木製品（鋤）である。

ＳＬ2129河川跡（第71図）

ＮＯ82・83に位置する。ＳＤ2132と切りあっており、ＳＬ2129をＳＤ2132が切っていることからＳＬ2129の方が古い。確認部分の幅は（東―西）2.1ｍで、確認面からの深さは30cmである。壁の立ち上がりは、西壁はＳＤ2132に切られ不明であるが東壁は緩やかである。底面は起伏が多い。

堆積土は単層でシルトである。

ＳＬ2130河川跡（第72図）

ＮＳ47～49、ＮＴ47・48に位置する。確認部分の長さは（東―西）4.75ｍで、確認面からの深さは40cmである。壁の立ち上がりは西壁は緩やかであるが東壁は一旦急になった後に緩やかに変化する。底面は平坦である。

堆積土は７層に分層した。ほとんどは粘土であるが底部の７層は砂質土である。本遺構の１層から土器片が出土している。

ＳＤ2132溝跡（第71図）

ＮＯ83に位置する。ＳＬ2129と切りあっており、ＳＬ2129をＳＤ2132が切っていることからＳＬ2129の方が古い。確認部分の幅は（東―西）75cmで、確認面からの深さは40cmである。壁の立ち上がりは、両壁ともに急で東壁は西壁よりもさらに急になり垂直に近い。底面は椀形である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＫ2133土杭（第71図）

ＮＯ80・81に位置する。確認部分の長さは（東―西）2.23ｍで、確認面からの深さは31cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底面は椀形である。

堆積土は４層に分層した。１・２層はシルトであるが３・４層は粘土である。

ＳＫ2134土杭（第73図）

ＯＢ28に位置する。確認部分の長さは（東―西）90cmで、確認面からの深さは35cmである。壁の立ち上がりは両壁ともに緩やかである。底部は椀形である。

堆積土は単層であり、シルトである。

ＳＬ2135河川跡（第74図）

ＯＥ02～05に位置する。確認部分の幅は（東―西）9.2ｍで、確認面からの深さは64㎝である。本遺構の中心付近には幅2.6ｍ、深さ68㎝の攪乱が確認できた。西壁は立ち上がり部分が攪乱されており不明である。東壁は河川跡が調査区外にまでのびているためこちらも立ち上がりは不明である。底面は西側はほぼ平坦であるが、東側は深いため調査した範囲では確認できなかった。

堆積土は21層に分層した。粘性や土色、混入物の違いから分層したが、似たような特徴の層がラミナ状に堆積している。また上、中間層はシルトであるが下層へ進むにつれ砂質土になる。11層からは木製の鋤が出土している。

12　19区

本区は調査区の南東に位置し、南西―北東方向に212.8ｍのびる用・排水路である。ここでは用水路と排水路が並行して設置された。延長上には16区があり北側では18区が近接し、南側では20区と接続する。前のフリューム埋設工事影響か、本区は全体的に攪乱を受けており壁や底面からビニール片や瓶類などを確認した。遺構、遺物の出土はなかった。

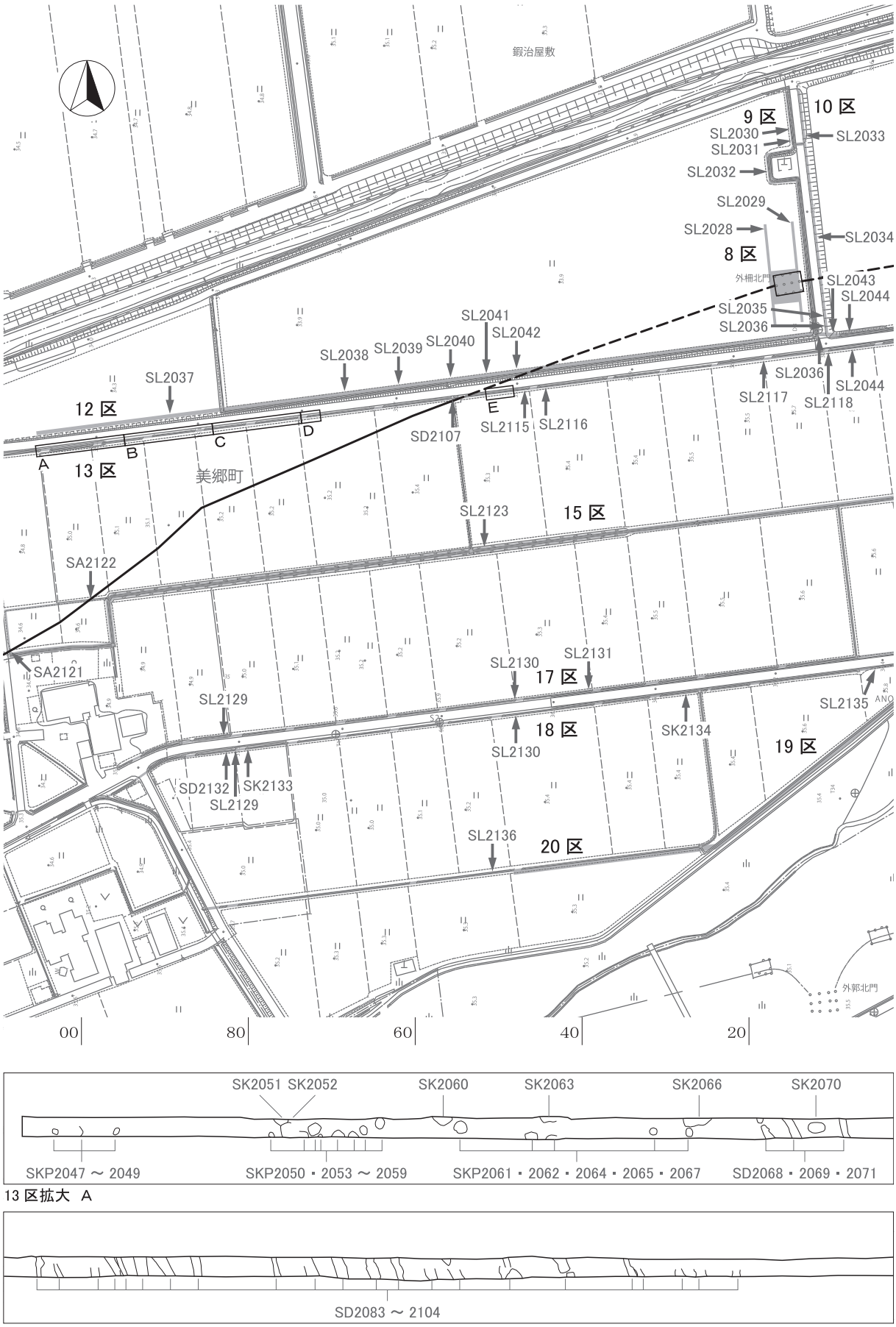
13　20区（第75図）

本区は調査区の最南端に位置し東―西方向に253.2ｍのびる用・排水路である。ここも用水路と排水路が並行して設置され、19区の用排水路と接続する。ここからは河川跡１条を検出した。出土遺物は土師器、須恵器であり、須恵器の中には墨書土器も含まれる。

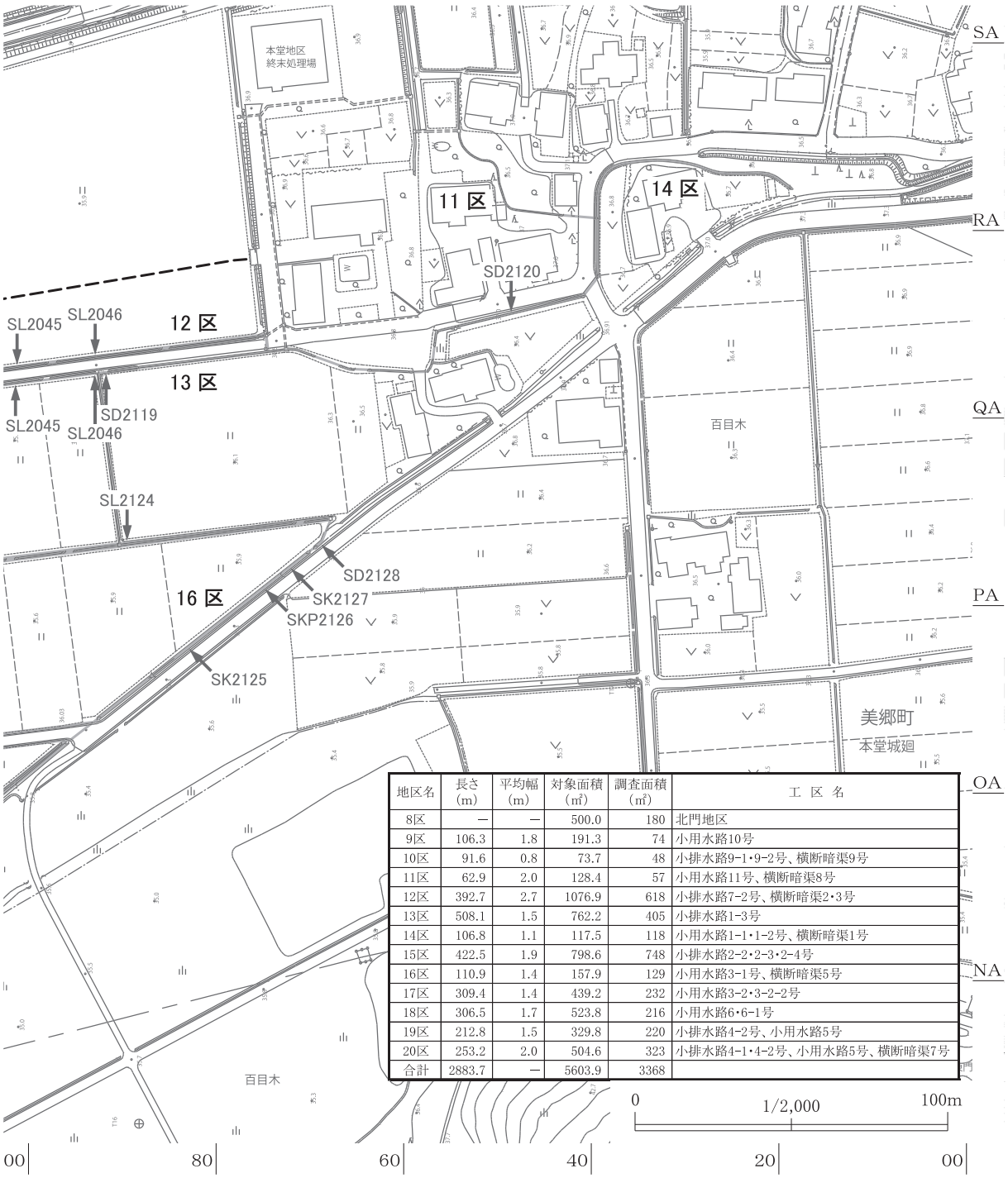
ＳＬ2136河川跡（第75図）

ＭＴ51・52、ＮＡ51・52に位置する。確認部分の幅は6.3ｍ、確認面からの深さは９㎝である。壁の立ち上がりは両壁共に緩やかである。底面は本区が全体的に攪乱されているため不明である。

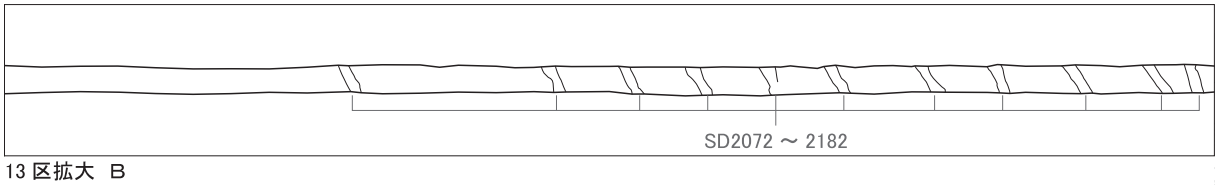
堆積土は２層に分層した。２層とも砂質土であり、１層からは土師器、須恵器が出土している。



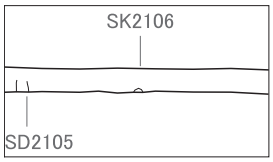
第23図　第145次調査　トレンチ・遺構配置略図（１）



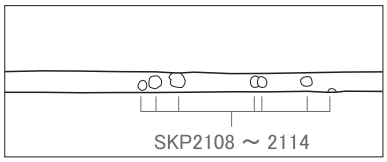
地区名	長さ (m)	平均幅 (m)	対象面積 (㎡)	調査面積 (㎡)	工 区 名
8区	―	―	500.0	180	北門地区
9区	106.3	1.8	191.3	74	小用水路10号
10区	91.6	0.8	73.7	48	小排水路9-1・9-2号、横断暗渠9号
11区	62.9	2.0	128.4	57	小用水路11号、横断暗渠8号
12区	392.7	2.7	1076.9	618	小排水路7-2号、横断暗渠2・3号
13区	508.1	1.5	762.2	405	小排水路1-3号
14区	106.8	1.1	117.5	118	小用水路1-1・1-2号、横断暗渠1号
15区	422.5	1.9	798.6	748	小排水路2-2・2-3・2-4号
16区	110.9	1.4	157.9	129	小用水路3-1号、横断暗渠5号
17区	309.4	1.4	439.2	232	小用水路3-2・3-2-2号
18区	306.5	1.7	523.8	216	小用水路6・6-1号
19区	212.8	1.5	329.8	220	小排水路4-2号、小用水路5号
20区	253.2	2.0	504.6	323	小排水路4-1・4-2号、小用水路5号、横断暗渠7号
合計	2883.7	―	5603.9	3368	



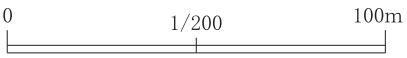
13 区拡大　B



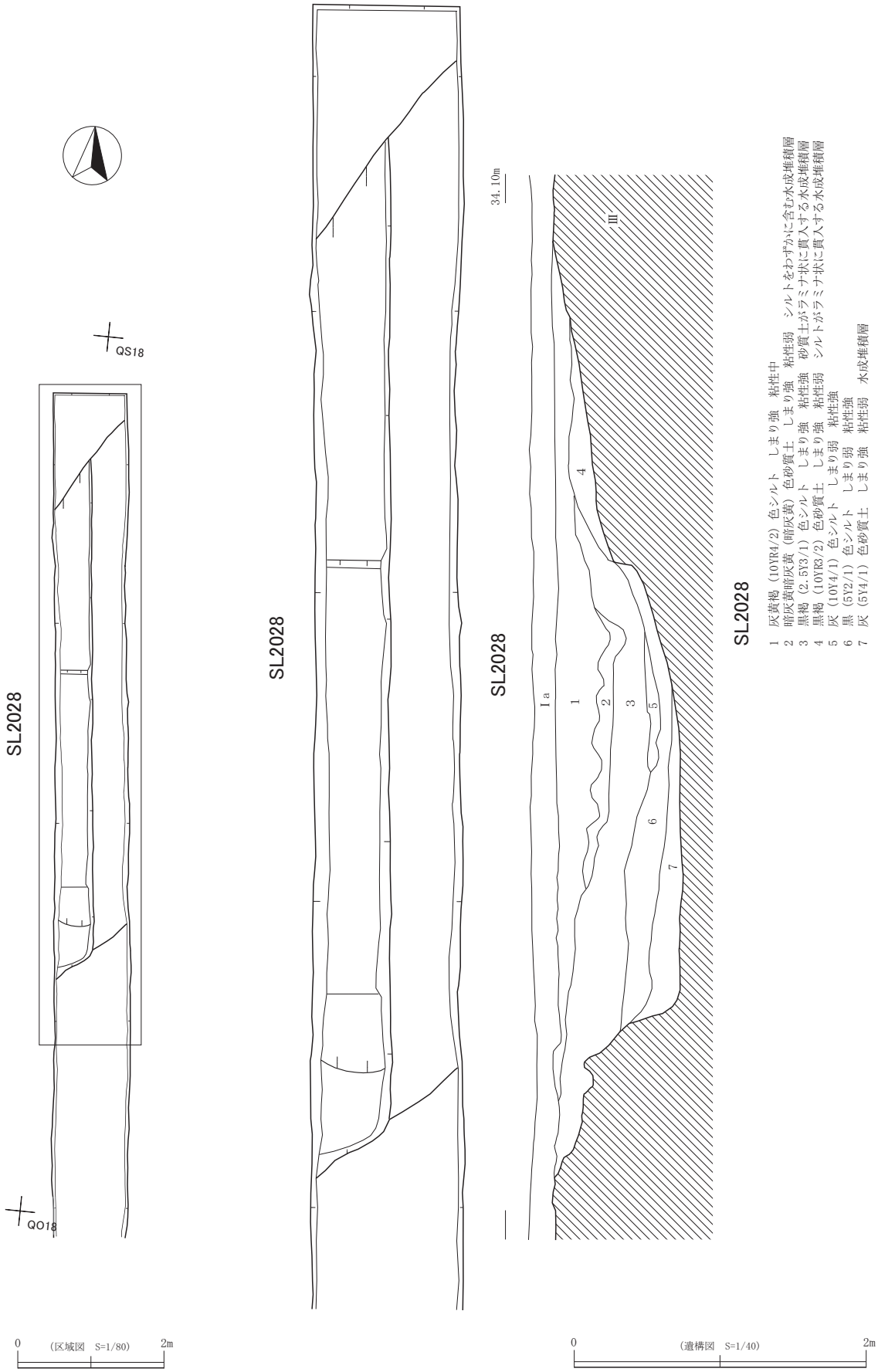
13 区拡大　D



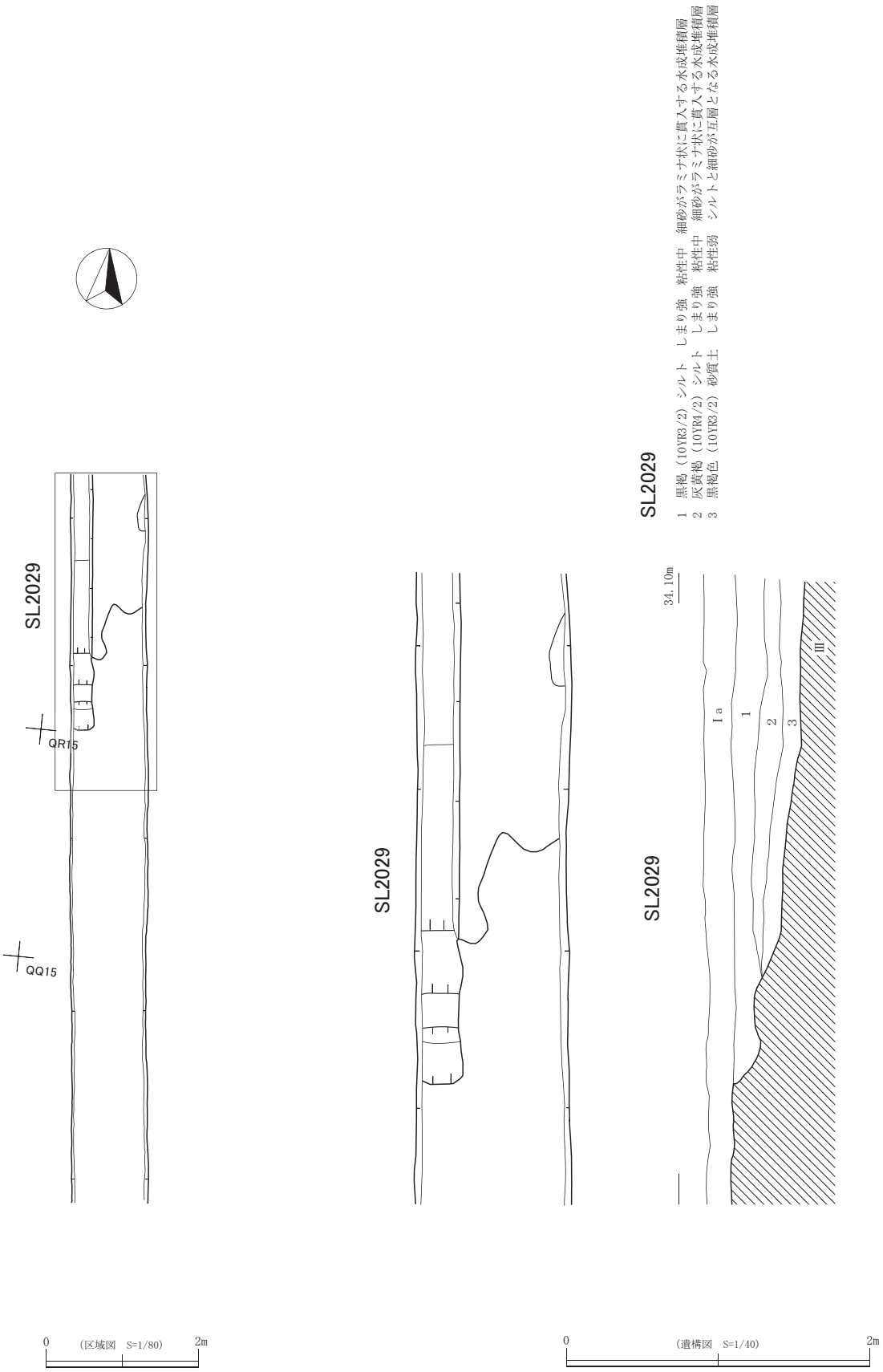
13 区拡大　E



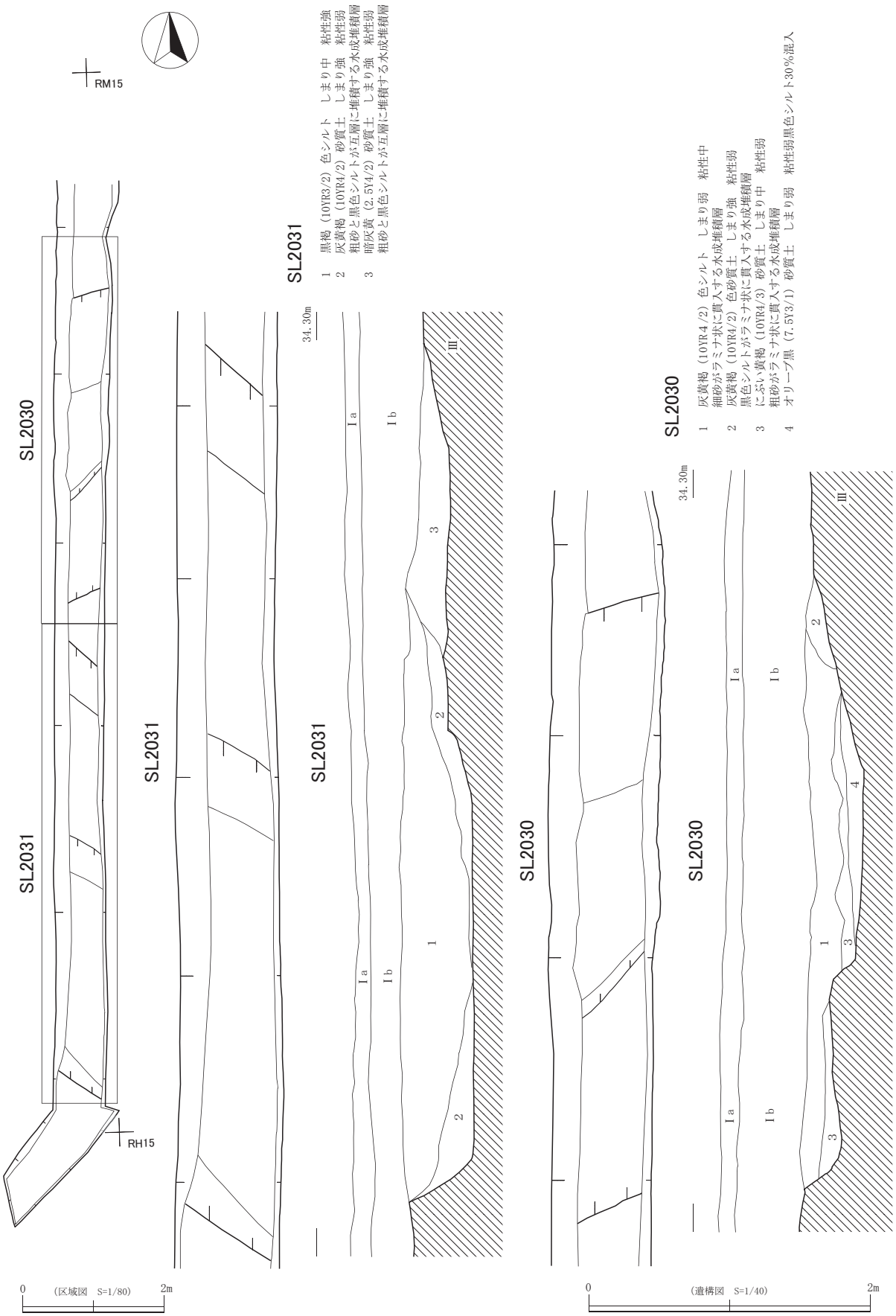
第24図　第145次調査　トレンチ・遺構配置略図（２）



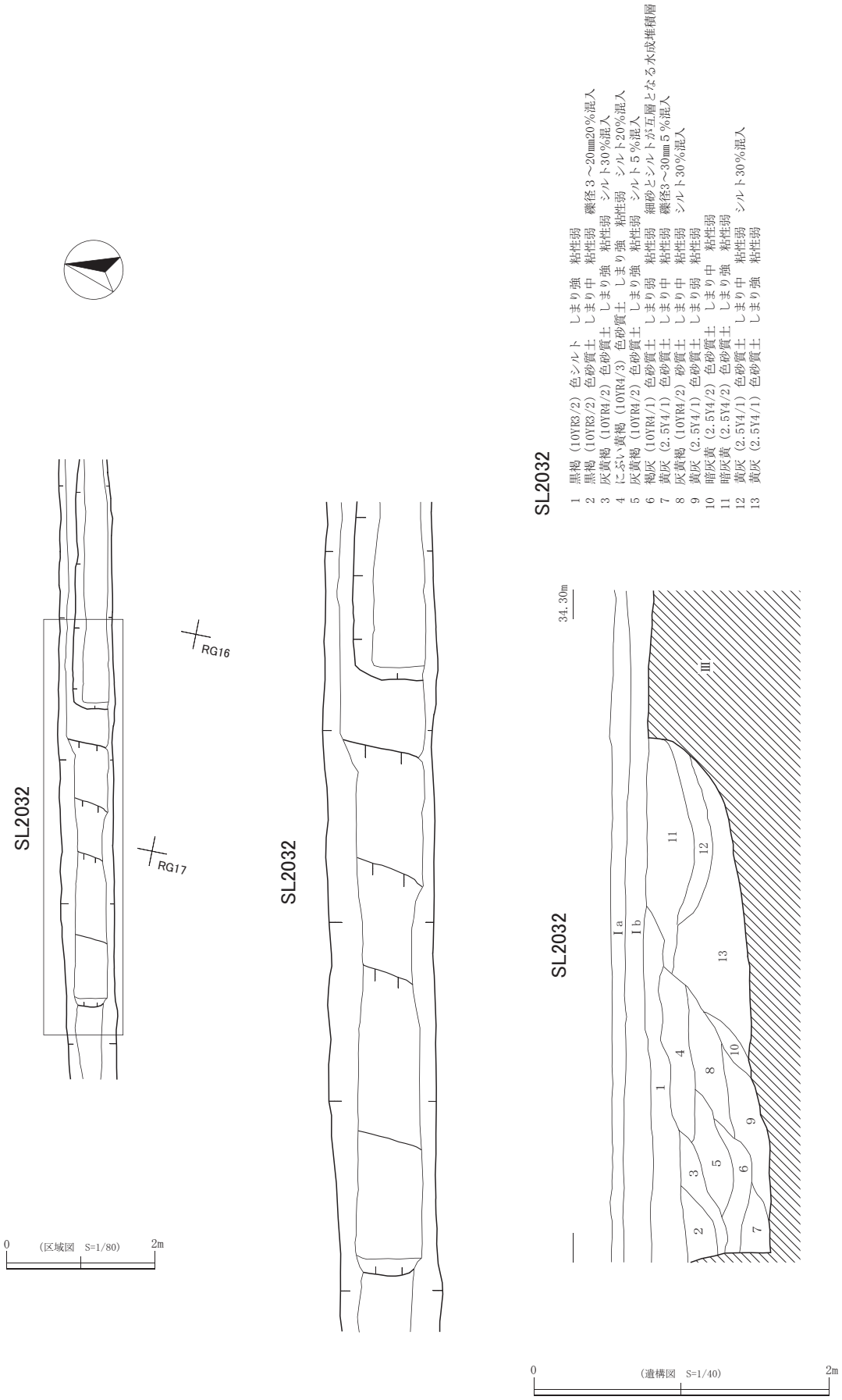
第25図　８区の遺構（１）　SL2028



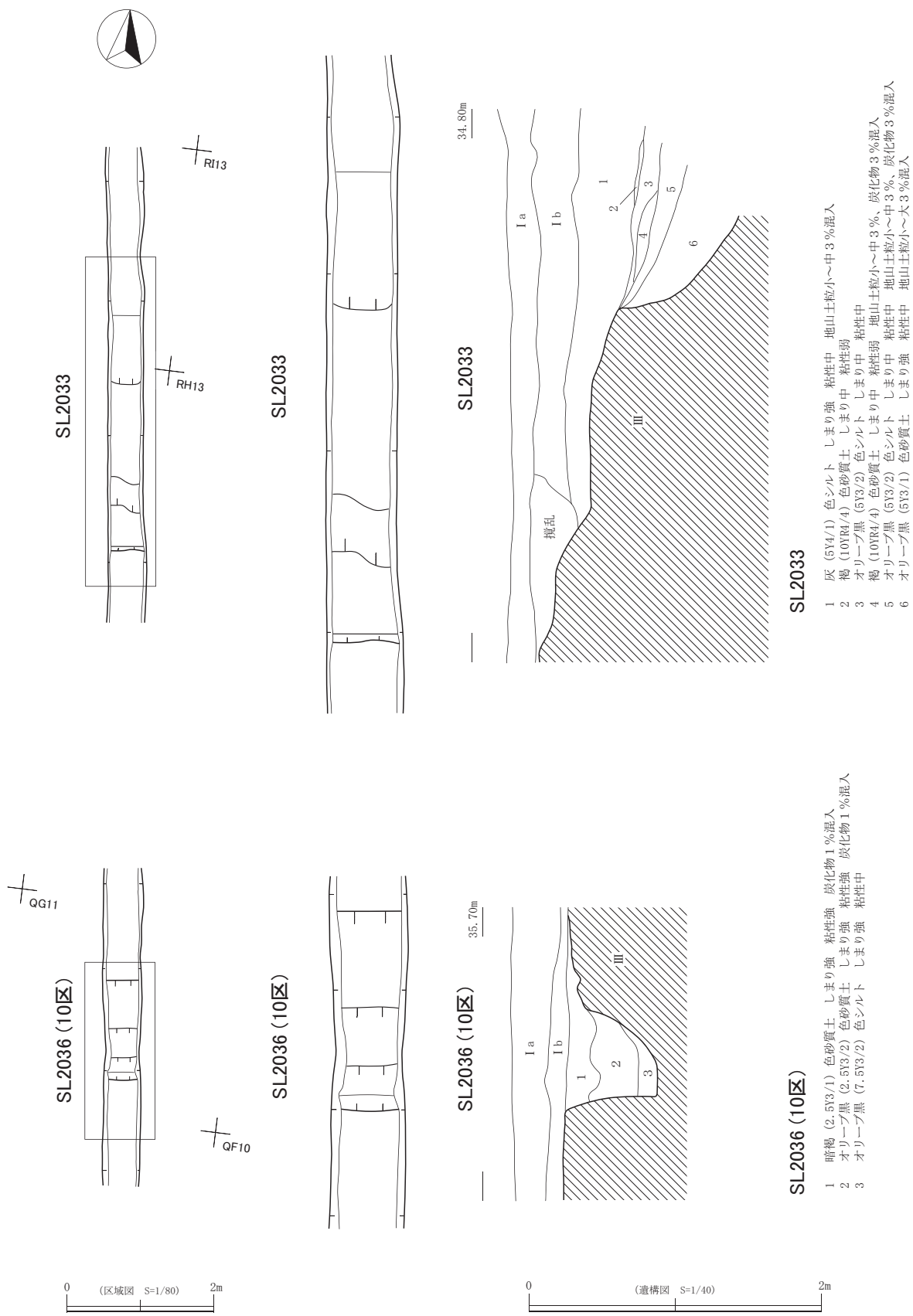
第26図　８区の遺構（２）　SL2029



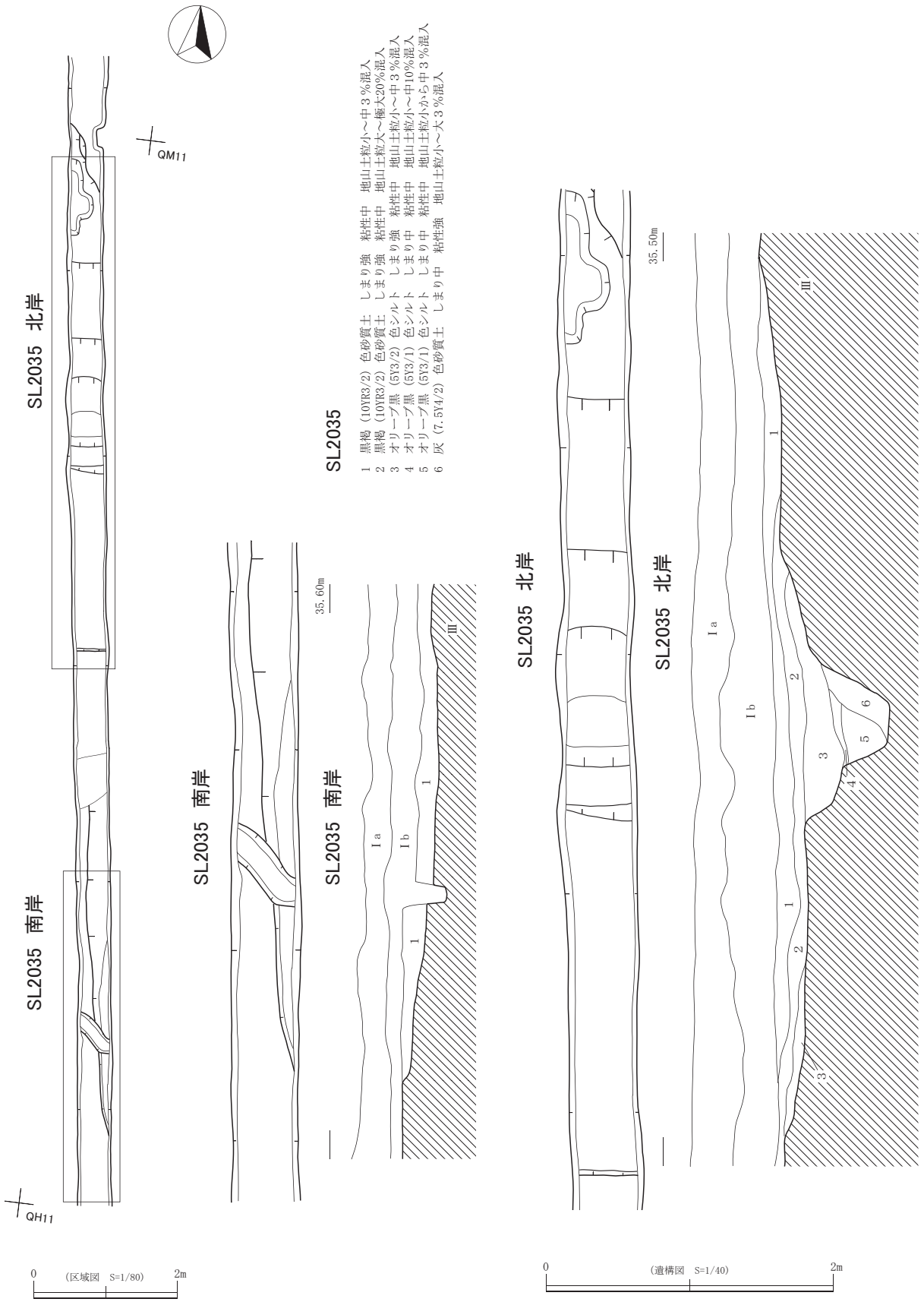
第27図　９区の遺構（１）　SL2030,2031



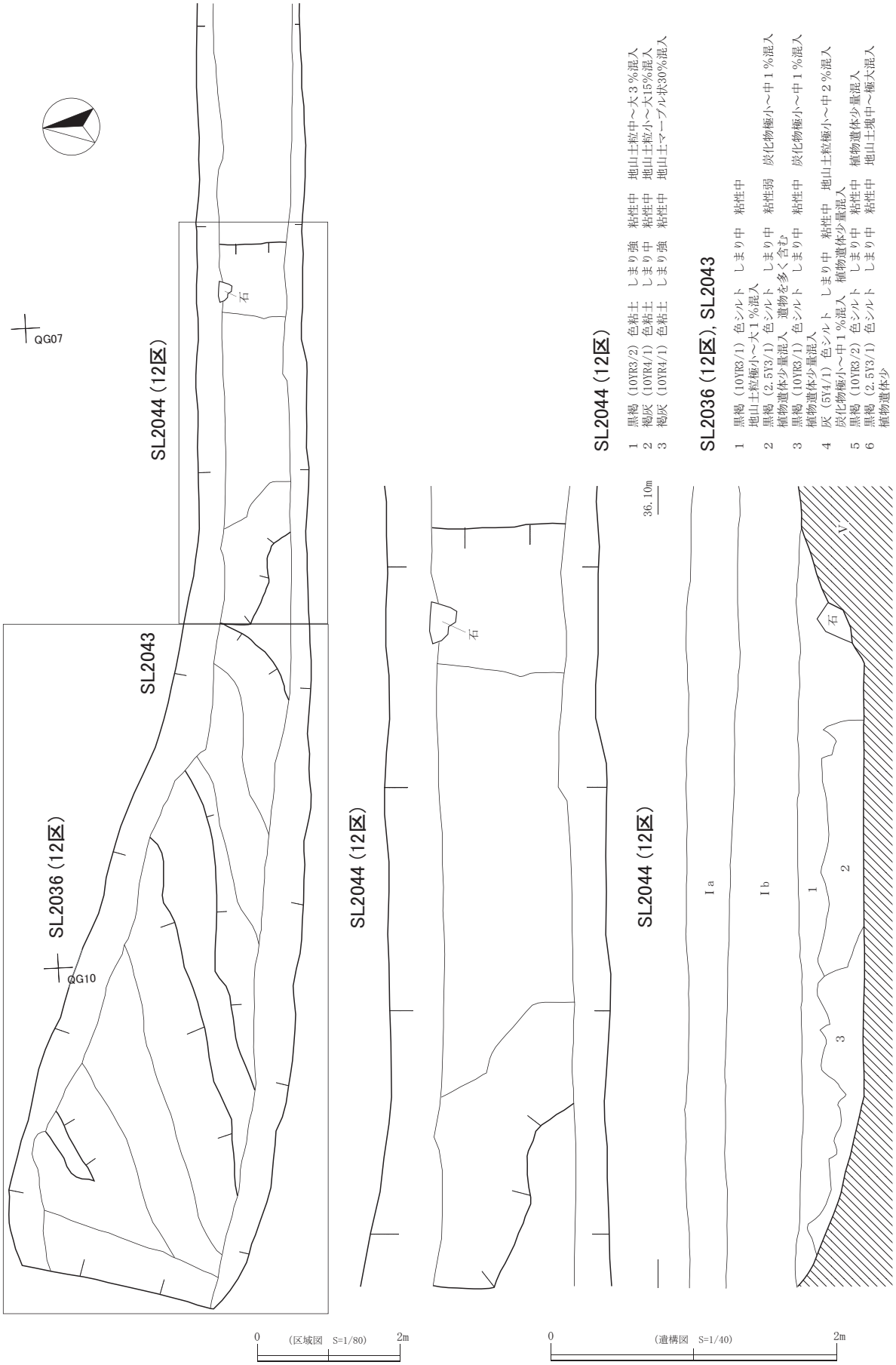
第28図　９区の遺構（２）　SL2032



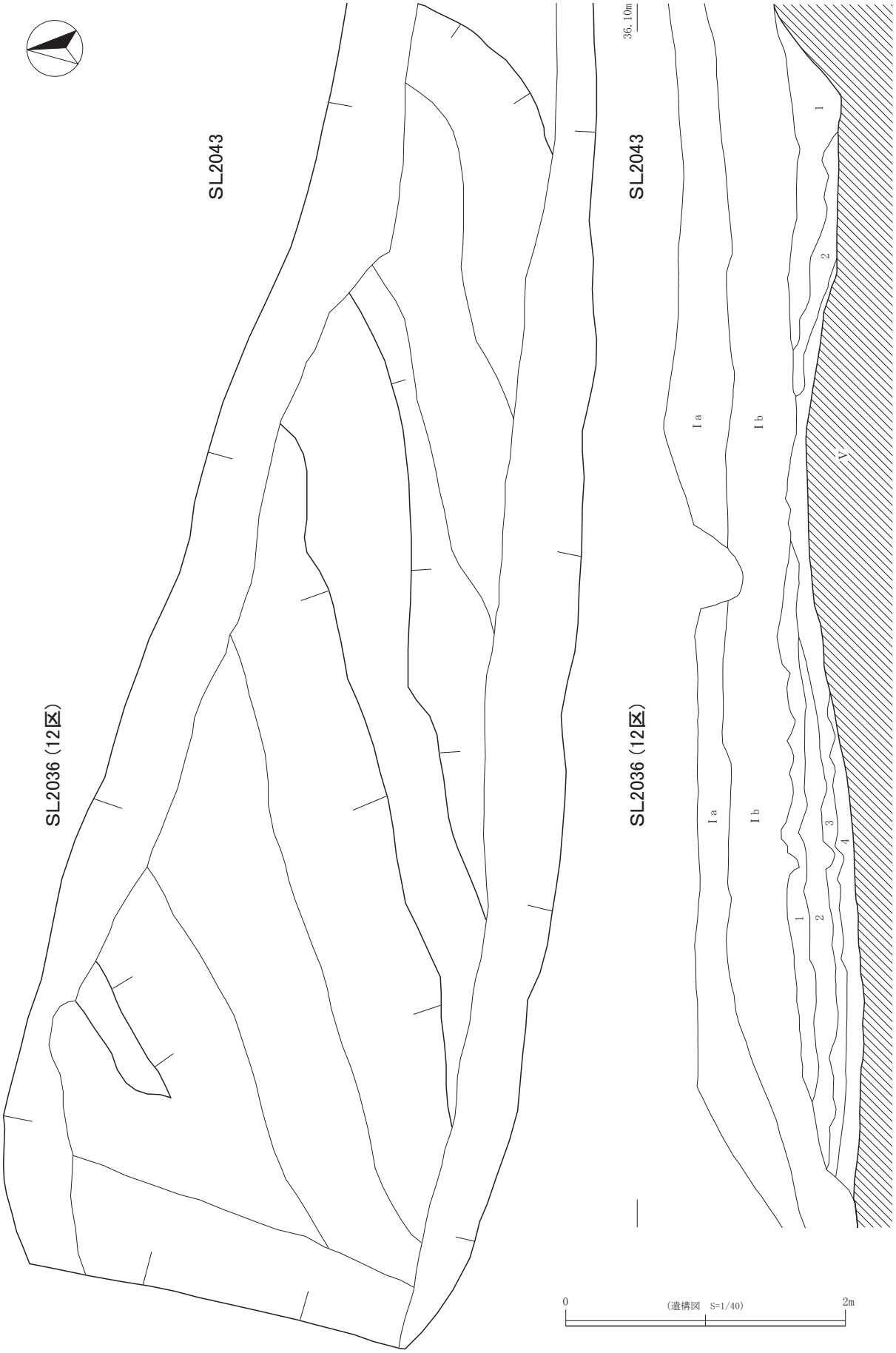
第29図　10区の遺構（１）　SL2033, 2036



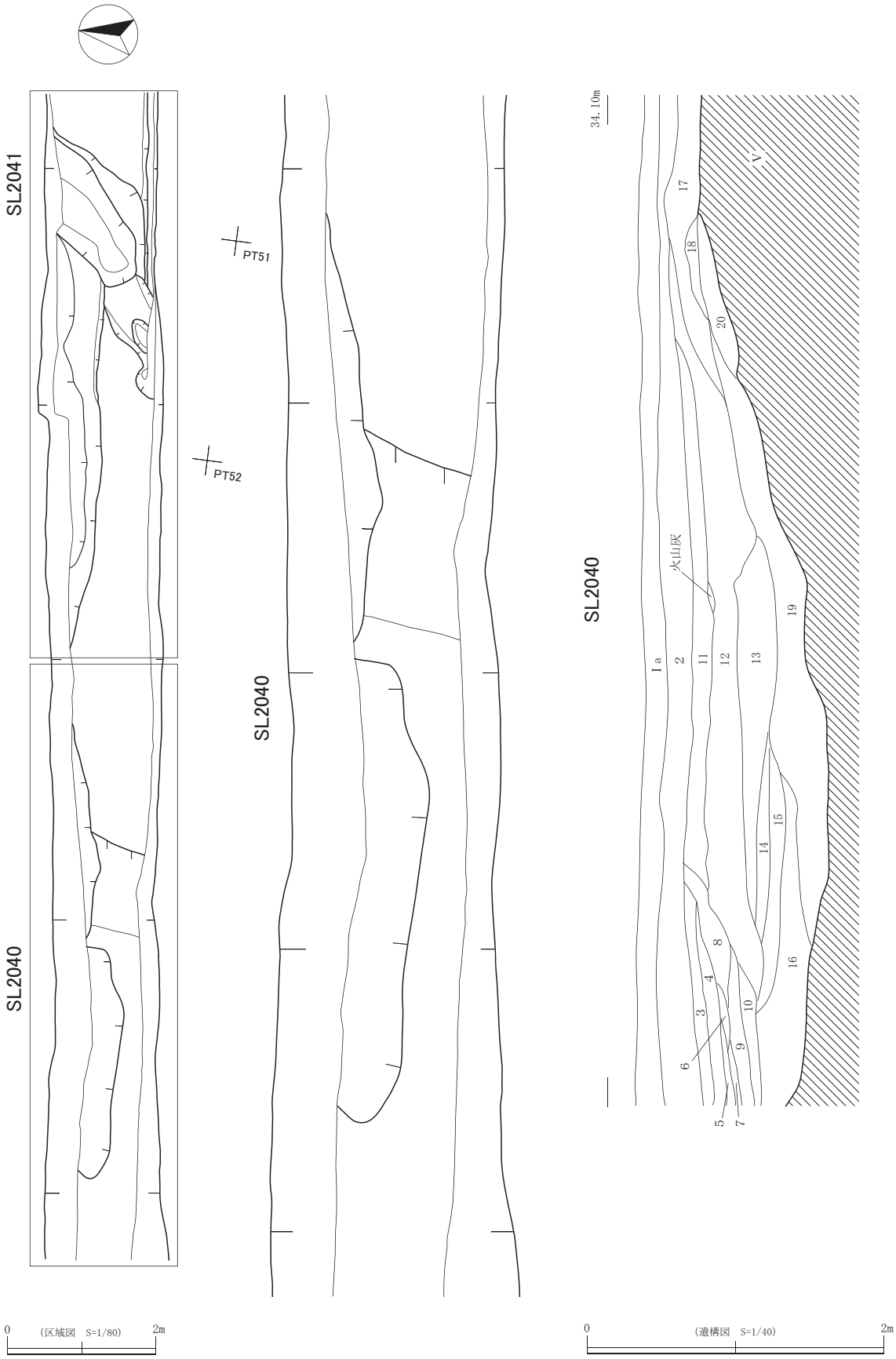
第30図　10区の遺構（２）　SL2035



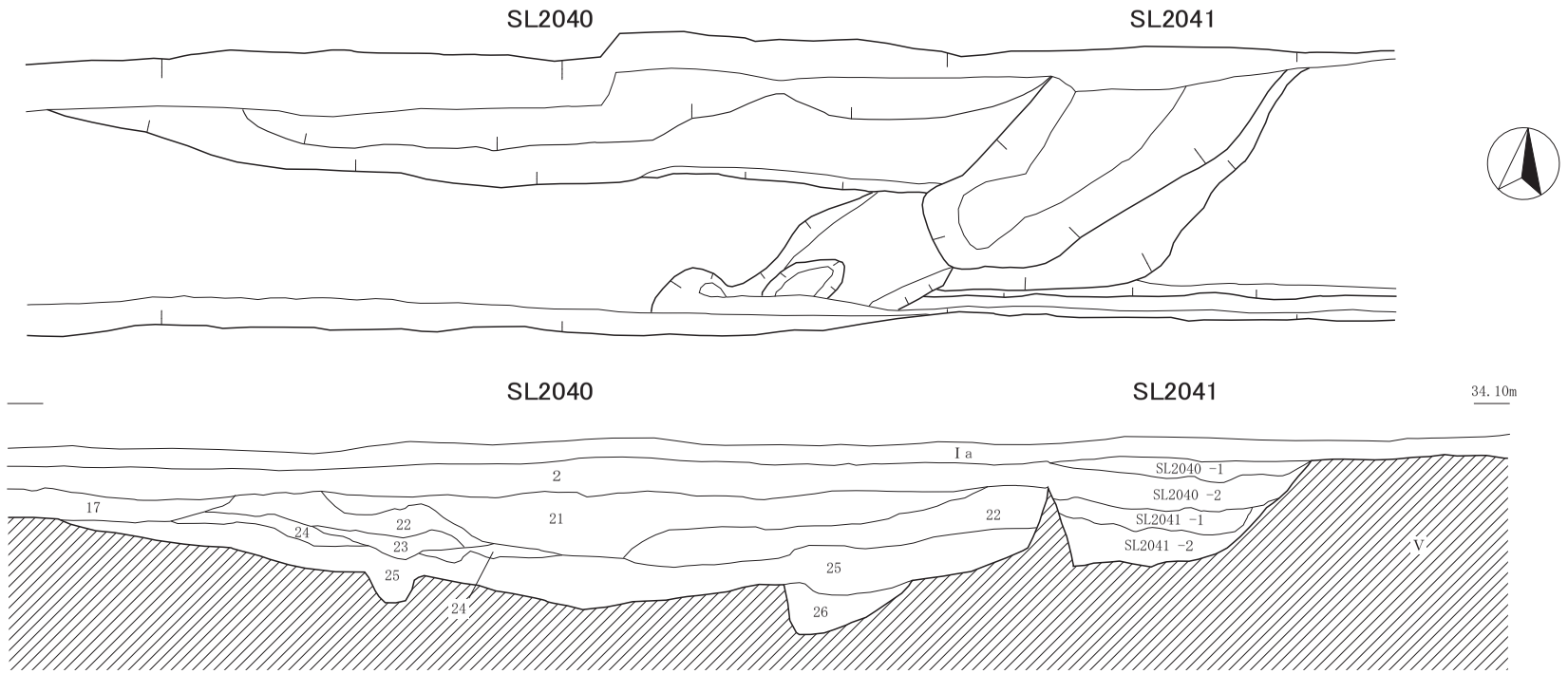
第31図　12区の遺構（１）　SL2036, 2043, 2044



第32図　12区の遺構（２）　SL2036, 2043, 2044



第33図　12区の遺構（３）　SL2040,2041



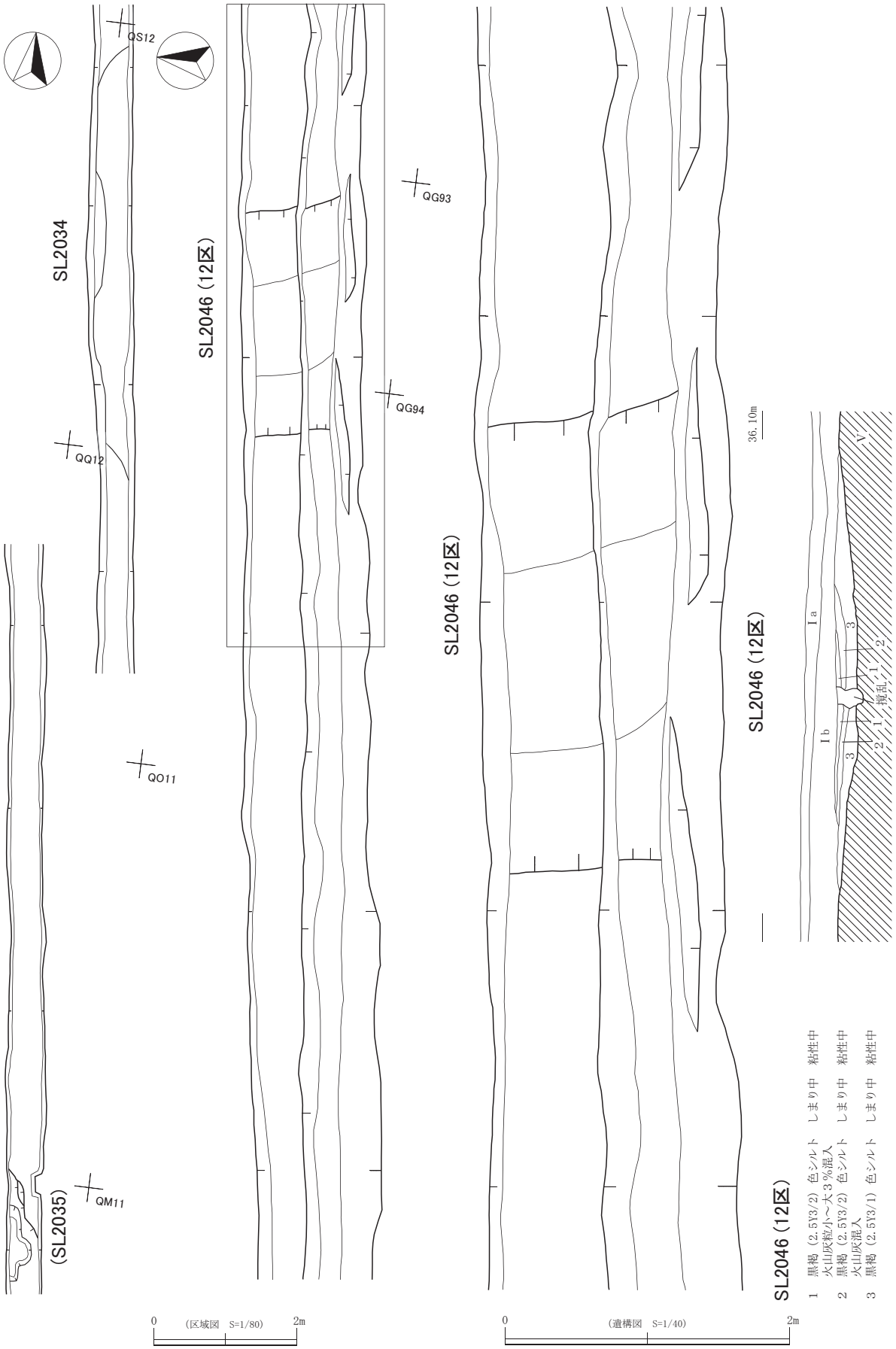
SL2040

1　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり中　粘性弱
2　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり中　粘性中
3　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり中　粘性中
4　黒褐（2.5Y3/1）色シルト　しまり中　粘性弱　砂がラミナ状に貫入する水成堆積層
5　暗赤褐（5YR3/4）色砂質土　しまり強　粘性弱　粗砂小～大25％混入
6　暗灰黄（2.5Y4/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　シルトがラミナ状に貫入する水成堆積層
7　灰黄褐（10YR4/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　粗砂小～大10％混入
8　灰（5Y4/1）色シルト　しまり中　粘性弱　植物遺体少量混入　黒色シルトがラミナ状に貫入する水成堆積層
9　灰（7.5Y4/1）色砂質土　しまり強　粘性弱　細砂がラミナ状に貫入する水成堆積層
10　オリーブ黒（10Y3/1）色シルト　しまり中　粘性弱　黒色シルトと細砂が互層する水成堆積層
11　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり中　粘性中　植物遺体少量混入
12　黒褐（2.5Y3/1）色シルト　しまり中　粘性中　植物遺体少量混入
13　暗灰黄（2.5Y4/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～大５％混入
14　黒褐（2.5Y3/1）色砂質土　しまり弱　粘性弱　植物遺体少量混入
15　オリーブ黒（7.5Y3/1）色砂質土　しまり中　粘性弱
16　オリーブ黒（10Y3/1）色砂質土　しまり弱　粘性弱　礫中～極大10％混入
17　黒褐（2.5Y3/1）色シルト　しまり強　粘性弱　地山土塊中～極大25％　炭化物極小１％
18　黄灰（2.5Y4/1）色シルト　しまり中　粘性弱　褐色シルトと青色細砂が混入　地山土塊中～極大10％混入
19　オリーブ黒（10Y3/1)色シルト　しまり強　粘性中　青色細砂50％混入　植物遺体少量混入
20　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり中　粘性中　地山土粒極小～中３％混入
21　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり強　粘性弱　地山土粒極小～大２％混入　炭化物極小～中１％　植物遺体少量混入
22　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり中　粘性弱　地山土粒・塊極小～極大10％混入　炭化物極小～中１％混入　植物遺体少量混入
23　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり中　粘性弱　植物遺体少量混入
24　オリーブ黒（5Y3/1）色シルト　しまり中　粘性中　地山土塊極大30％　炭化物１％　植物遺体少量混入
25　黒褐（2.4Y3/1）色シルト　しまり中　粘性中　地山土粒極小～中３％　植物遺体少量混入
26　黒褐（2.5Y3/1）色シルト　しまり弱　粘性強　地山土塊極大20％　植物遺体少量混入

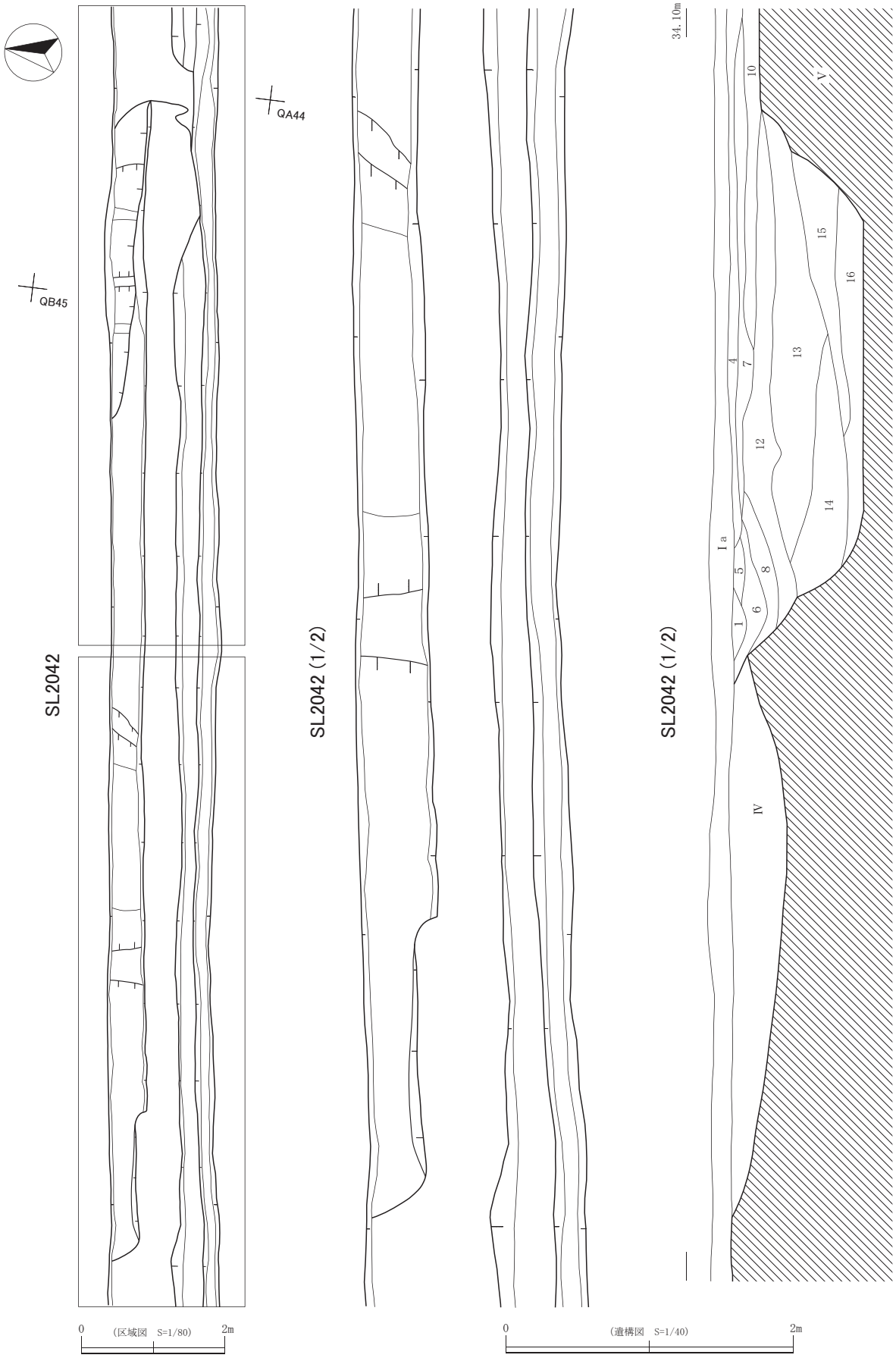
SL2041

1　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり強　粘性中　地山土塊小～極大30％混入　炭化物極小１％混入
2　黒褐（2.5Y3/1）色シルト　しまり強　粘性中　地山土塊小～極大30％混入　炭化物極小１％混入

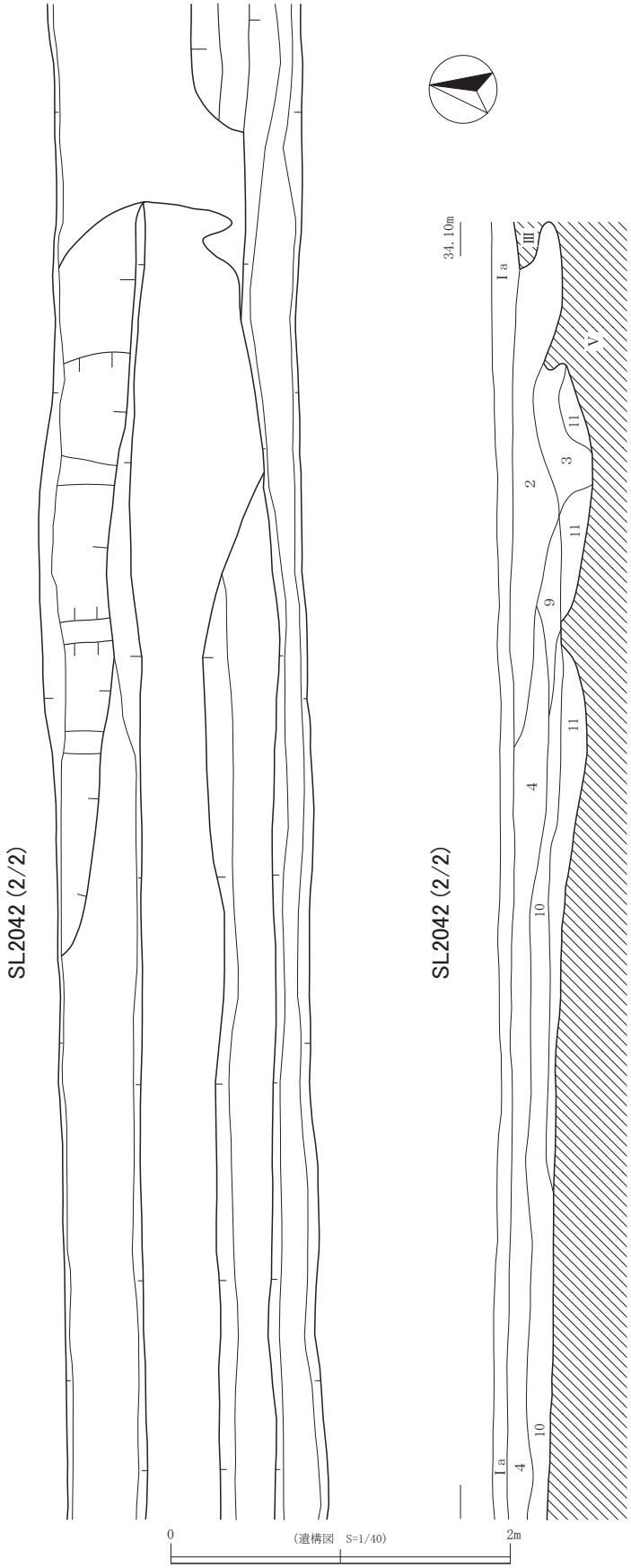
第34図　12区の遺構（４）　SL2040,2041



第35図　10・12区の遺構　SL2034, 2046



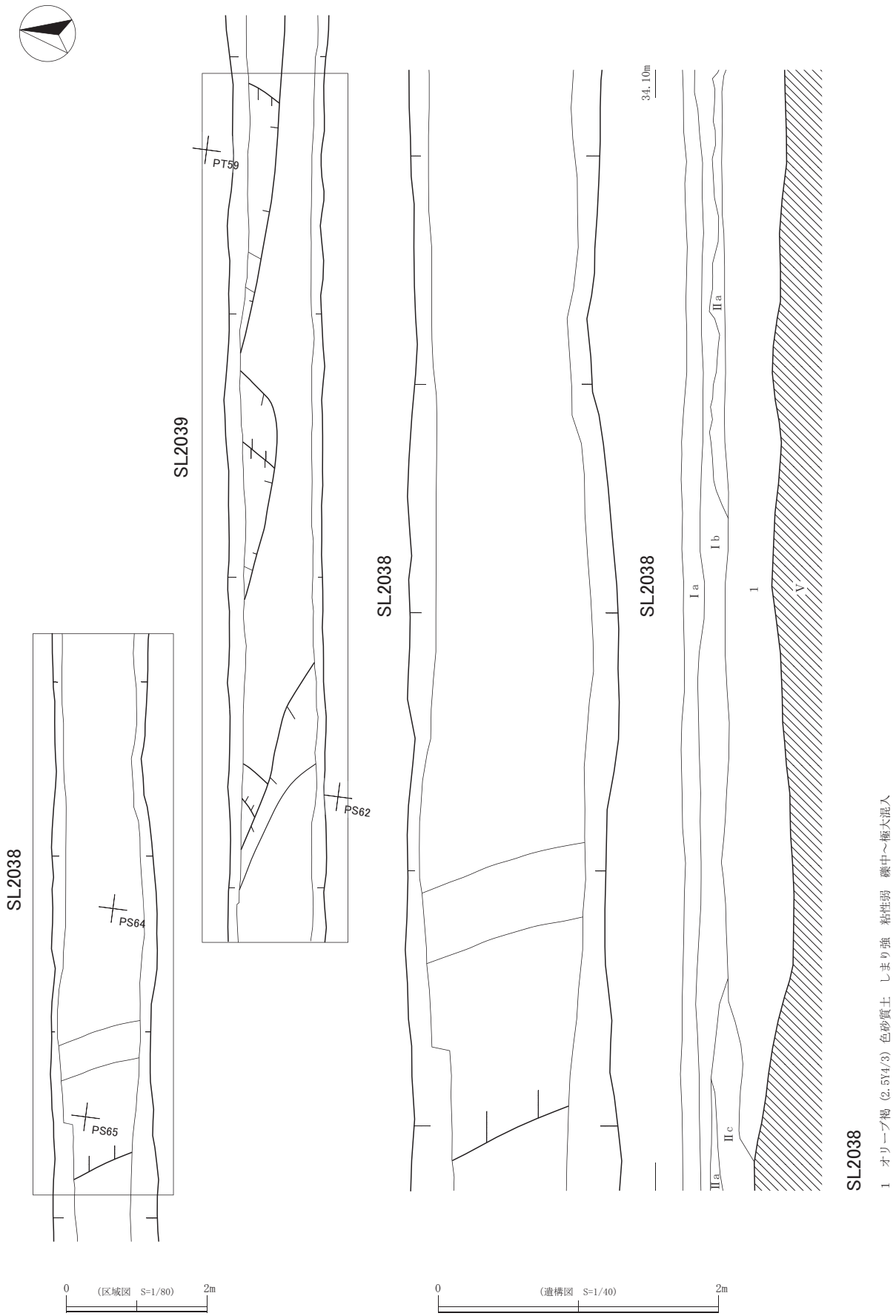
第36図　12区の遺構（５）　SL2042



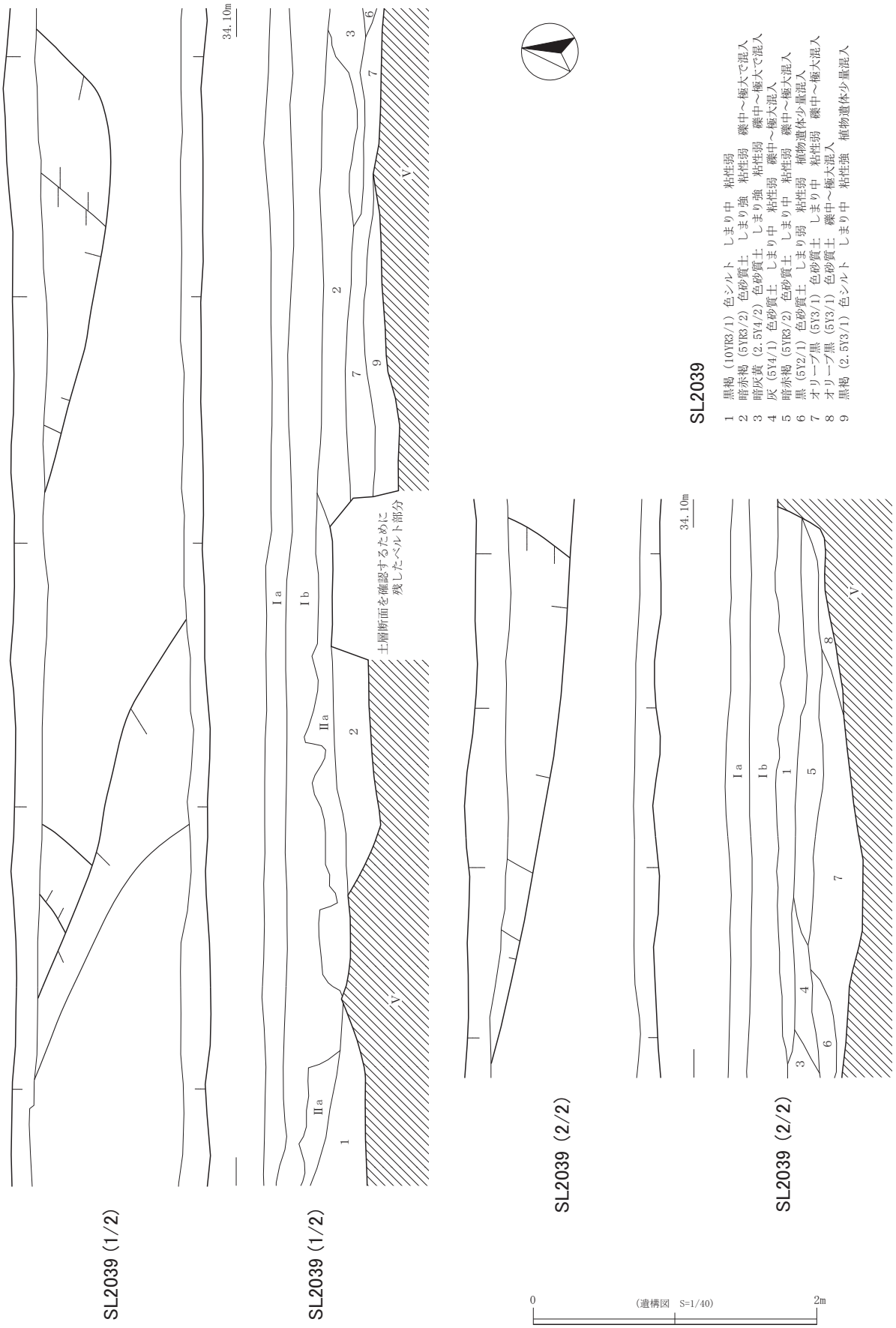
SL2042

1　褐（7.5YR4/3）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～極大80％混入
2　暗灰黄（2.5Y4/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～極大20％混入
3　灰黄褐（10YR4/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～大３％混入
4　暗灰黄（2.5Y4/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～大80％混入
5　灰（5Y5/1）色砂質土　しまり強　粘性弱　細砂混入
6　暗褐（7.5YR3/3）色砂質土　しまり中　粘性弱　礫極小～極大90％混入
7　にぶい黄褐（10YR4/3）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～極大80％混入
8　灰オリーブ（5Y4/2）色砂質土　しまり強　粘性１　礫小～極大20％
9　暗灰黄（2.5Y5/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～中５％混入
10　暗灰黄（2.5Y5/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～大70％
11　暗灰黄（2.5Y4/2）色砂質土　粗砂と細砂が互層する水成堆積層
12　灰（10Y4/1）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～中５％混入　植物遺体大量混入　黒色シルトがラミナ状に貫入する水成堆積層
13　オリーブ褐（2.5Y4/3）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～大　粗砂が主体層と互層する水成堆積層
14　暗褐黄（2.5Y4/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫小～極大30％　粗砂と礫が互層する水成堆積層
15　暗オリーブ灰（2.5GY4/1）色砂質土　しまり強　粘性弱　植物遺体少量混入　黒色砂質土と互層する水成堆積層
16　暗灰黄（2.5Y4/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　粗砂が貫入する水成堆積層

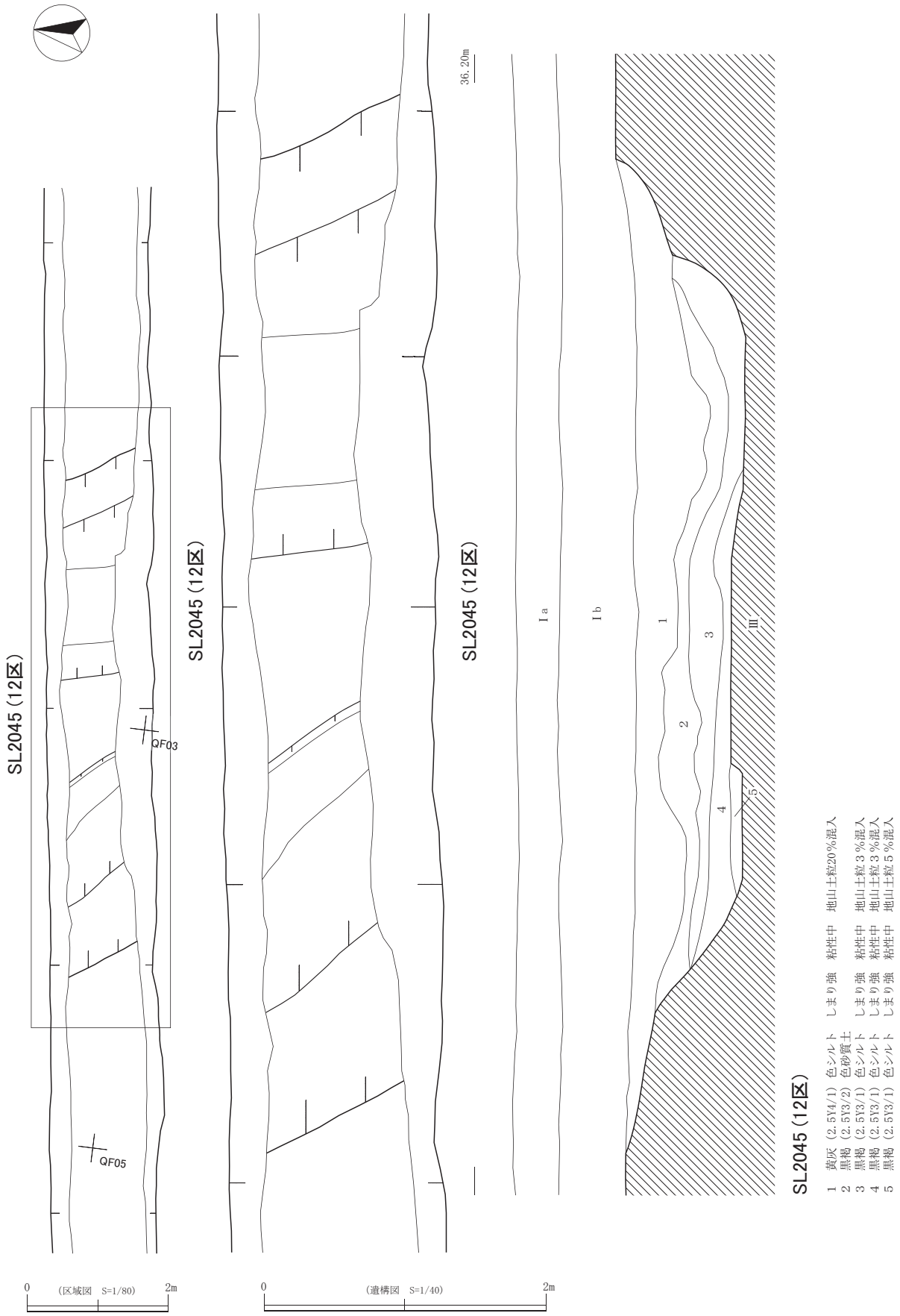
第37図　12区の遺構（６）　SL2042



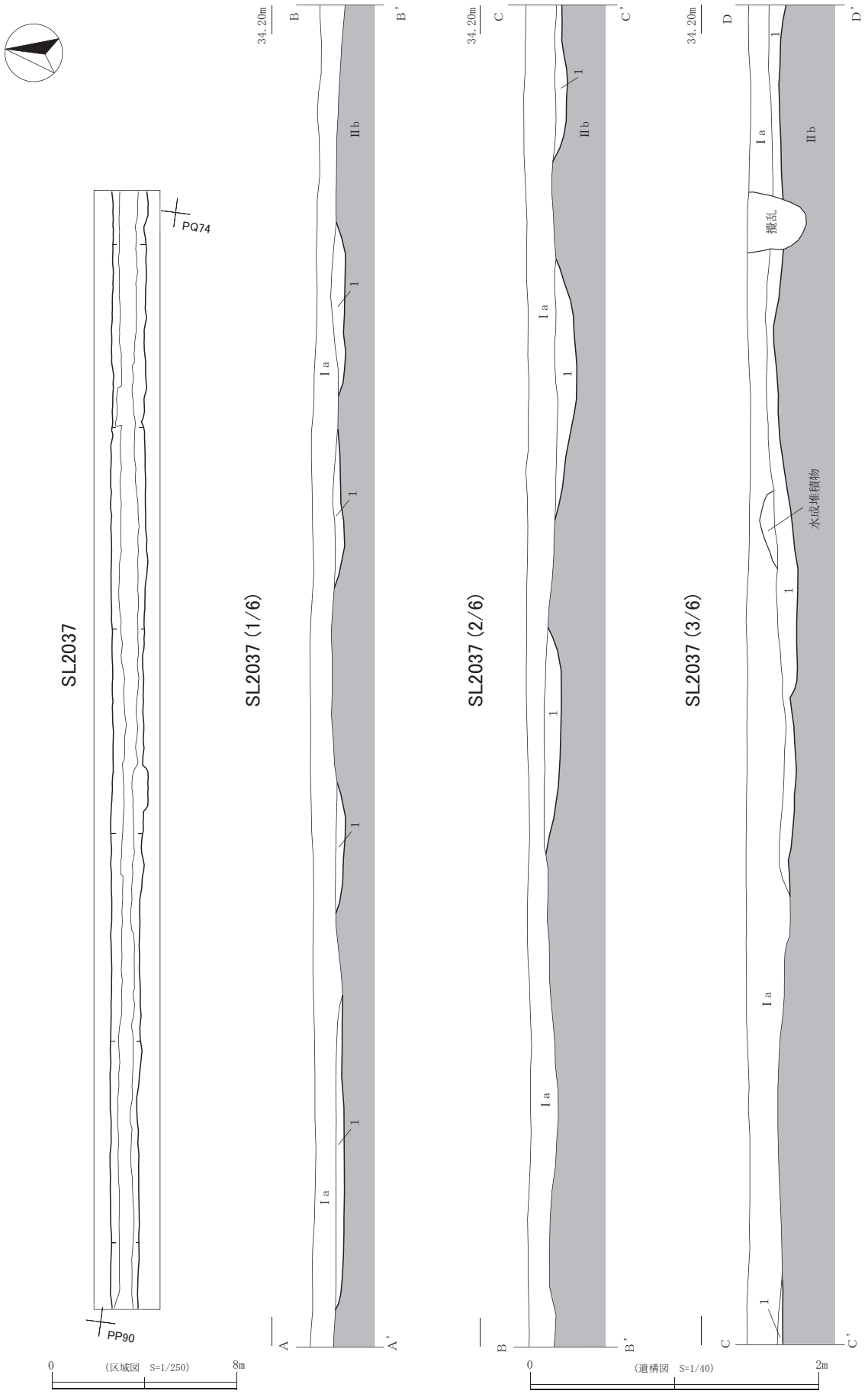
第38図　12区の遺構（７）　SL2038,2039



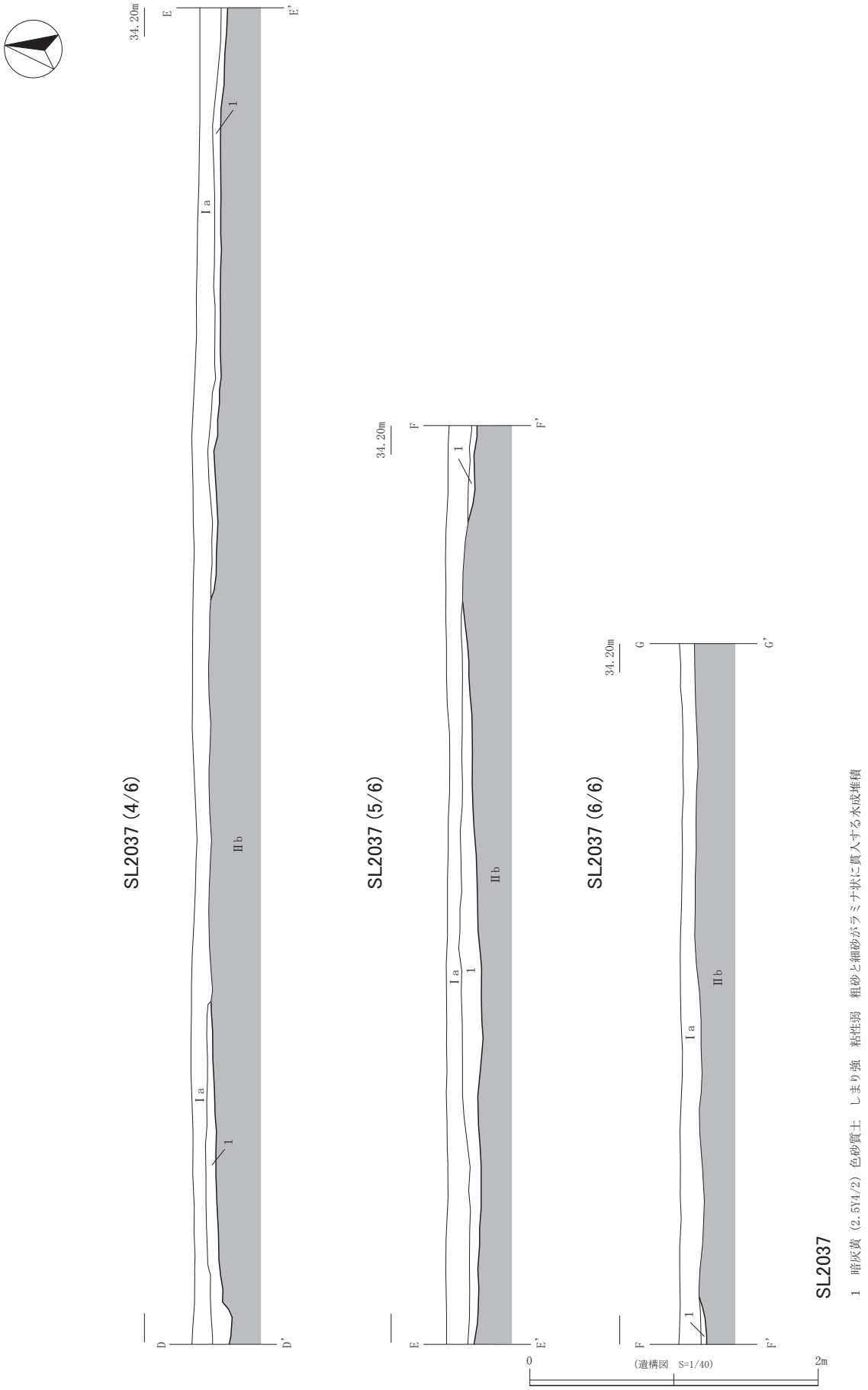
第39図　12区の遺構（８）　SL2038,2039



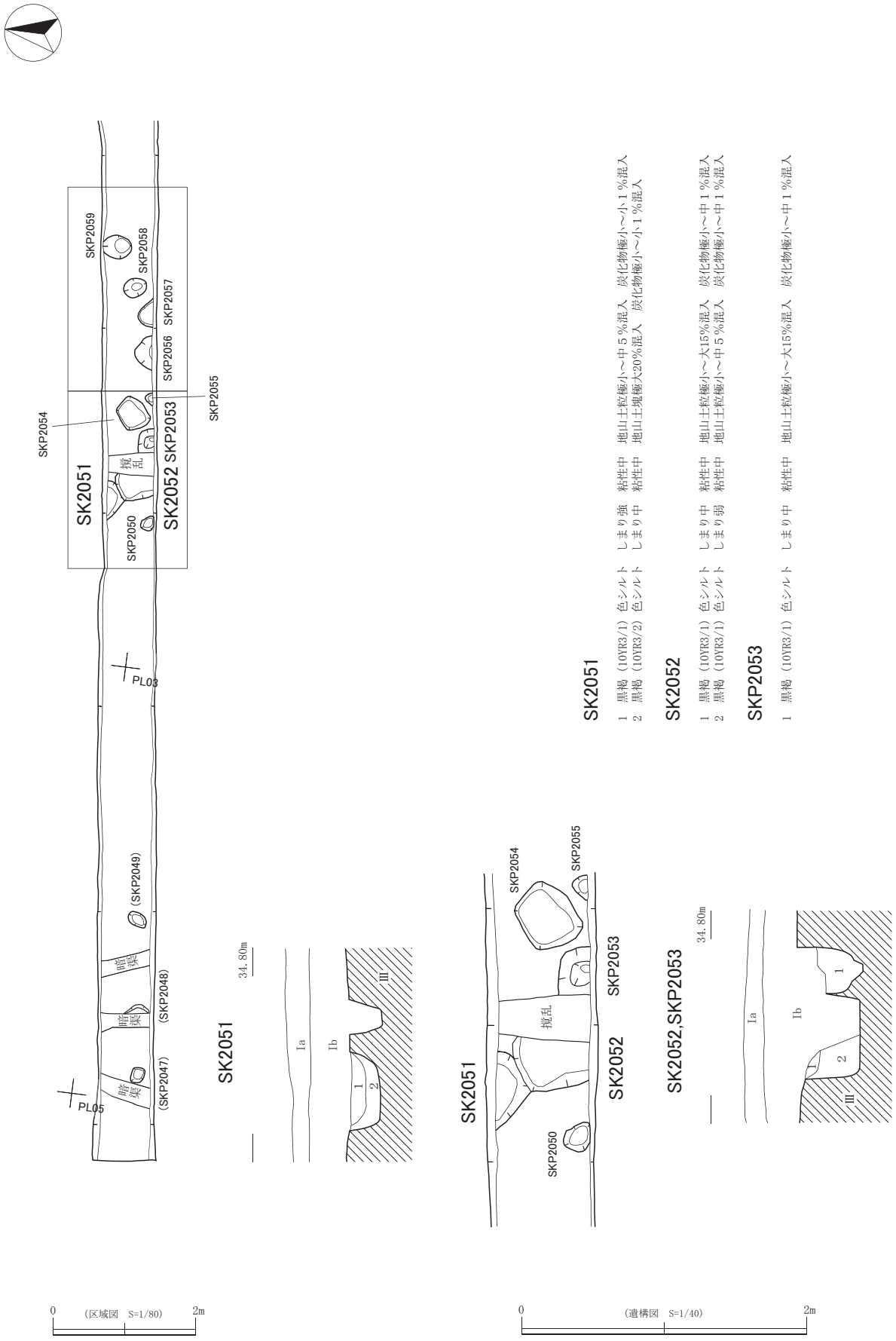
第40図　12区の遺構（９）　SL2045



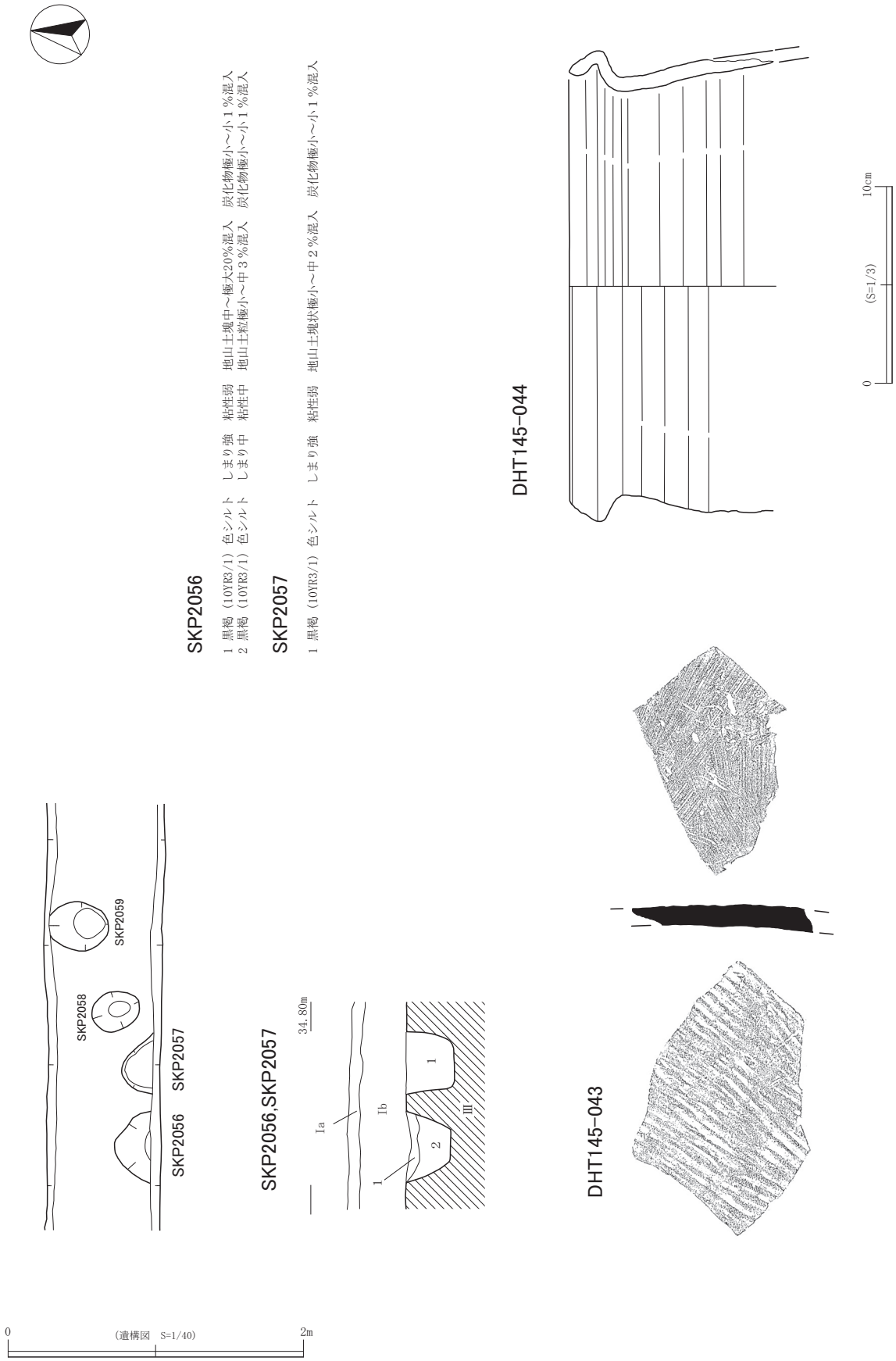
第41図　12区の遺構（10）　SL2037



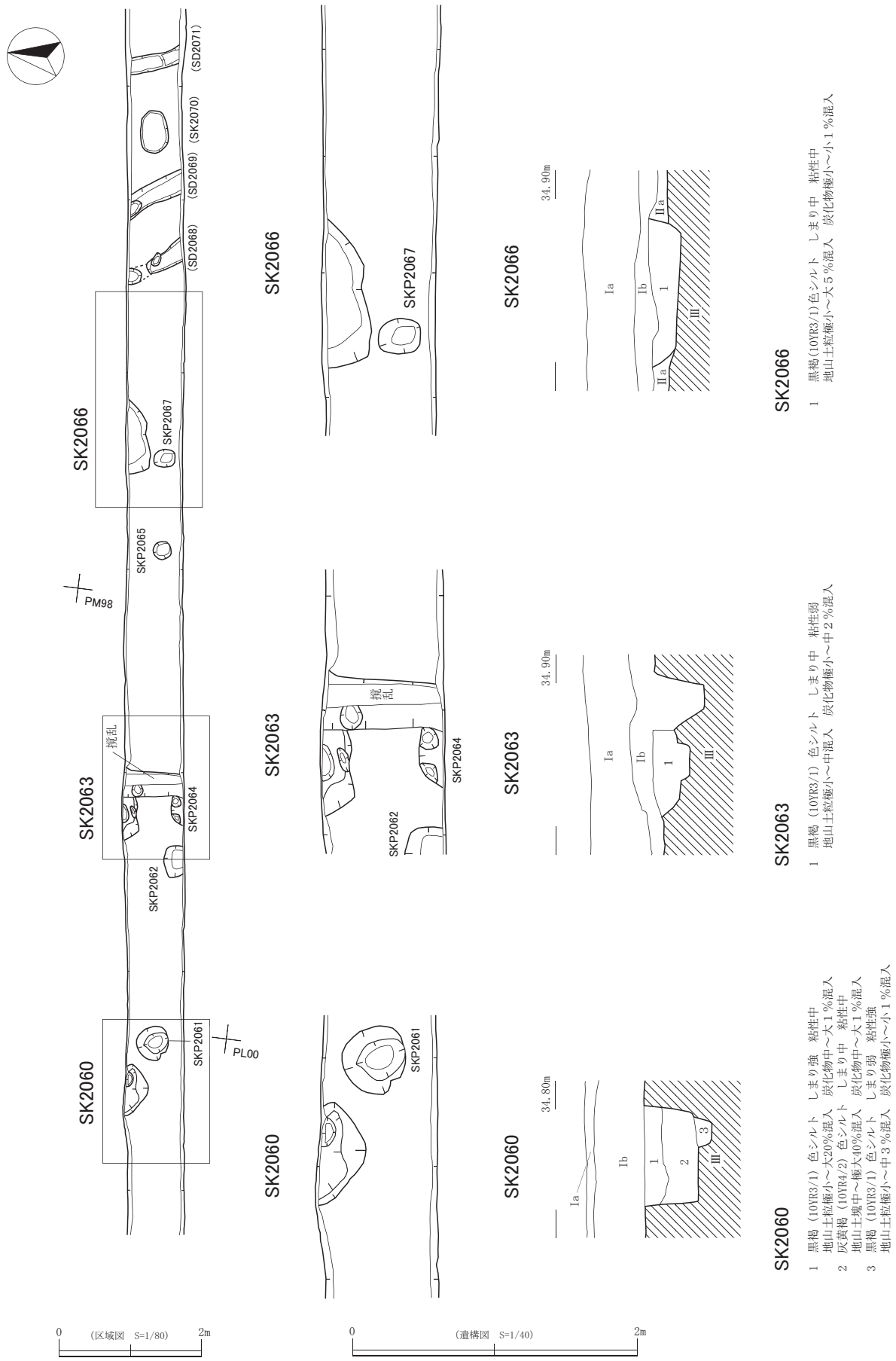
第42図　12区の遺構（11）　SL2037



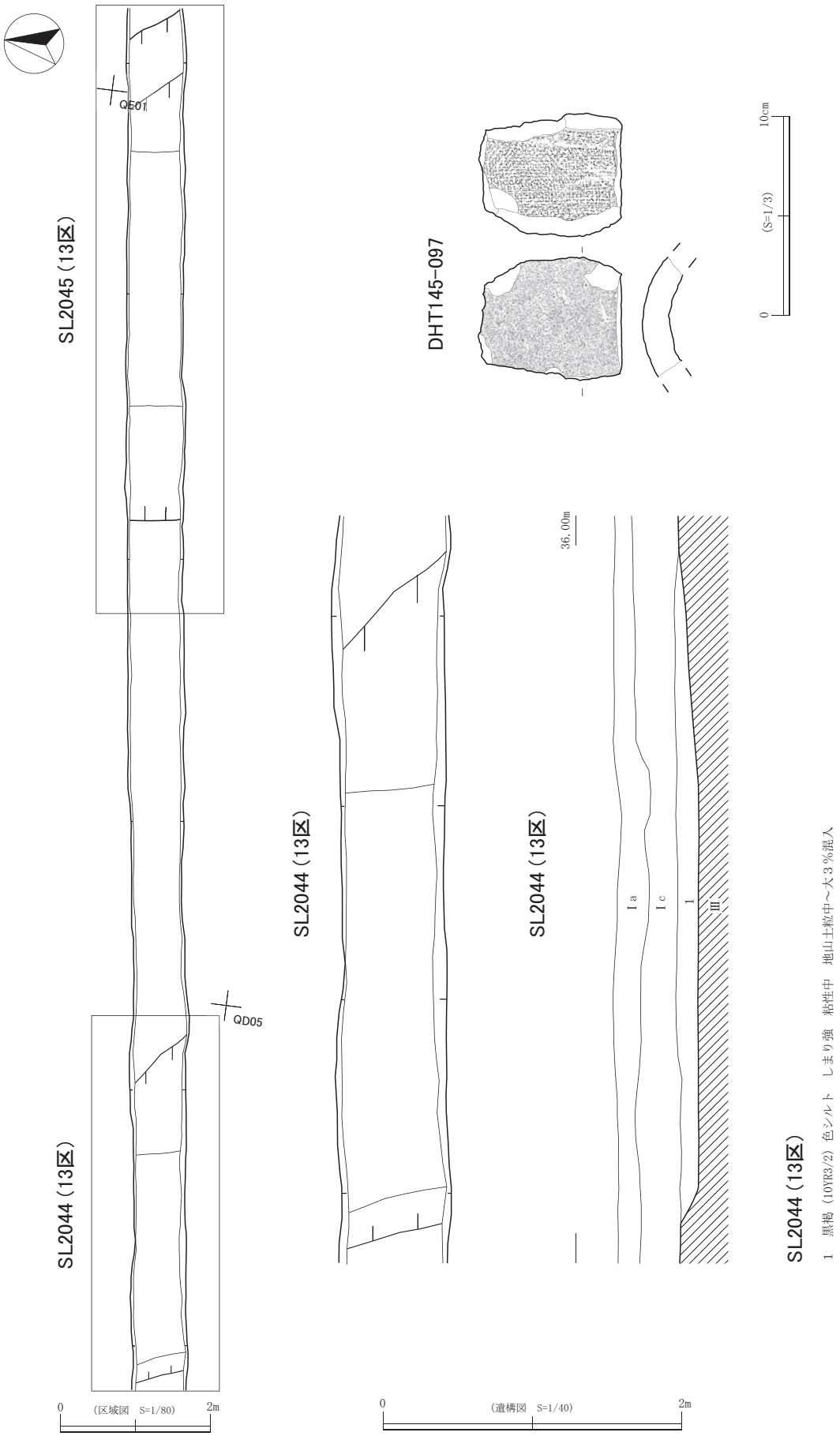
第43図　13区の遺構（１）　SK2051,2052,SKP2050,2053～2059



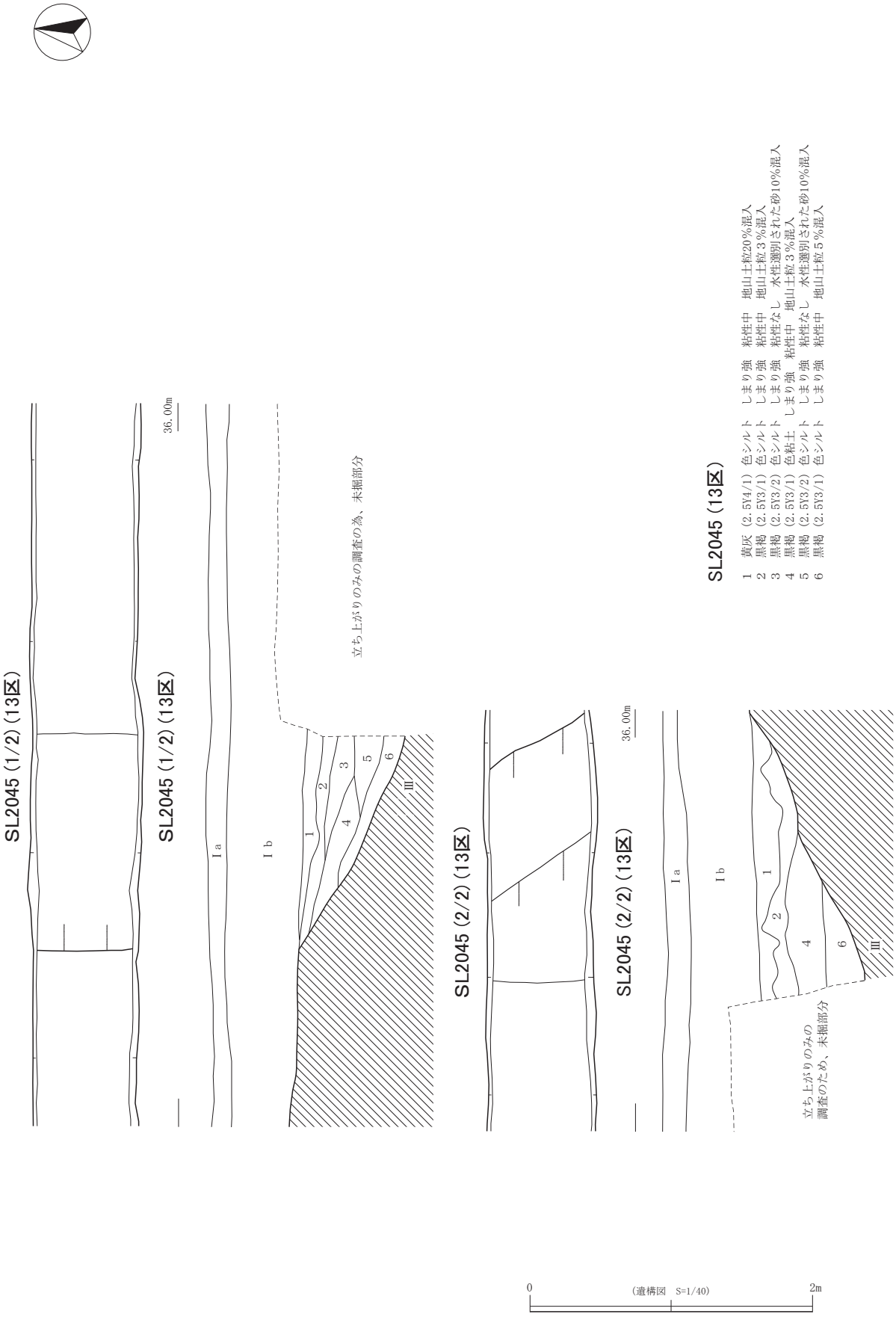
第44図　13区の遺構（２）　SK2051,2052,SKP2053～2059



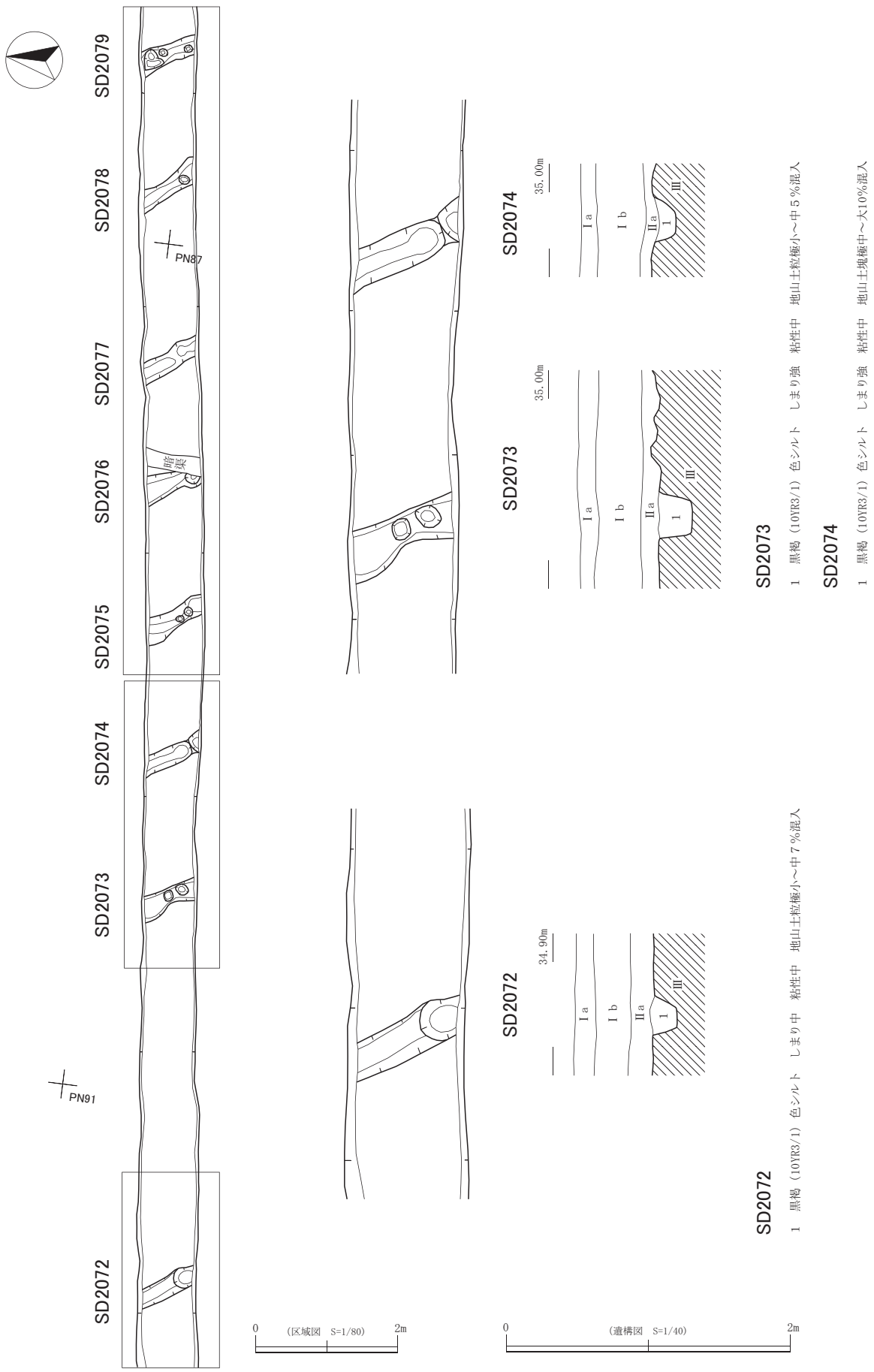
第45図　13区の遺構（３）　SK2060, 2063, 2066, SKP2061, 2062, 2064, 2065, 2067



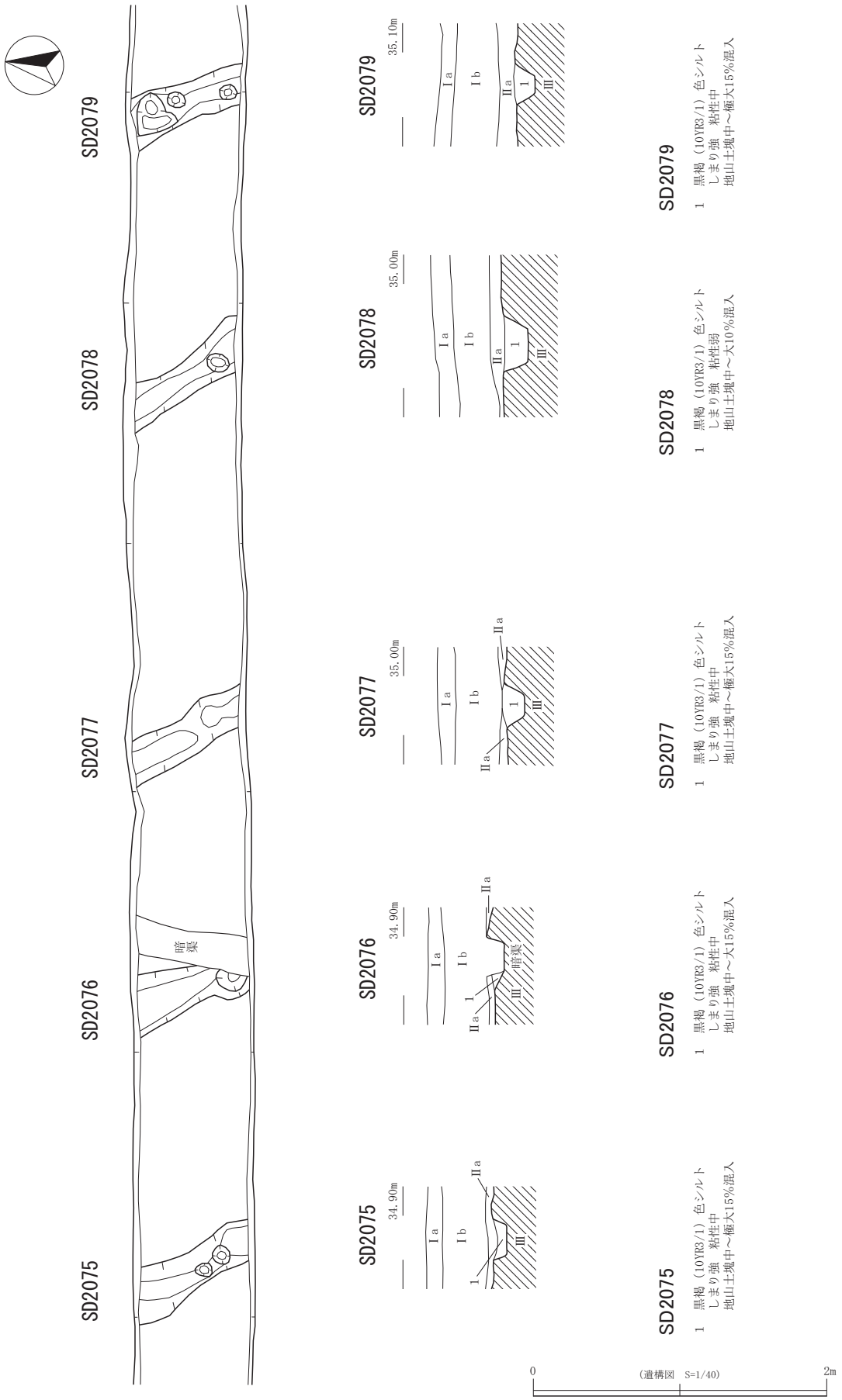
第46図　13区の遺構（４）　SL2044, 2045



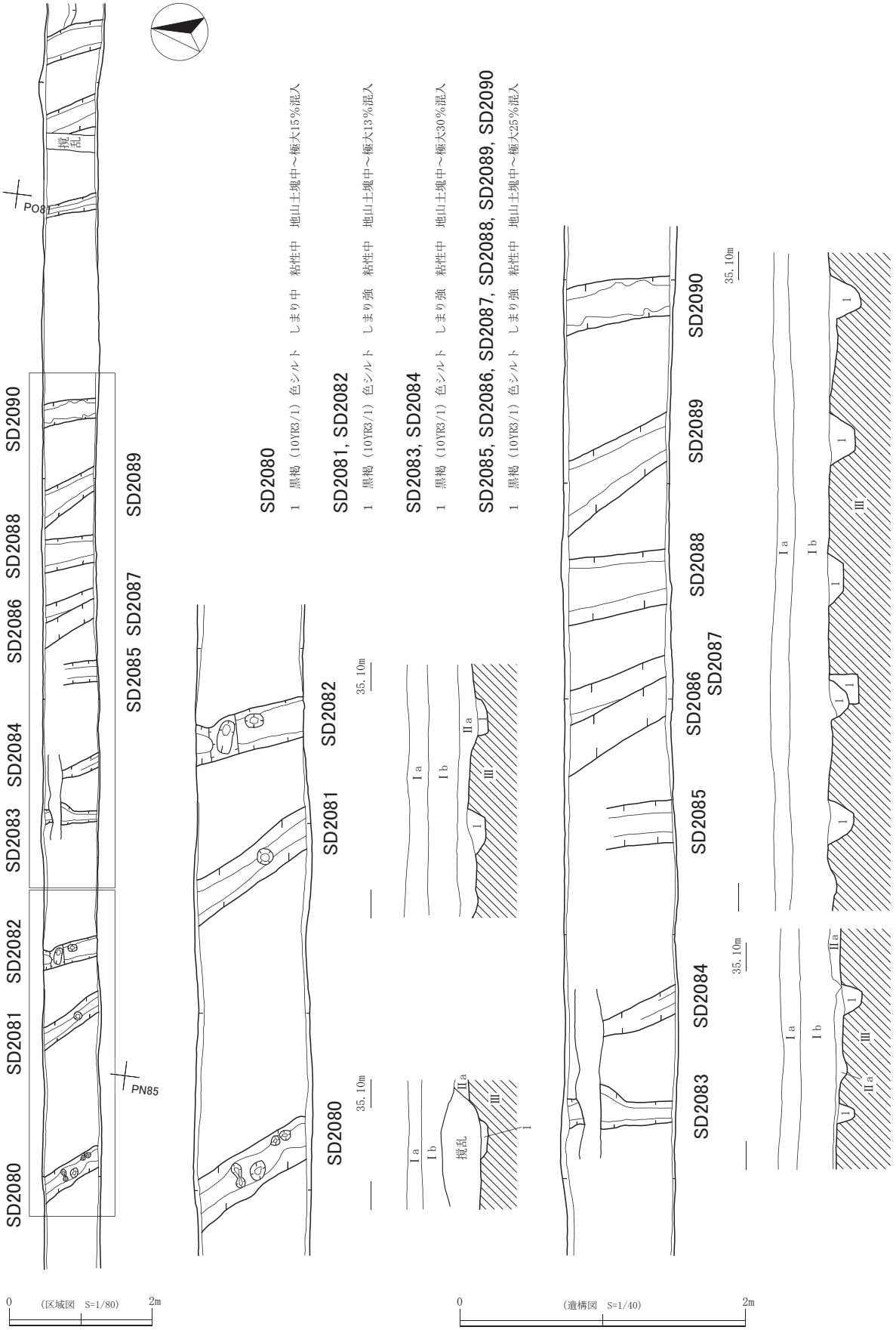
第47図　13区の遺構（５）　SL2045



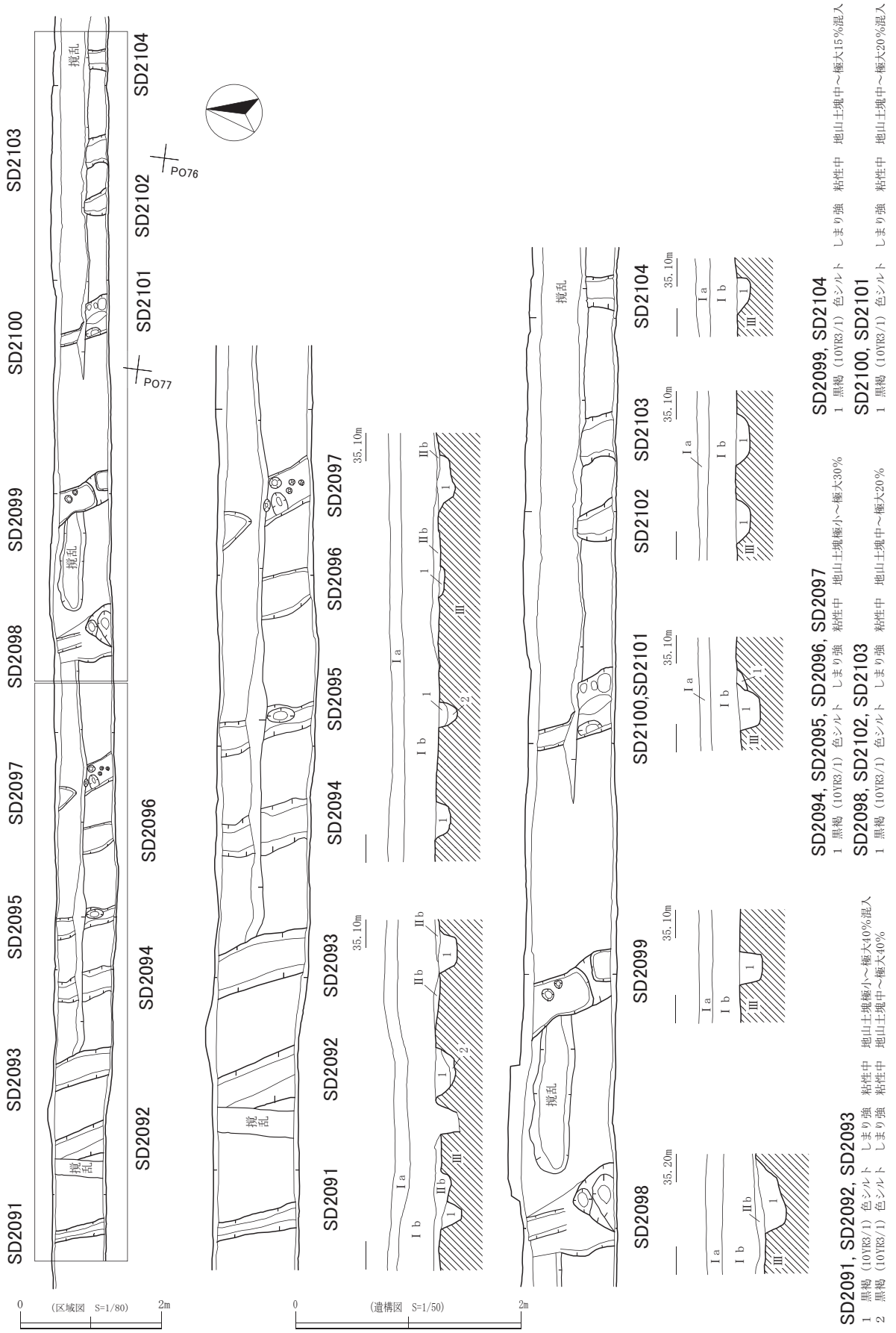
第48図　13区の遺構（６）　SD2072～2079



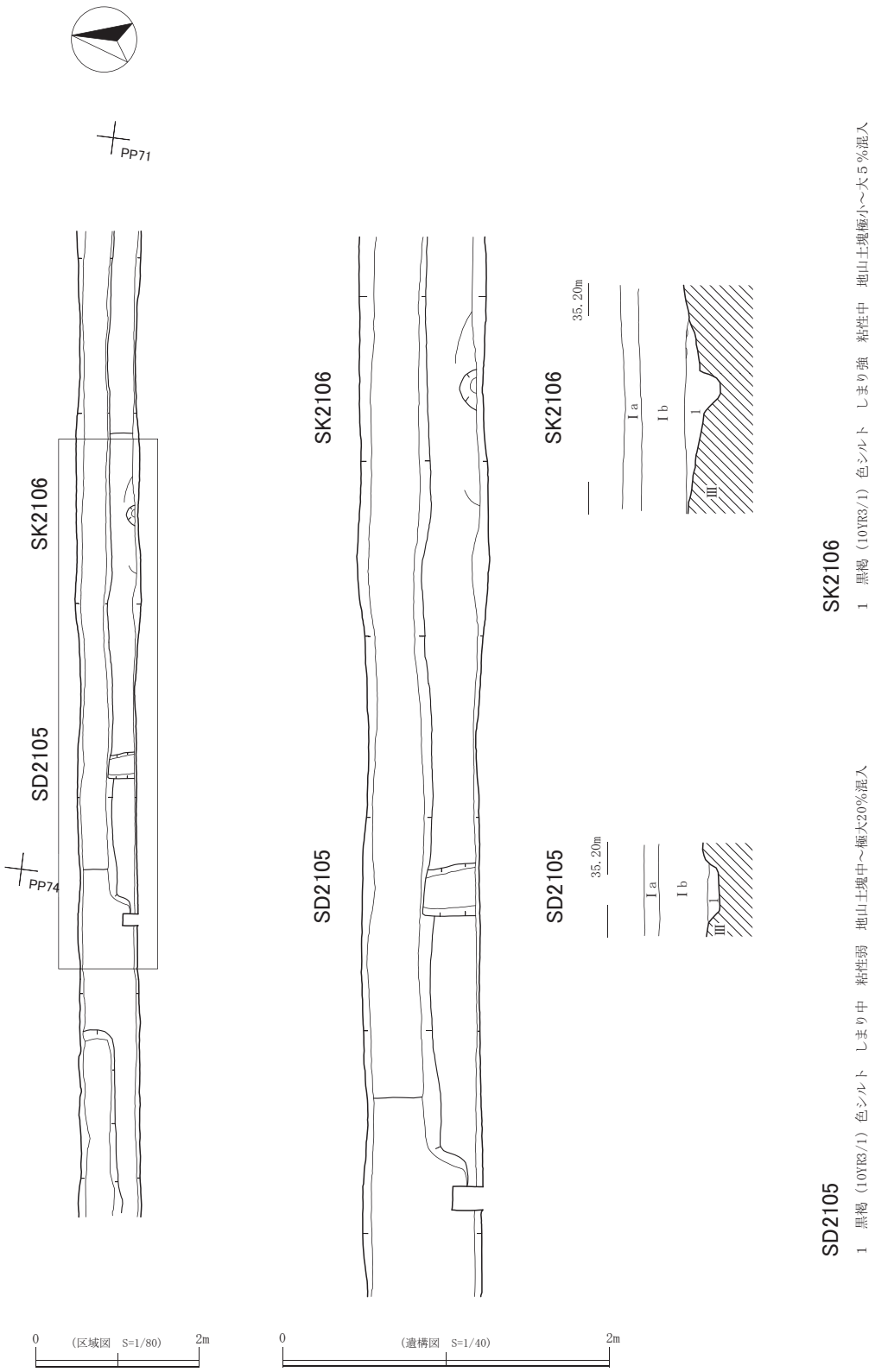
第49図　13区の遺構（７）　SD2075～2079



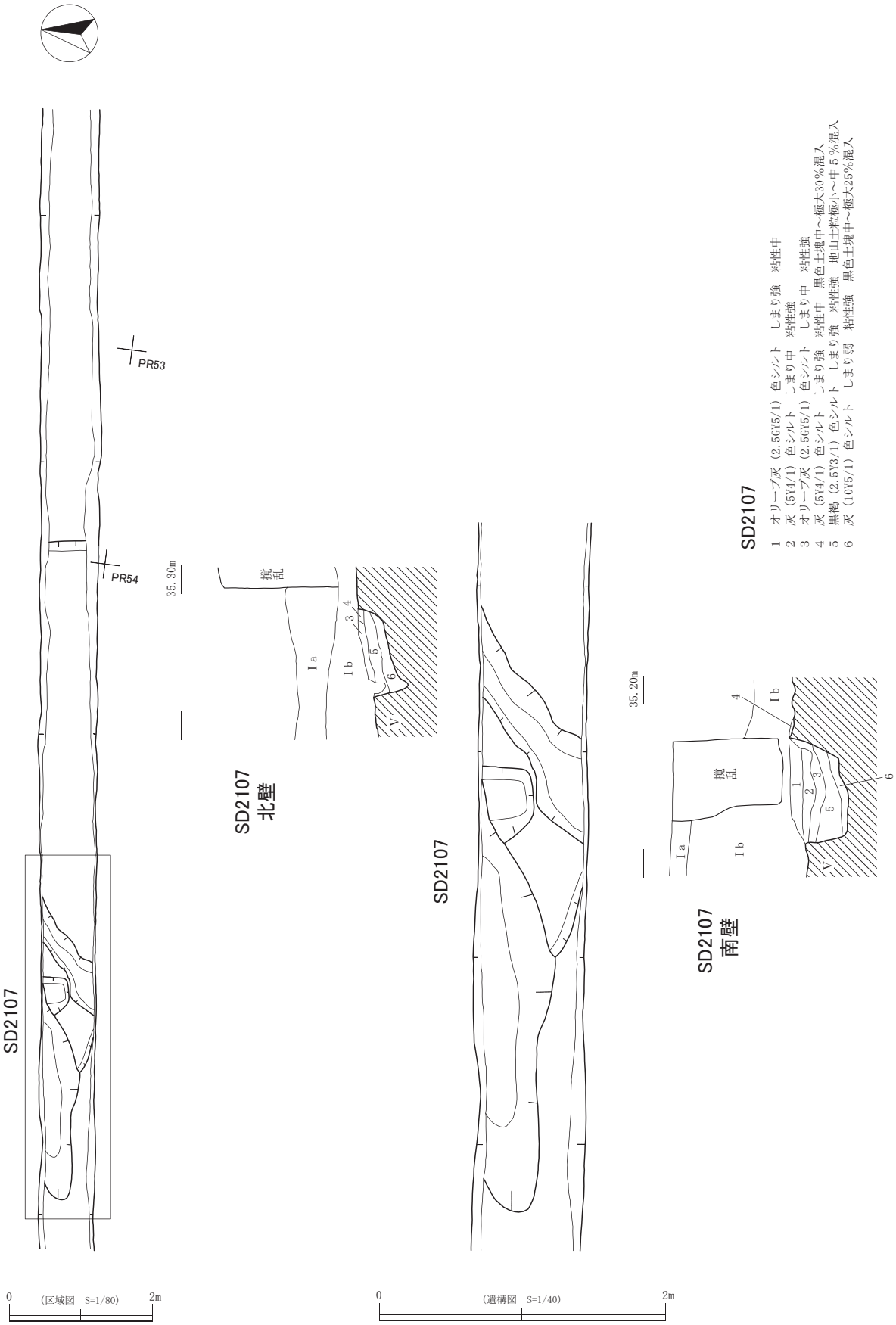
第50図　13区の遺構　（８）　SD2080～2090



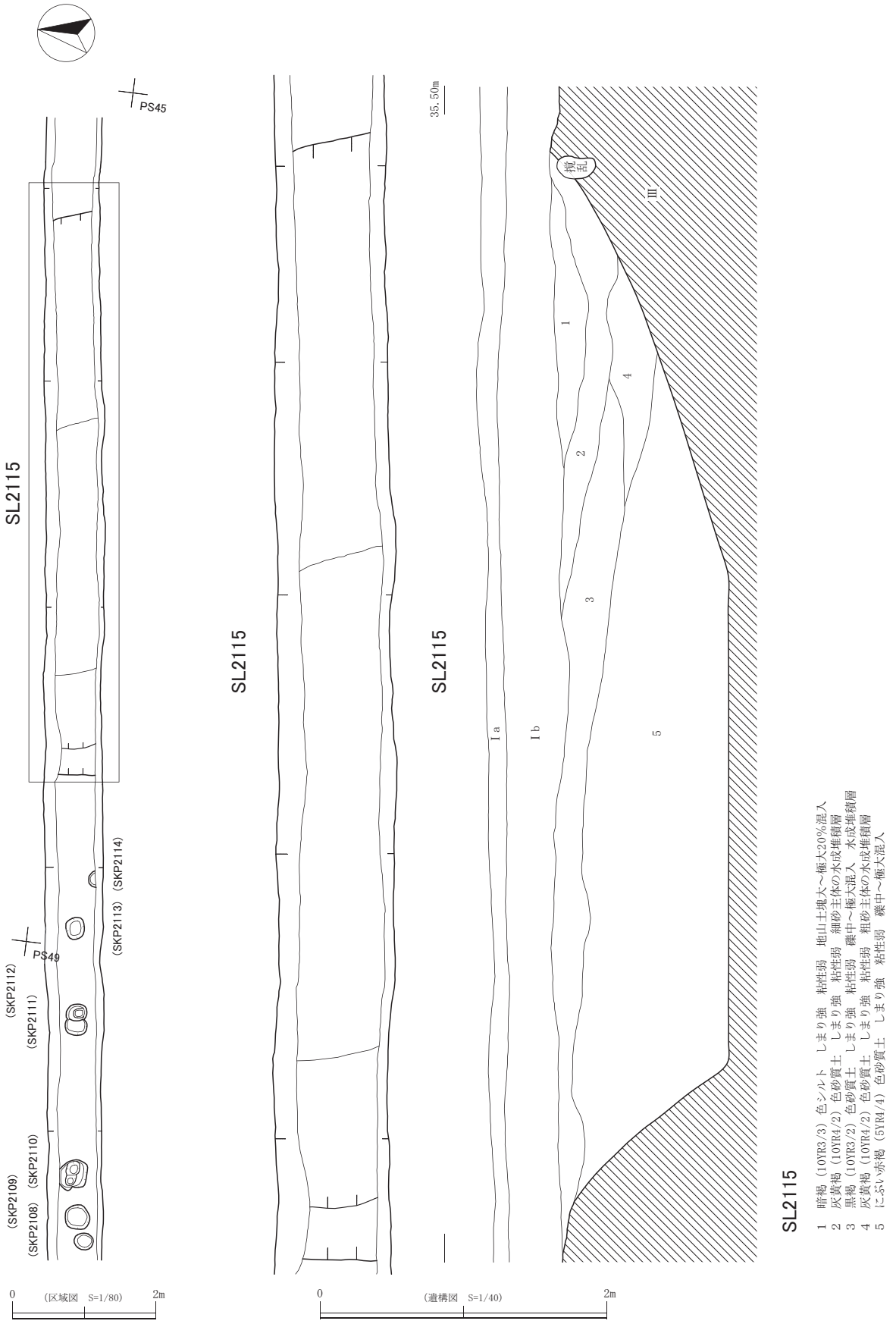
第51図　13区の遺構　（９）　SD2091～2104



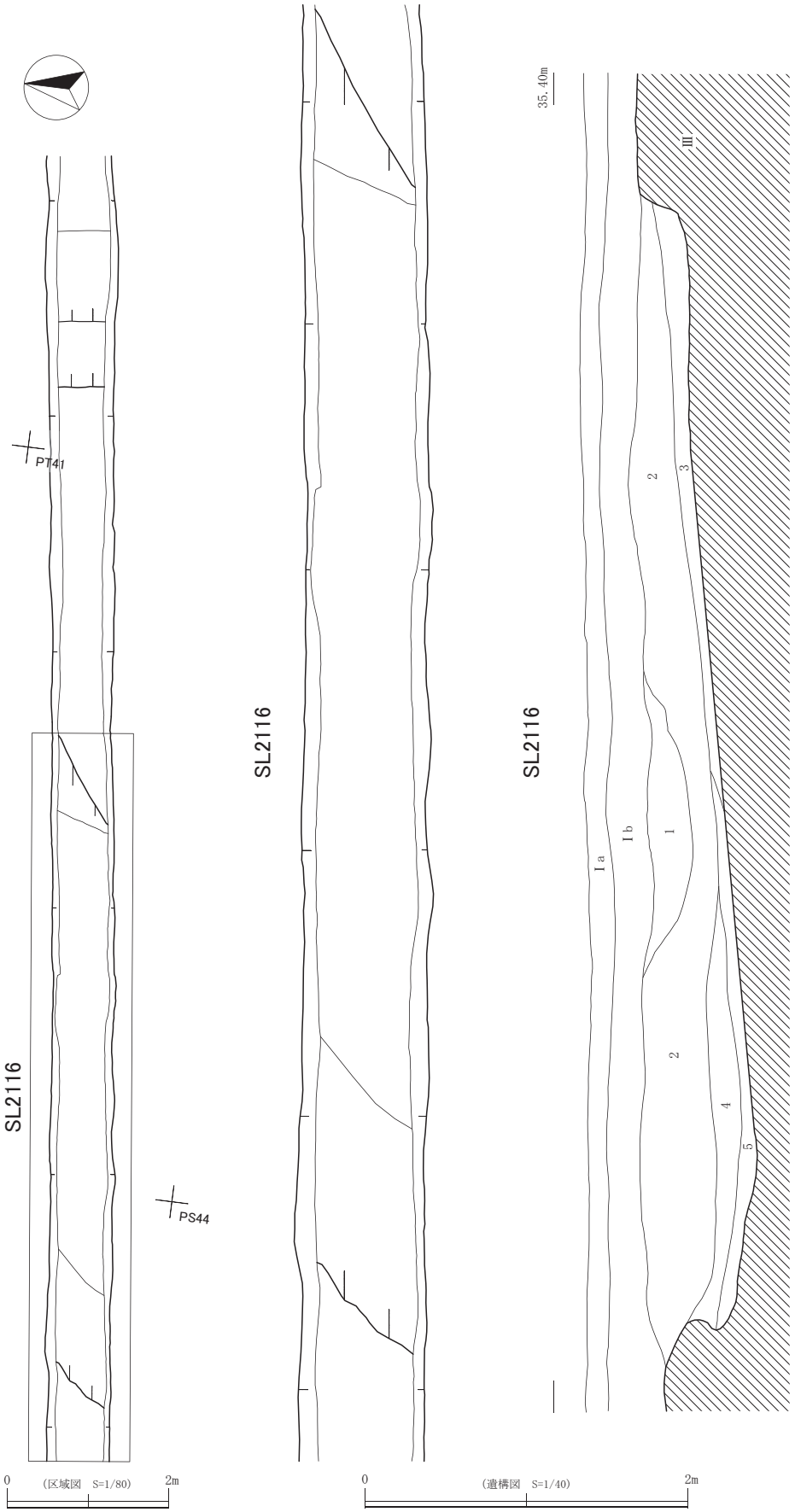
第52図　13区の遺構　（10）　SD2105,SK2106



第53図　13区の遺構　(11)　　SD2107



第54図　13区の遺構　(12)　　SL2115

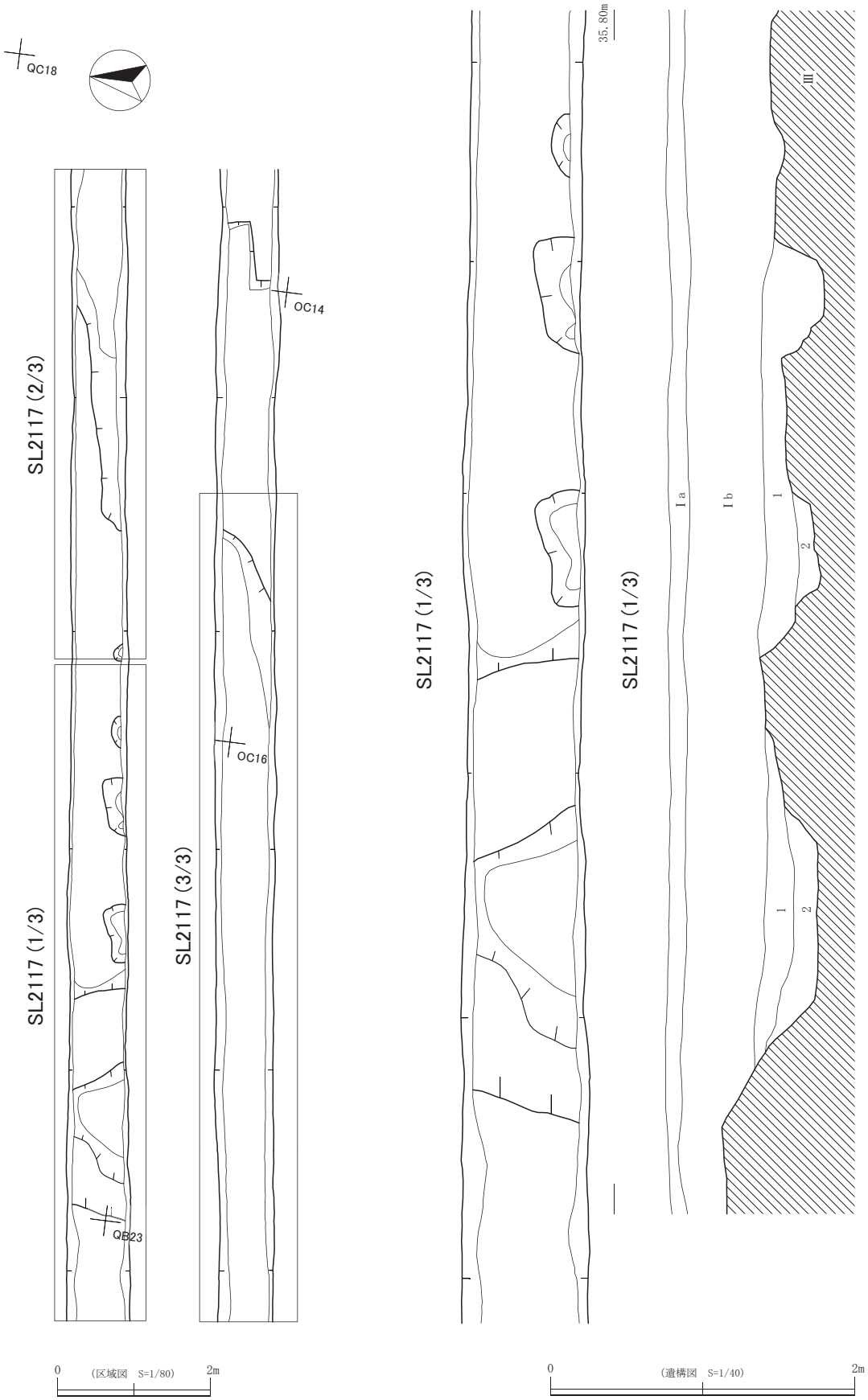


SL2116

1　黒褐（10YR3/2）色シルト　しまり強　粘性弱
2　黒褐（10YR3/2）色シルト　しまり強　粘性弱　礫中～極大50%混入
3　暗褐（10YR3/3）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫中～極大30%混入
4　暗褐（10YR3/3）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫中～極大40%混入
5　にぶい黄褐（10YR4/3）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫中～極大50%混入

第55図　13区の遺構　(13)　　SL2116

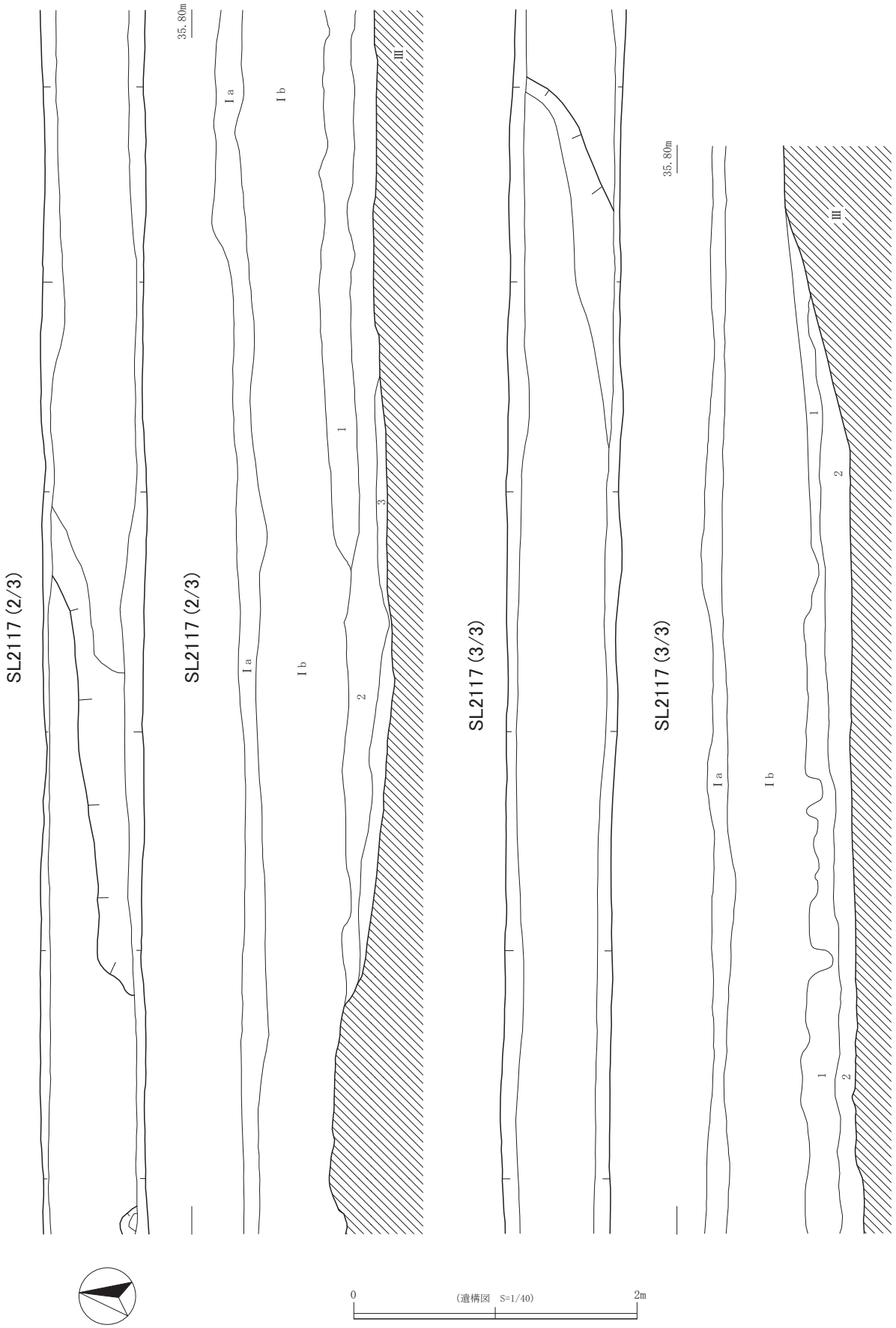
第56図　13区の遺構　(14)　　SL2118



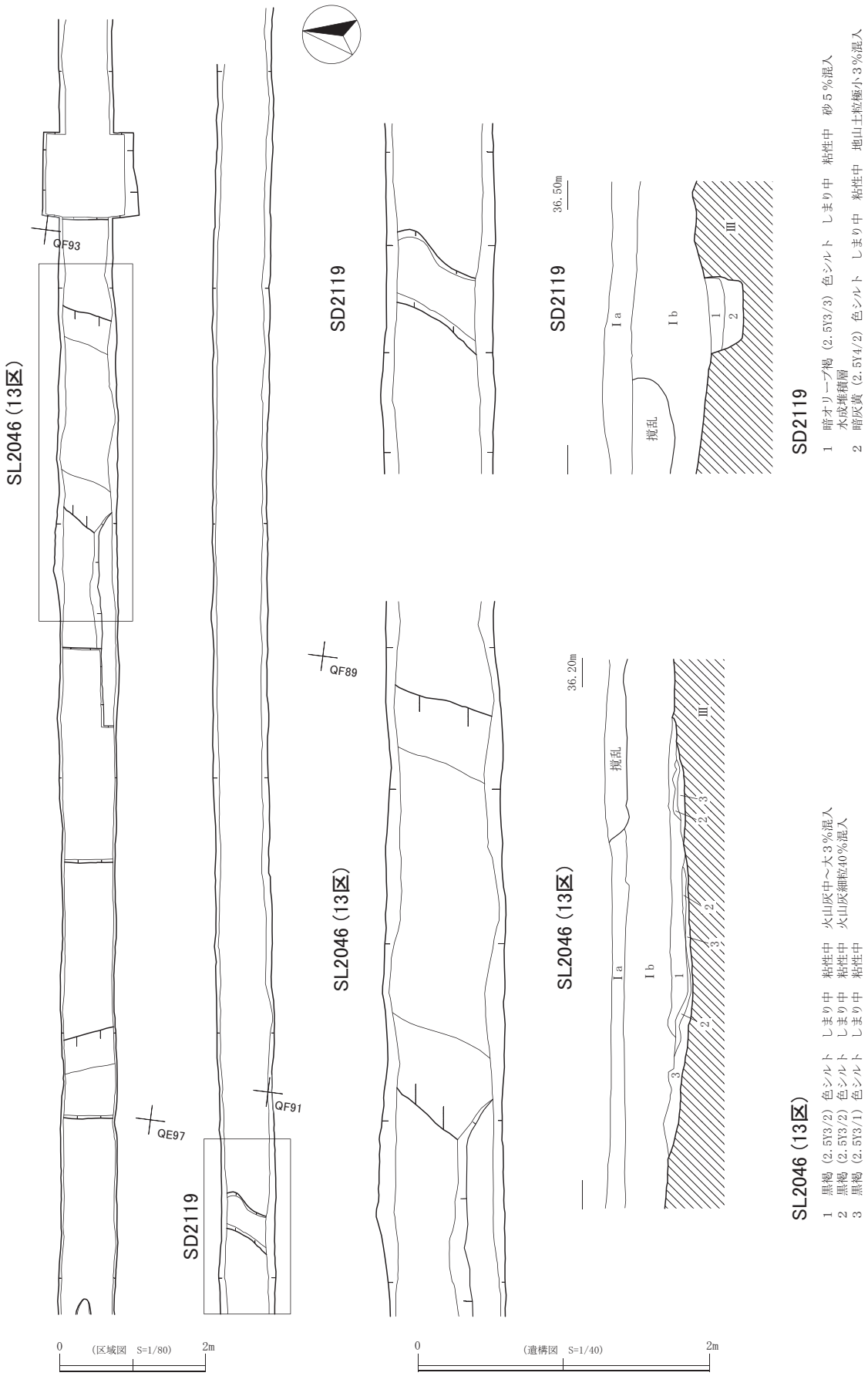
SL2117

1　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり弱　粘性弱
2　黄灰（2.5Y4/1）色シルト　しまり弱　粘性中　粘土少量混入　植物遺体少量混入
3　黄灰（2.5YR4/1）色シルト　しまり中　粘性中　地山土塊中～極大５％　炭化物極小～中１％混入　植物遺体少量混入

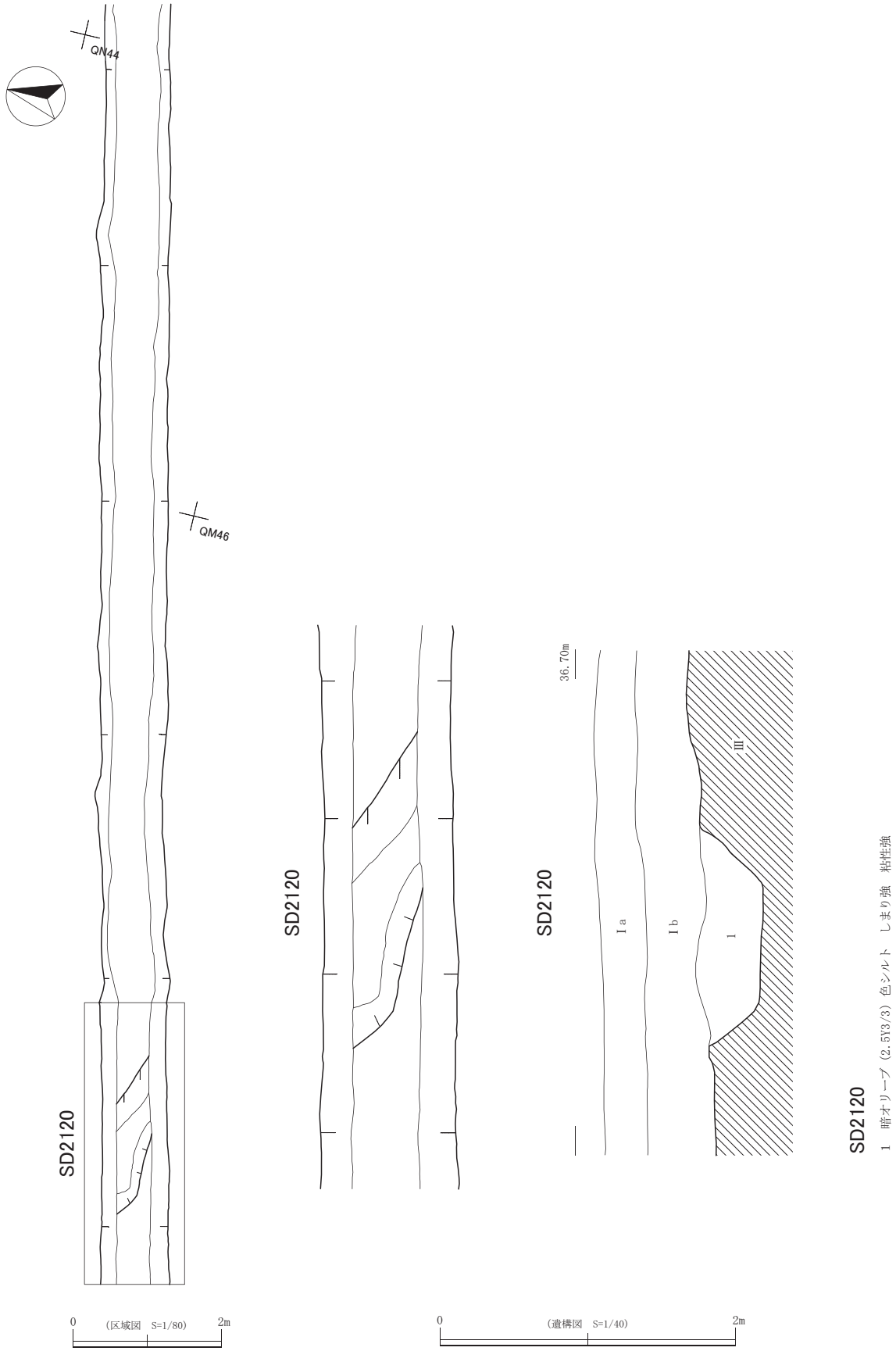
第57図　13区の遺構　(15)　　SL2117



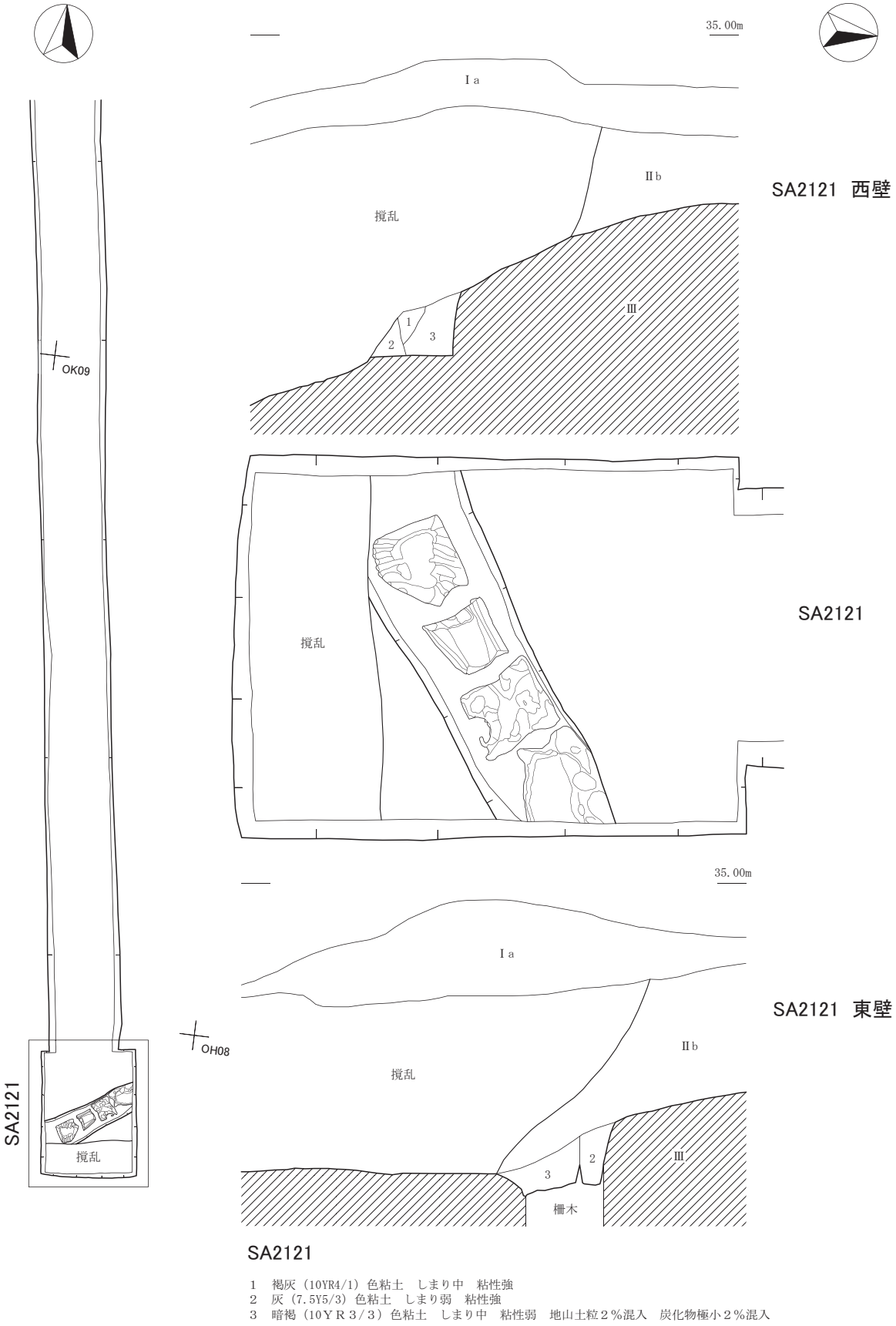
第58図　13区の遺構　(16)　　SL2117



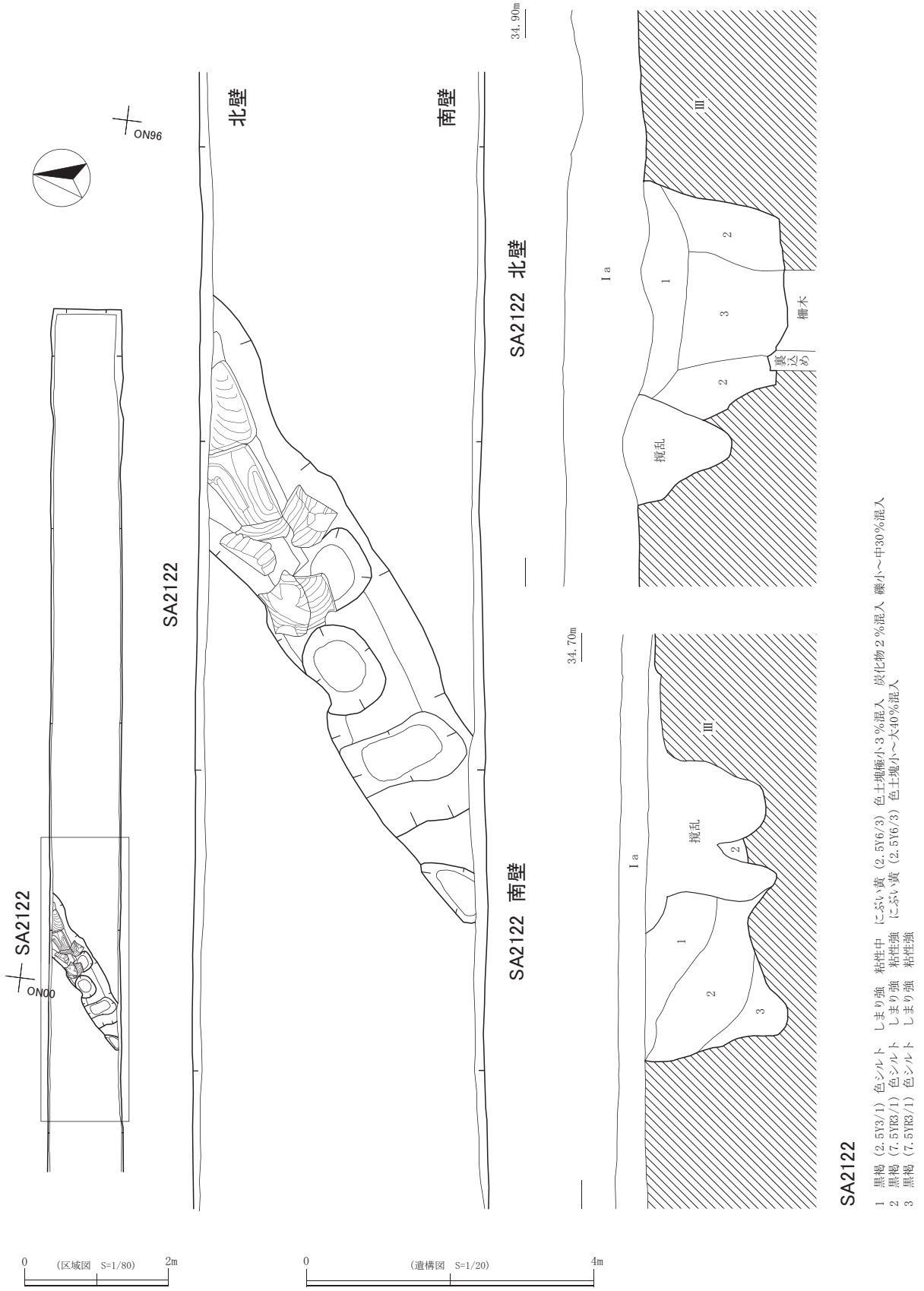
第59図　13区の遺構　（17）　SD2119, SL2046



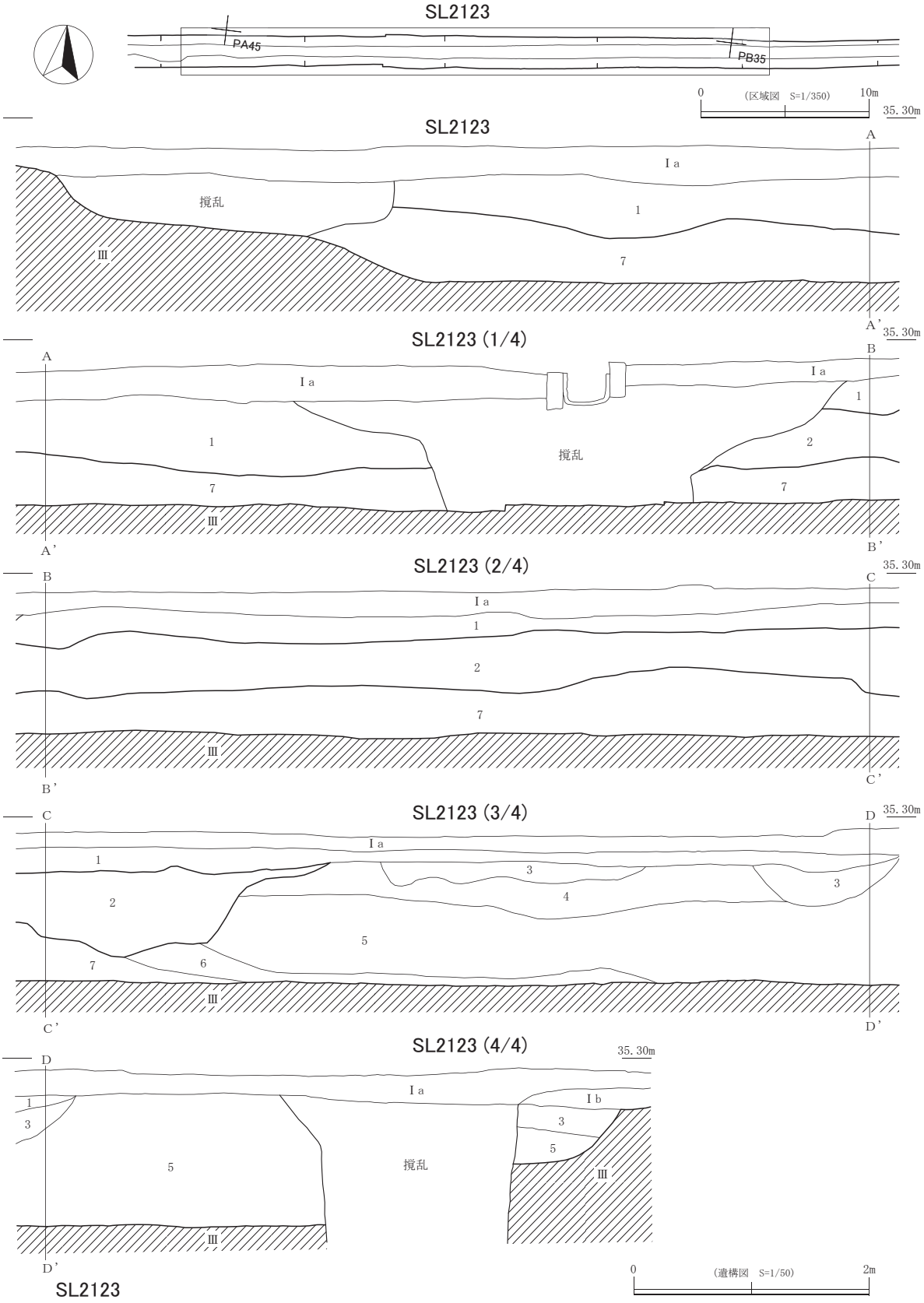
第60図　13区の遺構　(18)　　SD2120



第61図　15区の遺構　（１）　SA2121



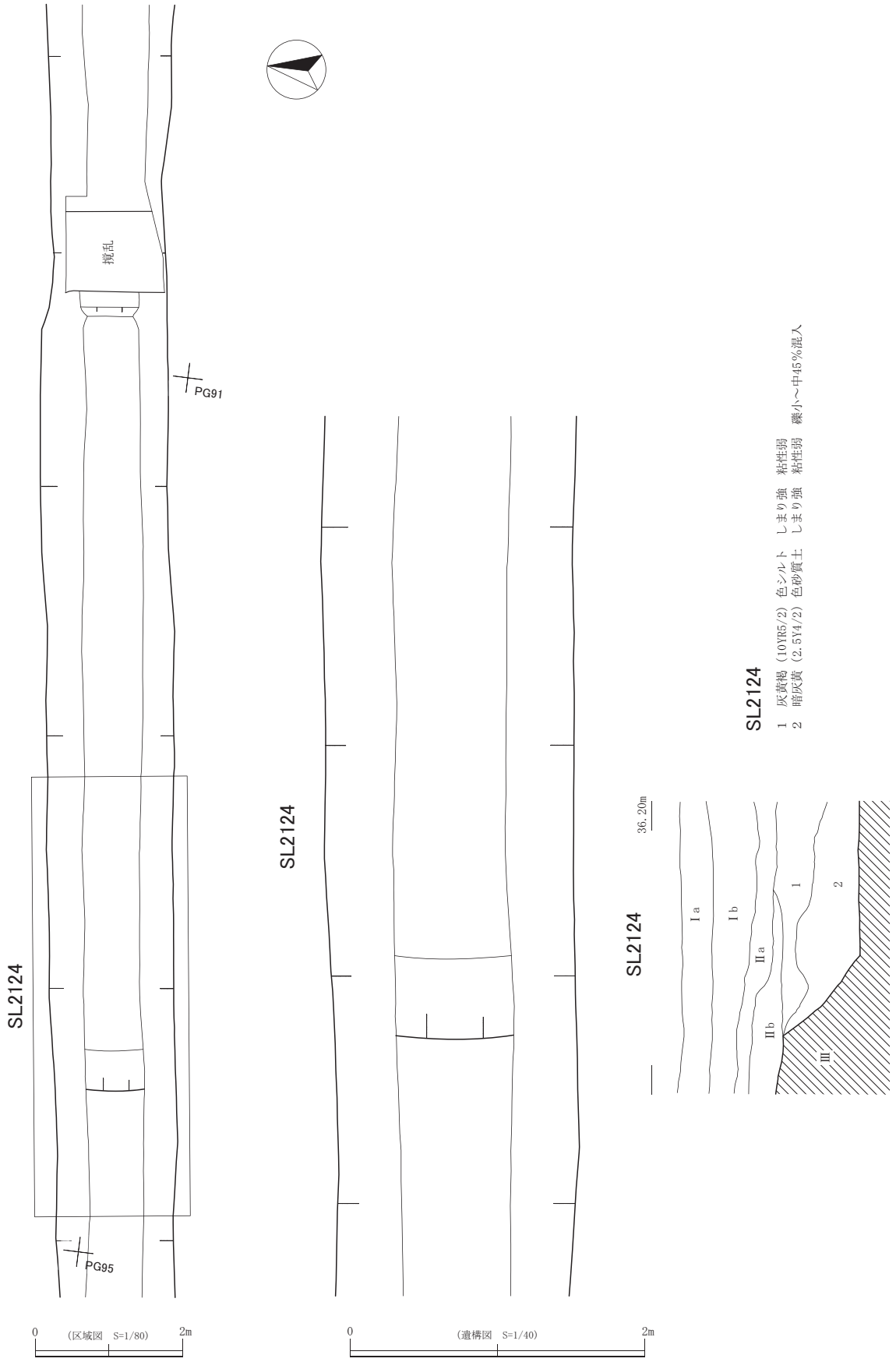
第62図　15区の遺構　（２）　SA2122



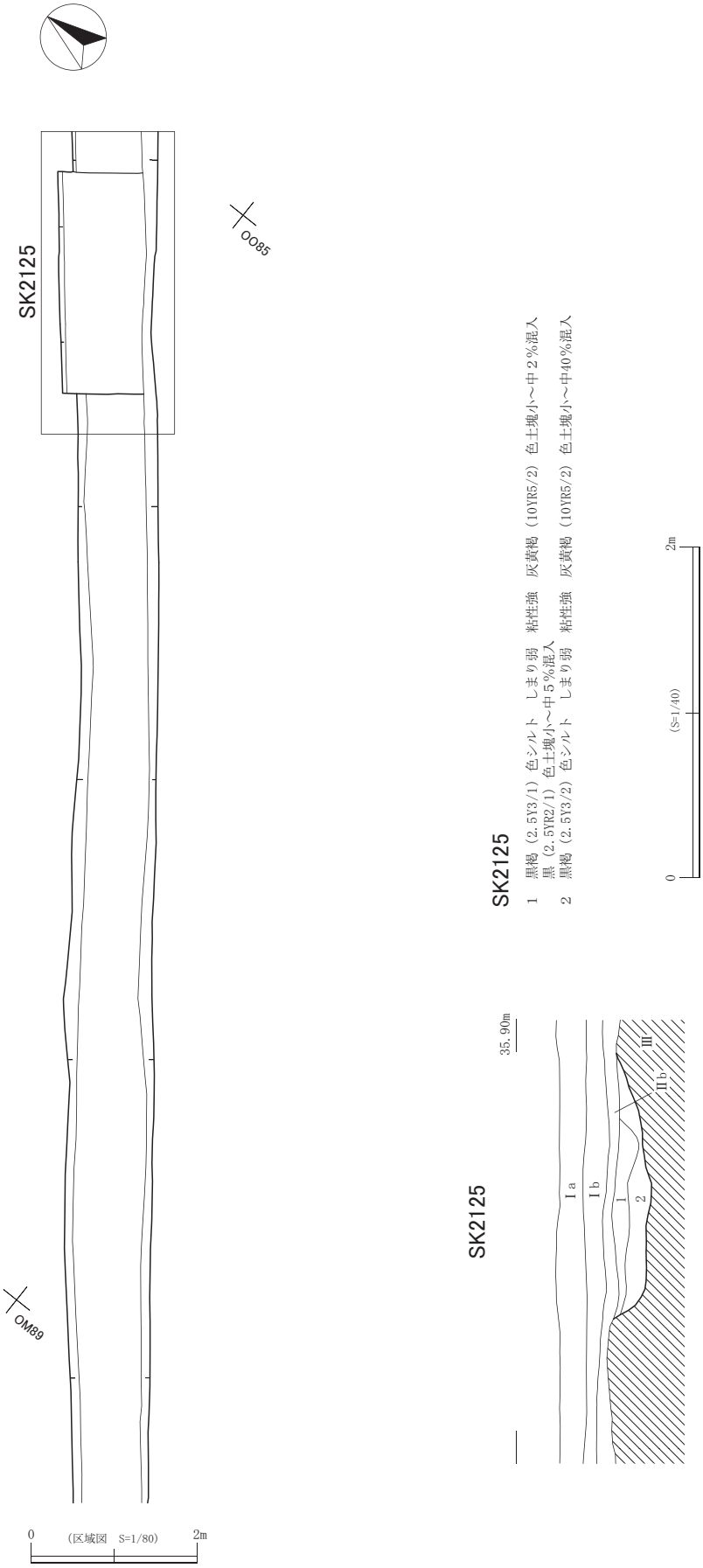
SL2123

1　灰黄褐（10Y4/2）色シルト　しまり強　粘性弱　礫小～中15％混入
2　暗灰黄（2.5Y4/2）色シルト　しまり強　粘性弱　礫小～中15％混入
3　オリーブ褐（2.5Y4/4）色シルト　しまり強　粘性弱
4　灰黄褐（10YR4/2）色シルト　しまり強　粘性中　黒褐（2.5Y3/1）色土塊小～中３％混入　礫小～中５％混入　炭化物３％混入
5　にぶい黄褐（10YR4/3）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫小～中45％
6　黒褐（7.5Y3/2）色砂質土　しまり強　粘性弱　礫極小～小45％
7　灰黄褐（10YR4/2）色シルト　しまり強　粘性中

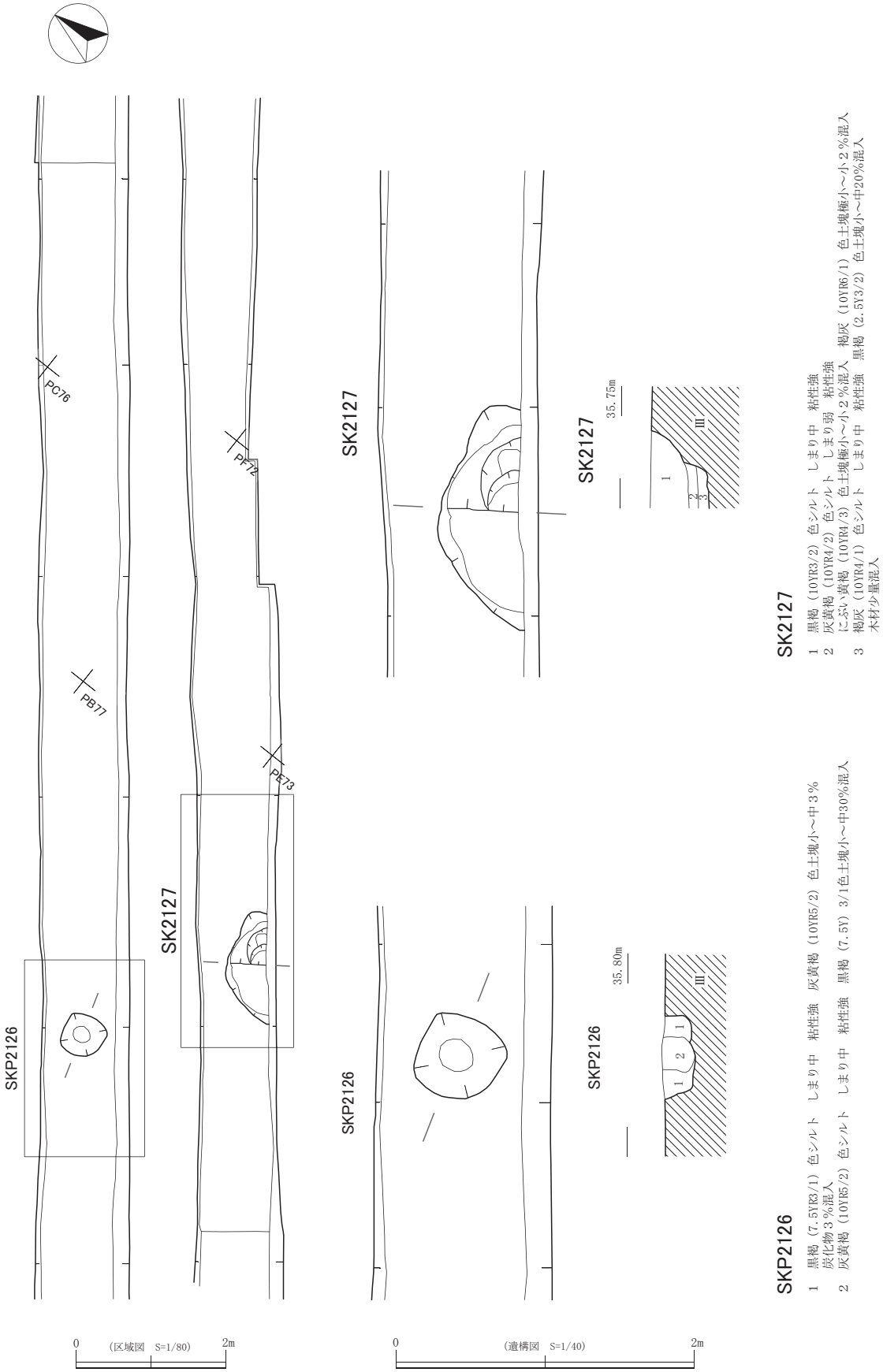
第63図　15区の遺構　（３）　SL2123



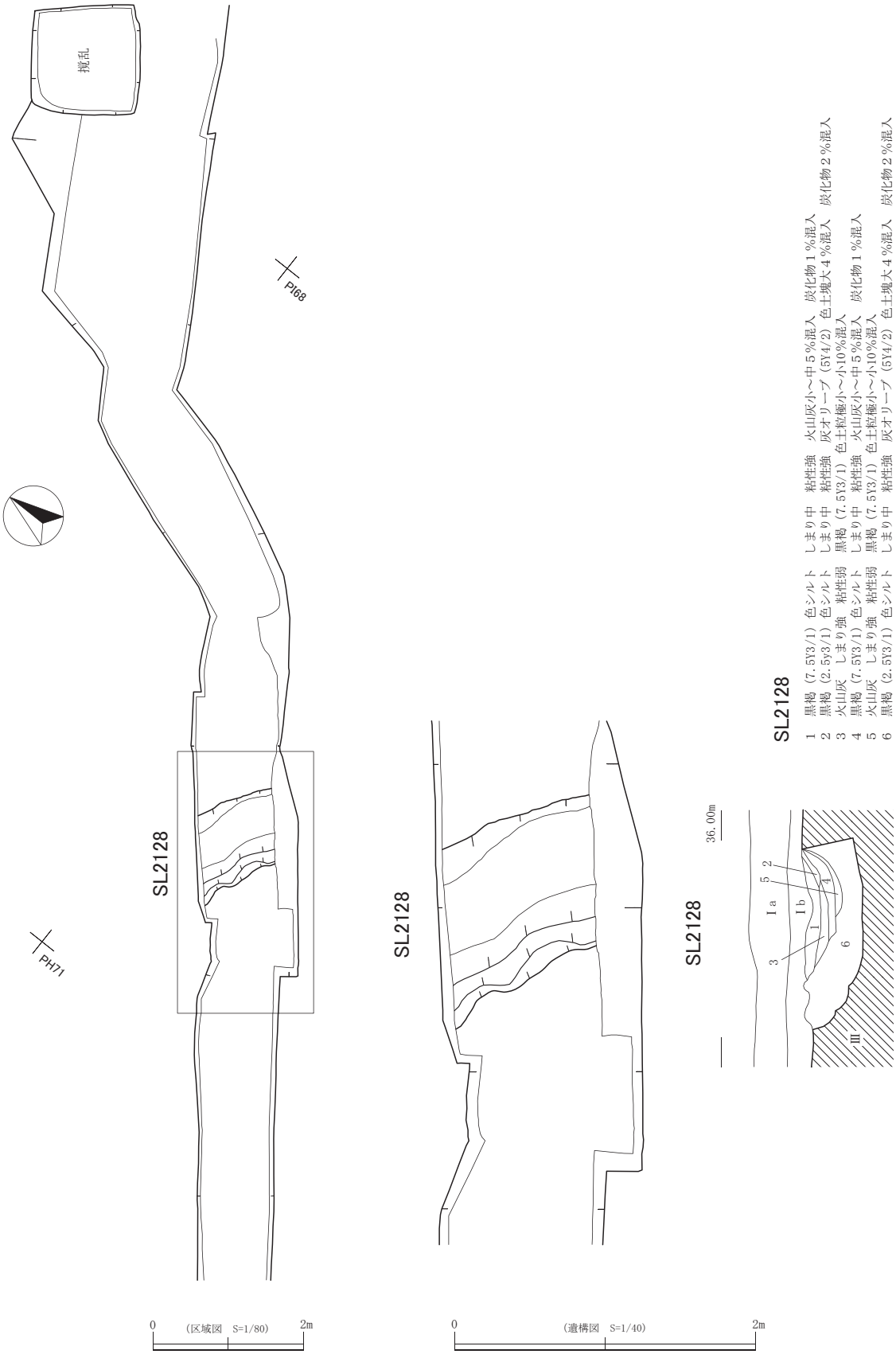
第64図　15区の遺構　（４）　SL2124



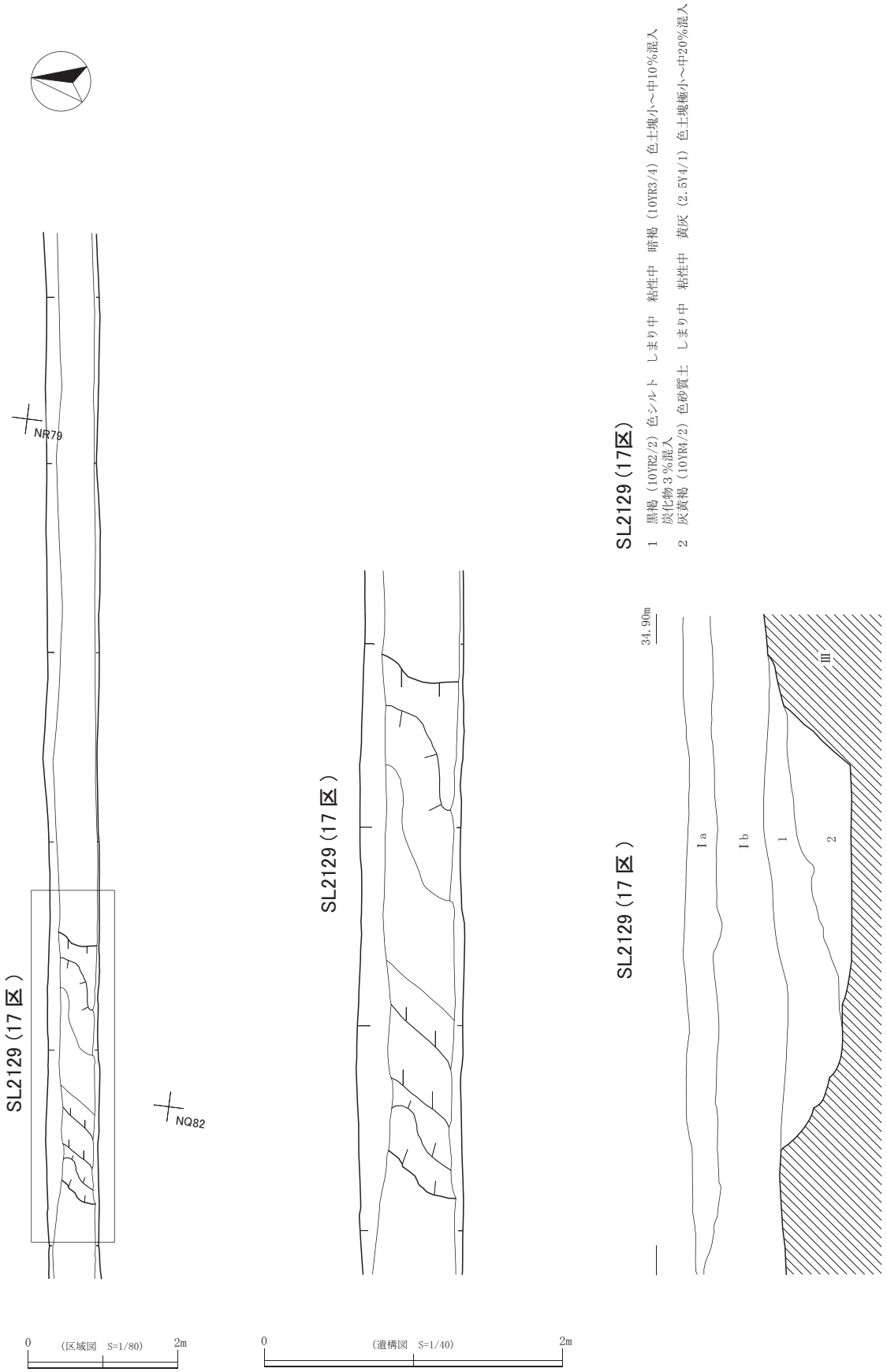
第65図 16区の遺構 （１）　SK2125



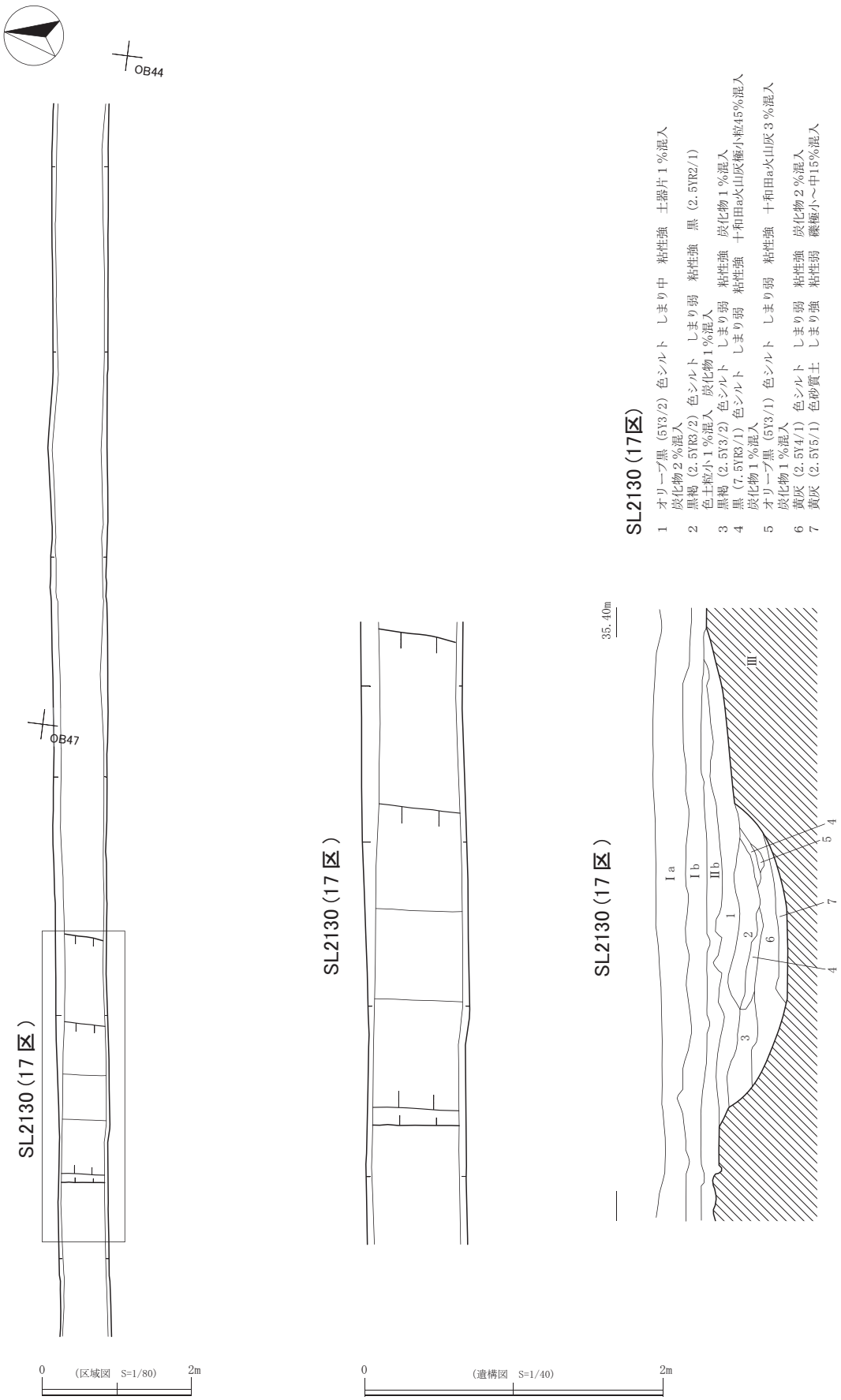
第66図　16区の遺構　（２）　SK2127,SKP2126



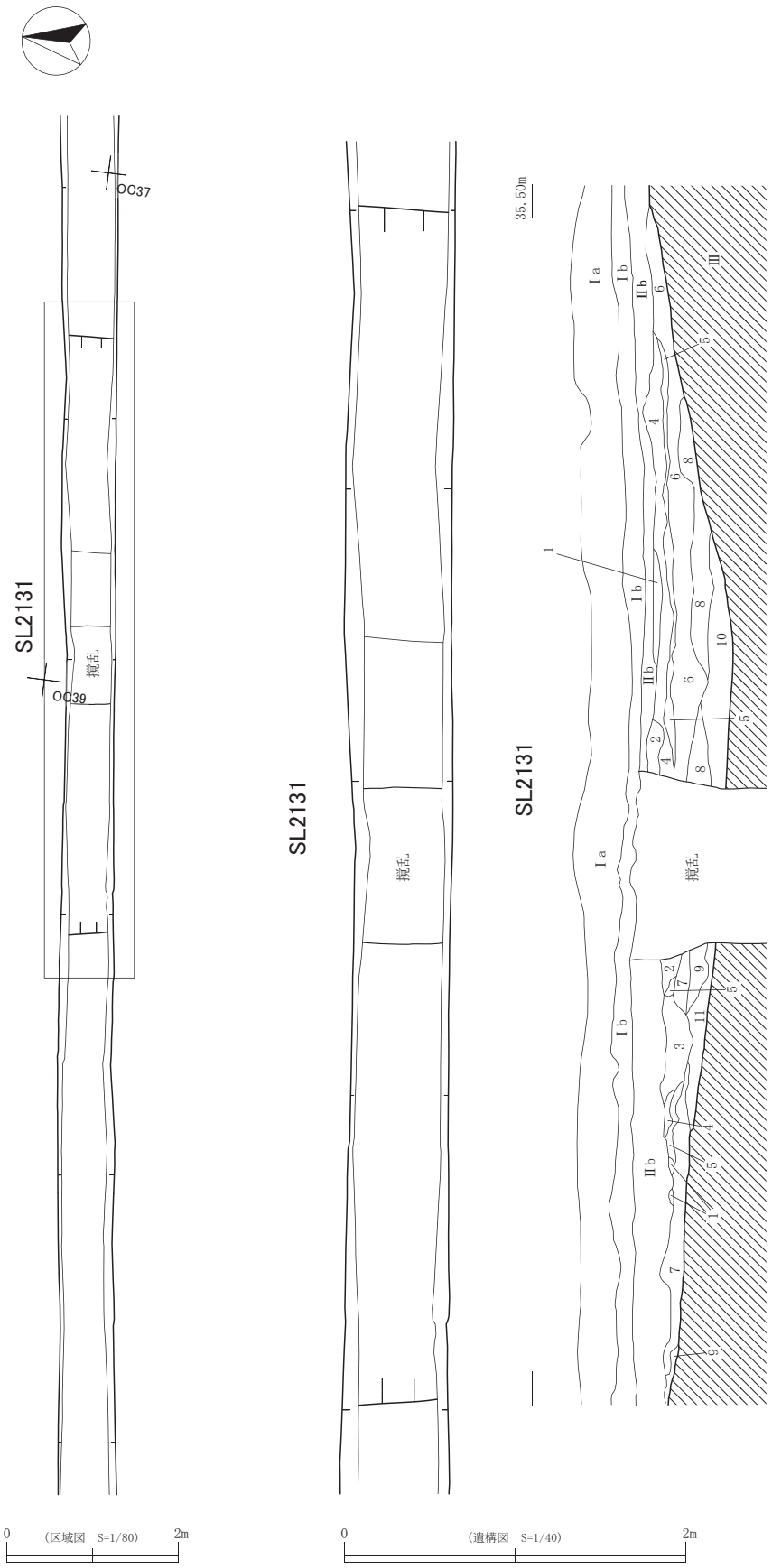
第67図　16区の遺構　（３）　SL2128



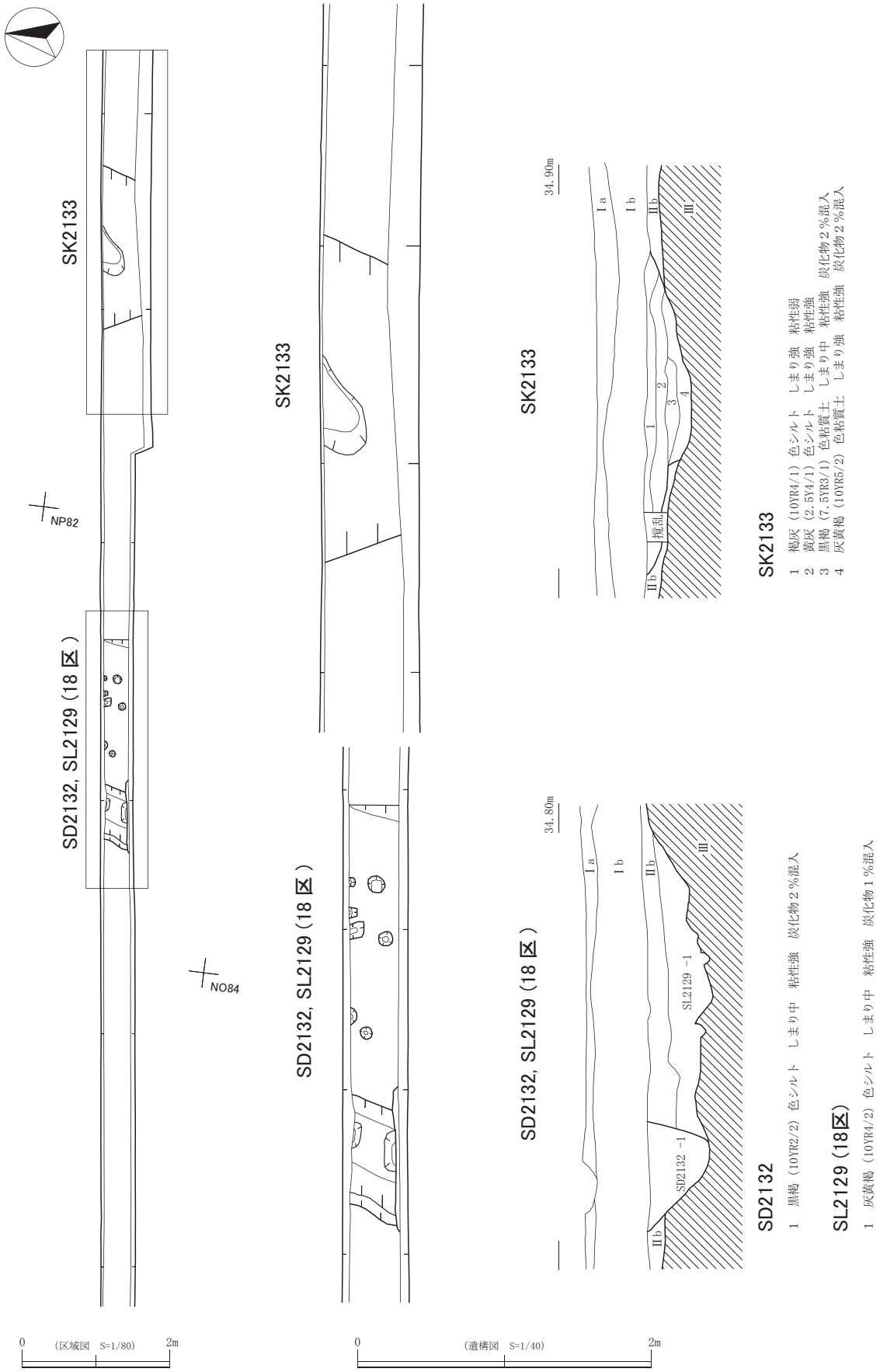
第68図　17区の遺構　（１）　SL2129



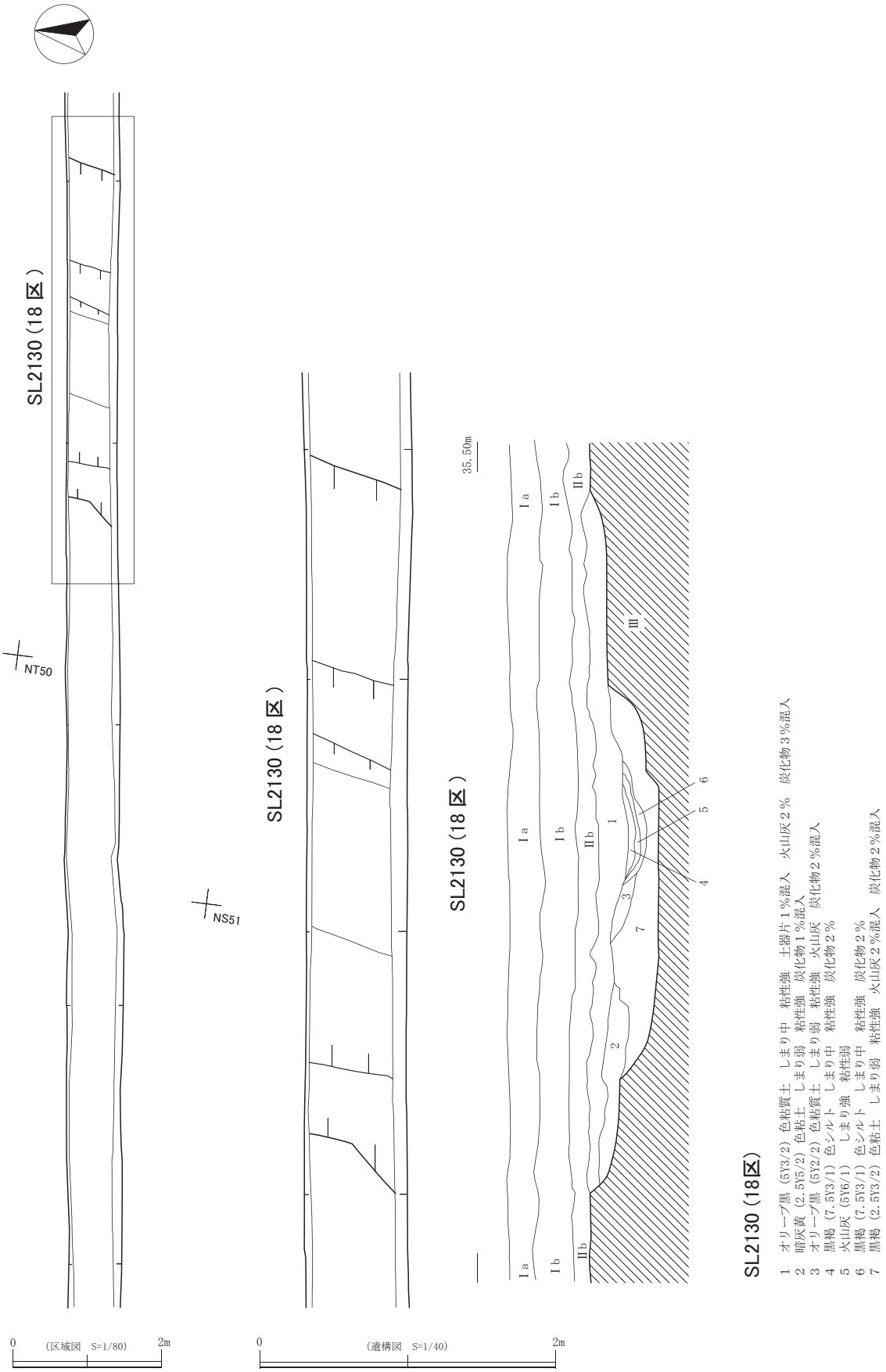
第69図　17区の遺構　（２）　SL2130



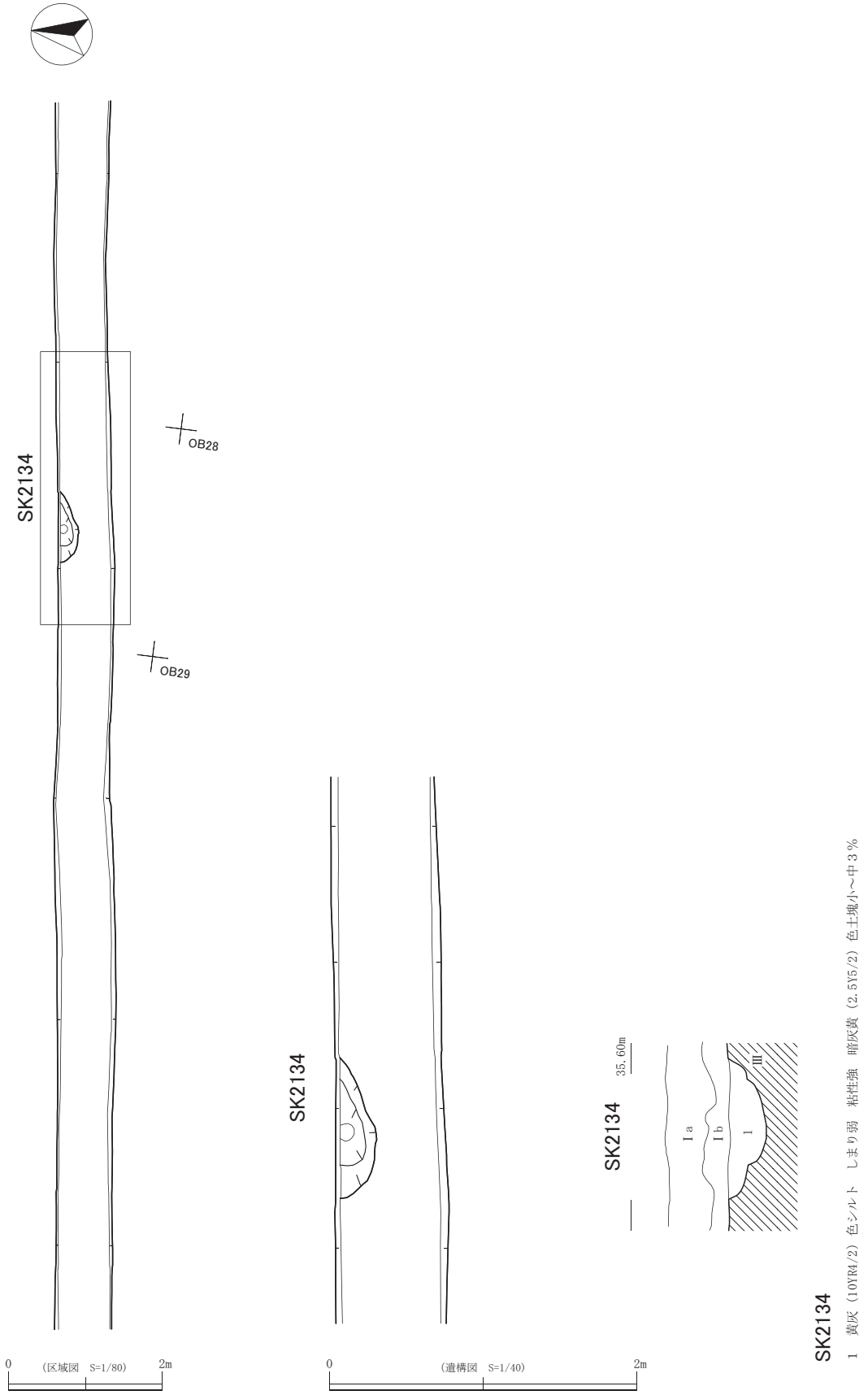
第70図　17区の遺構（３）　SL2131



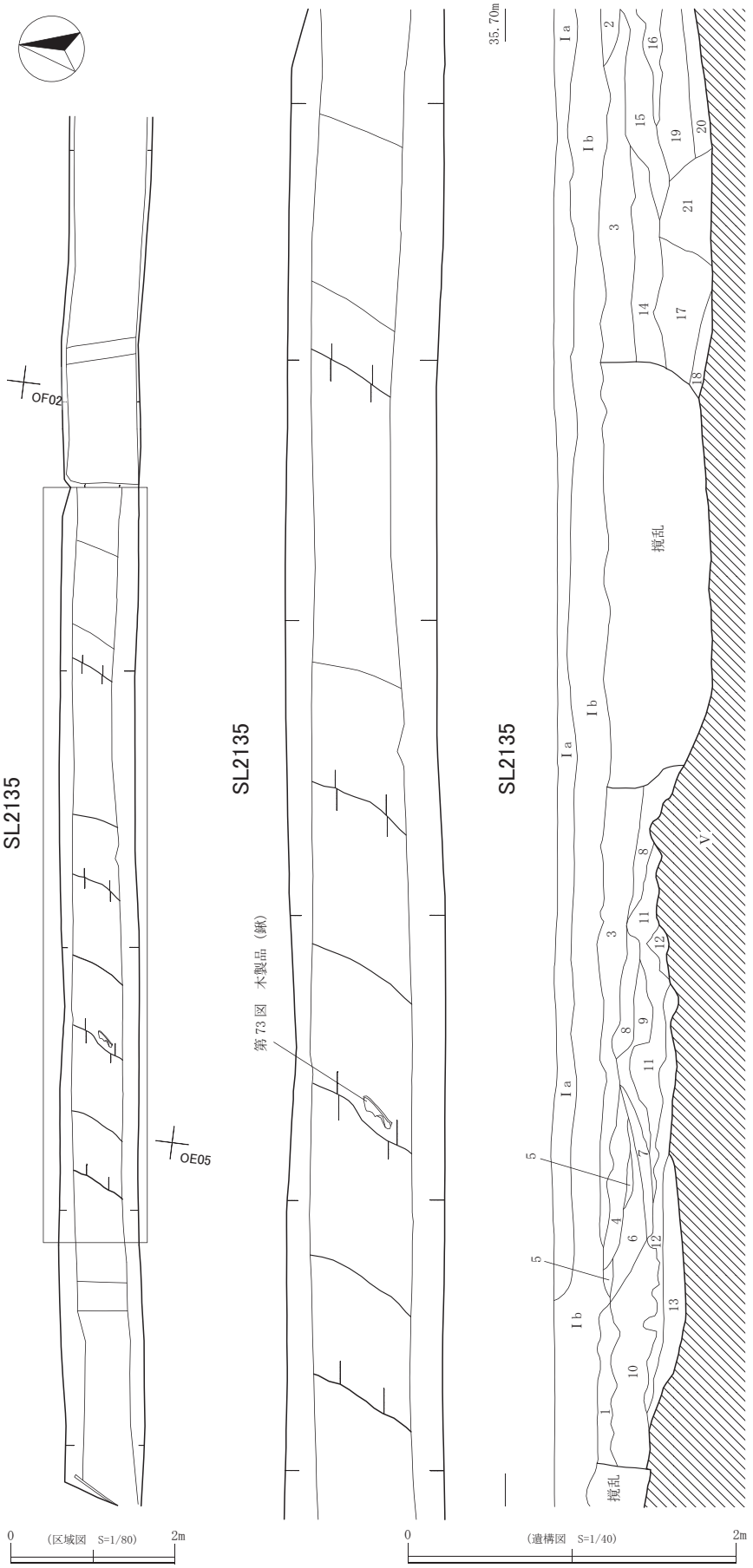
第71図　18区の遺構（１）　SD2132,SK2133,SL2129



第72図　18区の遺構（２）　SL2130



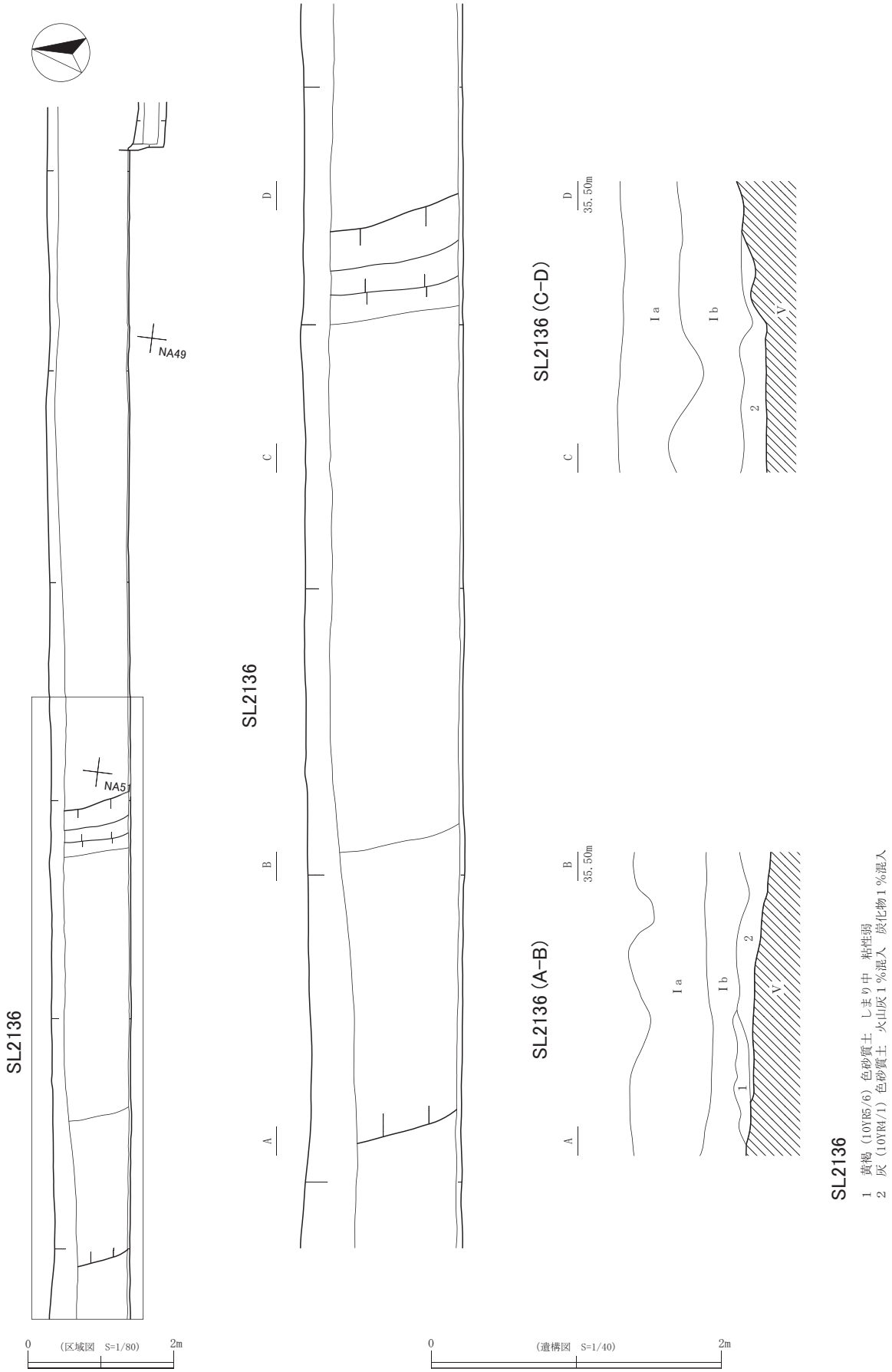
第73図　18区の遺構（３）　SK2134



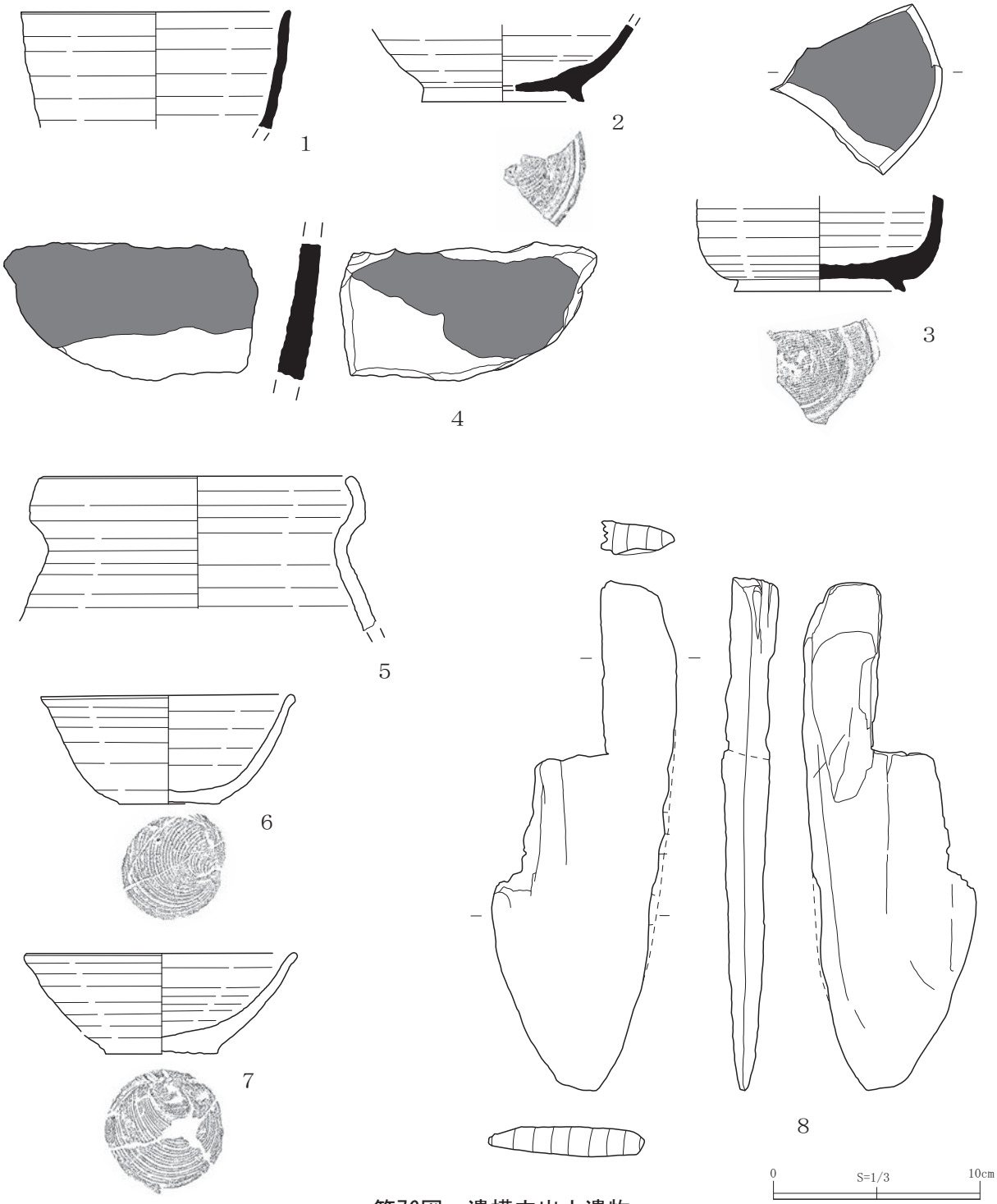
SL2135

1　黒褐（2.5Y3/1）色シルト　しまり強　粘性強　褐（10YR4/4）色シルト小粒１％混入
　黒褐（2.5Y3/2）色土塊小～中５％混入
2　褐灰（10YR4/1）色シルト　しまり弱　粘性強　炭化物２％混入
3　暗赤褐（5YR3/2）色シルト　しまり中　粘性強
4　黒褐（2.5Y3/2）色シルト　しまり強　粘性強
5　暗褐（10YR3/3）色砂質土　しまり強　粘性弱　火山灰２％混入
6　黒褐（7.5YR3/2）色シルト　しまり中　粘性強
7　暗褐（7.5Y3/3）色砂質土　しまり中　粘性弱　礫小～中10％混入
8　黒褐（5Y3/1）色シルト　しまり弱　粘性強　炭化物１％混入
9　黒褐（10YR2/2）色シルト　しまり弱　粘性強　黄灰（2.5Y4/1）色土粒小１％混入
10　黒褐（2.5Y3/2）色シルト　しまり中　粘性強　炭化物１％混入
11　灰黄褐（10YR4/2）色シルト　しまり弱　粘性強
12　火山灰（5Y6/1）　しまり強　粘性弱
13　暗灰黄（2.5Y4/2）色シルト　しまり弱　粘性強
14　暗赤褐（5YR3/2）色シルト　しまり中　粘性強　明褐（7.5Y5/8）色土塊小～中５％混入
15　黒褐（10YR3/1）色シルト　しまり弱　粘性強　明褐（7.5Y5/8）色土塊小～中５％混入
16　褐灰（10YR4/1）色砂質土　しまり強　粘性弱　褐（10YR4/4）色土塊小～中５％混入
17　オリーブ黒（7.5Y3/1）色シルト　しまり弱　粘性強　木材少量混入
18　オリーブ黒（7.5Y3/1）色砂質土　しまり弱　粘性弱　礫小～中40％混入
19　黒（10YR2/1）色シルト　しまり弱　粘性強　木材少量混入
20　褐（7.5YR4/3）色砂質土　礫極小～小40％
21　灰（7.5Y4/1）色シルト　しまり弱　粘性強　木材少量混入

第74図　18区の遺構（４）　SL2135



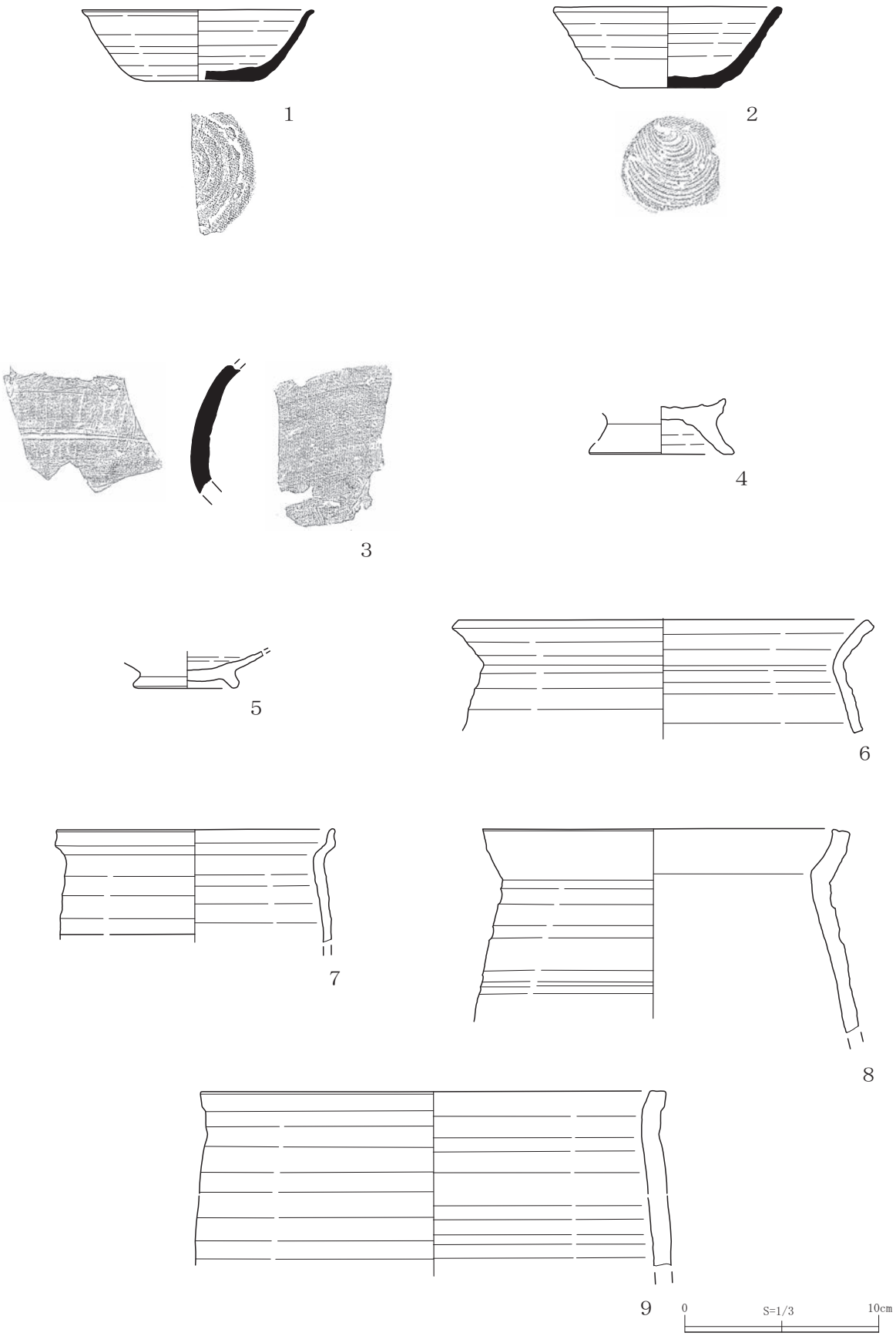
第75図　20区の遺構　SL2136



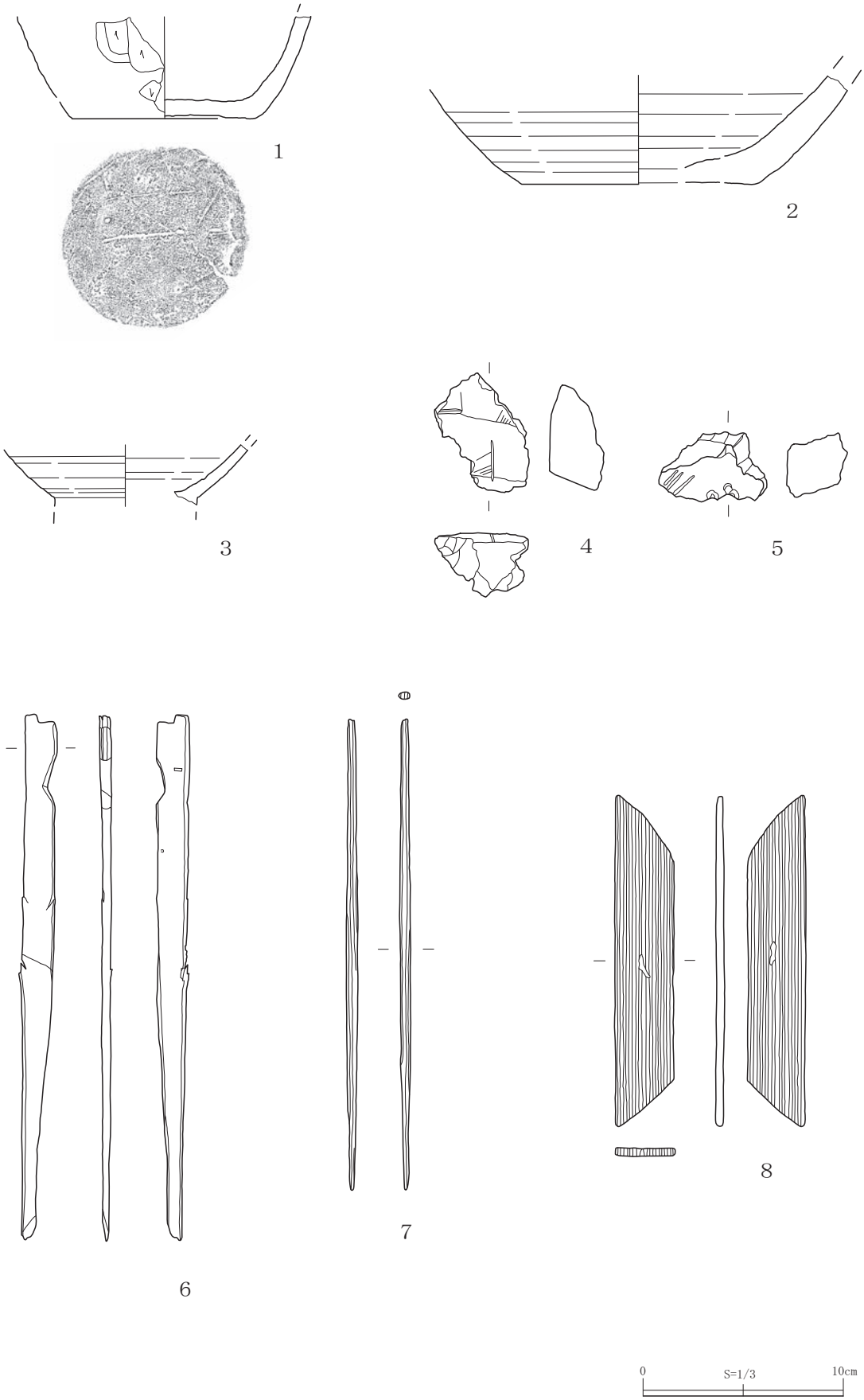
第76図　遺構内出土遺物

第３表　遺構内出土遺物観察表

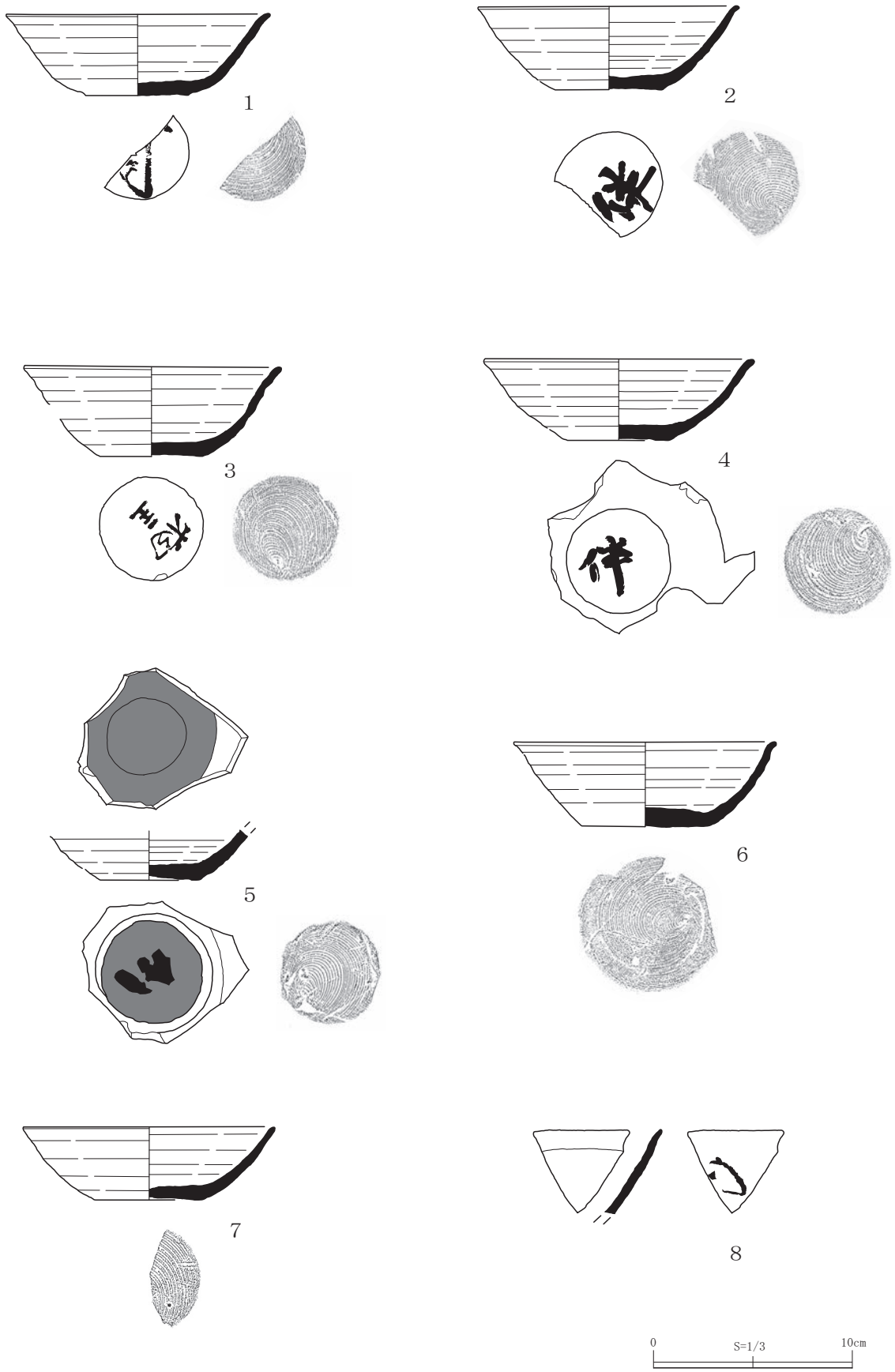
	出土位置	遺構	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	
第76図１	17区(NQ82)	SL2129	2層	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	—	(13.0)	—	—	
第76図２	18区(NO83)	SL2129	2層RP01	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	—	—	—	
第76図３	13区(OB22)	SL2117	1層	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り →ヘラナデ	(13.1)	5.4	4.9	転用硯
第76図４	18区(NS48)	SL2130	5層	須恵器	甕	タタキ	タタキ	—	—	—	—	内面を転用硯として使用しており、外面にも墨痕が付着している。側面には墨が付着していないことから、意図的破壊して、廃棄した考えられる。
第76図５	13区(QB18)	SL2117	2層	土師器	甕	—	—	—	—	—	—	
第76図６	13区	SK2106	1層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	12.2	4.8	5.3	
第76図７	13区(QB18)	SL2117	2層	土師器	坏	ロクロ	ロクロ	回転糸切り(左)	(13.1)	5.4	4.9	
第76図８	18区(OE04)	SL2135	11層	木製品	鍬	—	—	—	長24.7	幅7.6	厚2.2	



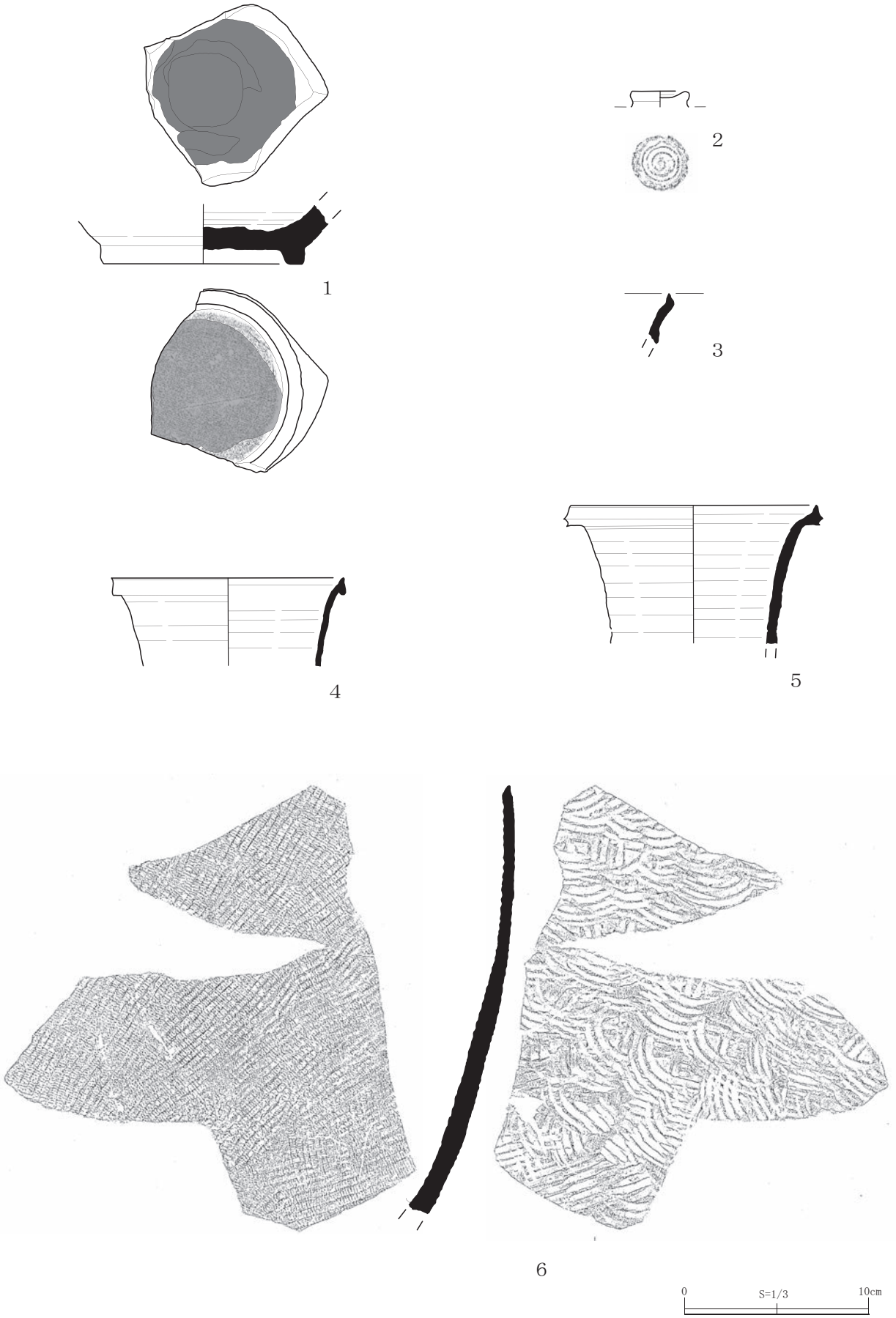
第77図　ＳＬ2040出土遺物（１）



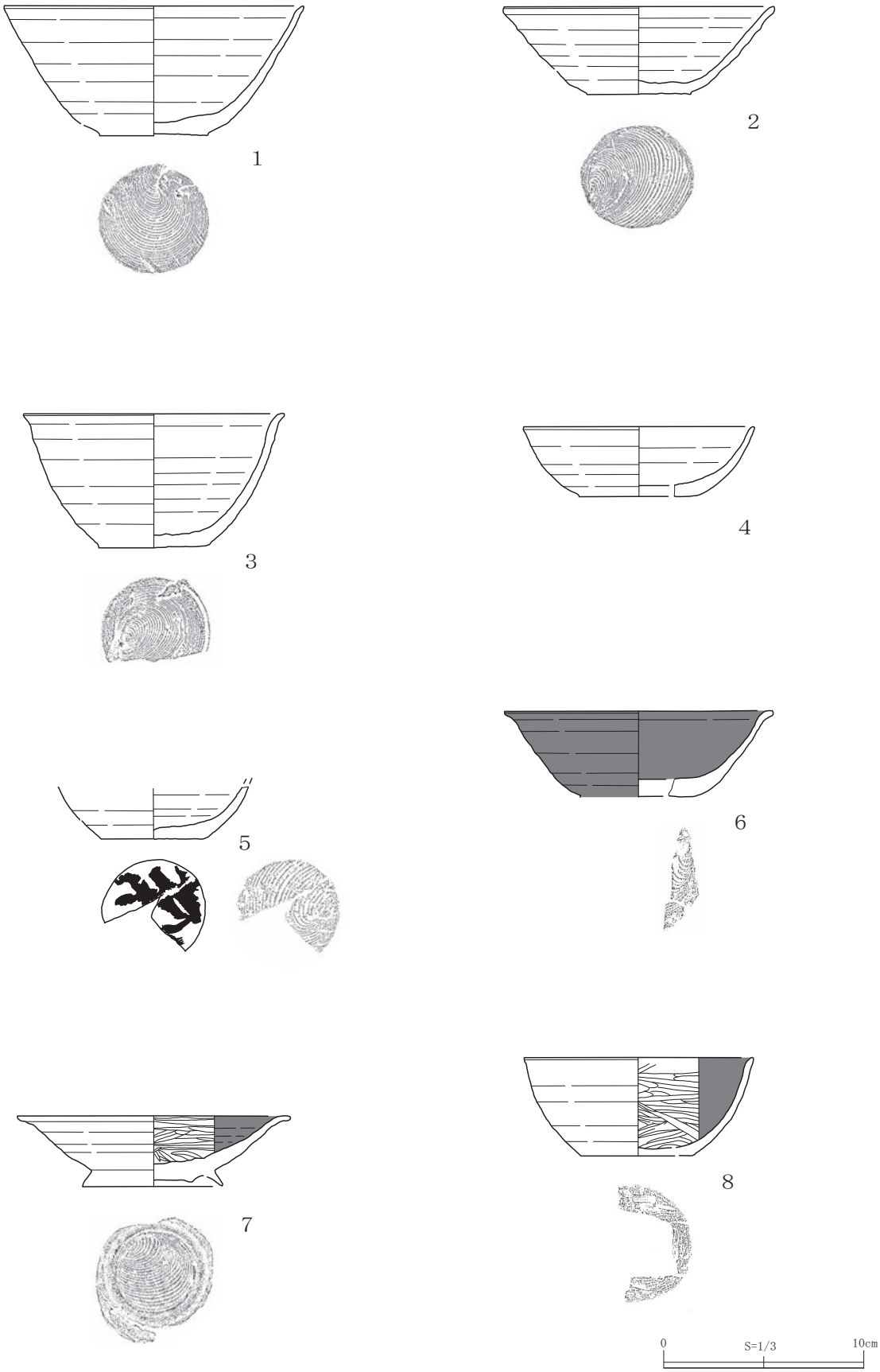
第78図　ＳＬ2040出土遺物（２）



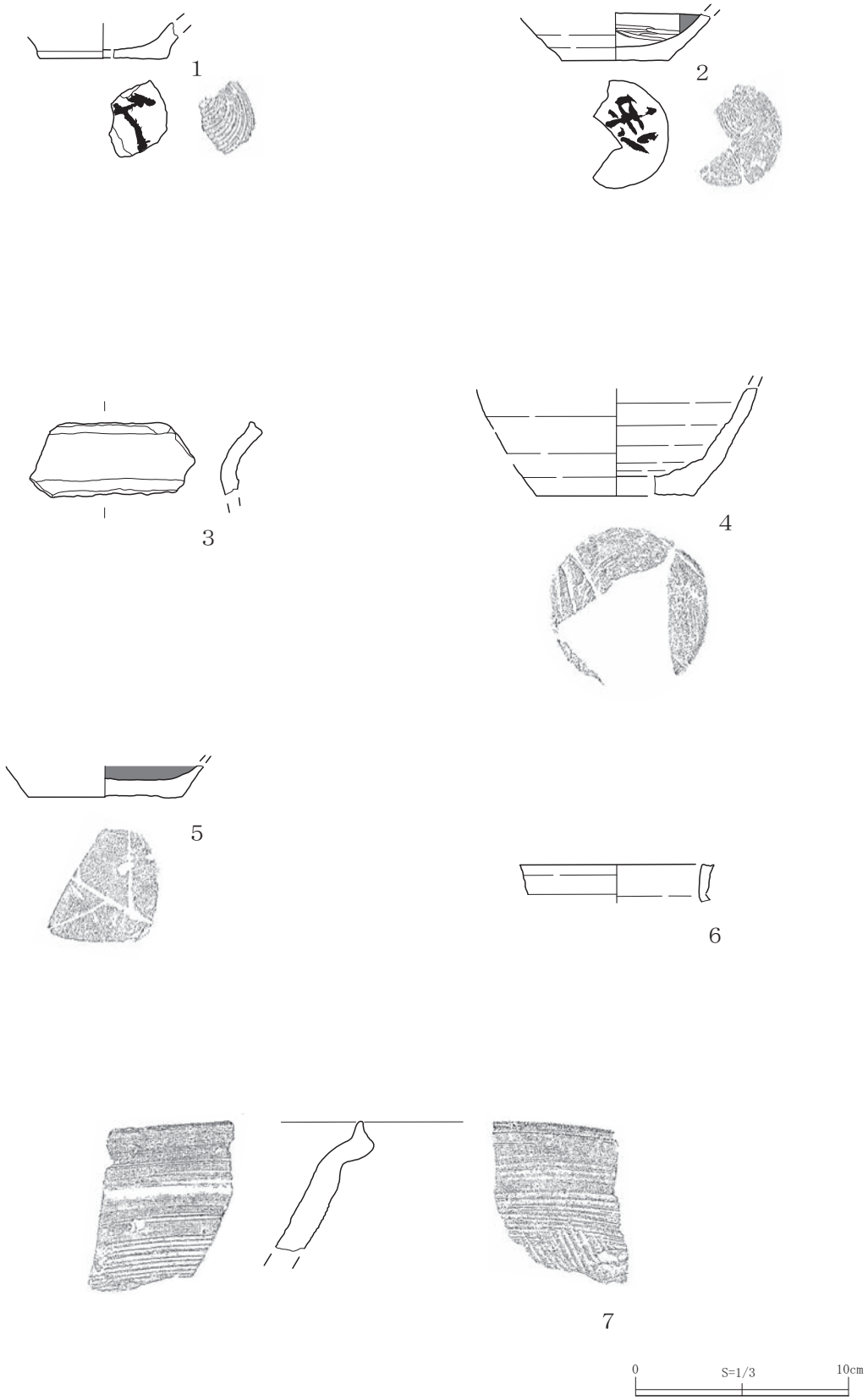
第79図　ＳＬ2136出土遺物（１）



第80図　ＳＬ2136出土遺物（２）



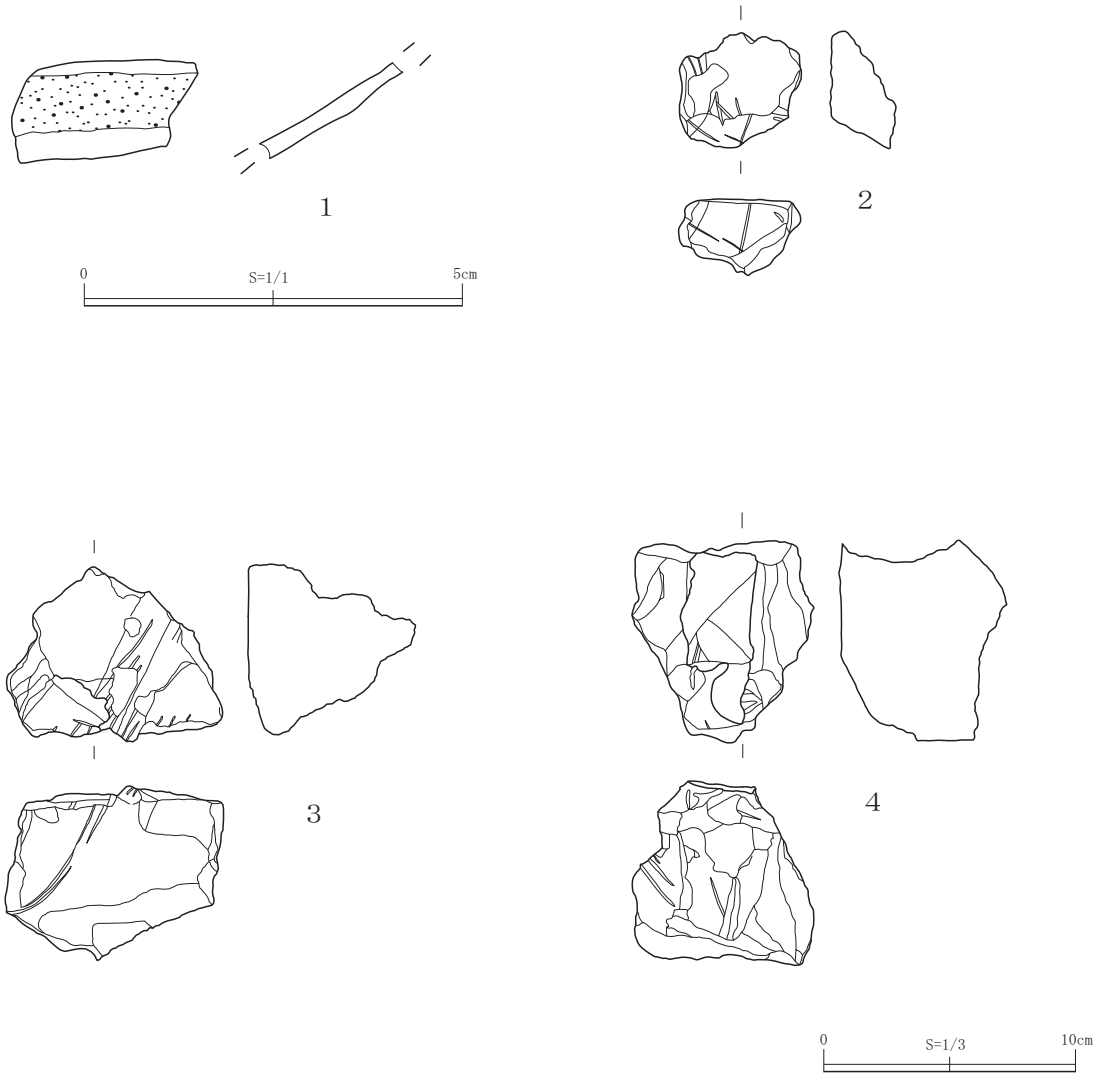
第81図　ＳＬ2136出土遺物（３）



第82図　ＳＬ2136出土遺物（４）

第４表　ＳＬ2040,2136出土遺物観察表

	出土位置	遺構	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	
第77図１	12区(PS57)	SL2040	11～12層	須恵器	坏	―	―	回転ヘラ切り	(11.8)	(5.6)	4.7	
第77図２	12区(PS57)	SL2040	11～12層	土師器	坏	ロクロナデ	黒色処理	回転糸切り(左)	(11.8)	4.9	5.2	
第77図３	12区(PS56)	SL2040	13層	須恵器	甕	叩き →ロクロナデ	叩き →ロクロナデ	―	―	―	―	
第77図４	12区(PS57)	SL2040	12層	土師器	台付坏	ロクロナデ	ロクロナデ	―	―	7.6	―	
第77図５	12区(PT52)	SL2040	26～27層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	―	4.1	―	
第77図６	12区(PS58)	SL2040	12～13層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	―	(20.9)	―	―	胎土に砂礫多く含む。 外面にスス状炭化物付着。
第77図７	12区(PS57)	SL2040	12～13層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	―	(14.3)	―	―	外面、内面にスス状炭化物付着。
第77図８	12区(PS57)	SL2040	12層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	―	(19.2)	―	―	外面にスス状炭化物付着
第77図９	12区(PS57)	SL2040	11～12層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	―	(30.2)	―	―	胎土に砂礫多く含む(粗雑なつくり)
第78図１	12区 (PS56PS57)	SL2040	11～13層	土師器	甕	ロクロ →ケズリ	ロクロ →ケズリ	ヘラナデ	―	9.1	―	
第78図２	12区(PS57)	SL2040	12層	土師器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ	―	―	(12.0)	―	外面にスス状炭化物
第78図３	12区(PT55)	SL2040	6～11層	白磁	碗	ロクロナデ	ロクロナデ	―	―	―	―	外側の一部、内側全面に釉が 施される。Ⅳ類
	出土位置	遺構	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	長さ	幅	厚さ	
第78図４	12区(PS57)	SL2040	12層	塼	―	―	―	―	(6.0)	(4.8)	(1.1)	外面に成形の痕跡がみられる
第78図５	12区(PS57)	SL2040	12層	塼	―	―	―	―	(5.2)	(3.3)	(3.0)	外面に成形の痕跡がみられる
第78図６	12区(PS57)	SL2040	11～12層	木製品	斎串	―	―	―	26.2	1.6	0.5	
第78図７	12区(PS58)	SL2040	12～13層	木製品	箸	―	―	―	23.5	0.6	0.3	
第78図８	12区(PS57)	SL2040	11～12層	木製品	曲物底板	―	―	―	(16.5)	(2.9)	0.4	
第79図１	20区 (MT52NA51)	SL2136	2層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	(13.2)	(5.2)	4.1	底面に墨書（判読不能）
第79図２	20区 (NA50NA51)	SL2136	2層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	(12.0)	(5.4)	4.2	底面に墨書「伴」
第79図３	20区(MT52)	SL2136	2層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	12.9	5.2	4.6	底面に墨書「物主」
第79図４	20区(MT52)	SL2136	2層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	(13.6)	5.2	4.1	底面に墨書「伴」
第79図５	20区(MT52)	SL2136	2層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	―	5	(2.3)	内面、底面に墨痕あり。転用硯。 割れ口には付着してないことから、 破壊後に廃棄したと考えられる。
第79図６	20区 (MT52・53)	SL2136	2層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	(13.2)	6.4	4.3	
第79図７	20区 (MT52・53)	SL2136	2層撹乱	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	(12.6)	(5.4)	3.7	
第79図８	20区(MT52)	SL2136	2層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	―	―	―	―	側面に墨書「□」（記号か？）
第80図１	20区(MT51)	SL2136	2層	須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ	―	―	―	―	内面、底面に墨痕あり。転用硯。
第80図２	20区(NA50)	SL2136	2層	須恵器	蓋	ロクロナデ	ロクロナデ	―	3.2(直径)	―	―	
第80図３	20区(MT52)	SL2136	2層	須恵器	壺	―	―	―	―	―	―	
第80図４	20区(MT52)	SL2136	2層	須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ	―	(12.6)	―	―	
第80図５	20区(MT51)	SL2136	2層	須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ	―	(13.2)	―	―	
第80図６	20区(MT52 NA50・51)	SL2136	2層	須恵器	甕	叩き	叩き	―	―	―	―	
第81図１	20区(MT52 NA50・51)	SL2136	2層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	(15.0)	5.4	6.5	
第81図２	20区(NA50)	SL2136	2層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	(13.6)	5.2	4.4	
第81図３	20区(NA50)	SL2136	2層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	(13.0)	(5.6)	6.7	
第81図４	20区(MT51)	SL2136	2層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	―	(11.6)	(6.0)	3.5	内面上端と外面にスス状炭化 物付着。灯明皿？
第81図５	20区(NA50)	SL2136	2層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	―	5.2	(2.6)	底面に墨書（判読不能）
第81図６	20区(MT51 MT52・NA50)	SL2136	2層	黒色土器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	(13.4)	(5.4)	4.3	
第81図７	20区(MT52 NA50・51)	SL2136	2層	内黒	坏	ヘラナデ	ロクロナデ →ミガキ	回転糸切り（左）	(13.6)	(7.0)	3.5	
第81図８	20区(MT51 MT52・NA50)	SL2136	2層	内黒	坏	ロクロナデ	ロクロナデ →ミガキ	回転糸切り	(11.4)	(5.6)	4.9	
第82図１	20区(MT50)	SL2136	2層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	―	―	―	底面に墨書（判読不能）
第82図２	20区(MT52)	SL2136	2層	内黒	坏	ロクロナデ	ロクロナデ →ミガキ	回転糸切り →ヘラナデ	―	(5.0)	(2.2)	底面に墨書「伴」
第82図３	20区(NA51)	SL2036	2層	土師器	甕	―	―	―	―	―	―	
第82図４	20区(NA51)	SL2036	2層	土師器	甕	―	ロクロナデ	ヘラナデ	―	7.4	(5.0)	
第82図５	20区(MT51)	SL2136	2層	内黒	鉢	ロクロナデ	ミガキ	木葉痕	―	(7.3)	―	
第82図６	20区(MT52)	SL2136	2層	須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ	―	―	―	―	
第82図７	20区(NA50)	SL2036	2層	土師器	鍋	ロクロナデ	ロクロナデ	―	―	―	―	



第83図　ＳＫＰ2061出土遺物

第５表　ＳＫＰ2061出土遺物観察表

	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	備考
第83図１	13区PL99	1層	灰釉陶器	皿	ロクロナデ→ハケ塗り	ロクロナデ→ハケ塗り		－	－	－	黒笹90号窯式　９世紀後半
	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	長さ	幅	厚さ	備考
第83図２	13区PL99	1層	埼	－	－	－	－	(4.5)	(4.8)	(2.5)	
第83図３	13区PL99	1層	埼	－	－	－	－	(7.0)	(8.5)	(6.5)	
第83図４	13区PL99	1層	埼	－	－	－	－	(8.1)	(7.0)	(6.6)	

第３節　第147次調査の検出遺構と遺物

払田柵跡第147次発掘調査は前年に調査した第143次調査範囲と第145次調査範囲にまたがるほ場整備事業（暗渠設置工事）である。第143次調査範囲を東側調査区、第145次調査範囲を西側調査区とし、更に西側調査区は農道で２分されており南北に分けて調査をおこなった。調査トレンチは外柵推定線と暗渠工事予定地の交点に設定しており、西側調査区をＷ１区、Ｗ２区、…、東側調査区をＥ１区、Ｅ２区、…とした。基本的には１ｍ×１ｍの幅で調査をおこなっているが必要に応じて拡張している。調査トレンチから遺構を検出しているものもあるが、調査トレンチが限られており遺構が調査トレンチの外にまでのびていることから遺構の長さは省略する。出土遺物は土師器、須恵器、陶器である。

第147次調査の遺構数総計は材木塀布掘溝跡が２か所、溝跡が１条、柱穴様ピットが１基である。材木塀布掘溝跡の調査にあっては、現状保存を原則とする認識に立ち、遺構確認後に図面・写真の記録を作成した後、埋め戻しを行った。なお、検出した材木塀布掘溝跡２か所は過去に調査が行われたものと連続することから、過去調査分の番号を付している。

１　西側調査区（南側）（第86・87図、図版18・19）

第145次調査区の13区と17区の間に位置し、大部分は水田と麦畑である。調査トレンチはＷ１区～W21区、W33区～W37区である。検出遺構は布掘溝跡が１条である。

Ｗ１区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層（地山土）にあたる。耕作土の厚さは32cmである。Ⅱ層（生活面・遺物包含層）が残存していないことから耕作のために地山面まで削平され、耕作土が造成されたと考えられる。南西－北東方向にのびる布掘溝跡と見られるプランを10YR4/4（褐色土）の上面で10YR4/2（灰黄褐色土）の広がりとして確認した。布掘溝跡の幅は49cmである。布掘溝跡に角材列の有無を確認するためにボーリング棒による調査をおこない、その結果、２か所で角材列と思われる反応を得た。

堆積土の特徴　10YR4/2（灰黄褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土５％、10YR4/4（褐色）土７％、炭化物２％が含まれている。本調査トレンチからは土師器が出土している。

Ｗ２区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層（10YR4/3（暗褐色土））にあたる。耕作土の厚さは39cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/3（暗褐色土）の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は45cmである。Ｗ１区で検出した布掘溝跡との位置関係に差異がないことや耕作土やⅢ層には含まれない10YR5/1（褐灰色土）の土が堆積土に含まれていることからＷ１の布掘溝跡とＷ２区の布掘溝跡は同一のものと考えられる。また、布掘溝跡のプランには角材列の一部と思われる木製品が確認できた。

堆積土の特徴　10YR3/3（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が30％含まれている。本調査トレンチから遺物の出土はないが、前述のとおり角材列の一部は残存していると考えられる。

Ｗ３区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層（10YR4/3（暗褐色）土）にあたる。耕作土の厚さは10cmであり、Ⅲ

層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/4（暗褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は40cmである。布掘溝跡は一部を南北方向にのびる幅43cmの古い暗渠に切られている。この暗渠は地表面から55cmの位置に埋設されていたが、西側の暗渠埋設工事では70～75cmの深さが必要であることから、古い暗渠跡を利用した暗渠埋設工事はできなかった。古い暗渠の下の角材列の有無を確認するためボーリング棒よる調査をおこなった。この結果、角材列と思われる反応があり、古い暗渠の下に角材列が残存している可能性がある。

堆積土の特徴　10YR3/4（暗褐色）土主体で10YR3/2（黒褐色）土が15％、10YR5/1（褐灰色）土が15％、炭化物が３％含まれている。本調査トレンチから遺物の出土はないが、前述のとおり角材列の一部は残存していると考えられる。

Ｗ４区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは0.33ｍであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は49cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれていることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が７％、10YR4/2（灰黄褐色）土が５％、炭化物が４％を含む。

Ｗ５区（第86図、図版19）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは10cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は66cmである。本調査トレンチで検出した布掘溝跡の状況を確認するために完掘した。その結果、布掘溝跡の底部より残存する角材列を検出した。なお、角材列も遺構とみなし、遺物としての取り上げはおこなわなかった。

堆積土の特徴　本区では平面的に２層に分けられる。①10YR3/2（黒褐色）土が主体で10YR5/1（褐灰色）土が５％含まれている層と②10YR3/2（黒褐色）土が主体で10YR5/1（褐灰色）土が30％含まれている層で①は角材列が埋まっていた層で②が裏込めにあたる。本調査トレンチから遺物の出土はないが、前述のとおり角材列の一部は残存している。

Ｗ６区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは17cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は37cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれていることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が７％、炭化物が１％を含む。

Ｗ７区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは20cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は60cmである。布掘溝跡は一部を南北方向にのびる幅40cmの古い暗渠に切られている。この暗渠は地表面から75cmの位置に埋設されており、新しい暗渠を設置するのに十分な深さがあったため、この古い暗渠跡を利用し

て新しい暗渠を埋設することになった。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR4/3（にぶい黄褐色）土を５％、礫を15％含んでいる。ここは他の調査トレンチと違い砂質土である。古い暗渠を掘りあげたときの壁を見てみるとⅢ層の下に10YR4/3（にぶい黄褐色）土が堆積しており、払田柵創建以前に堆積していた河川跡を掘り込んで角材列を設置していたことがうかがえる。

Ｗ８区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは20cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は45cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異が無いことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR4/3（にぶい黄褐色）土が15％、10YR2/2（黒褐色）土が５％、礫が10％含まれている。砂質土であることから本調査トレンチ下にも河川跡があると考えられる。また南側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。

Ｗ９区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは30cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は51cmである。
他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR4/2（灰黄褐色）土５％、礫20％を含んでいる。砂質土であることから本調査トレンチ下にも河川跡があると考えられる。

W10区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは19cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は37cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR4/3（にぶい黄褐色）土10％を含んでいる。

W11区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは16cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は61cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR4/2（灰黄褐色）土５％、礫15％を含んでいる。砂質土であることから本調査トレンチ下にも河川跡があると考えられる。

W12区（第86図）

麦畑内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは18cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は52cmである。布掘溝跡のプランには角材列の一部と思われる木製品が確認できた。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が20％、10YR4/2（灰黄褐色）土が10％、炭化物が３％含まれる。南側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。本調査トレンチから

遺物の出土はないが、前述のとおり角材列の一部は残存していると考えられる。

W13区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは17cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は61cmである。調査トレンチの東側に古い暗渠と思われる溝跡があったが、掘りあげた結果、15cmほどの深さしかなく、他の古い暗渠と違い土管も埋設されていなかったことから撹乱跡と判断した。深さも地表面から30cmほどしかないため、新たな暗渠埋設場所にはならなかった。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土20％が含まれる。また北側と南側の２か所に裏込めと思われる痕跡がある。本調査トレンチからは土師器が出土している。

W14区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは19cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は62cmである。調査トレンチの西側に古い暗渠と思われる溝跡があったが、掘りあげた結果、15cmほどの深さしかなく、他の古い暗渠と違い土管も埋設されていなかったことから撹乱跡と判断した。深さも地表面から35cmほどしかないため、新たな暗渠埋設場所にはならなかった。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が30％が含まれる。また南側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。

W15区（第86図、図版19）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは24cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は60cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土20％、炭化物３％が含まれる。また南側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。

W16区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは22cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は60cmである。布掘溝跡の東側は一部が撹乱を受けて壊されている。撹乱された場所は30cmほどで掘り上がり、底面に布掘溝跡と思われるプランが残っていた。ボーリング棒による調査をおこなったが、角材列が残存するような反応は得られなかった。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が20％含まれる。また南北側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。

W17区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは24cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東

方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は58cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が30％含まれる。また南北側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。本調査トレンチからは土師器と須恵器が出土している。

W18区（第86図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは52cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は42cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が30％、炭化物が２％含まれる。また南北側には裏込めと思われる痕跡が確認できる。耕作土が他の調査トレンチと比べて厚くなっているが東西の壁に布掘溝跡の掘り込みが確認できないことから、この調査トレンチの周囲は他と比べて低く、より多くの造成土（耕作土）が入れられたと考えられる。

W19区（第86図）

水田内に位置し、耕作土、造成土、Ⅱa層（遺物包含層①）からなる。耕作土の厚さは18cm、造成土の厚さは14cmである。耕作土と造成土で分層されるが元は同じ土性であり、耕作を繰り返すことにより土性に変化が生じたものである。Ⅱa層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は40cmである。本区の布掘溝跡の検出は10YR3/1（黒褐色）土から10YR3/2（黒褐色）土を識別する作業で見分けにくい。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が20％、炭化物が３％含まれる。本調査トレンチからは須恵器、磁器、陶器が出土している。

W20区、W21区（第86図）

２つの調査トレンチからは布掘溝跡は検出されなかった。W18区辺りから地形が低くなっており暗渠埋設工事で掘削する70～75cmよりも深い位置に布掘溝跡が残存すると思われる。

W33区（第87図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは26cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は53cmである。他の調査トレンチで検出した布掘溝跡と位置関係に差異がないこと、堆積土に10YR5/1（褐灰色）土が含まれることから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が５％、炭化物が３％含まれる。

W34区（第87図）

水田内に位置し、耕作土直下Ⅲ層にあたる。耕作土の厚さは36cmであり、Ⅲ層上面から南西－北東方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は43cmである。本区の布掘溝跡は南北方向にのびる古い暗渠に切られている。この暗渠は地表部から70cm下に埋設され

ており、新しい暗渠を設置するのに十分な深さがあったため、この古い暗渠跡を利用して新しい暗渠を埋設することになった。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が７％、10YR4/2（にぶい黄色）土が40％、炭化物が３％含まれる。

W34区～37区（第87図）

W34区～37区はＷ１区～W21区、W33区、W34区の調査で確認した暗渠埋設可能箇所だけでは十分な効果が見込めないため急遽、暗渠埋設箇所を設定するために調査をおこなったトレンチである。トレンチの設定は、既に古い暗渠の位置を確認していたＷ７区とW34区から枕暗渠の位置を特定し、ボーリング棒で暗渠に使用されている土管を探しておこなった。検出した暗渠の土管は地表からの70～80cm下に位置し、新たに暗渠を埋設するのに十分な深さがあった。このため、先に確認したＷ７区とW34区を加えた６つの調査トレンチで暗渠を埋設することになった。

２　西側調査区（北側）（第86・87図、図版18・19）

第145次調査区の10区の東側に位置し、大部分は水田である。調査トレンチはW22区～W32区である。調査区の特徴としてはW23区、W24区には一部にⅡb層が残っておりそこから土師器や須恵器が出土している。W25区～W32区は耕作土直下Ⅲ層になり、遺物の出土もW26区から土師器が出土しただけである。表土の厚さも概ね20cm前後である。Ⅲ層の下に新たな層がないか確認するためW26区とW32区のⅢ層を下げてみたが45cmほど下げてもⅢ層のままであった。検出遺構は溝跡が１条であり、ここではＳＤ2139について説明する。

３　ＳＤ2139溝跡（第86・87図、図版18・19）

W22区～W32区の調査トレンチから遺構が検出されなかったことから、南側にトレンチを拡張した結果確認した遺構である。W26区、W28～W32区の拡張トレンチで検出し、W22区～W25区、W27区では確認できなかった。W27区では重機のキャタピラーとみられる痕跡が残っておりW22区～W32区に係る水田は全体的に削平を受けていると考えられる。水田の南端からの検出であり、一部を枕暗渠（柴暗渠）に切られている。確認部分の幅は50～70cmである。このＳＤ2139は第145次調査で検出したＳＤ2120に向かってのびており同一の遺構の可能性がある。

４　東側調査区（第87・88図、図版18・20）

第143次調査区の東側を南北に通る。大部分は水田と豆畑である。第138次調査で調査区の北側に外柵東門があることを確認している。このため、暗渠は東門を迂回して設置計画が立てられている。本調査区では布掘溝跡と柱穴様ピットを検出している調査トレンチはＥ１区～Ｅ19区である。

Ｅ１区（第87図）

東側調査区の最南端で水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層（10YR5/1（褐灰色）土）で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は50cmである。布掘溝跡を切るように東－西方向に暗渠がのびている。この暗渠は地表面から70cm下に埋設されており、新しい暗渠を設置するのに十分な深さがあったため、それを利

用して新しい暗渠を埋設することになった。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が10％、礫が15％含まれている。

Ｅ２区（第87図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は40cmである。Ｅ１区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が10％、礫が20％含まれている。

Ｅ３区（第87図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は70cmである。布掘溝跡内で角材列跡確認した。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が７％、礫が20％含まれている。

Ｅ４区（第88図）

水田内に位置する。耕作土、造成土、Ⅲ層で耕作土・造成土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は80cmである。布掘溝跡に角材列の有無を確認するためにボーリング棒による調査をおこない、その結果、２か所で角材列と思われる反応を得た。

他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから、同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が５％含まれている。

Ｅ５区（第88図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は80cmである。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土主体で10YR5/1（褐灰色）土が７％含まれている。

Ｅ６区（第88図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR3/2（黒褐色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は65cmである。南－北方向にのびる暗渠と切り合っている。この暗渠は地表面から40～45cm下に埋設されてたが、東側の暗渠埋設工事では60～65cmの深さが必要であることから、それを利用した暗渠埋設工事はできなかった。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。布掘溝跡に角材列の有無を確認するためにボーリング棒による調査をおこない、その結果、布掘溝跡の北側で角材列と思われる反応を得た。

堆積土の特徴　10YR3/2（黒褐色）土である。

Ｅ７区（第88図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ

層上面から南－北方向にのびる10YR5/1（褐灰色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は50cmである。布掘溝跡を切るように東－西方向に暗渠がのびている。地表面から40～45cm下に埋設され、充分な深さがないことから、古い暗渠跡を利用した暗渠埋設工事はできなかった。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR5/1（褐灰色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が20％含まれている。

Ｅ８区（第88図）

水田内に位置する。耕作土直下Ⅲ層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは30cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR5/1（褐灰色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は85cmである。布掘溝跡を切るように東－西方向に暗渠がのびている。地表面から40～45cm下に埋設され、古い暗渠跡を利用した暗渠埋設工事はできなかった。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR5/1（褐灰色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が30％含まれている。

Ｅ９区（第88図）

豆畑内に位置する。耕作土直下Ⅲ層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR5/1（褐灰色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は50cmである。暗渠に大きく切られており布掘溝跡は一部しか残存していない。地表面から40～45cm下の位置に埋設され、古い暗渠跡を利用した暗渠埋設工事はできなかった。確認のためにサブトレンチを入れたところ南側に拡張したトレンチの壁から角材列の抜き取り跡が確認できた。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや暗渠に切られてはいるが、位置関係に大きな差異がないこと、角材列の抜き取り跡が確認出来たことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR5/1（褐灰色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が10％含まれている。

Ｅ10区（第88図）

豆畑内に位置する。耕作土直下Ⅲ層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR5/1（褐灰色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は80cmである。本区の耕作土から須恵器が出土している。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR5/1（褐灰色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が20％含まれている。

Ｅ11区（第88図）

豆畑内に位置する。耕作土直下Ⅲ層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR5/1（褐灰色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は80cmである。本区の耕作土から土師器が出土している。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。

堆積土の特徴　10YR5/1（褐灰色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が20％含まれている。

Ｅ12区（第88図）

豆畑内に位置する。耕作土直下Ⅲ層（10YR4/2（にぶい黄色）土）で耕作土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から10YR3/2（黒褐色）土の広がりを確認したが形状は不整形で遺物も出土していないことから年代及び性格は不明である。この場所は昭和５年に調査をおこなっており、その時の調査痕跡の可

能性がある。ここでは柱穴を１基検出しており、ボーリング棒による調査の結果、柱材が残存していることがわかった。昭和５年の調査では柱材を検出するまで下げているため、この柱穴のプランは埋め戻されたプランの可能性もある。

Ｅ13区（第88図）

豆畑内に位置する。耕作土、造成土、Ⅲ層で耕作土・造成土の厚さは20cmである。Ⅲ層上面から南－北方向にのびる10YR5/1（褐灰色）土の布掘溝跡のプランを確認した。布掘溝跡の幅は45cmである。布掘溝跡の東側を暗渠が切っている。地表面から70cm下に埋設されており、新しい暗渠を設置するのに十分な深さがあったため、この古い暗渠跡を利用して新しく埋設することになった。他の調査区の布掘溝跡と土性が同じことや位置関係に差異がないことから同一の布掘溝跡と考えられる。布掘溝跡に角材列の有無を確認するためにボーリング棒による調査をおこない、その結果、角材列と思われる反応を得た。

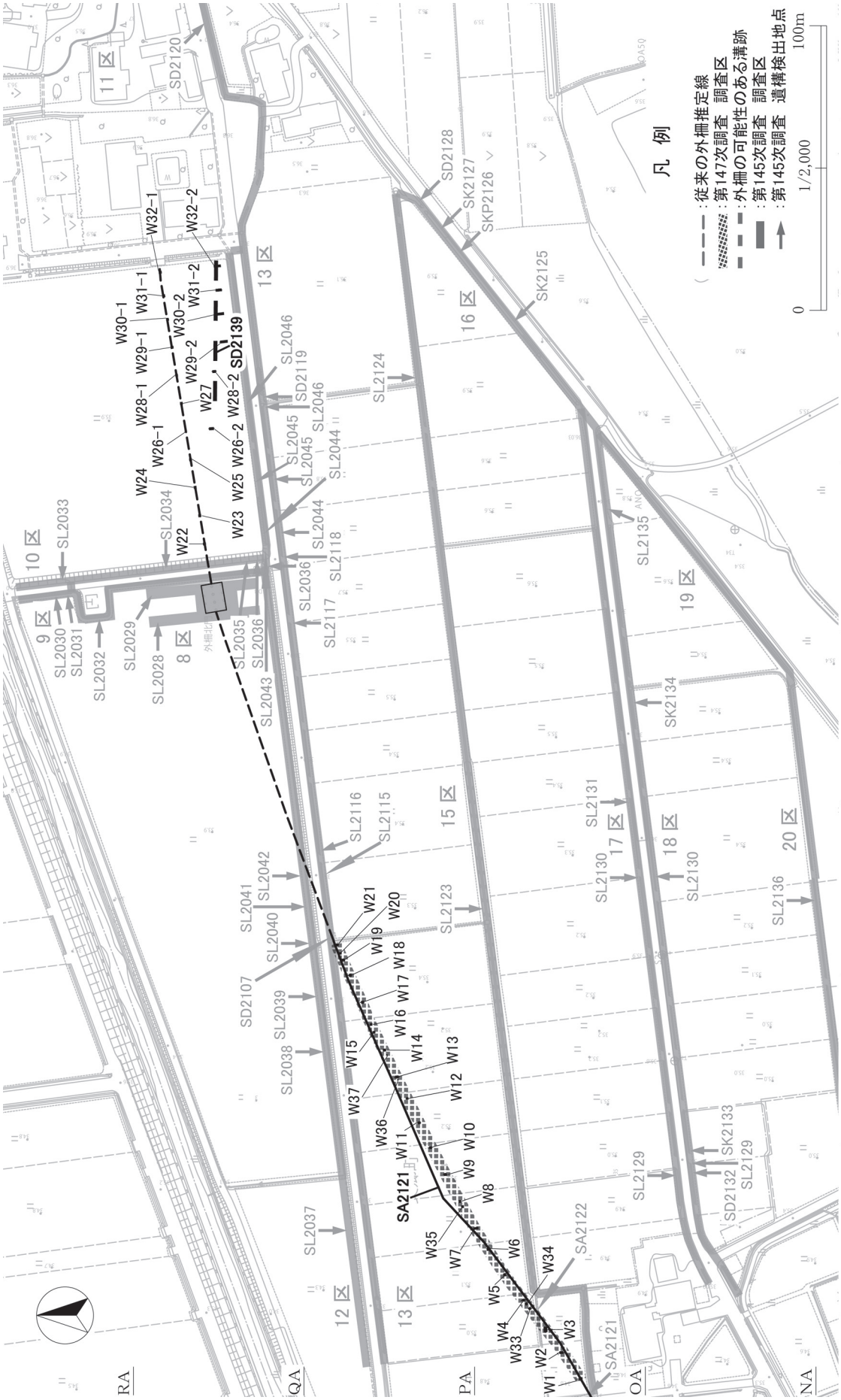
堆積土の特徴　10YR5/1（褐灰色）土主体に10YR4/2（にぶい黄色）土が20％含まれている。

Ｅ14区・Ｅ15区

両区から布掘溝跡などの遺構は検出しなかった。表土、耕作土の下は礫、木片を含む黒色土、十和田a火山灰、黒褐色土の順に堆積している。礫と木片を含む黒色土は河川堆積層であり、十和田a火山灰は二次堆積したものである。黒褐色土は第145次調査で確認した遺物包含層①、②に土性が類似しておりがトレンチ調査では黒褐色土が河川堆積によるものか遺物包含層①、②なのかは特定できなかった。15区の耕作土から土師器と須恵器（墨書土器）が出土した。

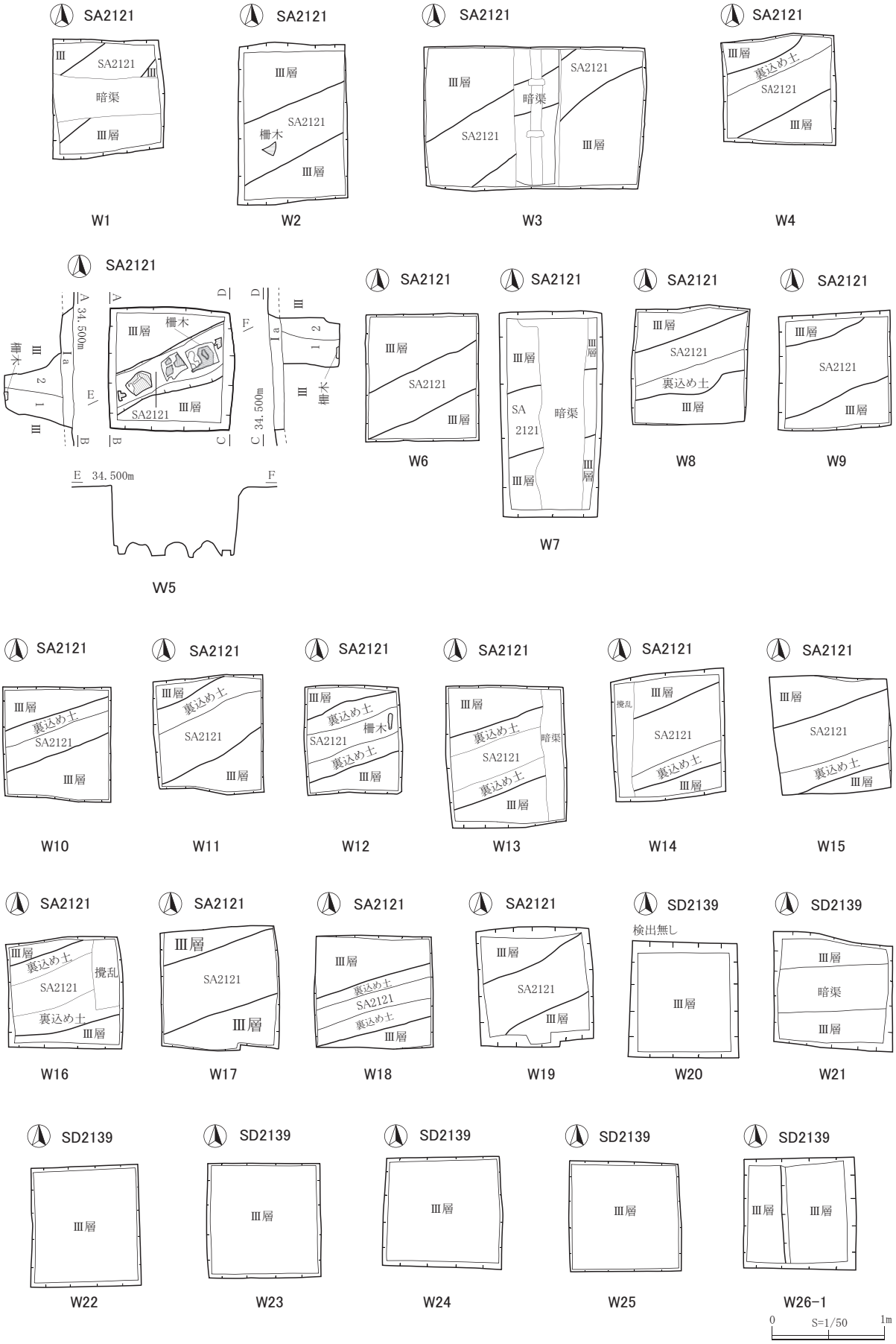
Ｅ16区～Ｅ19区（第88図）

Ｅ16区～Ｅ19区はＥ１区～Ｅ15区の調査で確認した暗渠埋設可能箇所だけでは十分な効果が見込めないため急遽、追加設定するために調査をおこなったトレンチである。トレンチは、既に古い暗渠の位置を確認していたＥ１区、Ｅ６区、Ｅ７区、Ｅ８区、Ｅ９区、Ｅ13区から枕暗渠の位置を特定し、ボーリング棒で暗渠に使用されている土管を探して設定した。検出した暗渠の土管は地表から70～80cm下にあり、新たに暗渠を埋設するのに十分な深さがあった。このため、先に確認したＥ１区とＥ13区を加えた８の調査トレンチで暗渠を埋設することになった。Ｅ６区、Ｅ７区、Ｅ８区、Ｅ９区は暗渠の深さが地表面から40～50cmと東側調査区の暗渠工事に必要な60cmの深さに足りなかったため除外した。

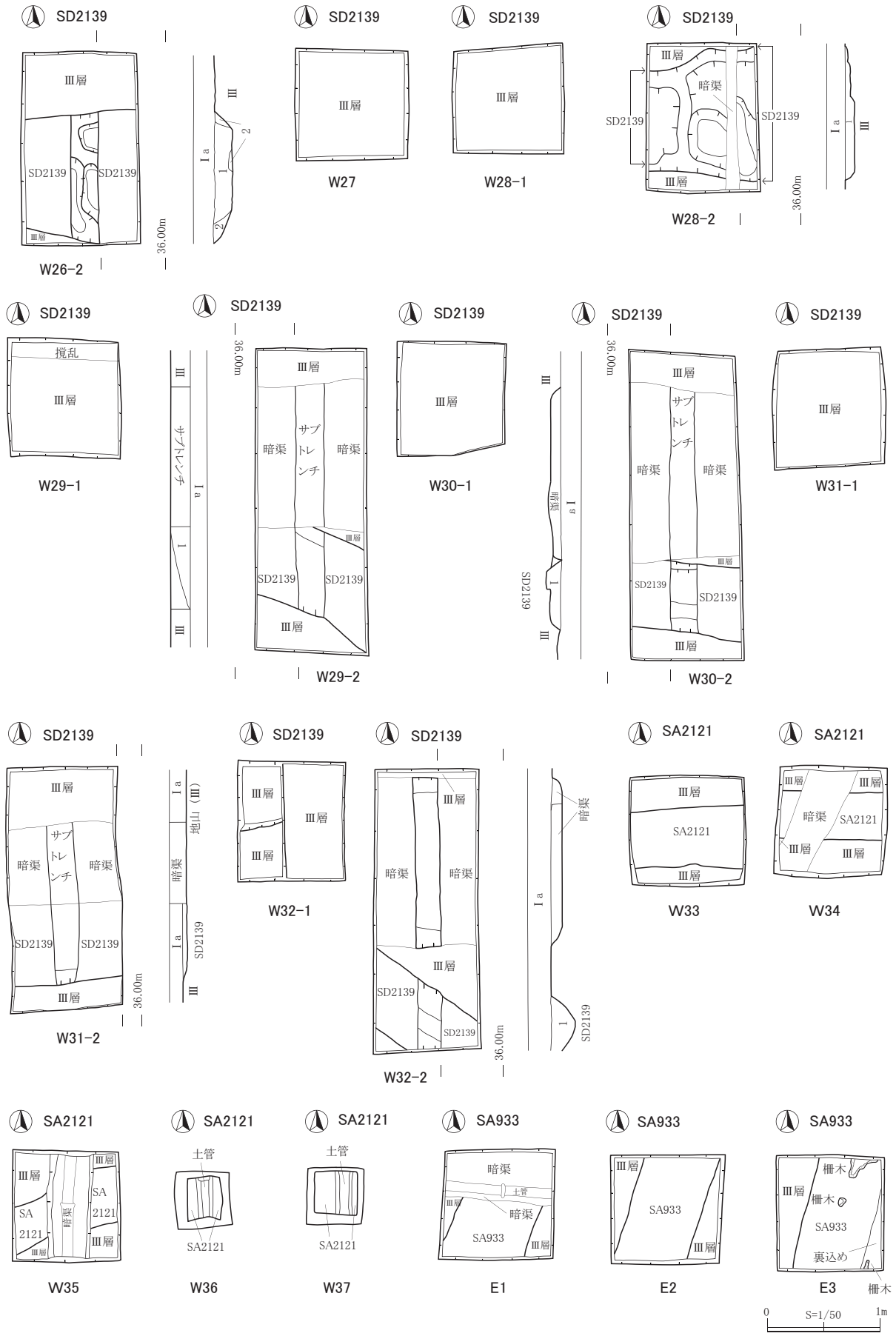


第84図　第147次調査　調査区位置図（外柵北門周辺地区）

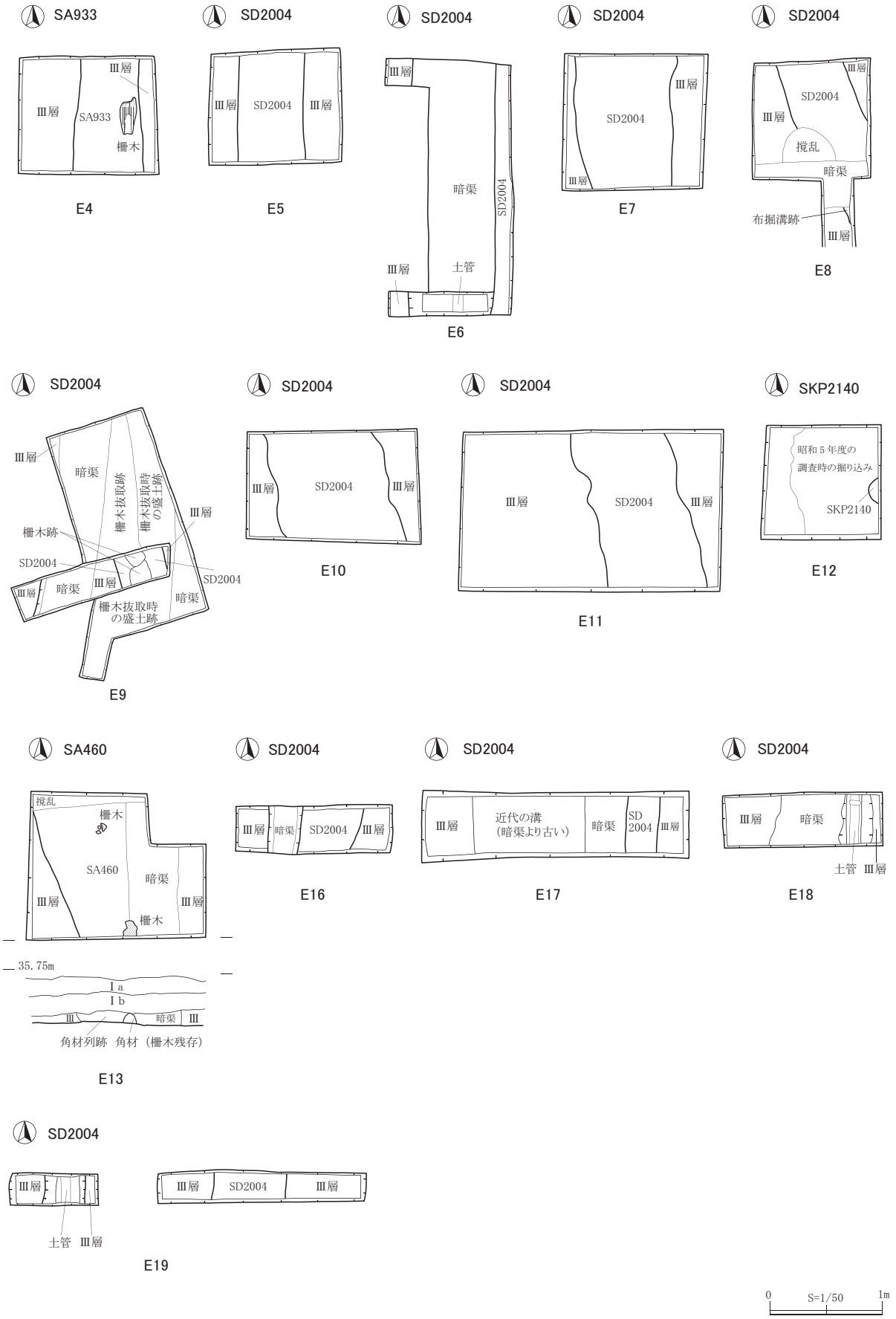
第85図　第147次調査　調査区位置図（外柵東門周辺地区）



第86図　第147次調査地点平面図（１）



第87図　第147次調査地点平面図（２）



第88図　第147次調査地点平面図（３）

第４節　遺構外出土遺物

（１）第143次調査

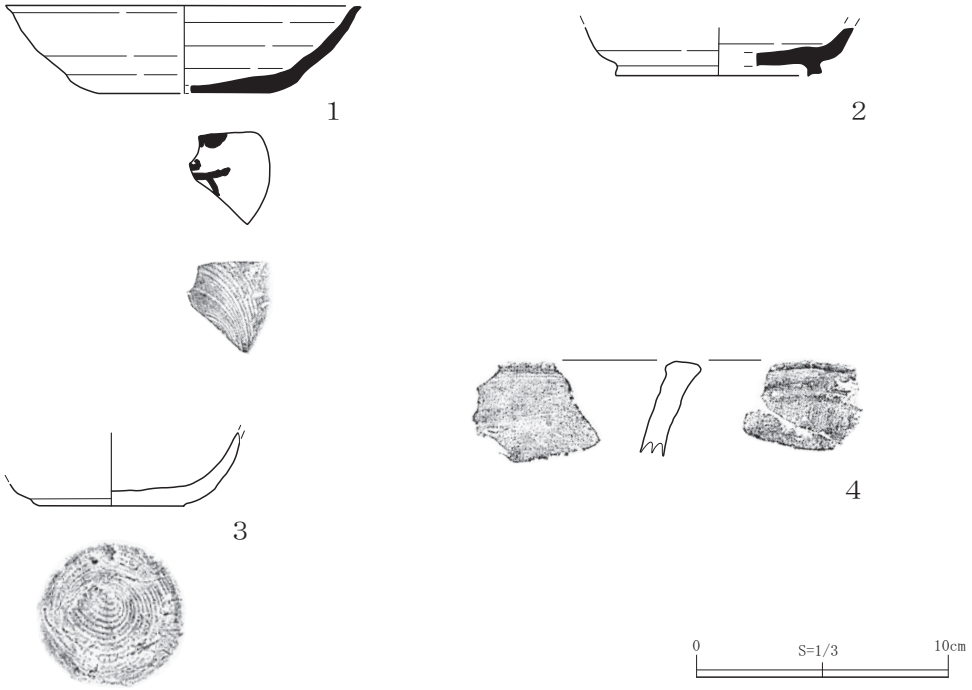
遺構外から須恵器、土師器、内黒土師器、剥片石器、礫石器、木製品が出土した。ここではそれらの内、細片を除くいくつかの遺物を掲載する。なお、個々の遺物の詳細は第７～９表に示す。第90図２・第90図３・第91図２は墨の付着が認められることから転用硯である。また、第90図３の底面には墨書「本」が認められる。第92図２の表面には鋭利な金属器を研いだような凹みが多数あり、磨り石を古代以降に転用した可能性がある。

（２）第145次調査

遺構外から須恵器、土師器、瓦、須恵器系中世陶器、剥片石器、石製品が出土した。なお、個々の遺物の詳細は第10～11表に示す。第93図３は墨の内外面に墨痕がみられるが、断面には認められないことから使用後に意図的に破砕したと考えられる。転用硯若しくは廃棄儀礼に伴う遺物である可能性がある。

（３）第147次調査

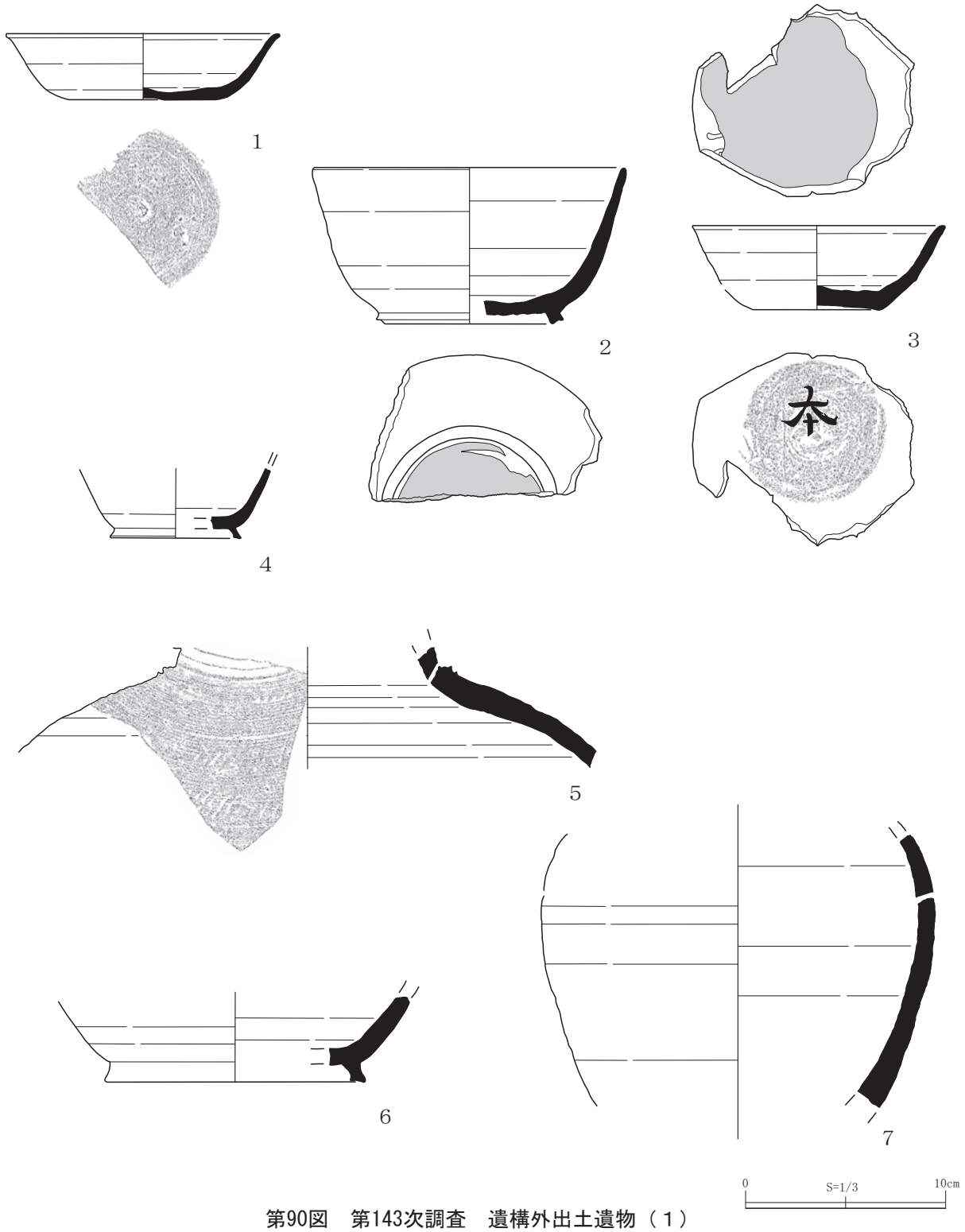
遺構外から須恵器、土師器、瓦須恵器系中世陶器、木製品が出土した。個々の遺物の詳細は第６表に示す。



第89図　第147次調査　遺構外出土遺物

第６表　第147次調査　遺構外出土遺物観察表

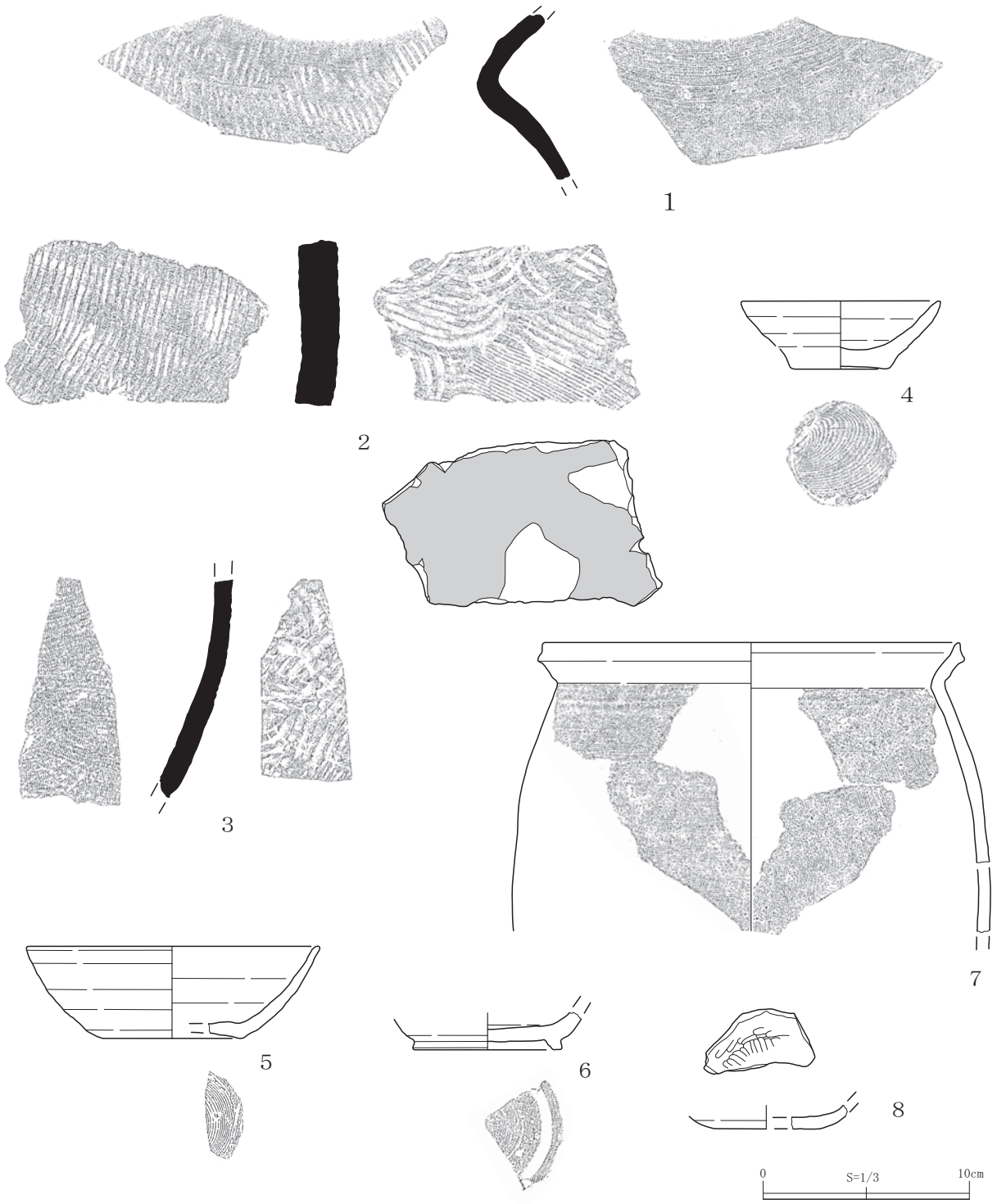
No.	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	備考
第89図1	E7　N137	Ⅰb層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（右）		(3.4)		墨書あり　判読不能
第89図2	E10 NT42	Ⅰb層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(4.1)		
第89図3	E15 ON52	Ⅰb層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）		(5.8)		
第89図4	W19 PP57	Ⅰb層	須恵器系中世陶器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ					



第90図　第143次調査　遺構外出土遺物（１）

第７表　第143次調査　遺構外出土遺物観察表（１）

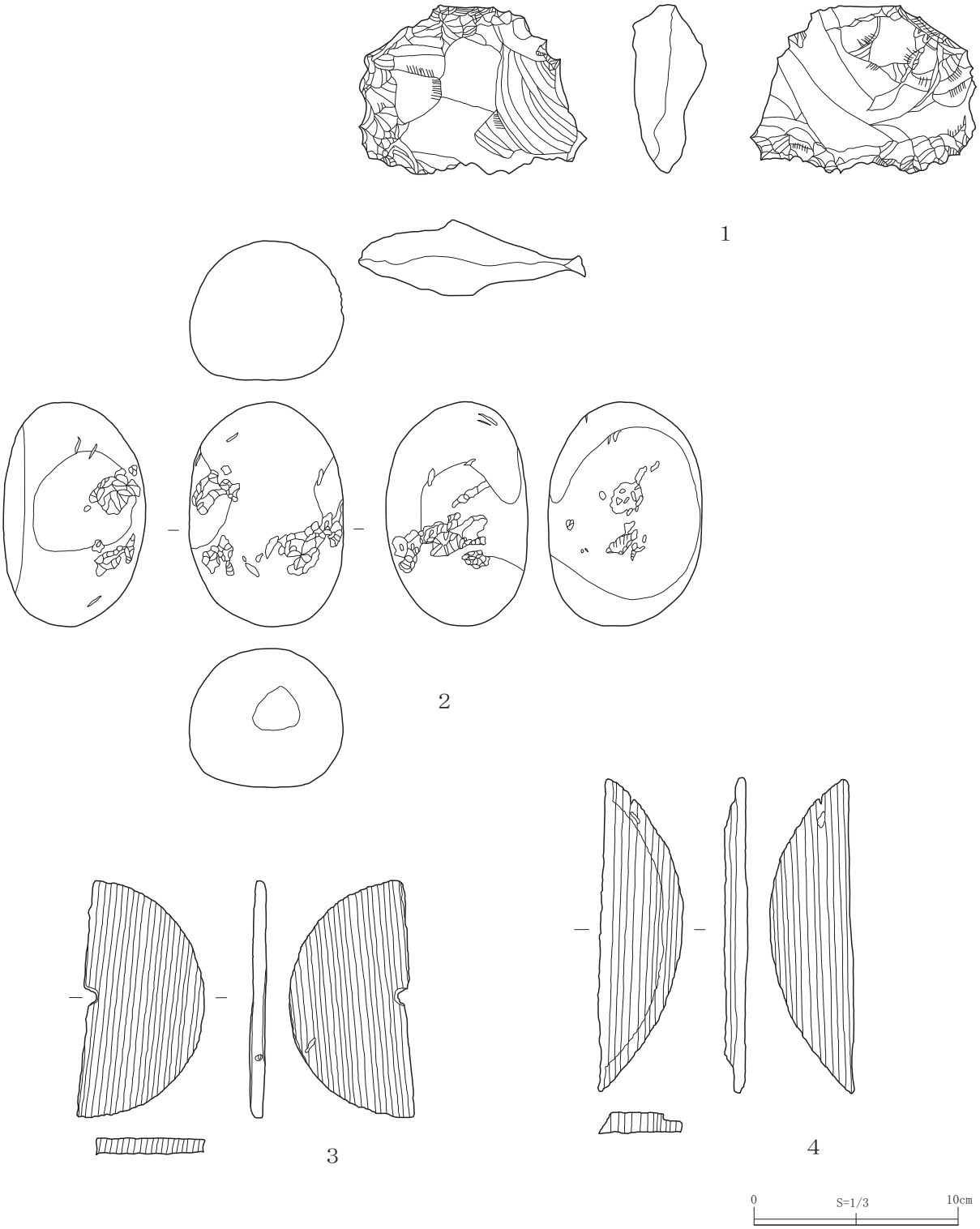
	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	備考
第90図１	C-7区KS75	Ⅰ層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	(13.6)	(7.4)	3.3	
第90図２	C-1区OE56	Ⅰ層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ		15.6	8.4	7.8	
第90図３	C-3区NJ38	Ⅲ層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転ヘラ切り	12.6	6.4	4.2	墨書「本」
第90図４	C-3区NJ38	Ⅲ層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(6.5)		
第90図５	C-6区LF34	Ⅰ層	須恵器	壺	ロクロナデ	ロクロナデ					
第90図６	C-4区NA59	Ⅲ層	須恵器	壺	ロクロナデ→ヘラケズリ	ロクロナデ			13.0		
第90図７	C-7区KS76	Ⅰ層	須恵器	甕	ロクロナデ	ロクロナデ					



第91図　第143次調査　遺構外出土遺物（２）

第８表　第143次調査　遺構外出土遺物観察表（２）

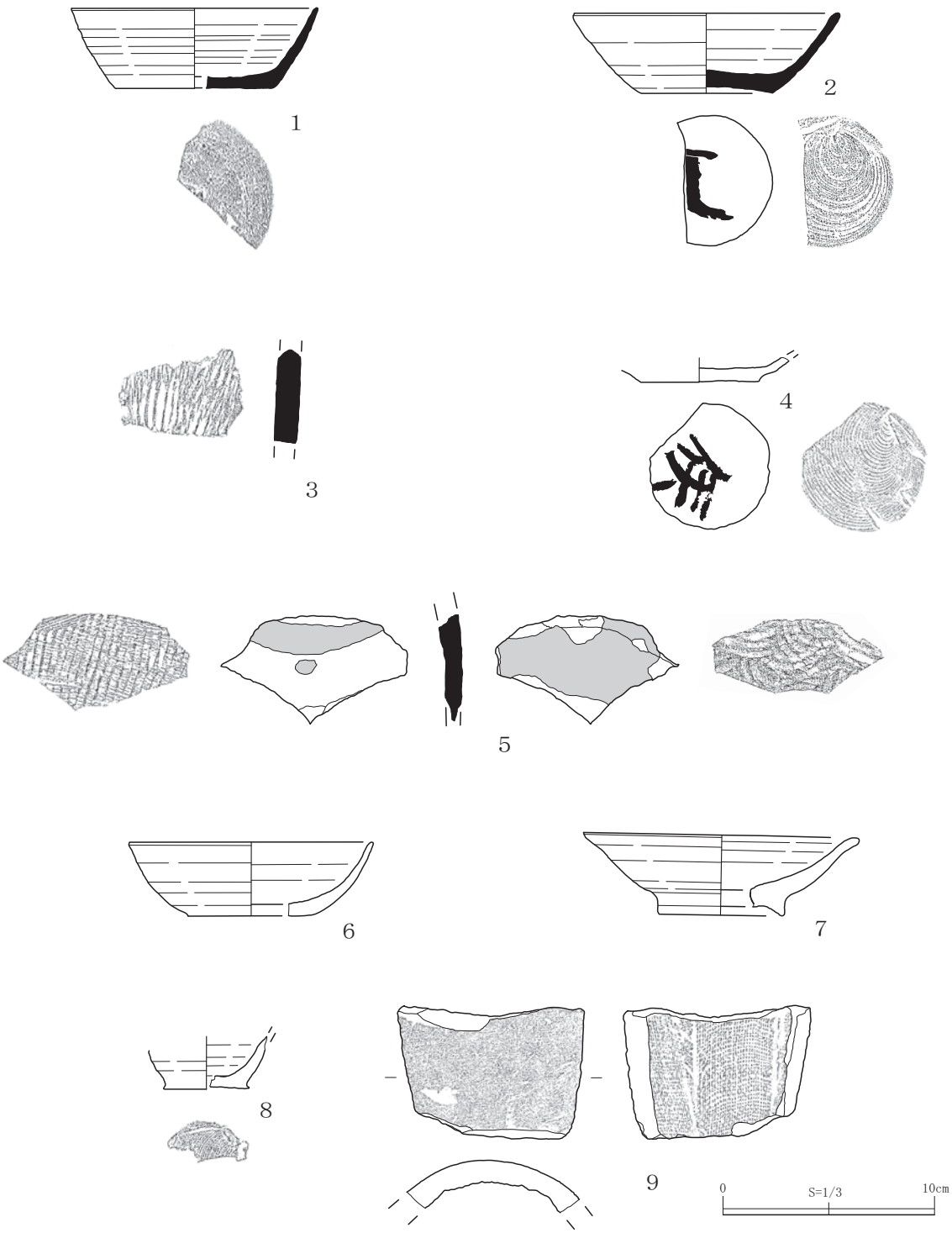
	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	備考
第91図１	C-1区OG55	Ⅳ層	須恵器	甕	ロクロナデ →叩き	ロクロナデ					
第91図２	C-7区KQ39	Ⅰ層	須恵器	甕	叩き	叩き					内面に墨痕転用硯
第91図３	C-6区LF30	Ⅰ層	須恵器	甕	叩き	叩き					
第91図４	C-1区LN87	Ⅳ層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	9.6	4.5	3.3	内面にススス状炭
第91図５	C-6区LF31	Ⅰ層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	(14.2)	(6.8)	4.5	
第91図６	C-3区NJ40	Ⅰ層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ			(7.4)		
第91図７	C-1区OF55	Ⅰ層	土師器	甕	ヘラナデ　ハケ目	ヘラナデ　ハケ目	－	20.2			
第91図８	C-6区LC62	Ⅰ層	内黒土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ →ヘラミガキ			(5.2)		



第 92 図　第 143 次調査　遺構外出土遺物（３）

第９表　第 143 次調査　遺構外出土遺物観察表（３）

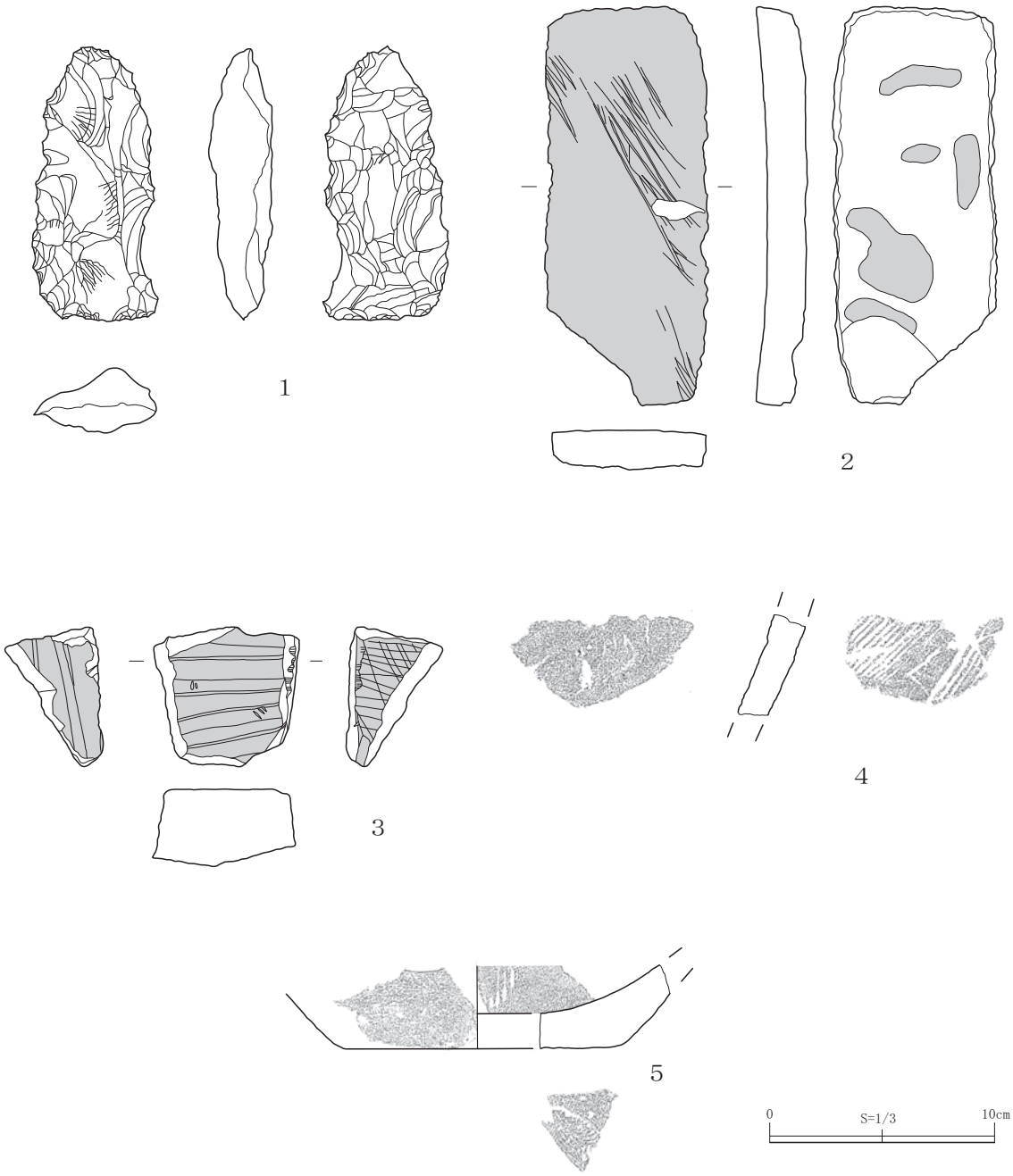
	出土位置	層位等	種別	器種	長さ	幅	厚さ	備考
第90図１	C-3区NK33	Ⅰ層	石器	スクレイパー	5.5	7.4	1.9	
第90図２	C-4区LF32	Ⅰ層	礫石器	磨石	11.0	7.5	6.9	
第90図３	C-1区0R51	Ⅳ層	木製品	曲物底板	(15.1)	(3.9)	0.9	中央に穿孔
第90図４	C-1区0H54	Ⅰ層	木製品	曲物底板	11.4	(6.0)	0.8	



第93図　第145次調査　遺構外出土遺物（１）

第10表　第145次調査　遺構外出土遺物観察表（１）

	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	備考
第93図１	12区OB37	Ⅲ層	須恵器	坏	ロクロ	ロクロ	回転ヘラ切り→ヘラナデ	(11.6)	(7.4)	3.8	
第93図２	17区OD29	Ⅱ層	須恵器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り（左）	(12.6)	(6.2)	3.8	底面に墨書（判読不能）
第93図３	13区PL99	Ⅰ層	須恵器	甕	タタキ	タタキ	－	－	－	－	外面、側面に墨痕あり。転用硯か
第93図４	20区MT53	撹乱	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	回転糸切り	－	5.8	(1.1)	底面に墨書「伊？」
第93図５	12区OG92～93	Ⅰ層	須恵器	甕	－	－	－	－	－	－	転用硯
第93図６	20区(MT51)	Ⅱ層	土師器	坏	ロクロナデ	ロクロナデ	－	(11.6)	(6.0)	3.5	内面上端と外面にススス状炭化物付着。灯明皿？
第93図７	15区(OS55)	撹乱	土師器	皿	ロクロ	ロクロ	－	(13.0)	(6.0)	3.8	
第93図８	15区OS55	撹乱	須恵器	壺	ロクロ	ロクロ	回転糸切り	－	－	－	
第93図９	20区MT52	撹乱	瓦	丸瓦	－	－	－	－	－	－	



第94図　第145次調査　遺構外出土遺物（２）

第11表　第145次調査　遺構外出土遺物観察表（２）

	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	長さ	幅	厚さ	
第94図１	20区（MS64）	撹乱	剥片石器	石篦				8.1	3.7	2.1	
第94図２	13区QF85～88	Ⅰ層	砥石	－	－	－	－	17.7	6.8	1.8	
第94図３	12QF02	Ⅰ層	砥石	－	－	－	－	－	6.6	3.6	
	出土位置	層位等	種別	器種	外面調整	内面調整	底面調整	口径	底径	器高	
第94図４	13区PT37	Ⅰ層	須恵器系陶器	擂鉢	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	－	－	6条を一単位とする卸目が施される。
第94図５	13区QF87	Ⅰ層	須恵器系陶器	擂鉢	ロクロナデ	ロクロナデ	－	－	(12.2)	－	

第５章　総　括

本堂城回地区のほ場整備事業に係る発掘調査は第143次、第145次、第147次調査の３次にわたって行われた。対象となった調査区は外柵北門周辺と外柵東門周辺の２つの地区であり、本章ではその地区ごとに調査の成果と今後の課題をまとめ、総括としたい。

第１節　外柵北門周辺地区

１　外柵北門跡

外柵北門跡を確認するために、推定地に9.8m×８mの規模でトレンチを設け、面的に調査を行った（第145次調査８区）。しかし、表土（耕作土）直下で地山が露出し、結果として北門の痕跡は確認できなかった。８区東側を南北に走る農道の高さから、本来は北西方向に緩やかに傾斜する地形であったことが北側に残っている墓地や地権者の話から推定されるが、耕地整理により農道以西を切土し水田造成したためと考えられる。北門跡推定地付近での農道から水田面までの比高は約1.7mあり、柱穴掘形があったとしても削平された可能性が高い。このような状況から外柵北門は従来の認識通り、すでに滅失したものと考えられる。

２　外柵材木塀

外柵周辺地区において材木塀を初めて検出したのが第145次調査であり、15区において２か所確認した（ＳＡ2121・2122）。第147次調査では、この２か所の間（Ｗ１～３）、さらには北西側（Ｗ４～19）で外柵線を確定した。第145次調査時では２か所で検出した材木塀が同一のものである確証がなかったため遺構番号を２つ付しているが、第147次調査の結果、同一の材木塀としたほうが妥当であるという結論に至ったため、外柵北門周辺地区の北門以西で確認した外柵線についてはＳＡ2121に統一した。W20・21では暗渠掘削深度（約70㎝）では布掘溝跡の検出面には到達せず、旧地形は北に向かって下がっていくことが分かった。また、第145次調査確認のＳＤ2107はＳＡ2121の延長線上に位置するため布掘溝跡である可能性が高い。

ＳＤ2107以東では材木塀・布掘溝跡は検出できず、北門同様に耕地整理により削平されたと考えられる。北門跡推定地東側（W22～34）の外柵推定線上でも外柵の痕跡は検出できなかった。しかし、外柵推定線より南（W26・28～32）でＳＤ2139を確認した。この溝跡を検出した水田もまた耕作土直下に地山が露出することから、耕地整理のための整地が行われ、上部が削平されたと想定される。この溝跡が断続的ではあるが北門跡地に向かっていること、推定線上では外柵の痕跡が全く見つからないことから、今回検出したＳＤ2139が布掘溝跡の底部が残存したものの可能性はある。また、第145次調査で検出したＳＤ2120も位置的には北門跡とＳＤ2139の延長上にあり、同一の溝跡と考えられる。外柵北門から東門にかけては外柵線配置状況が不明瞭な地域であり、今後の外柵線確定のための目安となる資料を得ることができたことは一つの成果である。

３　外柵外の遺構

第145次調査13区西端部において柱穴と土坑がまとまって検出されている。これらの遺構は外柵線

から北（外側）50m程に位置し、柱穴のうち１基（ＳＫＰ2057）では柱痕跡中から土師器甕と須恵器甕の破片が重なった状態で出土し、儀礼行為と考えられる。

柱穴出土遺物は10世紀初頭に属する可能性が高い。また、ＳＫＰ2061からは愛知県猿投窯跡群の一つ黒笹90号窯式の灰釉陶器皿（第83図１）註１と塼（第83図２～４）が出土している。これから、外柵の外側に９世紀後半から10世紀初頭にかけて建物施設があった可能性が高いことがわかる。今回調査対象となった外柵北門周辺の沖積地は、払田柵跡の中でも過去の調査事例が少なく、これまで、遺構の分布状況は不明確であった。矢島川が入り江状に蛇行する部分に近接する外柵の外側において、規模や形態は不明ながら、外柵滅失後である９世紀後半以降も建物が存在したことを示す柱穴が確認されたのは一つの大きな成果と言えよう。

第２節　外柵東門周辺地区

１　外柵東門跡と周辺地形

外柵東門の位置は第138次調査において特定されており、今回の調査では第138次調査時の図面を基に東門の位置を復元し、ボーリング探査によって位置を確定した。南東隅の柱穴のみボーリング探査では確定できなかったためトレンチ（Ｅ12）を設定し、掘り下げ位置を確定した（ＳＫＰ2140）。第138次調査ではボーリング探査により、東門の西（内）側約２ｍに木材が広く分布することが確認されていた。門に関係する部材片、もしくは門造営に先立つ地盤整備に関係するものである可能性が指摘されていたが、第147次調査の結果（Ｅ14）、外柵滅失後に堆積した洪水堆積物層中の木材片であることが明らかとなった。東門は沖積地内の微高地上に造営されていたため、洪水の影響を受けやすかったとみられる。Ｅ13では地表下40㎝で材木塀が確認できたが、同一水田に設定したＥ15では暗渠掘削深度（約70㎝）で布掘溝跡確認面の検出はできなかった。旧地形が北に向かって下がっていたことが分かる。また、東門の南でもＥ18からＥ17にかけては耕作土直下が地山ではなく造成土が確認されたことから、東門造営以前の旧地形は門の基礎レベルよりも低かったと考えられる。このように外柵東門の南北は低地であり、門はわずかな範囲の微高地を選び周囲の低地を整地しながら造営したことが再確認された。

２　外柵材木塀

第143次調査により、外柵の一部は従来の推定ラインよりも５ｍ程東（外）側に膨らむことが明らかとなり、第147次調査ではその状況を再確認するとともに、外柵線をより詳細に確認することができた。これにより一部が史跡指定地外へ膨らむことも明らかとなったが、この部分については近い将来追加指定措置を取る必要がある。

第147次調査Ｅ９では布掘溝跡を切る不整形な溝状プランを確認している。角材列を抜き取る際の掘り込み痕跡と推定される。Ｅ５～10では布掘溝跡を検出するも、ボーリング探査では角材列に当たらなかった。これらのトレンチを設定した水田３面では開墾の際に角材列を抜き取っている可能性がある。なお、第143次調査において布掘溝跡と推定されていた溝跡４条（ＳＤ2004・2007・2010・2013）は第147次調査の結果、同一の布掘溝跡としたほうが妥当であるという結論に至ったため、第147次調査以降ＳＤ2004とした。

註１　井上喜久男氏の教示による。

図版1

第143次調査

1　調査区遠景（南西→）
外郭東門付近から1区北部・2区・3区・4区方面を望む

2　調査区遠景（西→）
外郭東門付近から1区中央部・5区方面を望む

3　調査区遠景（北西→）
外郭東門付近から1区南部・6区・7区方面を望む

図版2

第143次調査

1　１区北部 調査完了状況（北→）

2　１区北部 ＳＤ2003土層断面
（西→）

3　１区中央部 調査完了状況
（北東→）

図版3

第143次調査

１　１区中央部　ＳＬ2014土層断面
（北西→）
火山灰検出状況（H-Iライン）

２　１区中央部　ＳＬ2014・2015
土層断面（北西→）
SL2014南端部立ち上がり及び
SL2015北端部立ち上がり状況

３　１区中央部　ＳＬ2015土層断面
（北西→）
南端部立ち上がり状況

図版4

第143次調査

１　１区中央部　ＳＬ2016土層断面
（北西→）
南端部立ち上がり状況

２　１区中央部　ＳＬ2017土層断面
（北西→）
北端部立ち上がり状況

３　１区中央部　ＳＬ2017土層断面
（北西→）
南端部立ち上がり状況

図版5

第143次調査

１　１区中央部　ＳＬ2017土層断面
（北→）
（O-Pライン）

２　１区南部　調査開始前状況
（南西→）

３　１区南部　ＳＬ2018土層断面
（南西→）

図版6

第143次調査

１　２区 調査完了状況（西→）

２　２区　ＳＡ460土層断面（北→）

３　３区東西ライン 調査完了状況
（西→）

図版7

第143次調査

１　３区　ＳＤ2004完掘状況（南→）
底面より板状加工木出土

２　３区　ＳＤ2005土層断面（南→）

３　３区　ＳＤ2006完掘状況（東→）

図版8

第143次調査

１　４区 調査完了状況（西→）

２　４区 ＳＤ2007完掘状況（北→）

３　４区 ＳＤ2008完掘状況（南→）

図版9

第143次調査

１　４区　ＳＤ2009完掘状況（南→）

２　４区　ＳＬ2019土層断面
（南西→）

３　５区　調査完了状況（東→）

図版10

第143次調査

１　５区　ＳＤ2010完掘状況（南→）

２　５区　ＳＤ2011完掘状況（北→）

３　５区　ＳＤ2012完掘状況（北→）

図版11

第143次調査

１　６区 調査完了状況（東→）

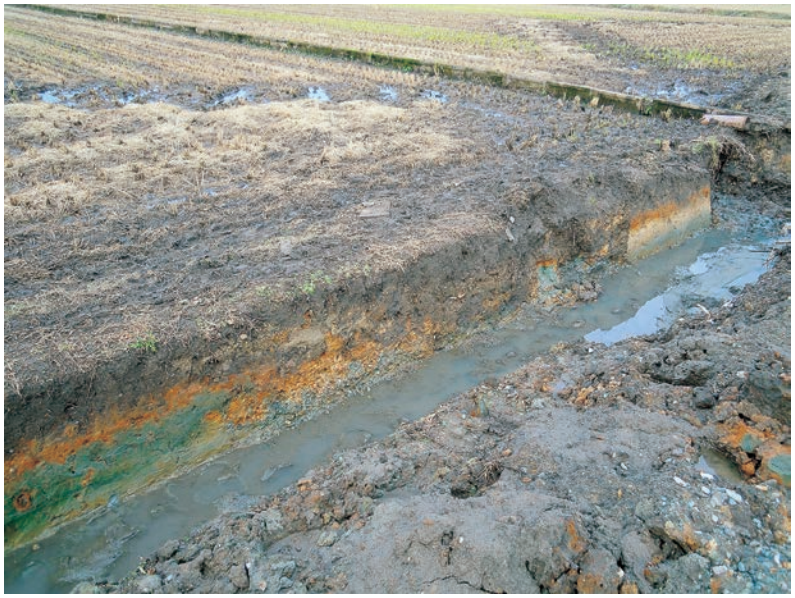
２　６区 ＳＤ2013完掘状況（北→）

３　６区 ＳＬ2020土層断面
（南西→）

図版12

第143次調査

１　６区　ＳＬ2021土層断面
（南西→）



２　６区　ＳＬ2022土層断面
（南西→）

３　６区　ＳＬ2023土層断面
（南西→）

図版13

第143次調査

１　６区　ＳＬ2024土層断面（南→）

２　７区 調査完了状況（西→）

３　７区　ＳＡ933確認状況
（北西→）

図版14

第145次調査

1　調査区全景①政庁側から
（南→）

2　調査区全景②政庁側から
（南→）

3　13区　ＳＫ2051, 2052,
ＳＫＰ2053完掘状況（北→）

図版15

第145次調査

１　13区　ＳＫＰ2057完掘状況
（北→）

２　13区　ＳＤ2073～2077確認状況
（東→）

３　13区　ＳＤ2073～2077完掘状況
（西→）

図版16

第145次調査

１　13区　ＳＤ2107完掘状況（東→）

２　13区　ＳＤ2120土層断面（北→）

３　８区東西トレンチ　精査完了
（南→）

図版17

第145次調査

１　８区東西トレンチ 精査完了
（東→）

２　15区　ＳＡ2121完掘状況（北→）

３　15区　ＳＡ2122完掘状況（南→）

第147次調査

1　西側調査区全景（北西→）

2　西側調査区全景（西→）

3　東側調査区全景（南西→）

図版19

第147次調査

1　Ｗ５区 角材列完掘状況
（南西→）

2　W15区 布掘溝跡検出状況
（南西→）

3　W26区 南側拡張部検出溝跡
確認状況（西→）

第147次調査

1　E13区 柵木検出状況（北→）

2　E14区 布掘溝跡確認状況（北→）

3　E12区 東門柱穴確認状況（南→）

調査トレンチ中央に見える黒いプランが昭和5年度に調査したトレンチ跡と考えられる。右斜め下に柱穴が確認できる。

報　告　書　抄　録

ふ　り　が　な	ほったのさくあと　だい　じ　ちょうさ　ほうこくしょ
書　　名	払田柵跡－第143・145・147次調査報告書－
副　書　名	県営ほ場整備事業（本堂城回地区）に係る埋蔵文化財発掘調査報告書
巻　　次	Ⅳ
シ リ ー ズ 名	秋田県文化財調査報告書
シリーズ番号	第495集
編　著　者　名	加藤 竜・佐々木尚人・髙橋和成
編　集　機　関	秋田県埋蔵文化財センター
所　在　地	〒014-0802　秋田県大仙市払田字牛嶋20　　TEL 0187-69-3331
発　行　機　関	秋田県教育委員会
所　在　地	〒010-8580　秋田県秋田市山王三丁目１番１号
発 行 年 月 日	西暦2014年９月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯 °′″	東経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
ほったたのさくあと 払田柵跡	あきたけんだいせんし 秋田県大仙市 ほった 払田 せんぼくぐんみさとちょう 仙北郡美郷町 ほんどうしろまわり 本堂城回	212 434	53-1 54-1	39° 28′ 06″	140° 32′ 57″			ほ場整備事業に係る事前発掘調査
	第143次:美郷町本堂城回字 もりさき 森崎					20110912 ～ 20111205	1,217㎡	
	第145次:美郷町本堂城回字 どめき 百目木					20120603 ～ 20121106	3,368㎡	
	第147次:美郷町本堂城回字 森崎～百目木					20131007 ～ 20131122	80㎡	

所収遺跡名	種　別	主な時代	主　な　遺　構	主な遺物	特記事項
払田柵跡 第143次	集　落　跡	平安時代	材木塀２条、材木塀布掘溝跡５条、溝跡６条、河川跡12か所	土師器、須恵器、木製品、角材　外	外柵東門周辺におけるほ場整備事業に係る事前調査。
払田柵跡 第145次			材木塀布掘溝跡２条、溝跡42条、土坑11基、柱穴24基、河川跡30か所	土師器、須恵器、木製品、外	外柵北門周辺におけるほ場整備事業に係る事前調査。
払田柵跡 第147次			材木塀布掘溝跡２条、溝跡１条、柱穴１基	土師器、須恵器、木製品（柵木）、外	外柵北門・東周辺におけるほ場整備事業に係る事前調査。

要　　約	本調査はほ場整備事業に係る事前調査で３か年の計画で実施された。第143次では外柵東門周辺における材木塀の位置が、予想された位置より５ｍほど東方で、一部が史跡指定地外となることがあきらかとなった。第145次は外柵北門周辺における土地改変の様相が、ある程度把握された。また調査区北西部において、外柵線より50ｍほど外側に10世紀初頭と考えられる遺構群が検出され外柵滅失後における柵関連遺構と考えられる。第147次は前年の調査で確認した外柵の続きの一部を検出し部分的ではあるが外柵の位置が確認できた。

秋田県文化財調査報告書第495集

払　田　柵　跡

第143・145・147次調査

－県営ほ場整備事業（本堂城回地区）に係る
埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅳ－

印刷・発行　平成26年9月

編　　集　秋田県埋蔵文化財センター
〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地
電話（0187）69-3331　FAX（0187）69-3330

発　　行　秋田県教育委員会
〒010-8580 秋田市山王三丁目1番1号
電話（018）860-5193